都城市文化財調査報告書　第87集

横市地区遺跡群

平田遺跡Ａ地点・Ｂ地点・Ｃ地点

―横市地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書―

（第１分冊　Ａ地点・Ｂ地点）

2008年3月

宮崎県都城市教育委員会

序　　文

本書は、「横市地区県営経営体育成基盤整備事業」に伴い、受託事業として都城市教育委員会が発掘調査を実施した平田遺跡の発掘調査報告書であります。

都城市では横市地区県営経営体育成基盤整備事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が平成8年から継続的に実施されており、これまでに数多くの成果が報告されています。

平田遺跡では総面積26,400㎡を、平成15・16年度の2ヵ年にわたり調査いたしました。

平成15年度は、平田遺跡A地点の発掘調査が行われ、弥生時代中期から後期にかけての集落跡が見つかり、当時の集落の様相が見えてきました。特に周溝状遺構から多量の炭化米が見つかったことにつきましては、新聞等を通してご紹介してまいりました。

平成16年度は、A地点の東側と北東側にあたるB地点およびC地点の調査を行いました。B地点では弥生時代の集落をはじめ古代・中世の遺構が数多く見つかっており、またC地点からは中世の水田跡をはじめ弥生時代の集落も見つかっています。

本書の刊行によって、都城市の文化財に対する理解と認識が高まることを願うとともに、今後の学術研究の発展に少しでも寄与できれば幸いです。

また、発掘調査に従事していただいた市民の皆様や、周辺住民の皆様をはじめ、関係各機関の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。心より感謝の意を表します。

2008年3月

都城市教育委員会
教育長　玉　利　　譲

例　　言

1．本書は、「横市地区県営経営体育成基盤整備事業」に伴い都城市教育委員会が平成15年度および16年度に実施した平田遺跡の発掘調査報告書である。

2．平成15年度にA地点を、B地点とC地点については平成16年度に調査を行った。

3．本書ではレベルは絶対高を用い、座標は国土座標を用いた。方位は真北である。

4．現場における遺構実測は、作業員の協力を得てA地点を栗山葉子・下田代清海・津曲千賀子が、B地点を栗山・津曲・天野玄晉が、C地点を山下大輔・原田亜紀子・天野が行った。なお、遺構実測図および遺物出土分布図の一部を有限会社ジパング・サーベイに委託した。

5．遺構の写真撮影については、A地点を栗山・下田代・津曲が、B地点を栗山・津曲・天野が、C地点を山下・原田・天野が行った。また、遺構の空中写真撮影は九州航空株式会社に委託した。

6．本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は各頁に示してある。また礫石の──は敲打痕
　　──は研磨痕

7．A地点で出土した鉄製品については愛媛大学村上恭通氏に鑑定、ご教授いただいた。

8．A地点で出土した炭化種子については熊本大学小畑弘己氏に鑑定、ご教授いただいた。

9．A地点で出土した炭化米の同定は株式会社古環境研究所に委託した。

10．A地点で出土した炭化米のＤＮＡ分析は株式会社ジェネテックに委託した。

11．B地点出土の鍛冶関連遺物については株式会社九州テクノリサーチに鑑定、ご指導いただいた。

12．本書の執筆は以下のとおりである。
（第1分冊）
第1章～第4章：栗山
第3章第3節1の（6）鉄製品：村上恭通
第4章第3節1と2の縄文土器：山下大輔
（第2分冊）
第5章：山下
第6章：株式会社古環境研究所
第7章第1節：佐藤洋一郎・花森功仁子
　第2節：小畑弘己
　第3・4節：栗山
　第5・6節：山下

13．本書で使用した遺構の略記号は以下のとおりである。
ＳＡ：竪穴住居跡　ＳＢ：掘立柱建物跡
ＳＣ：土坑　ＳＤ：溝状遺構
ＳＦ：道路状遺構　ＳＱ：土器溜り
ＳＲ：炭化種子集中部　ＳＳ：集石
ＳＴ：周溝状遺構　ＳＷ：水田

14．平成16年度に刊行した平田遺跡の概要報告書と遺構の番号及び時期については変更されたものがある。

15．現場での発掘調査及び報告書作成にあたり以下の方々からご教授いただいた。（敬称略）
宇田津徹朗（宮崎大学）・片岡宏二（小郡市教育委員会）・柴田博子（宮崎産業経営大学）・下條信行（愛媛大学）・永山修一（ラ・サール学園）・東和幸（鹿児島県歴史資料センター黎明館）・池畑耕一・川口雅之・中村耕治・永濱功治・西園勝彦・前迫亮一・馬籠亮道・八木澤一郎（鹿児島県立埋蔵文化財センター）・岩永哲男・菅付和樹・日高広人（宮崎県埋蔵文化財センター）・矢部喜多夫・乗畑光博・近沢恒典・加覧淳一・下田代清海・中村友昭（都城市教育委員会）・大盛祐子

16．発掘調査で出土した遺物とすべての記録は都城市教育委員会で保管している。

総 目 次

第1分冊
第1章 序説……1
第2章 遺跡の位置と環境……3
第3章 A地点の調査……7
第4章 B地点の調査……88
第2分冊
第5章 C地点の調査……1
第6章 自然科学分析……58
第7章 まとめ……106

本文目次

第1章 序説
第1節 調査の経緯と経過……1
第2節 調査組織……1
第2章 遺跡の位置と環境
第1節 地理的環境……3
第2節 地形面区分と横市川流域の歴史……4
第3章 A地点の調査
第1節 調査の方法と概要……7
第2節 基本層序……9
第3節 各時代の調査成果
1．弥生時代の遺構と遺物……12
（1）竪穴住居跡……12
（2）周溝状遺構……50
（3）土器溜まり……58
（4）掘立柱建物跡……59
（5）土坑及び炭化種子集中部……59
（6）鉄製品……73
（7）包含層出土遺物……74
2．その他の時代の遺構と遺物……81
（1）掘立柱建物跡……81
（2）土坑……81
（3）道路状遺構……87
（4）古代～中世出土遺物……87
第4章 B地点の調査……88
第1節 調査の方法と概要……88
第2節 基本層序……90
第3節 各時代の調査成果……90
1．縄文時代早期の遺構と遺物……90
2．縄文時代晩期の遺構と遺物……97
3．弥生時代の遺構と遺物……101
（1）竪穴住居跡……102
（2）周溝状遺構……132
（3）土器溜まり……135
（4）掘立柱建物跡……140
（5）土坑……142
（6）包含層出土遺物……142
4．古代～中世の遺構と遺物……144
（1）掘立柱建物跡……144
（2）集石状遺構と焜設遺構……146
（3）土坑……154
（4）溝状遺構と道路状遺構……154
（5）包含層出土遺物……176

挿図目次

第1図 遺跡分布図……3
第2図 地形面区分図……5
第3図 調査区域および周辺地形図……6
第4図 A地点遺構配置図……8
第5図 A地点土層断面図①……10
第6図 A地点土層断面図②……11
第7図 SA01及び出土遺物……14
第8図 SA02及び出土遺物……15
第9図 SA03及び出土遺物……16
第10図 SA04……17
第11図 SA04出土遺物……18
第12図 SA05……19
第13図 SA05出土遺物……20
第14図 SA06・07及び出土遺物……21
第15図 SA08・ST01及び出土遺物……22
第16図 SA09及び出土遺物……23
第17図 SA11及び出土遺物……24
第18図 SA12……25
第19図 SA12出土遺物……26
第20図 SA13及び出土遺物……27
第21図 SA13出土遺物①……29
第22図 SA13出土遺物②……30
第23図 SA14……31
第24図 SA14出土遺物……32
第25図 SA15及び出土遺物……33
第26図 SA16及び出土遺物……34
第27図 SA17及び出土遺物……35
第28図 SA18……37
第29図 SA18出土遺物……38
第30図 SA19……39
第31図 SA19出土遺物……40
第32図 SA22及び出土遺物……41
第33図 SA23……42
第34図 SA23出土遺物①……43
第35図 SA23出土遺物②……44
第36図 SA24……45
第37図 SA24出土遺物①……46
第38図 SA24出土遺物②……47
第39図 SA25……48
第40図 SA25出土遺物……49
第41図 SA26……50

第 42 図　SA27……51
第 43 図　SA27 出土遺物①　……52
第 44 図　SA27 出土遺物②　……53
第 45 図　SA27 出土遺物③　……54
第 46 図　SA28……55
第 47 図　SA28 出土遺物①　……56
第 48 図　SA28 出土遺物②　……57
第 49 図　SA28 出土遺物③　……58
第 50 図　ST02 及び出土遺物　……60
第 51 図　ST05 及び出土遺物　……61
第 52 図　ST03・04・06……62
第 53 図　ST03・04・06 出土遺物　……63
第 54 図　ST07・08……64
第 55 図　ST07 出土遺物①　……65
第 56 図　ST07 出土遺物②　……66
第 57 図　ST07・08 出土遺物　……67
第 58 図　SQ01・02 出土遺物　……68
第 59 図　SB03・05……69
第 60 図　弥生時代の土坑　……70
第 61 図　炭化種子分布図　……71
第 62 図　弥生時代 SC 出土遺物　……72
第 63 図　鉄製品　……74
第 64 図　包含層出土遺物①　……75
第 65 図　包含層出土遺物②　……76
第 66 図　包含層出土遺物③　……77
第 67 図　包含層出土遺物④　……78
第 68 図　包含層出土遺物⑤　……79
第 69 図　包含層出土遺物⑥　……80
第 70 図　SB01・02・06・07・08……82
第 71 図　その他の土坑①　……83
第 72 図　その他の土坑②　……84
第 73 図　その他の土坑③　……85
第 74 図　SF01・02……86
第 75 図　古代～中世出土遺物　……87
第 76 図　B 地点遺構配置図　……89
第 77 図　B 地点土層断面図①　……91
第 78 図　B 地点土層断面図②　……92
第 79 図　縄文時代早期遺構配置図　……93
第 80 図　縄文時代早期土坑①　……94
第 81 図　縄文時代早期土坑及び集石　……95
第 82 図　縄文時代早期の土器　……96
第 83 図　縄文時代早期の石器　……97
第 84 図　縄文時代晩期遺構配置図　……98
第 85 図　縄文時代晩期出土遺物①　……99
第 86 図　縄文時代晩期出土遺物②　……100
第 87 図　縄文時代晩期出土遺物③　……101
第 88 図　SA29……104
第 89 図　SA29 出土遺物　……105
第 90 図　SA30……106
第 91 図　SA30 出土遺物　……107
第 92 図　SA31……108
第 93 図　SA31 出土遺物　……109
第 94 図　SA32……110
第 95 図　SA32 出土遺物　……111
第 96 図　SA33……112
第 97 図　SA33 出土遺物　……113
第 98 図　SA34・35……114
第 99 図　SA34・35 出土遺物　……115
第 100 図　SA36 及び出土遺物　……116
第 101 図　SA36 出土遺物　……117
第 102 図　SA38 及び出土遺物　……118
第 103 図　SA39……119
第 104 図　SA39 出土遺物　……120
第 105 図　SA40……121
第 106 図　SA40 出土遺物　……122
第 107 図　SA41……123
第 108 図　SA41 出土遺物　……124
第 109 図　SA42・43……125
第 110 図　SA42 出土遺物　……126
第 111 図　SA44 及び出土遺物　……126
第 112 図　SA45……127
第 113 図　SA45 出土遺物①　……128
第 114 図　SA45 出土遺物②　……129
第 115 図　SA46……130
第 116 図　SA46 出土遺物　……131
第 117 図　ST09 及び出土遺物　……133
第 118 図　ST09 出土遺物　……134
第 119 図　ST10……135
第 120 図　ST10 出土遺物①　……136
第 121 図　ST10 出土遺物②　……137
第 122 図　ST11 及び出土遺物　……138
第 123 図　SQ 出土遺物　……139
第 124 図　SB09・10……140
第 125 図　SB08・21 及び SB 出土遺物　……141
第 126 図　SCB 1・2・3……142
第 127 図　包含層出土遺物①……143
第 128 図　包含層出土遺物②……144
第 129 図　古代～中世 SB ①……146
第 130 図　古代～中世 SB ②……147
第 131 図　古代～中世 SB ③……148
第 132 図　古代～中世 SB ④……149
第 133 図　古代～中世 SB ⑤……150
第 134 図　古代～中世 SB ⑥……151
第 135 図　古代～中世 SB ⑦……152
第 136 図　SS01・02……153
第 137 図　中世 SCB……154
第 138 図　SD03・04・05・15……155
第 139 図　SD12……156
第 140 図　SD01・02……157
第 141 図　SD07～10・13・14……158

第 142 図　SD06 断面図 …… 159
第 143 図　SD07・08・13 断面図 …… 160
第 144 図　SD09・10 断面図① …… 161
第 145 図　SD09・10 断面図②、SD14 平・断面図 …… 162
第 146 図　SD11 及び SS03 …… 163
第 147 図　遺構出土遺物① …… 164
第 148 図　遺構出土遺物② …… 165
第 149 図　遺構出土遺物③ …… 166
第 150 図　遺構出土遺物④ …… 167
第 151 図　包含層出土遺物③ …… 168
第 152 図　包含層出土遺物④ …… 169
第 153 図　包含層出土遺物⑤ …… 170
第 154 図　包含層出土遺物⑥ …… 171
第 155 図　包含層出土遺物⑦ …… 172
第 156 図　包含層出土遺物⑧ …… 173
第 157 図　包含層出土遺物⑨ …… 174
第 158 図　包含層出土遺物⑩ …… 175

表目次

A 地点遺物観察表 …… 177 ～ 184
B 地点遺物観察表 …… 185 ～ 195

写真目次

図版 1．B 地点全体写真 ……88
図版 2．平田遺跡遠景と A 地点土層 …… 196
図版 3．A 地点検出遺構① …… 197
図版 4．A 地点検出遺構② …… 198
図版 5．A 地点検出遺構③ …… 199
図版 6．A 地点検出遺構④ …… 200
図版 7．A 地点検出遺構⑤ …… 201
図版 8．A 地点検出遺構⑥と遺跡見学会 …… 202
図版 9．A 地点出土遺物① …… 203
図版 10．A 地点出土遺物② …… 204
図版 11．A 地点出土遺物③ …… 205
図版 12．A 地点出土遺物④ …… 206
図版 13．A 地点出土遺物⑤ …… 207
図版 14．B 地点検出遺構① …… 208
図版 15．B 地点検出遺構② …… 209
図版 16．B 地点検出遺構③ …… 210
図版 17．B 地点検出遺構④ …… 211
図版 18．B 地点検出遺構⑤ …… 212
図版 19．B 地点出土遺物① …… 213
図版 20．B 地点出土遺物② …… 214
図版 21．B 地点出土遺物③ …… 215
図版 22．B 地点出土遺物④ …… 216
図版 23．B 地点出土遺物⑤ …… 217

第1章　序　説

第1節　調査の経緯と経過

平成5年度より宮崎県北諸県農林振興局が行っているほ場整備事業において、事業実施予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である平田遺跡に含まれることから、平成14年に宮崎県文化課によって試掘調査が行われた。試掘の結果、御池軽石層上位にて弥生時代の遺構・遺物が確認されたため、宮崎県北諸県農林振興局、宮崎県文化課（現文化財課）、都城市教育委員会文化課（現文化財課）にて協議を行い、工事により遺跡に影響を及ぼす計26,400㎡について発掘調査を実施することとなった。また、平田遺跡の中央を一般国道10号都城道路が南北貫く予定となっており、該当地については宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。そこで、道路予定地より西側を平成15年度に、道路より東側を平成16年度に調査することとし、平成15年度調査地点をA地点、平成16年度調査地点をB・C地点、道路予定地をD・E地点とすることとなった。

平成15年度は平成15年4月10日～平成16年3月29日にかけて調査を行った。出土遺物の整理作業については、水洗・注記・復元の一部を現場の仮設事務所にて行い。復元及び実測図等の作成は市教育委員会文化財課にて行った。調査期間中に小学生・一般を対象とした遺跡見学会を実施し、約150名の参加があった。

平成16年度は平成16年4月9日～平成17年3月30日にかけて調査を行った。B地点とC地点では位置する地形面が異なるため、B地点・C地点の2地点に分かれて、あわせて12,400㎡について同時並行で発掘調査を行った。出土遺物の整理作業についてはA地点と同様である。平成17年3月12日に一般を対象に宮崎県埋蔵文化財センターと合同で遺跡調査報告会を実施し、約90名の参加があった。

第2節　調査組織

平成15年度（平田遺跡A地点調査実施年度）の組織

調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
調査責任者	教育長	北村　秀秋
調査事務局	教育部長	七牟礼　純一
	文化課長	井尻　賢治
	文化課長補佐	坂元　昭夫
	文化課副主幹	矢部　喜多夫
	文化財課事務嘱託	野上　幸代
調査担当者	文化課主事	栗山　葉子
	文化課嘱託	下田代　清海・津曲　千賀子

調査指導者　宍戸　章（宍戸地質研究所）、田崎博之（愛媛大学）、村上恭通（愛媛大学）
山村信榮（太宰府市教育委員会）、山本信夫（山本考古研究所）

平成16年度（平田遺跡B地点・C地点調査実施年度）の組織

調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
調査責任者	教育長	北村　秀秋
調査事務局	教育部長	七牟礼　純一

	文化財課長	稲丸　満文
	文化財課長補佐	坂元　昭夫
	文化財課副主幹	矢部　喜多夫
	文化財課事務嘱託	諸麦　友香
調査担当者		
（B地点）	文化財課主事	栗山　葉子
	文化財課嘱託	津曲　千賀子・天野　玄普（平成16年12月まで）
（C地点）	文化財課主事補	山下　大輔
	文化財課嘱託	原田　亜紀子・天野　玄普（平成17年1月より）
調査指導者	伊藤　晃（岡山県文化財センター）、宍戸　章（宍戸地質研究所）	
	丹治　康明（神戸市教育委員会）堀田孝博（宮崎県宮崎県埋蔵文化財センター）	

平成19年度（報告書刊行年度）の組織

調査主体者	宮崎県都城市教育委員会	
調査責任者	教育長	玉利　譲
調査事務局	教育部長	岩崎　透
	文化財課長	髙野　隆志
	文化財課主幹	新宮　髙弘
	文化財課副主幹	矢部　喜多夫
調査担当者	文化財課主事	栗山　葉子・山下　大輔（報告書の執筆・編集）

発掘作業従事者　阿久根トシエ・猪ヶ倉重光・猪ヶ倉正子・今村まさ子・今村ミツ子
岩切数秋・岩本泉・後田アヤ・上野利則・内山次男・大山伊智子・奥利治
奥スズ子・小山田利丸・上宮田ミチ・蒲生サダ・川野春信・木村七郎
木村典子・黒木昌子・児玉時春・児玉春男・下玉利文代・庄屋幸子
城村ミサ・竹下康子・立野良子・竹中美代子・谷山トミ子・武石重利
高橋露子・立石カズ子・永井隆・中村ゆう子・中須純子・永田義晴
西留健也・野上トシ子・野田ツミ子・橋口みどり・林有紀・早瀬航
平田美智子・福岡悦雄・馬籠恵子・松原ヨシ子・森山タツ子・山下美佐子
山口一夫・横山照良・吉村則子・来住サチ子・渡邊恭一

整理作業従事者　市来美都代・岩切真弓・内村ゆかり・大坪真知子・奥登根子・児玉信子
小浜ひろ子・新屋美佳・水光弘子・西里美・西博子・八谷邦江・福岡八重子
前田町子・横尾恵美子・丸崎千鶴子・水元美紀子・吉留優子・渡司ちさ子

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

都城市は九州東南部、宮崎県の南西部の都城盆地中央に位置する。盆地は北東を諸県丘陵、東から南にかけては鰐塚山地に、北西を霧島火山群、西を瓶台山・白鹿山に囲まれており、地溝状の窪地となっている。東側の地形は起伏に富み、山地から流下する河川によってその麓は開析し、扇状地を形成している。西側の山地は盆地底にかけて緩やかに傾斜する。また、盆地中央を多くの支流を集めながら大淀川が北流している。その支流の一つである横市川は、霧島山麓を源とし、鹿児島県曽於市（旧財部町）を経て蛇行しながら都城市中央部へと流下し、大淀川に合流する。

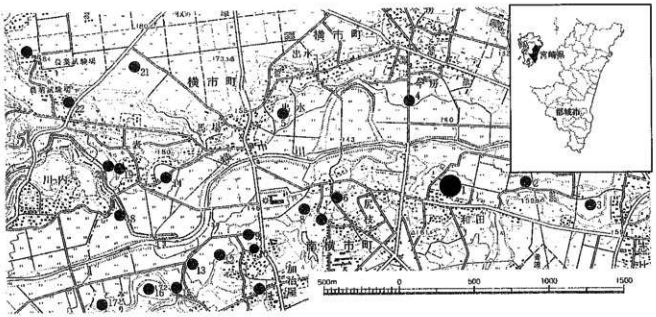
横市川流域は河岸段丘と氾濫現が形成されており、現況は水田が広がっている。この横市川両岸には、横市地区遺跡群と称される遺跡が多数存在し、当遺跡もこの遺跡群に含まれる。

平田遺跡は南横市町字和田に所在し、横市川右岸の成層シラス（二次シラス）台地である蓑原台地北端から東流する横市川へと傾斜する低位段丘面上に立地する。

Ａ地点では、北西より南と東へ谷間が延びている。それに伴い、南から調査区中央に向かい緩やかに下り、北側に向かい緩やかに高くなる。また全体的に東へ向かい緩やかに下っている。Ａ地点の標高は 148 m～ 150 mである。

Ｂ地点はＡ地点から連なる同一地形面に位置する。調査前の段階では北へ緩やかに下るものの、ほぼ平坦な地形であったが、旧地形は、調査区中央を東から西へ横断するように谷間が延び、それより北は高まりがあった。この谷は西側の宮崎県埋蔵文化財センターが調査を行ったＤ地点で終息している。

Ｃ地点は、Ａ地点・Ｂ地点より低い、沖積段丘面上に位置する。東から西へと緩やかに傾斜し、調査区の下層からは湧水が認められる。標高は 142 m前後である。



1.平田遺跡　2.早馬遺跡　3.正坂原遺跡　4.今原遺跡　5.鼓穴遺跡　6.胡摩殿遺跡　7.田谷尻牧遺跡　8.星原遺跡　9.加治屋拝遺跡　10.縄掛器川上地点
11.加治屋A遺跡　12.坂元B遺跡　13.坂元A遺跡　14.郷嶋遺跡　15.江内谷遺跡　16.中尾山・馬渡遺跡　17.馬渡遺跡　18.曽智兵谷遺跡　19.新宮城跡　20.御田遺跡
21.牧の原第2遺跡　22.曽智兵原第3遺跡　23.上牧第2遺跡

第１図　遺跡分布図

第２節　地形面区分と横市川流域の歴史

横市川流域では平成８年度より行われている農業基盤整備事業に伴い、継続的に発掘調査が行われてきた。その他の事業も含め、都城盆地内で、最も埋蔵文化財の調査密度が高い地域となっている。これらは、横市川とその周辺の地形と密接にかかわりがあることから、平成12年度から平成14年度にかけて、宍戸章氏が横市川流域一帯の地形について次のように区分を行っている。

成層シラス面より下位から現河床の存在する沖積低地（氾濫原）を除く面までを、薩摩テフラ（Ｐ14）かそれより古いテフラに覆われるものを低位段丘、アカホヤ（k-Ah）やそれ以降の御池軽石（Kr-M）等に覆われるものを沖積段丘とし、更に標高の違いから低位段丘を３つ（低位段丘１～３：ｔ１～ｔ３）、沖積段丘を２つ（沖積段丘１・２：at１・at２）、の５つに沖積低地（ａ）と成層シラス面（Ｓ）を含めた７面である。（第２図にその一部を掲載している。）

この区分でみると、平田遺跡はat１面からｔ２面にまたがっており、遺跡内には沖積低地から延びる谷間が延びている。

ここで平田遺跡が存在する横市川流域の歴史について、地形面区分を交え概観してみる。

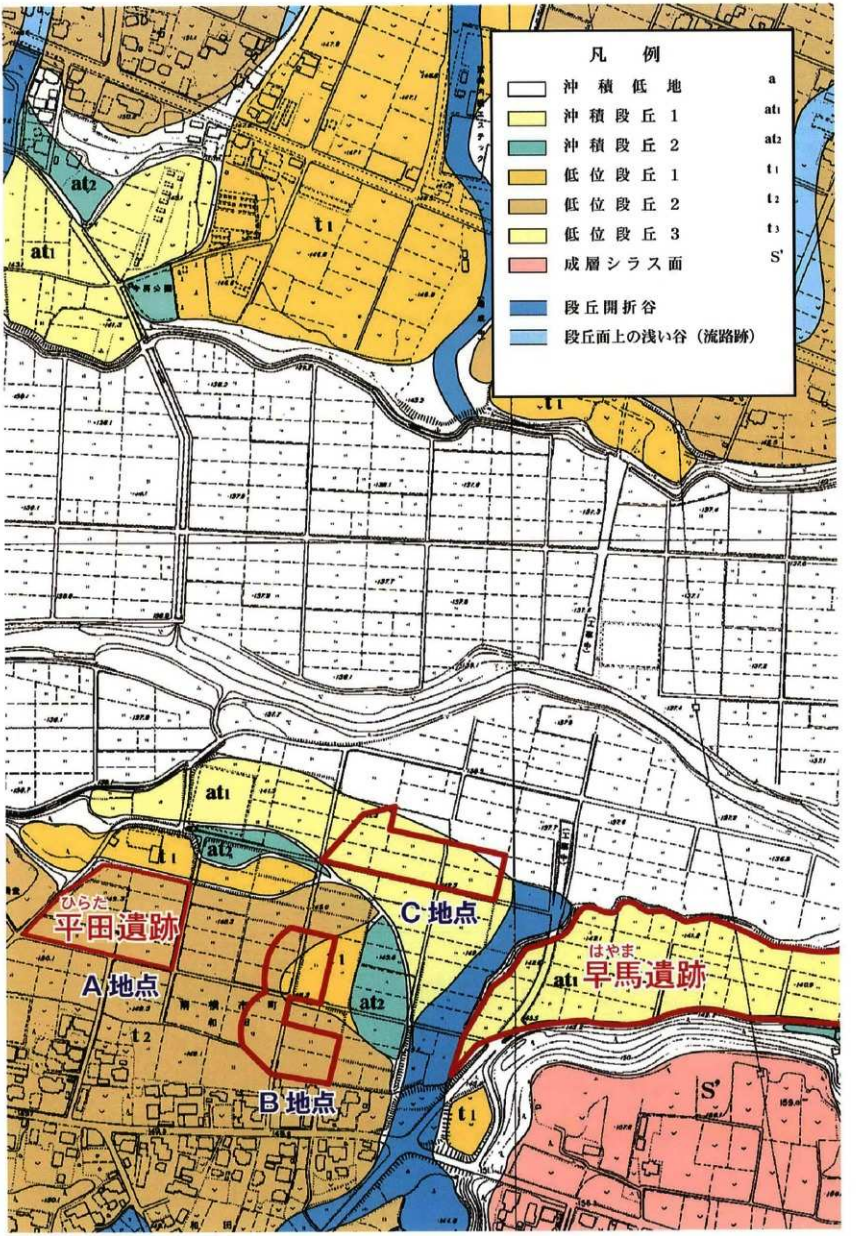
横市川流域で最も古い遺跡は縄文時代早期に該当する。他の時代に比べ数は多くないが、成層シラス面（S）から低位段丘（ｔ２）にかけて見つかっている。（S:胡摩段遺跡。ｔ３：田谷・尻枝遺跡。ｔ２：加治屋Ｂ遺跡、平田遺跡Ｂ地点）。縄文時代前～中期にかけてはｔ２～ｔ３面に位置する田谷・尻枝遺跡と星原遺跡がある。縄文時代後～晩期になると、低位段丘面より下位の沖積段丘面に遺跡が形成され始め、遺跡数も増加する。（ａｔ１：今房遺跡、馬渡遺跡、肱穴遺跡。S～ａｔ１：馬渡遺跡、中尾山・馬渡遺跡、坂元Ａ遺跡、坂元Ｂ遺跡、加治屋Ｂ遺跡、星原遺跡、平田遺跡、正坂原遺跡）坂元Ａ遺跡では晩期後半の水田跡が見つかっている。

弥生時代の遺構・遺物は、ａｔ１～Ｓ面にかけて、横市川流域の大半で検出される。中期の集落としてはｔ２面に位置する加治屋Ｂ遺跡や平田遺跡など、後期～終末にかけては、ａｔ１面に位置する馬渡遺跡、坂元Ｂ遺跡、今房遺跡、平田遺跡Ｃ地点などが挙げられる。

古墳時代の集落はＳ面（中尾遺跡、箕原遺跡、横市中原遺跡）とｔ２面（星原遺跡）の他、ａｔ１面に位置する鵜喰遺跡がある。特に鵜喰遺跡では後期の68軒にも及ぶ竪穴住居が検出され、住居跡内からカマドも検出されている。

古代における横市川流域は、８世紀後半にａｔ１～ａ面にかけて位置する肱穴遺跡の集落を皮切りに、９世紀～10世紀前半が特に盛行している。Ｓ面に位置する中尾山・馬渡遺跡を除くと、他はａｔ１とｔ２面（ａｔ１：馬渡遺跡、江内谷遺跡、坂元Ｂ遺跡、鵜喰遺跡、今房遺跡。ｔ２：加治屋Ｂ遺跡、星原遺跡、平田遺跡）に位置する。特に江内谷遺跡では木製品が多量に出土し、馬渡遺跡・加治屋Ｂ遺跡では石帯が出土している。星原遺跡では古代の畝状遺構が検出されている。ところが、大淀川右岸に推定される「島津荘」が成立した11世紀前半の遺跡は坂元Ｂ遺跡が挙げられる程度である。

平安時代の終わりから鎌倉時代にはａｔ１面を中心に遺跡が位置する。鵜喰遺跡（ａｔ１～ａｔ２面）、肱穴遺跡、今房遺跡、馬渡遺跡、坂元Ｂ遺跡、加治屋Ｂ遺跡（ｔ２面）、早馬遺跡、正坂原遺跡等である。中でも加治屋Ｂ遺跡では在地領主館跡と推定される掘立柱建物跡群が検出されている。また、南北朝の南朝方の城として新宮城がｔ２面に位置している。

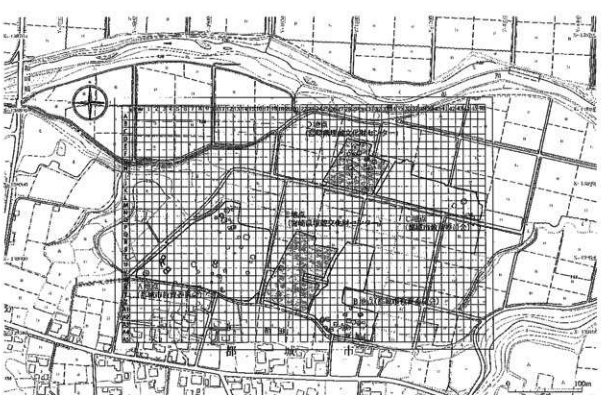


第2図　地形面区分図（S=1/5000）

近世の遺跡は肱穴遺跡、坂元Ｂ遺跡、加治屋Ｂ遺跡等、ａｔ１～ｔ２面に位置している。

【参考文献】

都城市教育委員会 1986『都城市遺跡詳細分布調査報告書』都城市文化財調査報告書第５集
都城市教育委員会 1997『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第 38 集
都城市教育委員会 1999『肱穴遺跡』都城市文化財報告書第 47 集都城市教育委員会 2004『鵜喰遺跡（古墳時代編）』都城市教育委員会都城市文化財調査報告書第 61 集
都城市教育委員会 2000『肱穴遺跡（１） 今房遺跡 馬渡遺跡（第１次）』都城市文化財報告書第 50 集
都城市教育委員会 2003『江内谷遺跡』都城市文化財調査報告書第 59 集
都城市教育委員会 2003『横市地区遺跡群加治屋遺跡遺跡（第２次調査）・星原遺跡』都城市文化財調査報告書第 60 集
都城市教育委員会 2004『鵜喰遺跡（古墳時代編）』都城市文化財調査報告書第 61 集
都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財報告書第 62 集
都城市教育委員会 2006『坂元Ａ遺跡 坂元Ｂ遺跡』都城市文化財調査報告書第 71 集
都城市教育委員会 2006『星原遺跡』都城市文化財調査報告書第 72 集
都城市教育委員会 2007『鵜喰遺跡（中世編）』都城市文化財調査報告書第 79 集
都城市教育委員会 2007『今房遺跡』都城市文化財調査報告書第 80 集
千田嘉博 1998「新宮城跡」『都城市の中世城館』都城市文化財調査報告書第 45 集 都城市教育委員会



第３図 調査区域および周辺地形図

第３章　Ａ地点の調査

第１節　発掘調査の方法と概要

第１章で触れたように、平田遺跡の調査は都城市教育委員会と、宮崎県埋蔵文化財センターによって同時に調査が行われることとなった。そこで、両調査区域を網羅するように、10ｍ×10ｍグリットと設定した。起点は世界測地系による国土座標（Ｘ＝－138800、Ｙ＝3810）である。東西方向に整数、南北方向にアルファベットを付したものを組み合わせた（一部アルファベットおよび整数の組み合わせとなっている）。このグリットは宮崎県埋蔵文化財センター調査区域と共通するものである。（第３図は宮崎県埋蔵文化財センターよりデーターの提供を受け加筆した。）

最初に平成15年４月10日より15日にかけて土層確認のための調査を行った。その結果、調査区の東では遺物包含層と思われる黒色土がほとんど残っておらず、また、遺構・遺物は確認されなかった。西側の北半分では15世紀後半に桜島より噴出したとされる文明軽石層より下位が良好に堆積していた。南半分では東端のトレンチ以外では黒色土がほぼ削平されていた。これらの状況と調査期間、調査面積を鑑み、調査区東半分については遺物が出土するレベルまで重機にて掘り下げを行うこととした。

また、膨大な廃土が産出されたため、調査区の東半分の調査を先に行い、遺物包含層が良好に残る西半分については後から行い、その廃土を東半分に置くこととした。当初調査区南西隅の一部については、土層確認調査の際に遺物包含層の残存状況が芳しくない点と、遺構・遺物が確認されないことから調査事務所を設置し、調査を行わない予定であった。しかし、表土を除去した時点で、周溝状遺構が事務所設置部分に伸びていることが確認されたため、東側の調査終了後に事務所を移転し調査することとなった。

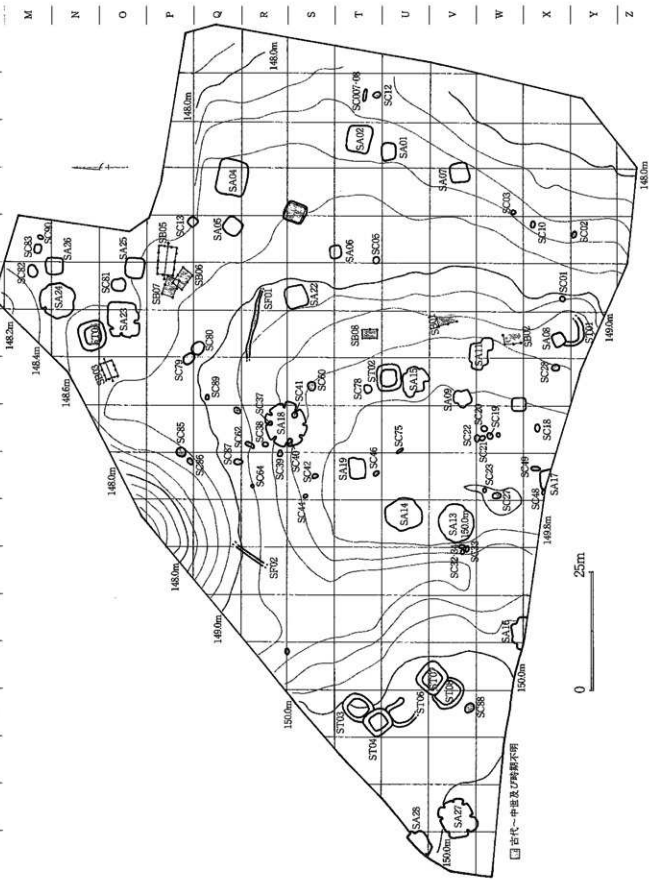
重機による表土の除去後、遺物包含層である黒色土（Ⅳ～Ⅴａ）層の掘り下げを人力で行った。また、調査区東端には下層確認も兼ねた排水用の溝をアカホヤ火山灰層下位まで重機にて掘り下げたが、遺構・遺物等は確認できなかった。

遺構検出は御池軽石層の漸移層である暗褐色土（Ⅴｂ）層上面で行ったが、黒色土が厚く残存していた部分では黒色土中にて遺構検出が可能であった。

遺物は通し番号を付け、随時トータルステーションを用い取り上げを行った。遺構については、検出後通し遺構番号を付け写真撮影を行った後、断ち割りを行い、平面的に掘り下げた。断面観察によって、地形的な浅い窪みと考えられるものについては、遺構番号が欠番となっている（SA20・21、SA10はSA09と同一）。

Ａ地点の調査面積は14,000㎡で、標高は約148ｍ～150ｍである。調査区中央が小高い尾根状を呈し、中央から北西に向かいやや深い谷が始まっている。また、調査区中央から東に向かい緩やかに傾斜し、北側は小谷を挟み緩やかな高まりが見られる。遺構・遺物は調査区中央の尾根状部分と北側の緩やかな高まりを中心にみられ、弥生時代中期後半から後期を主体としている。主な遺構としては竪穴住居跡・周溝状遺構が挙げられる。周溝状遺構からは多量の炭化米が出土するなど、当時の集落の様相を食糧事情の点からも解明する一端となった。

また、古代から中世にかけての道路状遺構や掘立柱建物跡も検出されており、Ｂ・Ｃ地点を含め古代～中世における平田遺跡周辺の集落の広がりを知ることが出来た。



第4図　A地点遺構配置図

第2節　基本層序

A地点の土層堆積状況は、表土および近・現代の耕作土によって削平を受けているため、必ずしも良好な堆積とはいえなかった。

調査区北西の谷部分でⅢ層の文明軽石層（15世紀後半に鹿児島県桜島より噴出）が認められた。良好なものとは言えなかったが、ほぼ等間隔に半月状に残されていることから文明軽石噴出時に埋没した畠の畝間に残されているものと判断した。これらは平面的にはほとんど検出することができなかった。

Ⅲ層の下にパミスをほとんど含まない粘質の黒色土であるⅣ層が存在するが、これも調査区北西谷部分と南西部を除いては大半が削平されていた。いずれも、周辺よりやや低い部分に埋没したものが残されている状況と考えられる。

調査区南西部を除きほぼ全域で認められたのはⅤ層の黒褐色土である。Ⅵ層の御池軽石（霧島御池より約4,200年前に噴出）を多く含むのが特徴で、弥生時代の遺物包含層である。Ⅴ層は全体としては黒褐色であるが、下位に行くにしたがってⅥ層の含有率が高くなり褐色化していく。弥生時代の遺構検出面はⅤ層の黒褐色土（Ⅴａ）と暗褐色土（Ⅴｂ）の境である。

Ⅰ層：表土。調査区西壁（P-6区）では80cm程の厚さが認められ、間に2枚の水田基盤層が認められた。灰褐色砂質土。

Ⅱ層：旧耕作土。黒灰色土。調査区西壁では50cm程の厚さが認められた。1cm以下の白色軽石（文明軽石）が主体で、黒色土が混ざっている。

Ⅲ層：文明軽石（15世紀後半に櫻島より噴出）層。白～明黄白色を呈す。0.5cm程度を主体とする1cm以下の軽石が主体で砂混じり。

Ⅳ層：黒色粘質シルト土。調査区西壁で厚さ20cm程。光沢がありしっとりとしてサラサラしている。粘質は弱。

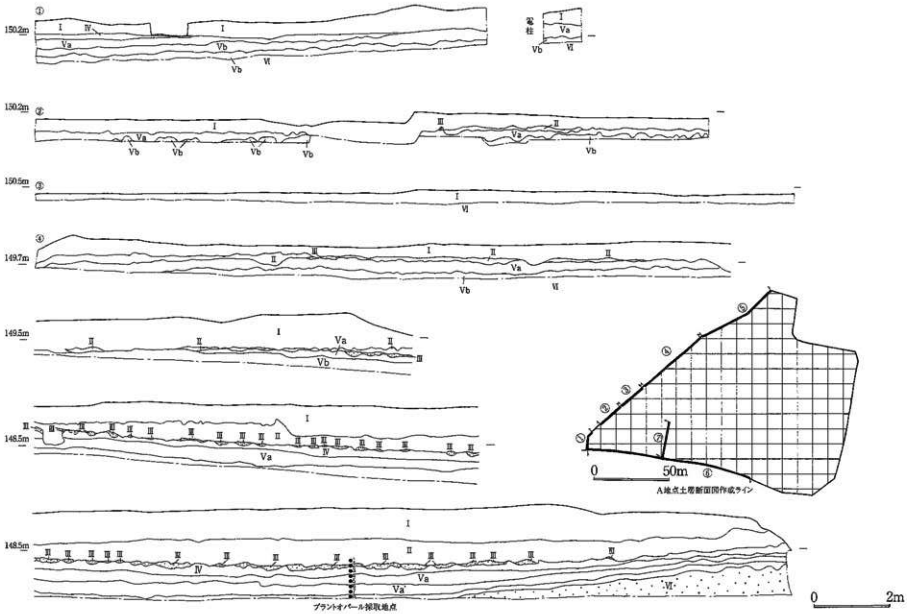
Ⅴ層：黒色～暗褐色粘質シルト土。上部から下部にかけてⅥ層の御池軽石（黄色軽石）を含む割合が高くなり褐色化していく。上部の黒色～黒褐色を呈し、御池軽石を含む部分をⅤａ層、下部の御池軽石を極多く含み、暗褐色を呈する部分をⅤｂ層として細分が可能である。また、北西部や南西部の土層堆積が良好な場所では、上部のⅤａ層が更に細分化できる。Ⅴａ1とⅤａ2である。Ⅴａ1は黒色を呈し、小粒の黄色軽石を多く含んでいる。Ⅴａ2層は黒褐色を呈し、Ⅴａ1層よりⅥ層の黄色軽石を多く含んでいる。

Ⅵ層：御池軽石（約4,200年前に霧島御池より噴出）層。黄色を呈す。2ｃｍ以下を主体とする。1～1.5ｍの堆積が認められた

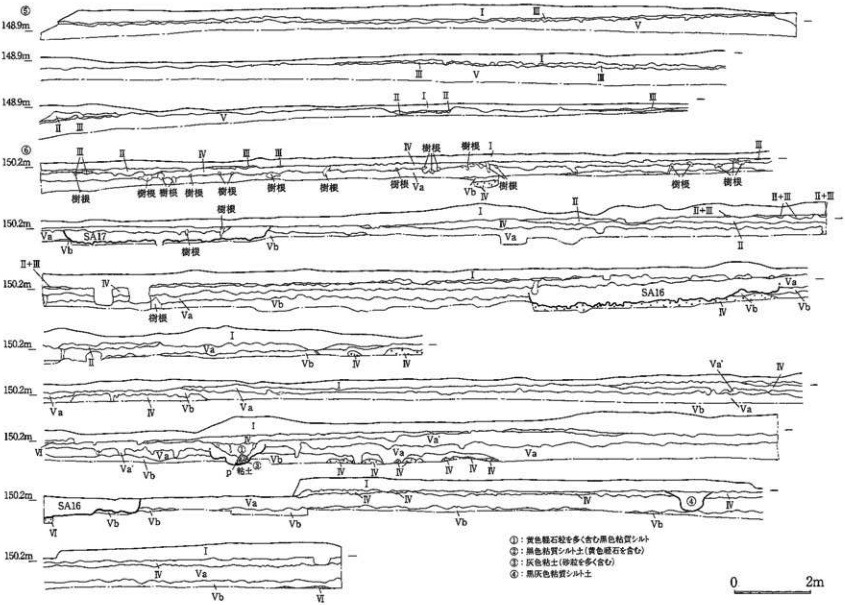
Ⅶ層：黒色粘質シルト土。若干水分を含む粘質の非常に強い土である。

Ⅷ層：アカホヤ火山灰。鬼界カルデラより約6,500年前に噴出した火山灰である。

＊Ⅵ～Ⅷ層については、土坑の壁面と調査区東端のトレンチを参考としている。



第5図　A地点土層断面図①



第69図　A地点土層断面図②

第３節　各時代の調査成果

1.弥生時代の遺構と遺物

A地点で検出された弥生時代の遺構は、竪穴住居跡18軒、竪穴状遺構７基、掘立柱建物跡２棟、周溝状遺構８基、土坑23基、炭化種子集中部３箇所である。

うち中期後半に属するものが、竪穴住居跡15軒（SA01、02、04、09、11～17、19、23～25）、竪穴状遺構５基（SA03、06、07、22、26）、周溝状遺構１基（ST02）である。後期に属するのが、竪穴住居跡３軒（SA18、27、28）、竪穴状遺構２基（SA05・08）、周溝状遺構７基（ST01、03～08）である。掘立柱建物跡の詳細な時期は不明である。また、土坑はSC03、08、10、79、80、82、83、90が後期に属し、SC05、13、18～22、26、38、43、45、47、74、78、81については中期後半に属すると思われる。

これらの遺構の配置を見ると、後期の遺構が中期後半の遺構に比べ、高地に集中しており、後期の遺構が中期後半の遺構を壊して構築されることはない。

中期後半の遺構からは、鹿児島県大隈半島を中心に見られる雲母を多く含む山ノ口式土器や、下城式や中津式といった宮崎平野を中心に見られる土器が出土している。その他の特徴として、磨製石鏃の未成品が多数出土している。

後期前半の遺構からは無文の甕が多く出土する。胎土に赤褐・黒・白色などの粒を多く含んでいるのが特徴で、非常に粗い胎土である。また、SA27・28からは免田式の長頸壺が共伴している。SA27からは炭化米や炭化種子も出土している。

ST01を除く周溝状遺構からは炭化米が出土している。ST02は炭化米と共に少量ではあるが、雲母を含む山ノ口式の胴部片などが出土している。後期の周溝状遺構はST05を除くと残存状態が良好とはいえないが、炭化米と共に多量の土器が出土している。器台を除けば何れも住居から出土している器種と同じで、甕・壺が主体となっている。

（１）竪穴住居跡（竪穴状遺構）

SA01（第７図）

U－15区に位置する。東西3.1ｍ、南北2.8ｍ、検出面からの掘り込みは約0.4ｍ。方形の竪穴住居である。東西に直径0.4～0.5ｍ、深さ0.4～0.55ｍの主柱穴と住居中央に直径0.25ｍ、深さ0.3ｍの柱穴が１本認められた。東西の主柱穴はいずれも住居側壁から外側へ掘り込まれているが、住居側壁は壊されていない。床面は黄色軽石を主体とした貼床は５～10cmの厚さで認められ、硬くしまっていた。住居内の埋土はⅤａ層黒色土を主体とし、Ⅵ層御池軽石を多く含んでいた。遺物は住居中央を中心に出土している。

1～4は甕である。いずれも胴部突帯を持つもので、胎土に雲母を含んでいるのが特徴である。1・2は山ノ口Ⅱ式に該当すると思われる。5は礫端部と稜部を敲打用として、平面を砥石として併用している。

SA02（第８図）

T－15区、SA01のすぐ北側に位置する。ベット状部分を含めた規模が東西約5.5ｍ、南北4.9ｍ、深さ0.25ｍの方形竪穴住居である。中央が東西2.9、南北2.4ｍの範囲で一段下がり、その東西の

壁面に2本の主柱が認められる。中央の方形部分だけ見ると、SA01に規模・形態・柱穴等、酷似している。柱穴は直径0.5～0.7m、床面からの深さは約0.7mである。2本とも外側に袋状の掘り込みがあり、東側の柱穴ではその袋部分に甕脚部（山ノ口式Ⅱ式）が埋設されていた。貼床は中央の北側でははっきりするが、全体的に層を成すほどしっかりはしていない。

6は山ノ口式の甕。口縁部が粘土の継ぎ目ではがれているが、胎土に雲母を含んでいる。7は柱穴より出土した山ノ口Ⅱ式の甕脚部で胎土に雲母を多く含んでいる。外面に灰白色の付着物が認められた。8は磨石である。9・10は軽石製品である。

SA03（第9図）

S・R-13・14区に位置する。南北4.3m、東西3.5m、深さ0.1mの方形を呈す竪穴状遺構である。遺構の壁際を中心に柱穴が検出されており、当初はこの遺構に伴う柱穴と考えられたが、遺跡内の古代～中世の掘立柱建物跡の柱間とを比較したところ、ほぼ同規格であることから、SA03には伴わない可能性が高い。また、貼床は層を成すほど厚さがなく、所々認められる程度であった。遺構内の埋土は単一層で、黄色軽石を多く含んでいる。

遺構内からの出土遺物は少量かつ破片が多い。11は中溝式甕の胴部片で、外面にススが付着する。12は軽石製品である。中央に穿孔の痕が残る。

SA04（第10・11図）

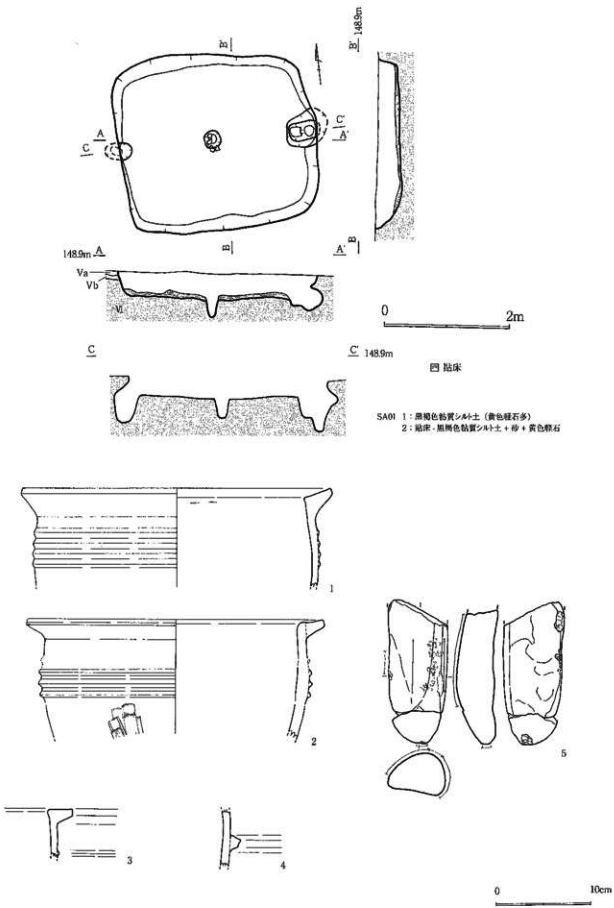
Q・R－14・15区に位置する。中央掘り込みの周囲にベット状遺構が巡る、東西7.3m、南北6.4m、深さは0.5mの方形の竪穴住居跡である。主柱穴は中央の2本で、直径0.8～0.9m、床面からの深さは1mである。また、主柱穴の延長上に東西の柱穴が認められた。住居埋土は黒色土と褐色土からなり、黄色軽石を含んでいる。掘り込み面直上に黒褐色土、その上に黄色軽石を主体とする貼床が柱穴や壁際の一部を除き全体的に認められた。住居東側では貼床が2枚認められた。2枚目は1枚目を掘削した上に、間層を挟んで造られている。

13は頸部に分割暗文風のミガキが施された壷である。丹塗りではないが、所々赤褐～明赤褐色の付着物が残る。暗文風のミガキは5箇所に5～9本施されている。胴部は全体的にミガキが施される。胎土は在地のものである。外面に煤が付着している。14は無文の甕で、口唇部が窪む。15は中溝式甕。16は口縁端部がやや下垂し、やや丸味を帯びたもので、口縁平坦面に櫛描状の文様が施されている。胎土に雲母を含んでいる。入来Ⅱ式と思われる。17は胎土に雲母を含む甕脚部である。18は壷底部である。底部に布状の圧痕が認められる。19は土製の紡錘車で、焼成前に片側から穿孔が認められる。胎土は在地系の土器と同じである。

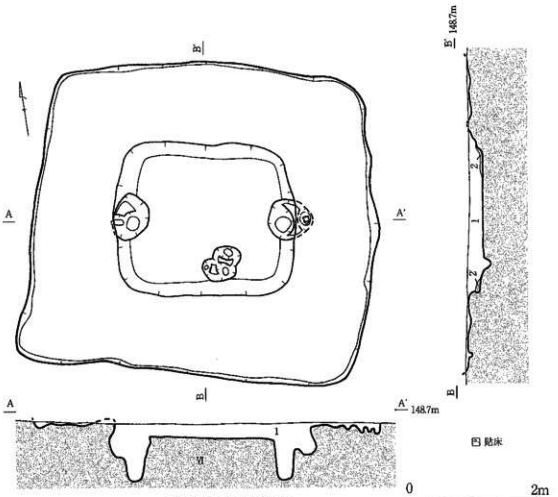
20は輝石安山岩の剥片で下面に2次加工が認められる。21・22は磨石、23は台石兼砥石である。24～28は軽石製品である。24・27・28は浅い溝状のものが複数見られることから、紐などを巻きつけた可能性がある。

SA05（第12・13図）

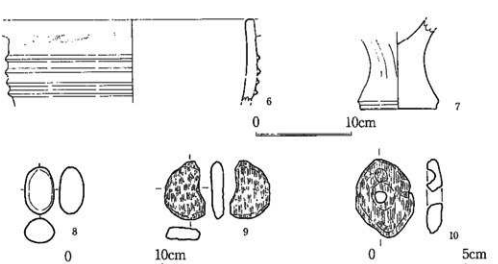
Q－13区に位置する。東西3.2m、南北3.4m、深さ0.7mの方形を呈す竪穴状遺構である。遺構の床面には貼床が全面に認められ、貼床直上からは壷が出土している。遺構を囲むようにテラス状に浅い窪みが認められたが、遺構に伴う意図的な構造というよりは、構築時および使用による踏みしめ等による地形の変化と考えるのが妥当かと思われる。



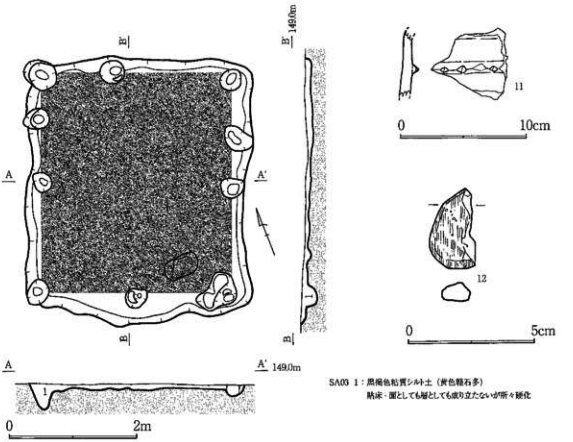
第7図　SA01 及び出土遺物



SA02　1：黒褐色粘質シルト土（黄色酸石多）
2：明黒褐色粘質シルト土（黄色酸石多）
2'：貼床・黄色酸石＋黒褐色粘質シルト土



第8図　SA02及び出土遺物



第9図　SA03及び出土遺物

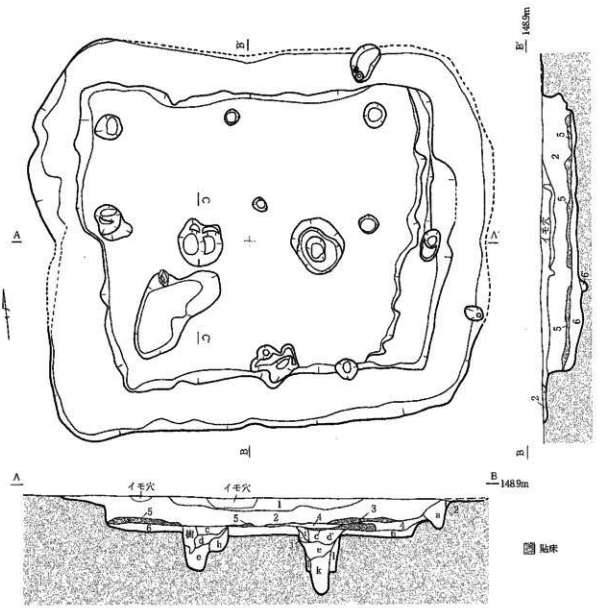
埋土は四層に分層できたが、何れもレンズ状に堆積していることから、遺構廃絶後、自然に埋没したものと考えられる。**29**は壺で、工具によるナデが施される。弥生時代後期と思われる。外面には煤が付着している。瘤内底部には砂と黄色軽石を主体とする褐色土が堆積していた。**30**はおそらく流れ込みと考えられる。須久Ⅱ式の甕で搬入品の可能性がある。埋土中の炭化物の年代は2030±40年BPであるが、測定を行った炭化物は他の遺物同様流れ込みの可能性が高い。

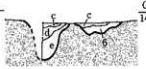
SA06（第14図）

S・T－13区に位置する。南北2.2m、東西2.1mの方形を呈す竪穴状遺構である。検出面からの深さは0.2mで、遺構中央を中心に厚さ5cmの貼床が認められる。貼床は壁際などには認められず、砂と黄色軽石を主体としている。遺構南と西の壁際に浅い小ピットが認められるが、何れも小規模である。遺構埋土は単一の黒褐色土で黄色軽石を多く含んでいる。遺物は住居中央を中心に土器・石器が出土している。**36**は山ノ口Ⅱ式の甕で胎土に雲母を含んでいる。**37**は瘤頸部で、胎土に雲母を多く含む。**38**は磨製石鏃である。石材は緑色岩類である。

SA07（第14図）

V－13・14区に位置する。当初、大型の土坑と思われたが、東西3.25m、南北3.1m、深さ10cmの方形を呈す竪穴状遺構となった。貼床は遺構中央を中心に部分的に認められ、厚さ5cm程度である。直径0.3～0.4m、深さ0.16mの柱穴が中心よりやや南で1基検出された。



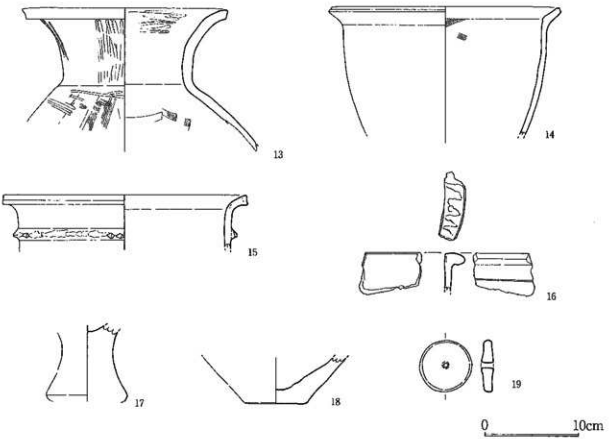


SA04 1：黒褐色砧質シルト土（黄色軽石含）
2：褐色砧質シルト土（黄色軽石含）
3：貼床・黒褐色砧質シルト土＋黄色軽石
4：黒色砧質シルト土
5：貼床・黒褐色砧質シルト土＋黄色軽石
6：黒褐色砧質シルト土＋黄色軽石

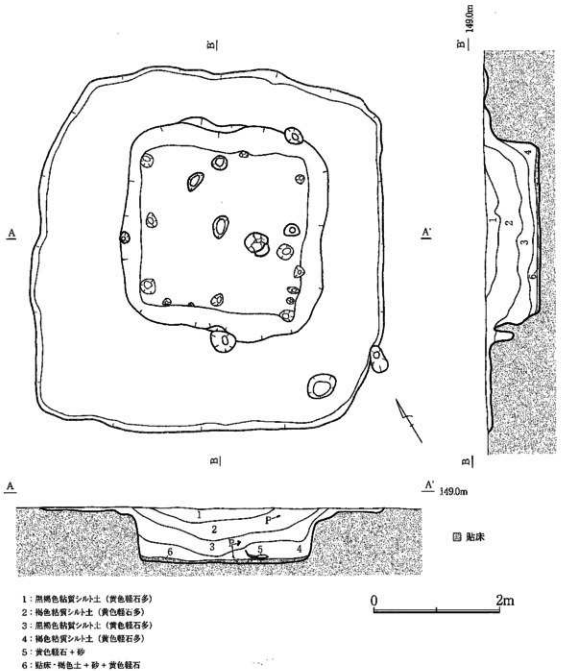
ピット a：黒色砧質シルト土＋（黄色軽石黄色軽石多）
b：黄色軽石＋黒褐色砧質シルト土
c：黒色砧質シルト土（黄色軽石多）やや灰色がかる
d：黒褐色砧質シルト土（黄色軽石多）
e：褐色砧質シルト土＋黄色軽石
f：dの硬化
g：fより黄色軽石多
h：黒色砧質シルト土（黄色軽石含）
i：黄色軽石
j：黒褐色砧質シルト土ブロック
k：黒色砧質シルト土（黄色軽石少）
l：黄色軽石（黒褐色にくすむ）

0　2m

第10図　SA04



第11図　SA04出土遺物

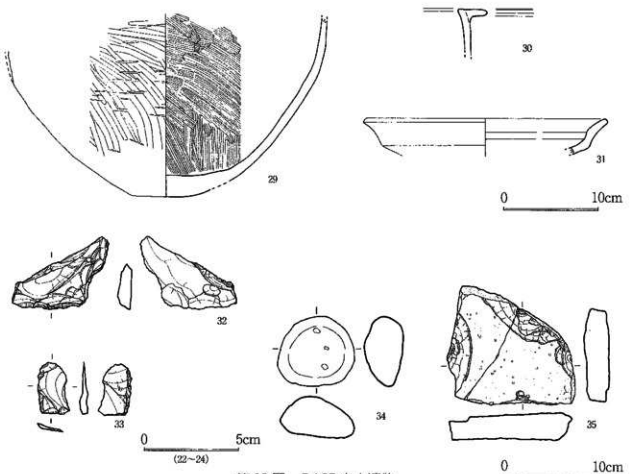


第12図　SA05

遺構埋土は単一である。貼床は黄色軽石を主体とし、硬くしまっていた。遺構内からの遺物は雲母を含む破片が1点と礫2点で、破片の胎土から中期後半に位置付けられると考える。

SA08及びST01（第15図）

X－11区に位置する。SA08は、東西2.45m、南北2.4m、検出面からの掘り込みは0.55m、方形の竪穴状遺構である。規模が小さく、柱穴が認められないものの、最下層に貼床が認められる。埋土は貼床を含め五層に分層される。2層がやや硬くしまり、切り合い関係にあるST01の埋土と非常に類似していることから1・2層はST01の埋土と考えられる。よってSA08が埋没した時点でST01が構築されたものと思われる。



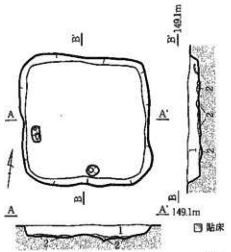
第13図　SA05出土遺物

ST01の深さが全体的に浅いのに対し、SA08部分では深さが40cmと深いのはSA08が完全に埋まらず、やや窪地状態であった時点でST01が構築されたか、周辺より土が軟らかかったためと思われる。ST01は南西から北東へ傾斜する場所に位置する。おそらく遺構構築時は検出時ほど傾斜が無くほぼ平坦であったため、北東部は御池軽石層まで掘り込まれることが無かった可能性が高い。遺構の規模は推定で5.5～5m。溝幅は60～70cmで、溝の深さは20～40cmである。溝が全周していたかは不明であるが、平面形態は楕円か隅丸方形と思われる。

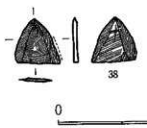
40はST01よりの出土で、壺である。**39**、**41**、**42**はSA08出土遺物である。**39**は口縁部の屈曲がやや緩いカーブを描くことと、胎土から弥生時代後期に位置づけられる。**41**は2次加工が施された剥片で、**42**はおそらく台石片である。

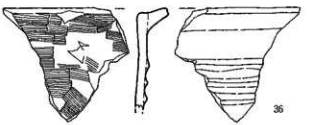
SA09（第16図）

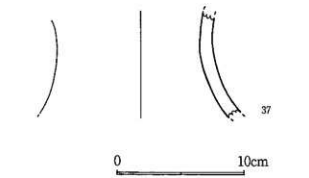
V－10区に位置する。検出当初は2件の竪穴住居（SA09・10）と考えられたが、土層断面を観察した結果、方形竪穴住居の一部に方形のピット状遺構を持つ1軒の住居となった。東西3.5m、南北3.5mで、深さは0.25mである。遺構上部は後世の削平を受けていると思われる。主柱穴は中央の東西側壁に位置する2本で、直径45cm、床面からの深さ45cmである。住居中央には貼床が施されていたが、ピット状遺構部分では認められなかった。遺構埋土は単一で、御池軽石を多く含んでいた。

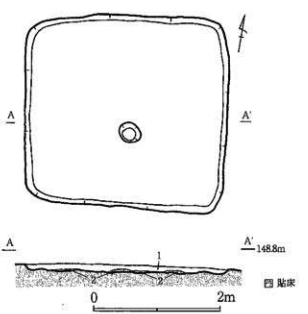


SA06 1：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
2：貼床・砂＋黄色粒石



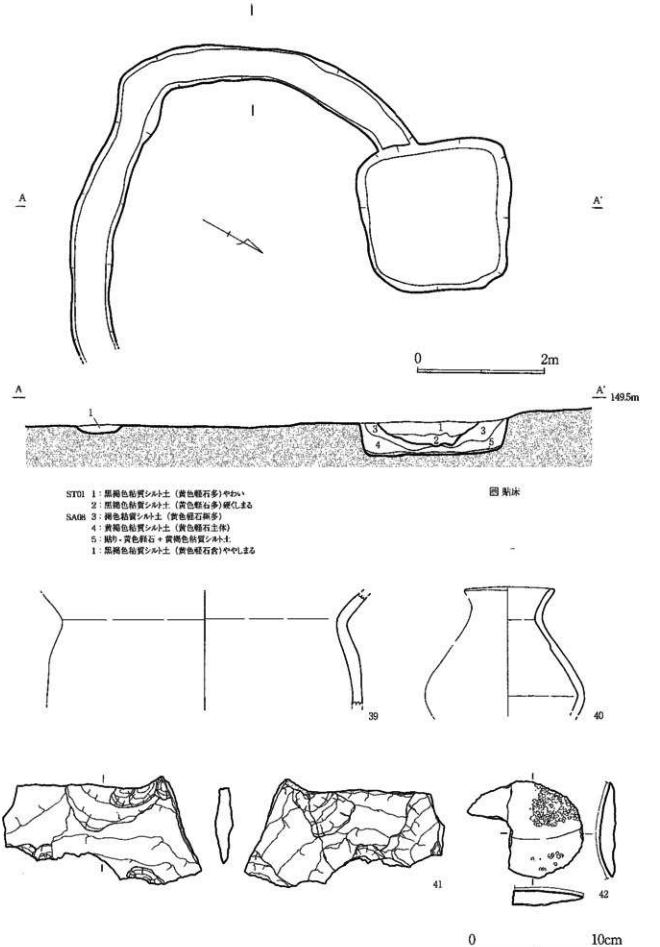




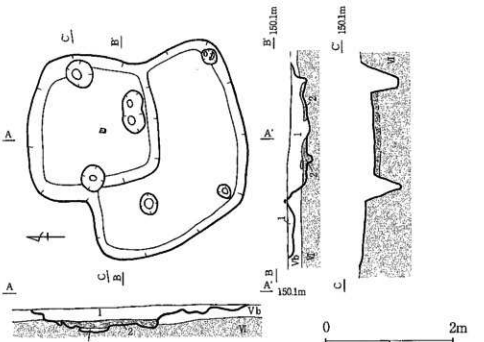


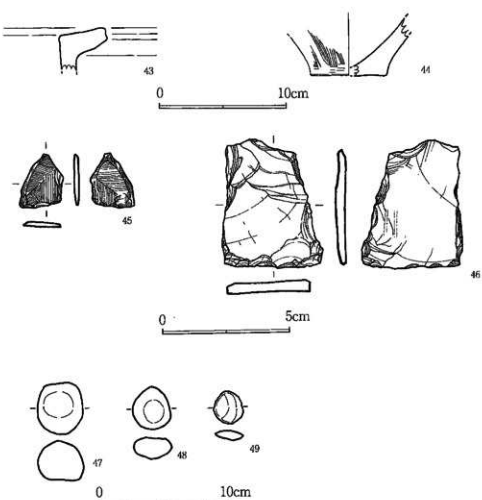
SA07 1：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石含）
2：貼床・明褐色粘質シルト土（黄色粒石含）

第14図　SA06・07及び出土遺物

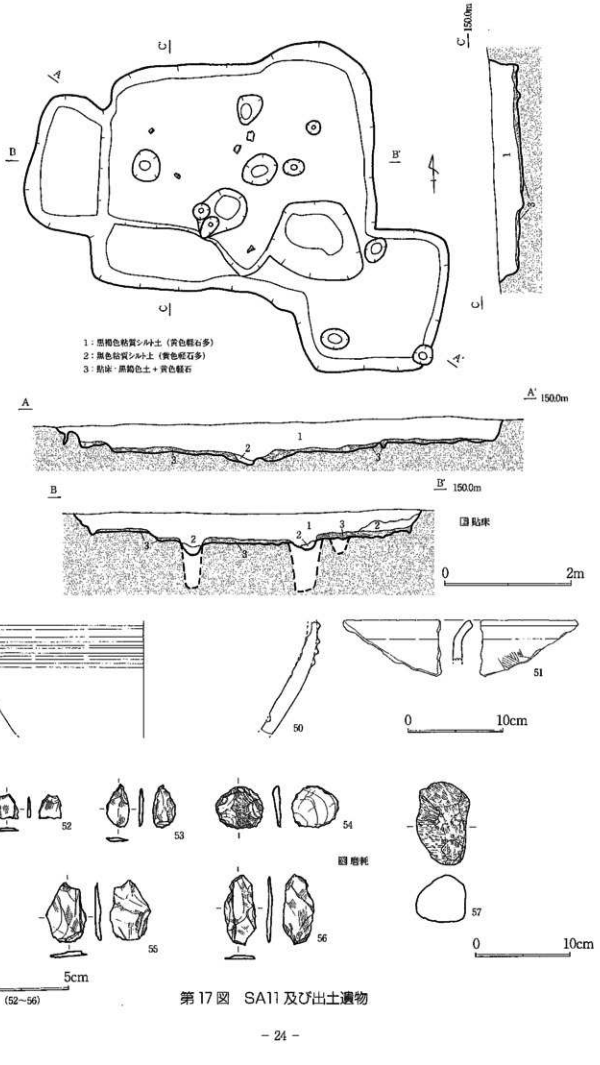


第 15 図　SA08・ST01 及び出土遺物

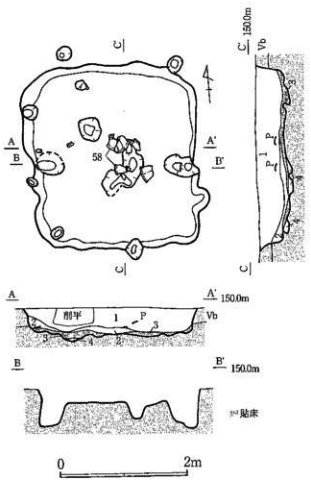




第16図　SA09及び出土遺物



第17図　SA11及び出土遺物



第18図　SA12

43は甕口縁部片で、胎土に雲母を多く含んでいる。44は平底の底部で、下から上へハケメが明瞭に残る。45は緑色珪質頁岩の磨製石鏃で、一部成形の際の剥離面が明瞭に残る。46は緑色軽質頁岩の加工品で、表裏面に磨きが見られる。47～49はミガキ石の可能性がある小礫である。

SA11（第17図）

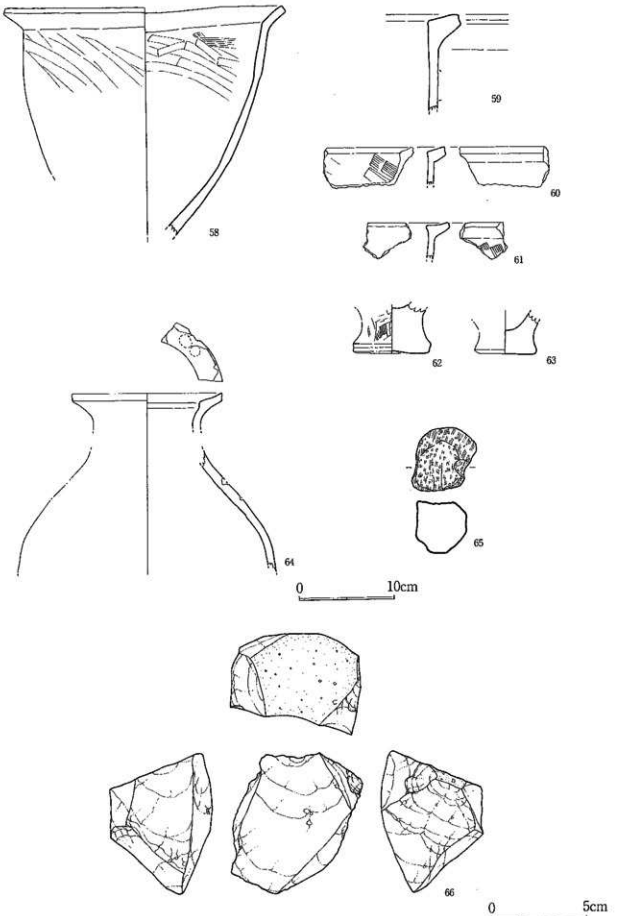
V・W－10・11区に位置する。東西6.7m、南北5.2m深さは0.45mである。中央の4.5m×3mの方形が基調である。西、南、南東にベット状遺構の張り出し部を持つ。検出当初は複数の遺構の切り合いと考えられたが、埋土観察の結果1軒と判断した。主柱穴は中央の2本で、直径0.45～0.6m、深さ0.8mである。やや西よりであるが、ほぼ東西の全長を3分割した地点に2本の柱穴が位置する。貼床は柱穴を除く全面で確認された。厚さ約10cmで、黄色軽石を非常に多く含み硬くしまっていた。埋土は中央の方形の東端で二層に分層されたのみで、他の部分では単一であった。埋土出土の炭化物の年代は2100±40年BPである。

50は山ノ口Ⅱ式の壷胴部で、胎土に雲母を含む。51は口縁端部に向かって肥厚する。52～55は緑色珪質頁岩の未成品。54以外は磨製石鏃未成品と考えられる。何れも成形後研磨段階で廃棄か。57は軽石製品で左右と上面に浅い溝状の窪みを有する。

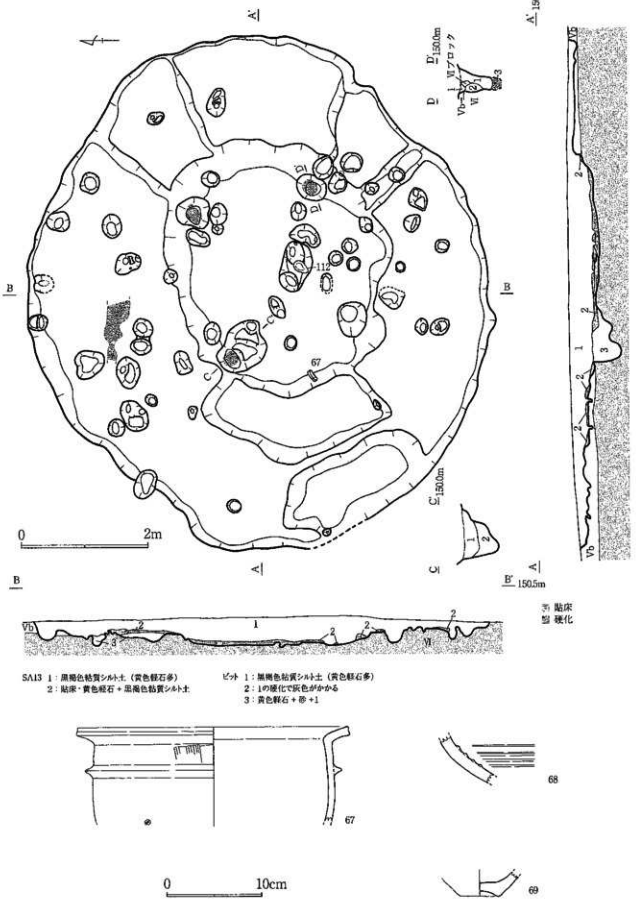
SA12（第18・19図）

W・X－9・10区に位置する。南北2.9m、東西2.3mの方形竪穴住居で、検出面からの深さは0.45mである。床面は厚さ5cm程の貼床が全体的に施されていた。主柱穴は東西の2本で、直径0.45～0.6m、床面からの深さは0.4～0.5mである。住居中央には炭化物の付着する甕が1個体分、割れた状態で出土した。この下部には貼床に覆われた柱穴が1基認められた。

主柱穴は東西の側壁から掘り込まれた2本である。直径0.45m～0.6m、床面からの深さは0.4mである。掘り込みの断面や平面から柱穴は遺構中央から外側に向かって若干斜めに掘り込まれていることがわかる。



第19図　SA12出土遺物



第20図　SA13及び出土遺物

SA01に類似しているが、SA12の中央の柱穴は貼床によって塞がれていた。埋土は貼床を含め四層に分層された。最下層である4層は遺構掘り込み後すぐに流れ込んだ砂と掘り込んだ御池軽石が混ざったものである。3層は黄色軽石を主体とした貼床で、2層は南西部を中心に薄く堆積していた。埋土出土の炭化物の年代は2080±40年BPである。

遺物は全て1層からの出土である。58は無文の甕で、炭化物が外面に多量に付着していた。59は山ノ口Ⅱ式の大甕と思われ、胎土に雲母を多く含んでいる。コの字状の突帯がはがれている。60は口縁部下面の付け根部に接合痕が明瞭に残るもので、61は口縁部平坦面が窪む。何れも胎土に雲母を含んでいる。62は若干上げ底である。脚裾の側面が窪み、下から上へのハケメが明瞭に残り、寸胴である。63は底部外面を観察したところ、中央に円盤状の粘土、その円を半分ずつ2本の粘土紐を貼り付けて作られている。64は口縁部平坦面に円形の浮文が施された壷であるが浮文は剥がれていた。外面は丁寧にミガキを施す。

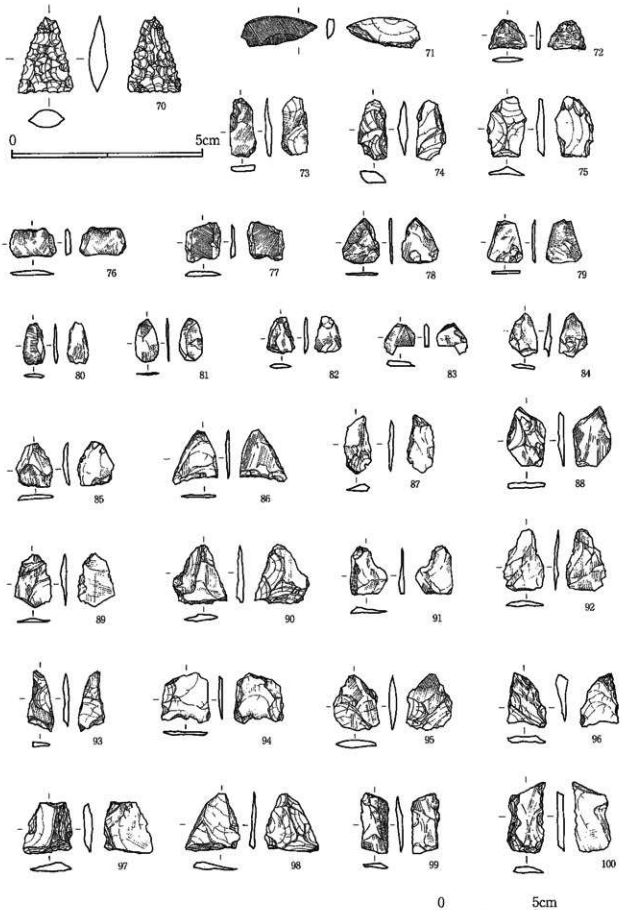
65は軽石製品で、左右と平坦面が浅い溝状の窪みを有する。66は輝石安山岩の石核である。自然面を残し、縦長の剥片を剥ぎ取っている。他、緑色珪質頁岩の小片が10点ほど出土した。

SA13（第20・21・22図）

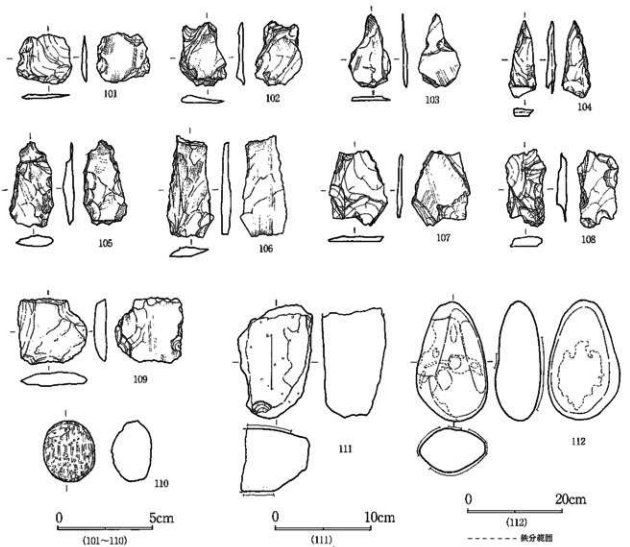
Ⅴ－7区に位置する。西側には浅い谷が南北に伸びる。全体は南北7.45m、東西8.1mで楕円形を呈す。中央に4m×3.5mの円から隅丸方形の掘り込みがあり、その周囲を東側から西側にかけて階段状に下がるベッド状遺構を持っている。西には土坑状の浅い落ち込みが認められた。

主柱は四隅に1本ずつの4本と、中央に1本認められた。この中央の柱穴の横から112の台石兼砥石が出土した。柱穴は直径0.5m～0.9m、床面からの深さ0.5m～0.9mである。4本の柱穴底部は何れも硬化していた。貼床は中央の掘り込みを中心に認められ、ベット状遺構部分では認められないが、全体的に硬くしまっていた。掘り込み底部が御池軽石層の漸移層であるⅤb層中に止まる部分では貼床を施す必要が無かったと思われる。ただし、北側の一部では帯状に激しく硬化する部分が認められた。遺構埋土は貼床を含め三層に分層でき、3層は掘り込みの直後に混入した御池軽石と砂から構成される。2層は貼床で黄色軽石を主体とし硬くしまっていた。貼床より上位と柱穴の埋土は単一層である。遺物もこの1層中から床面にかけて出土した。埋土出土の炭化物の年代は2210±40年BPである。

67は胎土に雲母を含むものであるが、口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部にむかって肥厚している。胴部には1条の突帯を施すもので、プロポーションは中溝式で、胎土は山ノ口式と同じである。折衷形といえよう。68は胎土に雲母を多く含む山ノ口式の甕である。69は上げ底で胎土に雲母を含んでいる。70はチャートの打製石鏃である。71は黒色頁岩の石庖丁片を再加工している。72～75までが黒色頁岩。72は平基の三角鏃で、刃部まで研磨している途中で廃棄した資料である。73は表裏面を平滑に研ぎ揃える途中で廃棄された資料である。74・75は剥片に加工を加えた状態の資料である。75から横長剥片を素材としていることが窺える。76は緑色岩類の磨製石鏃で、上端を欠損している。仕上げ段階での欠損と思われる。77～109は緑色珪質頁岩である。77は側面の刃部研ぎ出しの際に欠損した資料である。78～83は製品に近い状態で廃棄された資料である。84は成形後研磨を行っているが素材の厚みがあるため廃棄されたものと思われる。



第21図　SA13出土遺物①

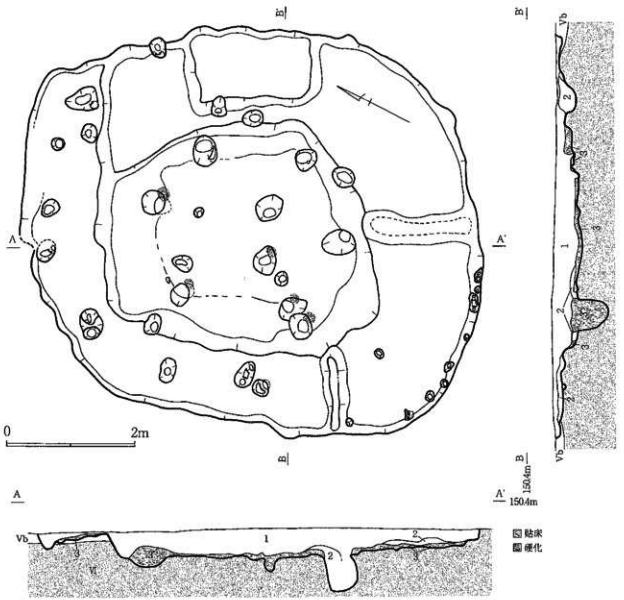


第22図　SA13出土遺物②

85～107は成形後表裏面を研磨している資料である。97・100・106は研磨中に上端が欠損した資料である。108は剥片に成形のための加工を施した資料である。109は原石面が残る。110は軽石製品である。111は輝石安山岩の砥石である。112は台石兼砥石である。表面中央が敲打によって窪んでいるが、その後の研磨作業によって敲打痕は明瞭ではない。表裏面には鉄分が染み付いており、おそらく磨製石器の研磨だけではなく、鉄器の研磨も行っていた可能性がある。他に、未成品や剥片と共に大量の砕片が出土している。特に東側のベット状遺構部分2箇所（一番東のベット状遺構部分からそれぞれ南北に1段下がった所）では未成品が折り重なるように床面から出土している。砕片は南東を中心に出土が多い。中央の掘り込みの一部では床面が赤化していた。西側の土坑状の掘り込みからは炭が多量に出土している。

SA14（第23・24図）

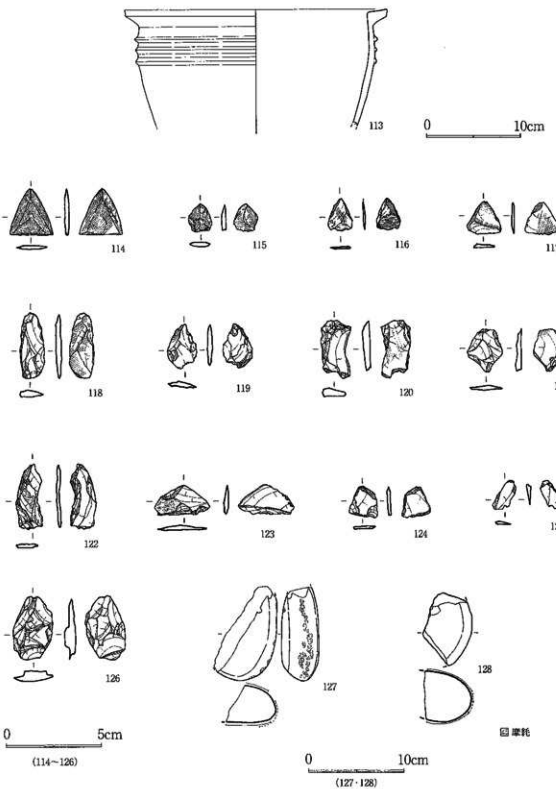
U－7区、SA13の北に位置する。全体の規模は北7.3m、東西6.5m、検出面からの深さ40cmである。中央の4.5m×3mの方形の掘り込みを基調とし、周辺に間仕切りのあるベット状遺構を持つ。東側と西側のベット状遺構は南北に比べ高くなっており、特に東側の2m×1mの範囲は高く、入り口の可能性がある。



第23図　SA14

主柱穴は中央の掘り込みにある6本と思われる。柱穴底部には硬化面が残るものもあり、西側の柱穴2つについては切り合いがあるが、古い柱穴は全体的に貼床と同質であるため埋め戻し固めた後に掘りなおしたものと思われる。柱穴の直径は0.4～0.5mで、床面からの深さは0.55～0.7mである。遺構埋土は床面を含め三層に分層される。遺物は1層から出土している。

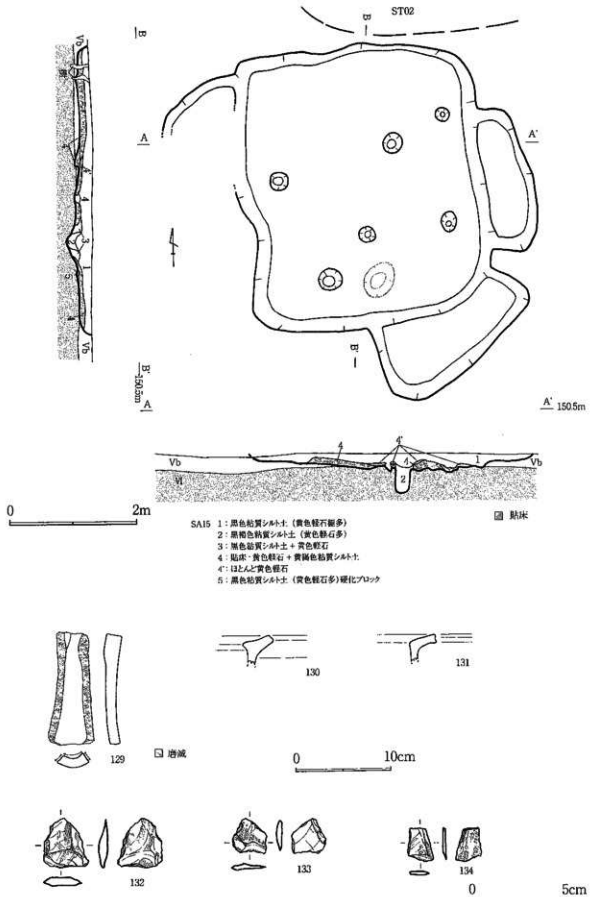
113は胎土に雲母を含む山ノ口Ⅱ式の甕である。外面に煤が付着しており、SA13出土資料と接合している。114は緑色珪質頁岩の磨製石鏃で、平基の三角鏃である。115～126は磨製石鏃未成品及び素材剥片等である。115～110は製品にかなり近いものの、剥離面の稜が残る。119～124は成形後若干表裏面を研磨した資料である。125は砕片で、126は成形後の剥片である。127・128は磨石・敲石である。遺物の組成を考えると、堅果類の粉砕等ではなく石器の加工に用いられた可能性が高い。埋土出土の炭化物の年代は2230±40年BPである。



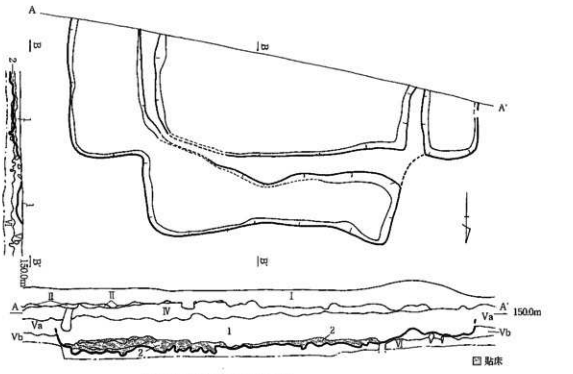
第24図　SA14出土遺物

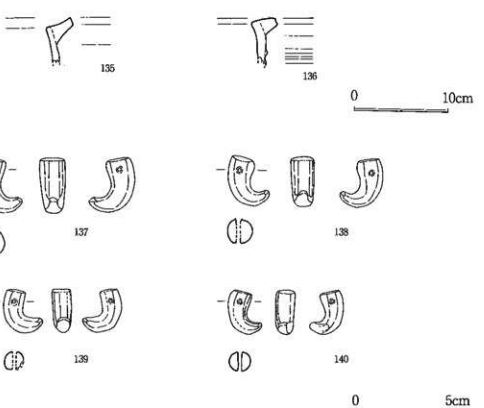
SA15（第25図）

U－10区に位置する。表土によって遺構の一部は削平を受けている。南北6m、東西5.5m、深さ0.15mである。中央の4.5m×4mの方形を基調とし、ベット状遺構が3箇所残されていた。おそらく南西にも1箇所ベット状遺構が造られていたと思われる。柱穴は中央の4本で、直径0.3m～0.5m、床面からの深さ0.5mである。貼床は中央の掘り込みにのみ認められる。炭化物の年代

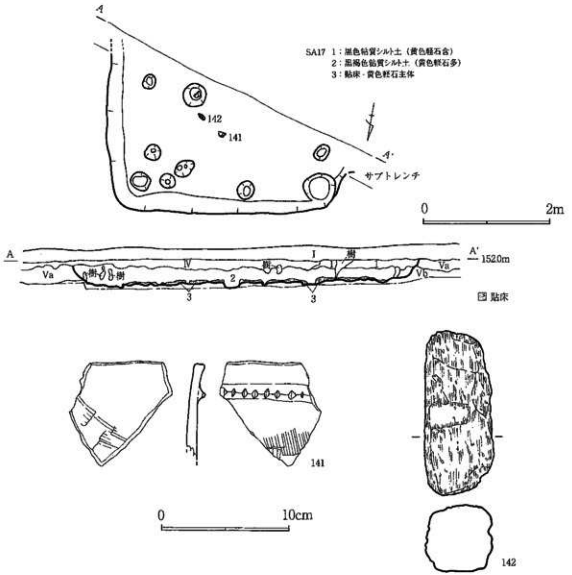


第25図　SA15及び出土遺物





第26図　SA16及び出土遺物



第27図　SA17及び出土遺物

は2110±40年BPである。

129は高坏の脚部を転用したもので、割れ口を研磨し平滑に整えている。130・131は胎土に雲母を含んでいる。132～134は磨製石鏃未成品である。

SA16（第26図）

調査区南端、W・X－5区に位置し、調査区外へ延びる。規模は約7mと思われる。深さは0.1～0.2mである。方形を基調とし3方にベット状遺構がある。柱穴はおそらく調査区外にあると思われる。床面には黄色軽石を主体とする貼床がⅥ層まで掘り込まれた部分にのみ認められる。遺構埋土は貼床を除き単一である。135・136は胎土に雲母を含む山ノ口式の甕口縁部である。137～140は土製の勾玉で、頭部が平坦に整えられ、先端に向かって先細り湾曲する。何れも穿孔が1箇所認められる。胎土は在地系の土器と同質である。

SA17（第27図）

X－8区に位置する。SA16同様調査区外へ延びる。推定で3.5mの方形竪穴住居跡と思われ、深さは0.2m。柱穴は2本（うち1本は調査区外の断面に）。直径0.35m、深さ0.2mである。貼

床はおそらく住居中央を中心に薄く貼られている。遺物は床面より下城式土器（141）と、軽石製品（142）のほか土器片が数点出土している。

SA18（第28図）

R・S－9区に位置する。南北7.2m、東西6.9m深さ0.3mの花弁状住居跡である。後世の土坑によって削平を受けている。間仕切りは8箇所で、南の1箇所がやや下がる。主柱穴は遺構中央に6本、南の間仕切りの両側に2本と、遺構中央に1本。柱穴の直径は0.3m、床面からの深さは0.5m。中央には幅0.4～0.5m、深さ0.2mほどの溝が半円状に巡る。この溝より外側を中心に貼床が認められた。埋土は単一である。床面からは、外側から遺構中央に向かって炭化材が多数検出された。上部が後世の削平を受けており、残存状態は良好とは言えない。一部の炭化材の年代は2030±60年BPである。南西の間仕切りの隅ではベンガラが出土している。143は長頸壺で、表面には粘土が弾けたように円形にはがれた部分が多数認められ、頸部に縦長の黒斑が認められる。144は内外面ともミガキが施される。特に内面は炭素を吸着させ、放射状にミガキを施す精製の鉢である。145は粗製の鉢。146はミニチュア土器。147は流れ込みの遺物で、胎土に雲母を含む。148はユビオサエの残る底部。149は鉢の口縁部。150は高坏片。151～154は黒色頁岩。151は磨製石鏃の欠損品。152は研磨途中の剥片。153は石庖丁で、破損が激しい。154は石庖丁の未成品。157・158は軽石製品。159・160・162は台石兼砥石である。161は緑色岩類の砥石。遺物は床面か床面付近から出土。

SA19（第30・31図）

T－8区に位置する。東西4.5m、南北3.3m、深さ0.4mの方形を基調とし北東に間仕切りを1箇所持つ竪穴住居跡である。主柱穴は2本で東西方向。直径0.4～0.5m、床面からの深さ0.5～0.9m。貼床がほぼ全面に認められた。埋土は貼床を除き二層に分層でき、遺物の大半が床面及び床面付近から出土している。163は口縁端部が肥厚する甕で外面にススが付着する。164は逆L字の甕口縁部。165は胎土に雲母を含む。166平底で下から上へハケメが残る。167は輝石安山岩の石核で、他にも数点石核が出土している。168・170は台石兼砥石。169は砥石。170は磨・敲石。埋土出土の炭化物の年代は2110±40年BPである。

SA22（第32図）

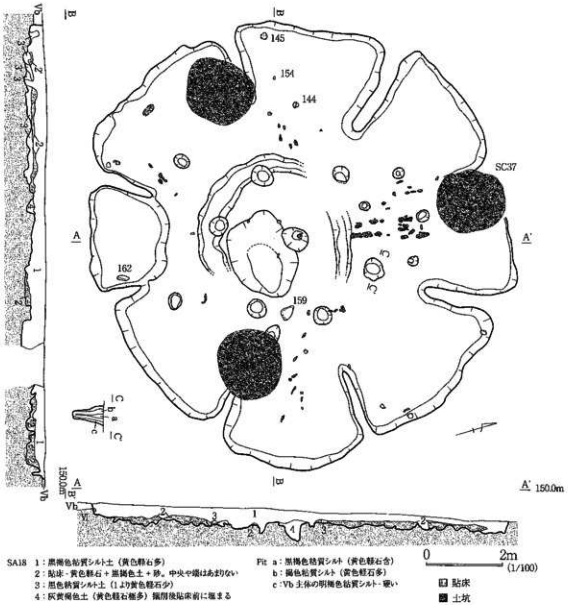
S－12区に位置する。南北4.3m、東西4.1m、深さ0.1mの隅丸方形の竪穴状遺構である。貼床は認められない。172は胎土に雲母を含む。173は磨製石鏃未成品。

SA23（第33・34・35図）

O－11・12区に位置する。東西7.1m、南北6.7m、深さ0.5mである。方形を基調とし、5箇所の間仕切りを持つ。うち2箇所はベット状遺構である。貼床は堀り込みがⅥ層に達している部分を中心に見られる。

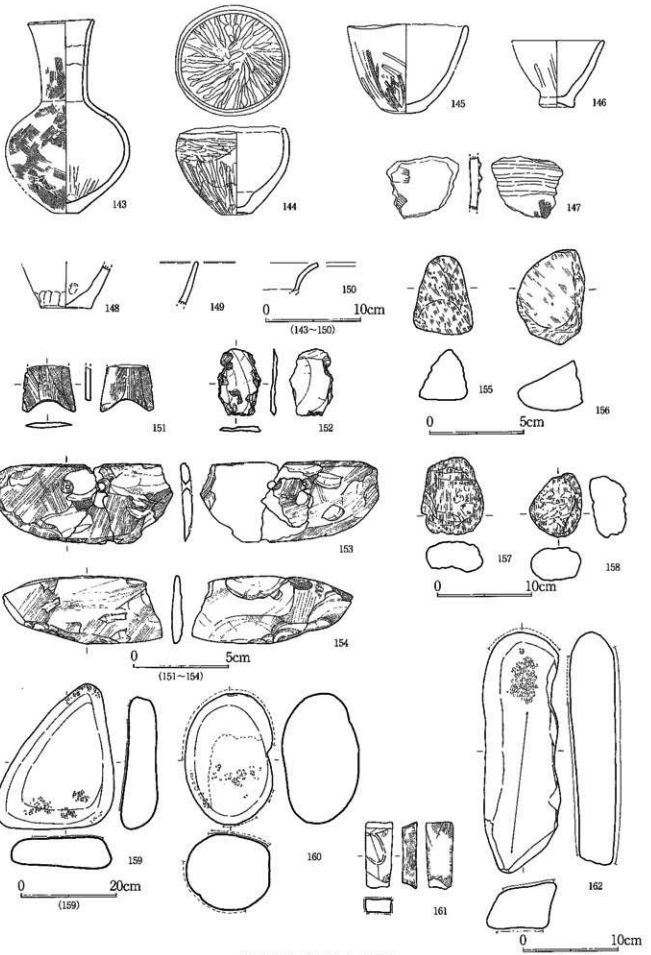
主柱穴は東西の2本で、直径0.5m～0.6m、床面からの深さ1mで、底面は固く硬化していた。一部で遺構の外側壁帯溝の可能性がある幅10cm、深さ10cm程度の溝が認められた。埋土は床面を含め四層に分層され、遺物は2層を中心に1・2層から出土している。

174・175は口縁端部に向かい肥厚する無文の甕である。176・177は下城式甕で、176は胎土に雲母を含む。178～180は中溝式甕で、178は突帯に刻目を持たない。180はSA17出土の141と

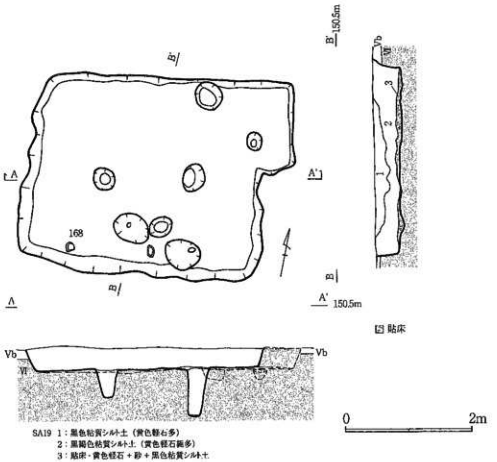


第28図　SA18

胎土が酷似している。181・182は壷で、181は丁寧なミガキが施される。183は頸部付け根に刻目突帯を持つ。184は口縁部内面に稜が付く。185は黒髪式土器に類似するが、胎土は在地系の土器と同じである。186は胴部に断面三角突帯を複数持つ壷である。胎土に雲母を含まない。内面にはハケメが残り、外面は丁寧なミガキが施されている。187は上げ底で全体的に磨耗が激しい。粘土継ぎ目で割れている。188は上げ底気味で、189は内面にススが付着する。190はミニチュア土器でススが付着。191～194は黒色頁岩。191は磨製石鏃で先端を欠損した後に研ぎ直している。193・194は成形後の剥片。195はミガキ石と思われ、端部のみ摩滅。196・197は端部を敲打用、平坦面を砥石として使用。197は小型の砥石で平坦面のみ使用。199・200は台石兼砥石。201～211は軽石製品。



第29図　SA18出土遺物



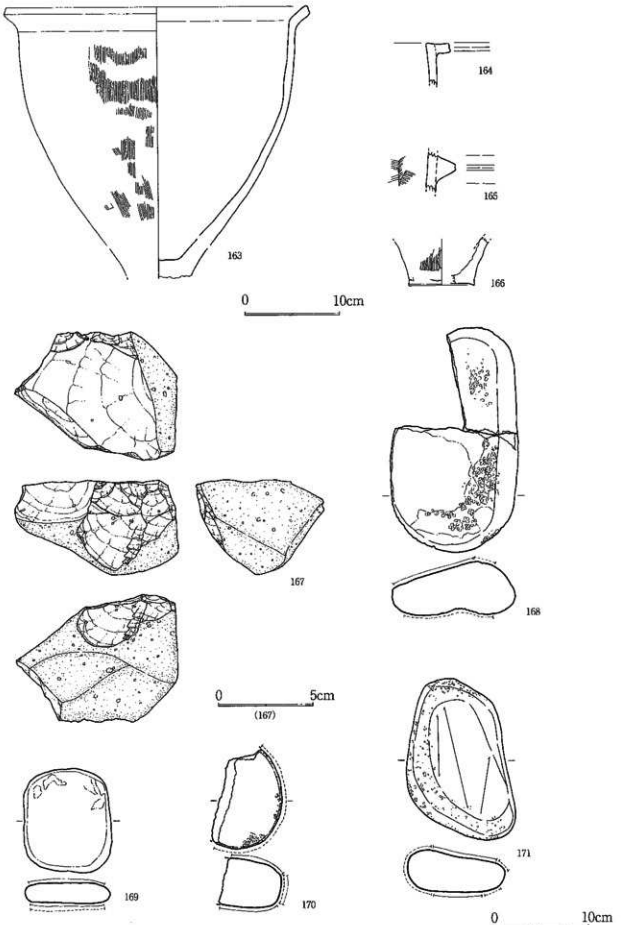
第30図　SA19

SA24（第36・37・38図）

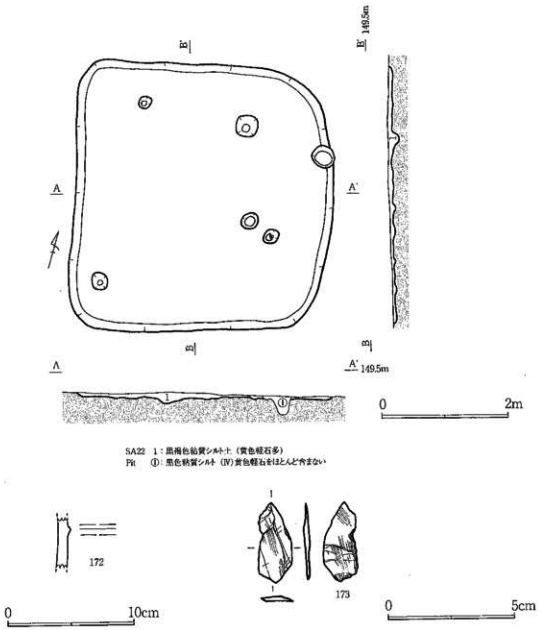
N－12区に位置する。南北7.6m、東西7.2mの円形を基調とした竪穴住居跡である。検出面からの深さは0.6m。主柱穴は4本で直径が0.4～0.7m、床面からの深さが1～1.2mである。柱穴はやや斜めに掘り込まれている。一部の柱穴底部は硬化していた。柱穴内の埋土から炭化米1粒が見つかっている。貼床ははぼ床面全体に認められ、西側では2枚認められた。また、南西の床面は一部が硬化しており、北東の一部には未焼成粘土が残されていた。遺物は1・2層から出土している。212は口縁部が「く」の字に屈曲する中溝式の甕である。213は内面のハケメが明瞭で、口縁端部に向かいやや肥厚する。口唇部にハケメが残る。214・215は口唇部が窪む。216の外面はミガキが施され、内面は丁寧にナデが施される。底部内面は摩滅する。口縁端部がやや肥厚する。鉢形土器である。217・219は上げ底気味。217は内面にススが残る。218は磨耗が激しい。220は胎土に長石を多く含む。221は内面にミガキが施される。222は粘土塊で、赤褐色の付着物が認められる。223～225は緑色珪質頁岩である。223は磨製石鏃で、224・225は研磨途中の未成品である。226は軽石製品で表面が緩やかに窪む。227は砥石で、一部平面や側面に鉄分が付着する。埋土出土の炭化物の年代は2260±60年BPである。

SA25（第39図）

O－12・13に位置する。SC81を挟んでSA23のすぐ東に位置する。東西4.2m、南北4m、検出面からの深さは0.4mである。方形の竪穴住居跡である。主柱穴は東西の2本である。直径0.35～0.6m、床面からの深さは0.8～0.9mである。柱穴を除く部分に貼床が施されていた。



第31図　SA19出土遺物



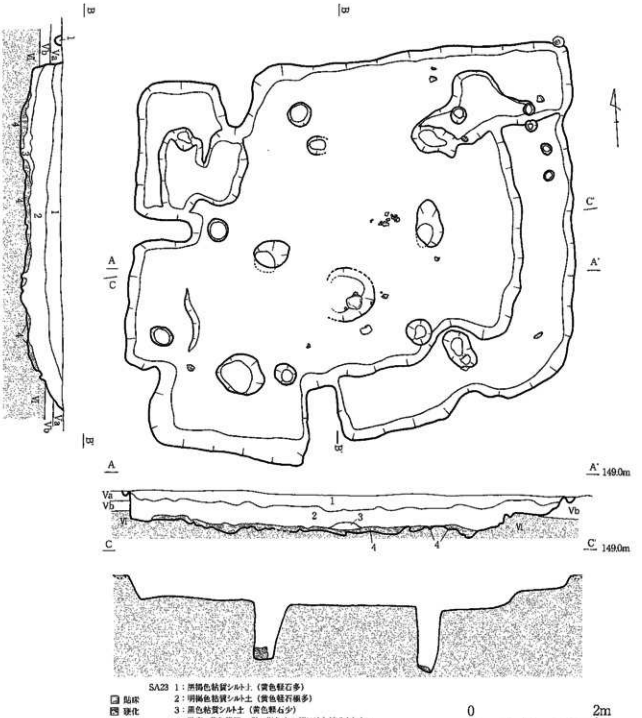
第 32 図　SA22 及び出土遺物

貼床の上部と柱穴内には黒色土が堆積しており、その上に焼土を挟んで黒褐色土が堆積していた。焼土は遺構中央に多く堆積しそのほかでは点在する程度であった。また、焼土の上部では炭化材が出土した。炭化材の年代は 2270±70 年 BP である。堆土の状況から住居廃絶後しばらくたってから焼失したと思われる。なお 2・3 層より炭化米が 4 粒出土している。

228 は鉢形土器で、内外面にハケメが残る。口縁端部にむかい肥厚する。229 は壷の頸部でハケメの後ミガキを施しているがハケメが深く残る。230 は緑色珪質頁岩で、231・232 は黒色頁岩である。何れも未成品である。233 は輝石安山岩の台石兼砥石である。

SA26（第 41 図）

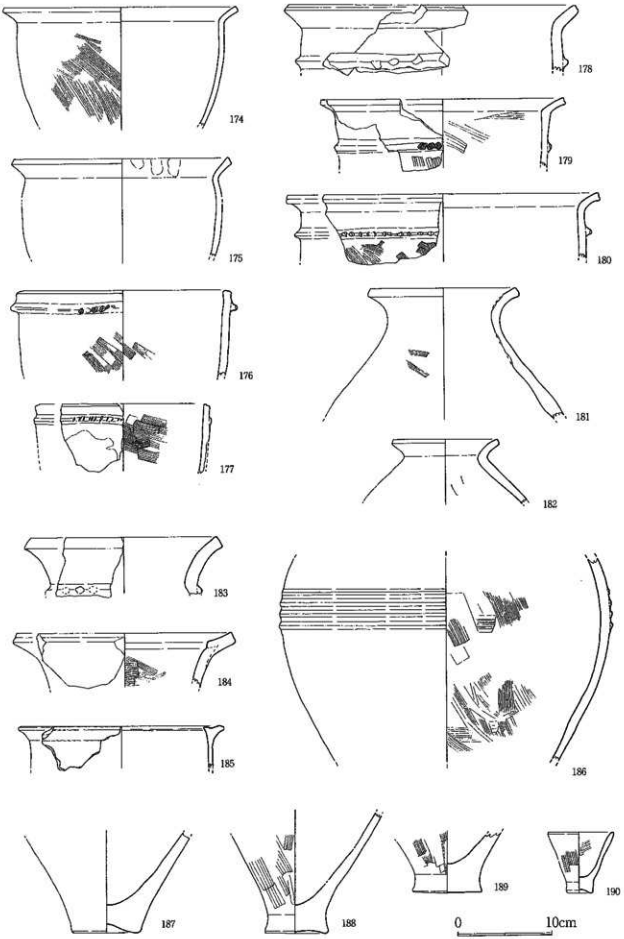
N－12・13 区、SA24 のすぐ東隣に位置する。南北 3.5 m、東西 3.2 m、深さ 0.1 m の方形竪穴状遺構である。柱穴及び貼床を持たない。遺物は破片が多く図示していないが、おそらく中溝式甕の胴部と思われるものが多く出土している。その他炭化米が 1 粒出土している。堆土中の炭化物の年代は 2150±40 年 BP である。



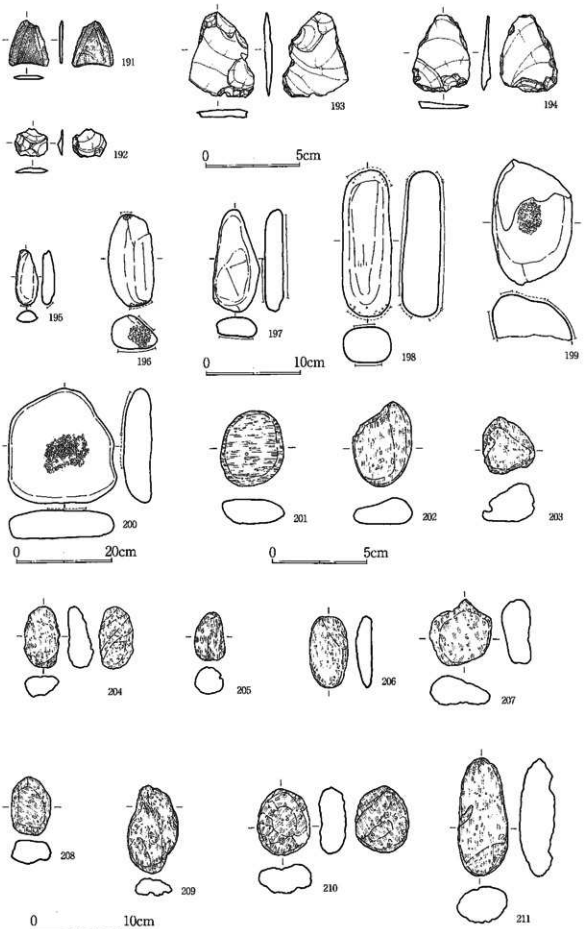
第33図　SA23

SA27（第42～45図）

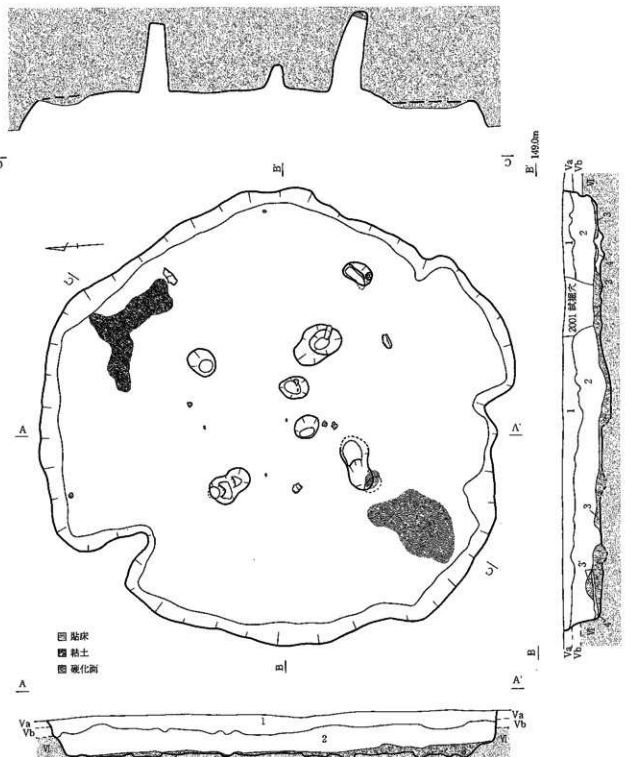
Ⅴ－1区に位置する。東西8.2m、南北7m、深さ0.5m。方形を基調とし、間仕切りを7つ持つ花弁状住居跡である。主柱穴は4本で、直径は0.5～0.6m、床面からの深さは0.6～0.9mで、柱穴底部は硬化する。中央に2.5m×1.7mの方形を呈す床面が赤化した土坑状の掘り込みを持つ。中央には未焼成粘土が堆積していた。未焼成粘土は出土する土器と同様砂や礫粒が含まれており、ここ以外にも、北側の間仕切りに位置する柱穴をはじめ遺構内に散逸して見受けられた。遺構埋土は貼床を含め六層に分層でき、4層が貼床、5～6層は掘り込み後の整地に伴う土である。



第34図　SA23出土遺物①

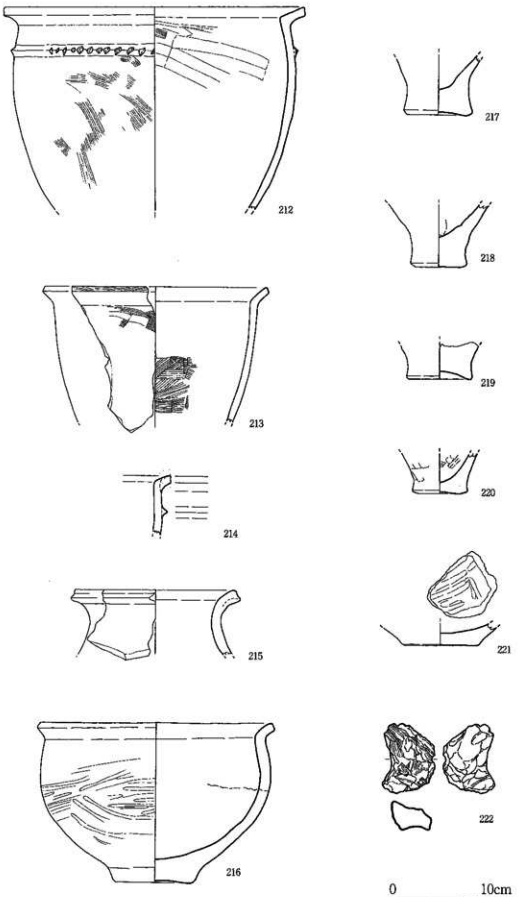


第35図　SA23出土遺物②

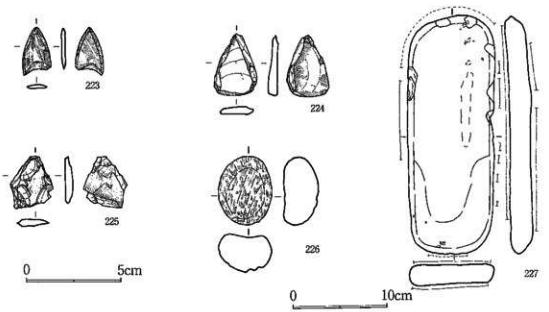


SA24　1：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
2：黄褐色色粘質シルト土（黄色軽石極多）
3：貼床・黄色軽石明黄褐色粘質シルト土
3'：貼床・黄色軽石主体で南西 1/4 に見られる
4：黒色粘質シルト土（黄色軽石少）

第36図　SA24

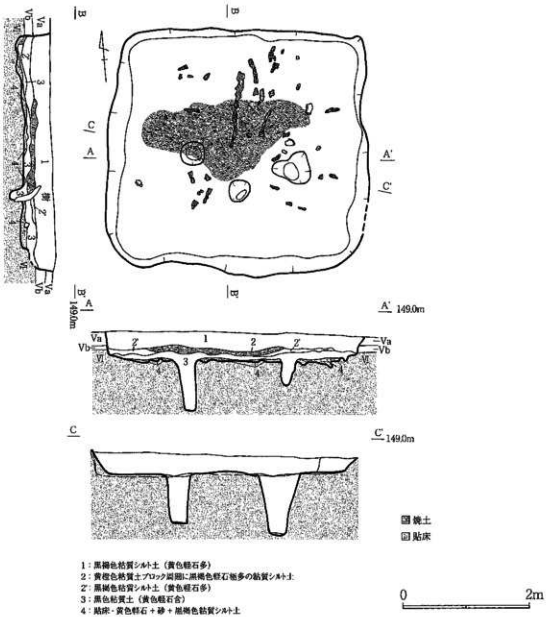


第37図　SA24出土遺物①



第38図　SA24出土遺物②

遺物は1層と2層の境に沿う形で多く出土している。炭化材、炭化種子、炭化米も出土している。炭化材の年代は2060±60年BPである。炭化米は遺構の北東1／4、炭化種子は北東～南東の1／2を中心に出土している。東側の間仕切り隅には受熱の痕跡が認められる小礫が多数出土した。土器も多くは炭化種子と分布を同じくする。234は外面のハケメが残る。235は口縁部の屈曲が鈍い。236は外面にススが付着し、237は口縁部付け根から端部に向かうハケメの打ち込みが残る。238は口縁部と胴部に帯状に炭化物が付着する。胴部より口縁端部が大きく外へ開く。239は胎土が粗い。240は内面にハケメが残る。口縁部の屈曲が「S」字に近い。241は底部で、内面にススが付着する。242は小型の甕で、口縁部は指でつまみ出したように薄い。243は磨耗が激しい。244～247は上げ底の底部。248は底部外面にスサの痕跡が認められる。249は大型の壺である。非常に重量があるが、胎土は脆く、内面は磨耗が激しい。外面は工具による丁寧なナデが施されている。口唇部が窪む。250は外面に円形の黒斑が多く見られる。251は外面胴部に黒斑が見られ、下部にはススが付着する。上半はミガキが目立つ。上部内面は粘土の接合痕が残る。252は口唇部に櫛描の波状文が、頸部付け根には2本の沈線が施される。外面胴部には黒斑が見られ、内外に白色系の付着物が残る。253は底部に指オサエが残り、外面底部付近に黒斑が見られた。254は下から上へハケメが残る。255は胎土が粗い。256は底部に黒斑あり。257は外面にススが付着する。258は胴部が張るもので、3条の線刻が施される。259は工具による丁寧なナデが施される。器壁が薄い。260は頸部付け根に4本の線刻が巡る長頸壺で、全体がミガキによって仕上げられている。頸部には縦長の黒斑が、胴部には横長の黒斑が見られる。261は胎土が粗い。262は口縁内面から外面にかけて縦長の黒斑が見られる。263はやはり長頸壺で、ミガキ前のハケメが残る。264は免田式の長頸壺である。265は内外面にミガキを施す高坏で、266は脚部に円形透かしを持つ高坏脚部である。267は高坏で内外面にミガキが施される。268～274は小型の鉢形土器である。268は外面左右に黒斑が見られミガキが施される。272は内外面とも細かなミガキが施される黒色土器。273の

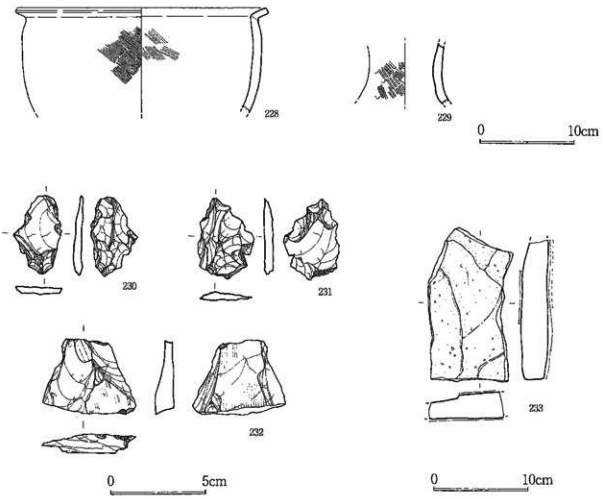


第 39 図　SA25

胎土は粗く底部外面に黒斑がある。275～277 はミニチュア土器で、276 は割れ後のススが付着する。277 は指オサエの痕が明瞭で底部が指で押し上げられている。278～289 は黒色頁岩で、278 は磨製石鏃の製品、279 は磨製石鏃未成品、280 は石庖丁未成品、281 は石庖丁、282 は手持ちの砥石。283・283・287 は砥石兼台石で、284 は特にドーナツ状に研磨痕が見られる。286 は緑色岩類の砥石。285 は敲石。288～293 は軽石製品で、292 は浅い溝状の窪みが激しく磨耗していた

SA28（第 46 図）

Ｖ－ａａ区に位置し、半分以上が調査区外へ延びる。残存範囲から推定で６ｍ～７ｍ規模の間仕切りを持つ竪穴住居跡である。主柱穴は南北方向の２本で、直径 0.4 ｍ、深さ 0.3～0.4 ｍである。底部はやや丸味を帯びる。床には貼床が施され、埋土は三層に分層される。

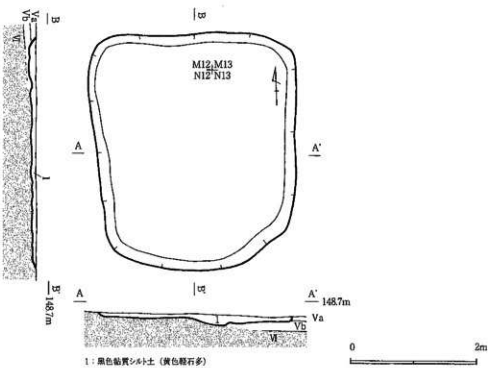


第40図　SA25出土遺物

北側の柱穴からは未焼成粘土が柱穴底部から住居検出面まで山盛りになっていた。主柱穴の間には浅い中央土坑が認められた。

SA28は遺構の半分程度しか調査していないが、多量の遺物が出土した。中にはSA27と接合するものも多い。294は大甕で、外面にススが付着し、内外面に黒斑が見られる。295は直線的な胴部から口縁部が屈曲する甕。296は口縁端部に向かいやや薄くなる。297は細めの工具によるナデが施されている。298は口縁部が水平ではない。299は胎土が粗く底部外面にユビオサエの痕が残る。300は内外面にススが付着する。301は胎土が粗く全体的に磨耗する。

302～304は甕底部で、302は磨耗し、304は外面の一部に顔料が付着する。305・306は小型の甕で、305は外面にハケ後ミガキを施し、黒斑が見られる。307は外面にミガキを施す大型の壷である。胴部を欠く。308は底部内面中央が盛り上がる。309は外面に丁寧なミガキを施し、胴部の上半に線刻が1条巡る。310は底部から胴部にかけて線刻が見られる。311・312は底部付近に黒斑が見られる。313は外面に細かいハケメが残る。314～318は長頸壷。319は壷胴部下半に線刻が認められる。黒斑あり。320は免田式の長頸壷胴部で、SA27出土のものより精緻である。321～325は高坏で、322は円形の透かしが施される。326～330は鉢形土器である。331～333は軽石製品である。



第41図　SA26

（2）周溝状遺構

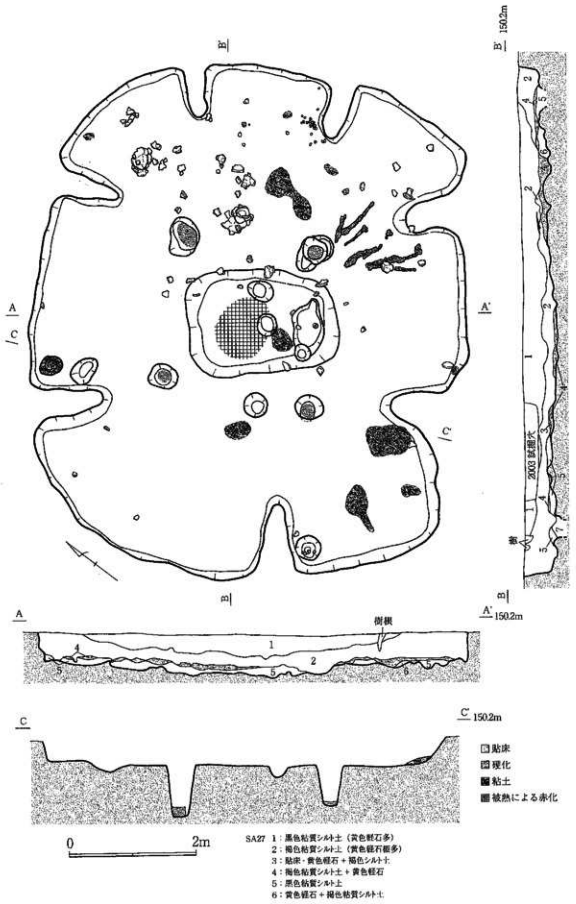
A地点で検出された周溝状遺構は8基である。うちＳＴ02が中期後半に、残りの7基については後期に位置づけられる。周溝状遺構の平面形態は、ほぼ隅丸方形である。

ST01（第15図）：規模等についてはSA08で触れている。調査中の埋土から炭化米は出土していない。炭化米を念頭においていないため、埋土のサンプルも採取していない。

ST02（第50図）：南北5.4ｍ、東西5.4ｍ、溝幅0.6～0.7ｍ、深さ約0.5ｍの隅丸方形を呈する。埋土は三層に分層される。ｃ層は溝底部に堆積する黄色軽石を主体とした硬くしまった土で、ａ層は黒褐色土、ｂ層はａ層より黄色軽石粒が多く含まれる。炭化米は検出面から溝底まで出土したがｃ層からの出土は上位に比べ少ない。炭化米は遺構内全体から満遍なく出土し、南側中央付近にて籾塊が出土した。最低でも4升の炭化米が出土している。遺構内からは炭化米のほかに雲母を胎土に含む山ノ口式土器と思われる胴部片（**334**）や口縁端部が肥厚する甕口縁部（**335**）、胎土に雲母を含み胴部に「コ」の字状の突帯を持つもの（**336**）などが出土している。何れも中期後半に属する遺物である。炭化米の年代は2000±40年BPである。

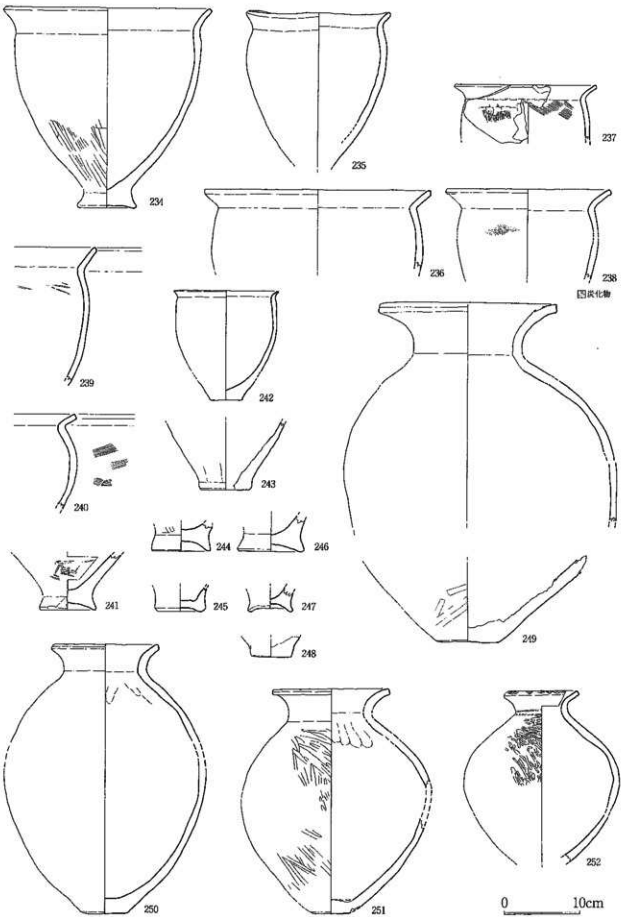
ST05（第51図）：Ｎ・Ｏ－１１区に位置し、東西5.8ｍ、南北5.4ｍ、溝幅0.8ｍ～1ｍ、深さ約0.5ｍの隅丸方形を呈す。埋土は三層に分層された。最下層は掘り込み直後の流れ込みで、中層は硬くしまった層である。**337**は胎土が粗い。**338・339**は壷胴部に線刻が見られる。**340**は肩の張る壷。炭化物の年代は1930±40年BPである。炭化米はａ層を中心に出土した。

ST03・04・06（第52・53図）：調査区南西に位置する。

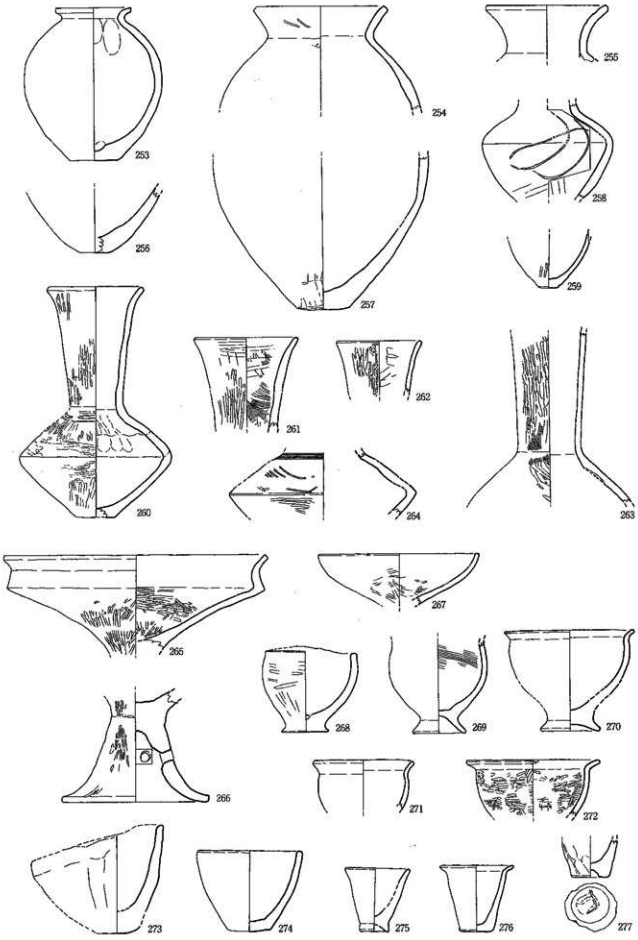


A
A'
B
B'
C
C'
150.2m
2003 試掘穴
樹根
0
2m
貼床
硬化
粘土
被熱による赤化
SA27 1：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
2：褐色粘質シルト土（黄色軽石顕多）
3：貼床・黄色軽石＋褐色シルト土
4：褐色粘質シルト土＋黄色軽石
5：黒色粘質シルト土
6：黄色軽石＋褐色粘質シルト土

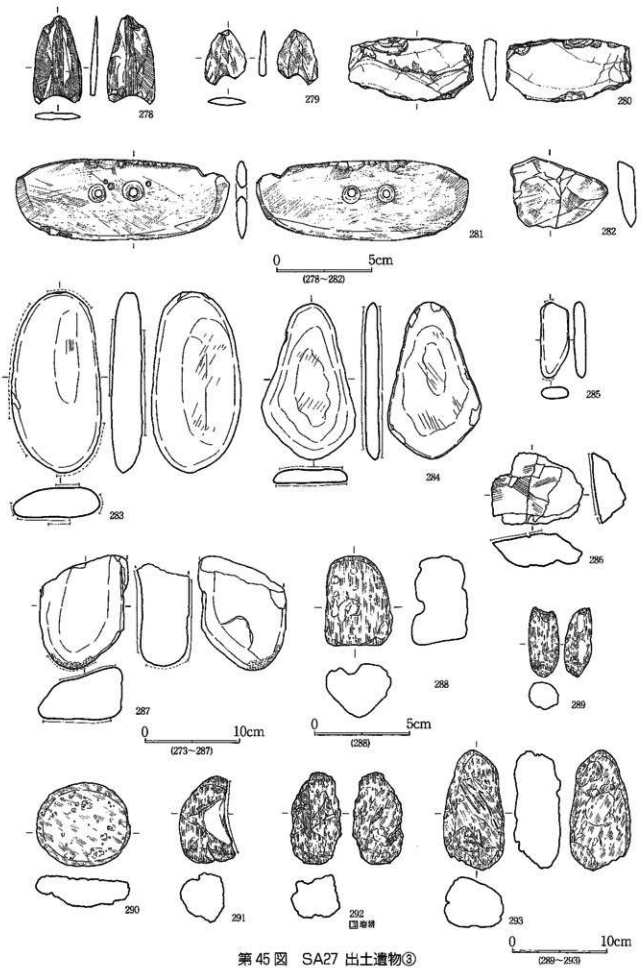
第42図　SA27



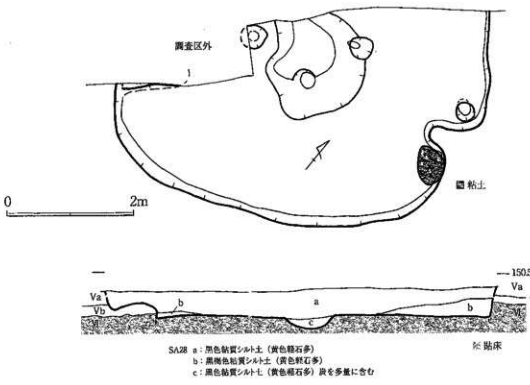
第43図　SA27出土遺物①



第44図　SA27 出土遺物②



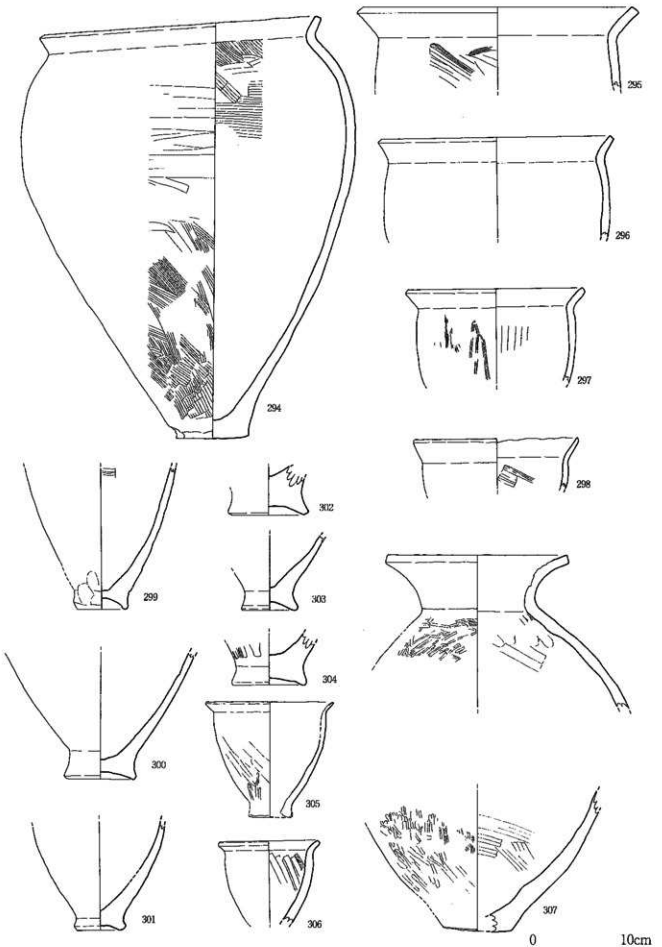
第 45 図　SA27 出土遺物③



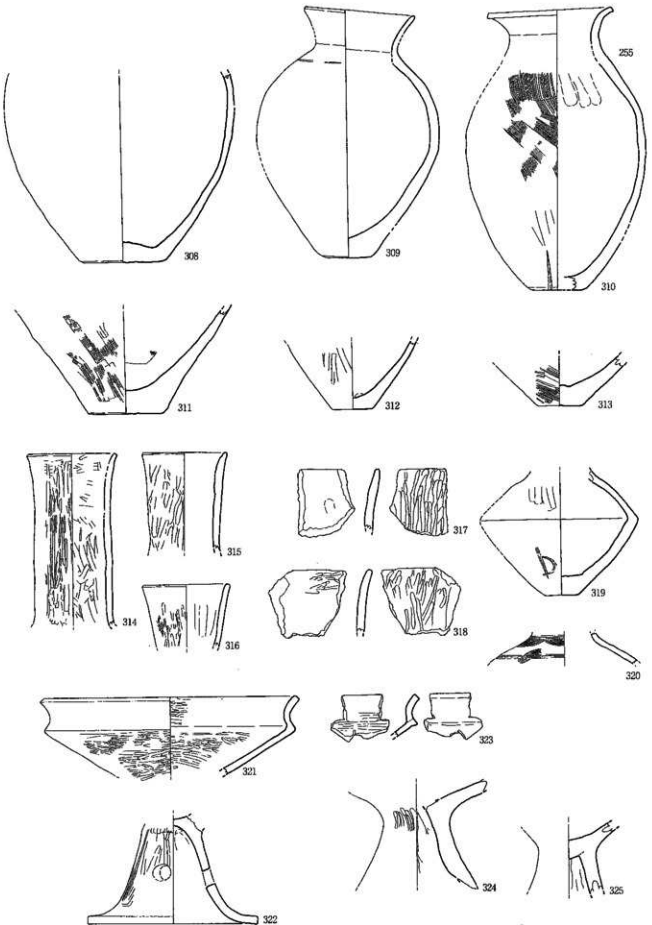
第46図　SA28

ST03 は 6.2 m × 5.8 mで、溝幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.3 mである。遺物は北東から器台や壷、甕底部が出土している。埋土は二層に分層でき、Ⅰ層は黒色土で、Ⅱ層は硬くしまる。遺物はⅡ層の上面におかれたような状態で出土している。**342** は器台。**343** は壷で、底部の接合痕が残る。**344** は長頸壷で付け根に沈線が巡る。**345** は甕底部である。内面に顔料が残る。ST03 のⅠ層中からは少量ではあるが炭化米が出土している（炭化種子も数点あり）。**343** 内の土からは炭化米（籾を含む）が出土。Ⅱ層からも出土したが極微量である。**346** は軽石製品。炭化物の年代は 1920±40 年 BP である。**ST04** は 東西 5.4 m、南北 5.9m、溝幅 0.6 m～ 0.9 m、深さ 0.2 mの隅丸方形を呈す。残存状態は悪い。埋土中から炭化米が出土している。**347** は甕で、**248** は壷底部。**349** は鉢形土器で、底部付近に黒斑がみられる。炭化物の年代は 1950±40 年 BP である。**ST06** の規模は南北 5.4 m、東西 5 m、溝幅 0.6 m深さ 0.3 m～ 0.4 mの南東が開くコの字形を呈す。北東の隅より甕が出土している。またST04によって切られている。**350** は丹塗りの口縁部。須久式土器か。流れ込みの可能性が高い。**351** は甕で、内外面に調整痕が残る。炭化物の年代は 1940±40 年 BP である。

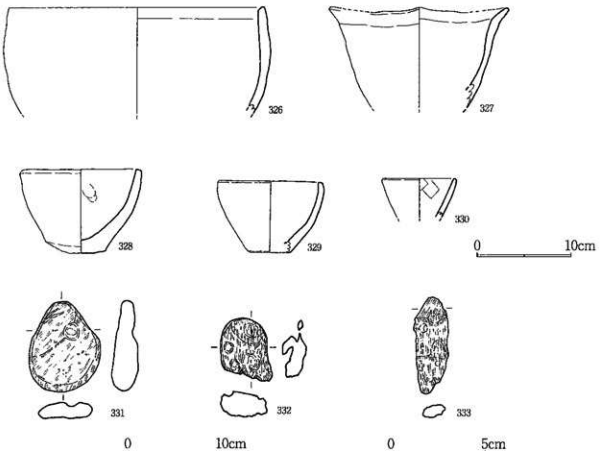
ST07・08（第54～57図）：**ST06** の南東に位置する。**ST07** は 6 m × 5.6 mの隅丸方形を呈す。溝幅は 0.8 m～ 1 m、深さ 0.4 m。溝の南東から土器がまとまって出土した。埋土は二層に分層され、下層は硬くしまっていた。炭化米が少量出土する。炭化物の年代は 1910±40 年 BP である。**352** は大甕。**353** は外面にハケメが残る甕。**354** は胴部に 1 条の刻目突帯を持つ。**355** は胎土が粗い。**356** は工具によるナデが施される。**357** は最大径が胴部にある甕である。**358** は磨耗が激しい。**359** は内面に剥落が多い。**360** は縦方向のハケメが施される。**361** は口唇部が窪む。**362** は鉢形土器で、全体的に磨耗する。**352** ～ **362** は何れも外面にススが付着する。



第47図　SA28出土遺物①



第48図　SA28出土遺物②



第49図　SA28出土遺物③

363～376は壷。外面にミガキを施すものと、工具によるナデを施すものがある。363は胴部下半に3cm幅で施朱が、368は胴部に線刻が、370は黒斑が見られる。371・372は頸部内面に絞り痕と指頭痕が残り、373は黒斑が見られる。374～376は長頸壷で、375は内面に粘土接合痕が、374・376は底部に黒斑が見られる。374は底部から胴部下半にかけて線刻が施され、胴部の線刻で囲まれた内部に粘土塊が貼り付けられている。377～384は鉢形土器である。377は工具によるナデが施される。378は底部側の板状の粘土が輪状で剥がれている。本体底部側面と、輪状粘土表面は完全に焼成されているため、焼成中に剥落したものか。379・380は磨耗が激しく、383は炭化物が付着する。381・384は工具によるミガキ状のナデが施される。382は口縁部が大きく開く。385は高坏で、内外面には磨きが施され、脚部付け根には沈線が2条巡る。386は緑色珪質頁岩未成品。387は溝状の浅い窪みを有する軽石製品。ST08はST07より先に構築されている。7m×5.5mの規模で、溝幅0.4～0.7m、深さ0.2mの隅丸方形を呈する。ST07に比べ、遺物の出土は少なく、炭化米も極少量である。388は長頸壷で内面に粘土接合痕と絞り痕が残る。頸部内面はかなり細い工具によるナデで、外面は丁寧にハケメが施されている。389は鉢形土器。

（3）土器溜り（SQ01・02：第58図）

A地点では2箇所の土器溜りが検出された。S－5区（SQ01）とV－4区（SQ02）である。

SQ01は横たわる高坏（391・392）の内部に甕（390）と甕内部に壷（393）が入ったような状態で検出された。半裁したが、土坑の掘り込みは確認できなかった。周辺では後述するビーズ（478）が出土した。すぐ北東にSR03が位置する。391～392は胎土・焼きが同質。何れも磨耗が激しい。390は外面にススが付着する。393は工具によるナデが底部まで施される。

SQ02は後世の削平を受けており詳細は不明。黒色土の浅い窪みから、多量の遺物が出土した。394～396は長頸壷で、395が胴部最大径に黒斑を有し、内面にハケメが残る。394・396は底部に黒斑が見られ、396は黒斑の端から線刻が描かれる。397は内外面に工具によるナデが施される。398は磨耗しているが、ミガキが一部残る高坏。399は口唇部にキザミが施され口縁平坦面に櫛描が施される。400は複合口縁に櫛描が施される。401は鉢形土器である。

（4）掘立柱建物跡（第59図）

弥生時代に属すると思われる掘立柱建物跡は2棟である。2棟とも調査区の北側に位置する。

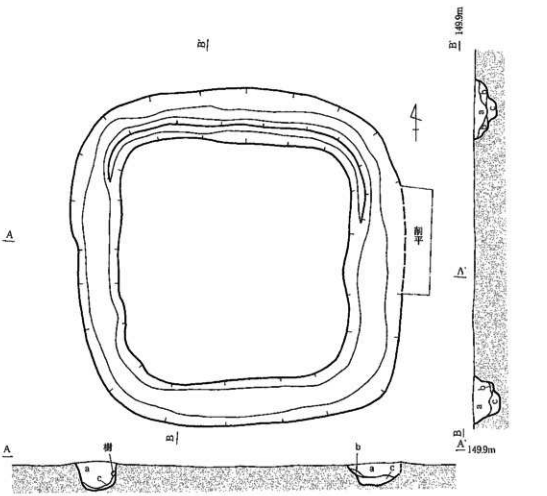
SB03はST05の南西、O－10区に位置する。3間×3間の棟持柱を持つ掘立柱建物跡である。桁行3.6～4m（柱間1.2～1.3m）、梁間2.8m（柱間約0.93m）で、柱穴直径は0.2～0.5m、深さ0.2mとかなり小型である。棟持部分を入れた建物の最大長は5.4mである。

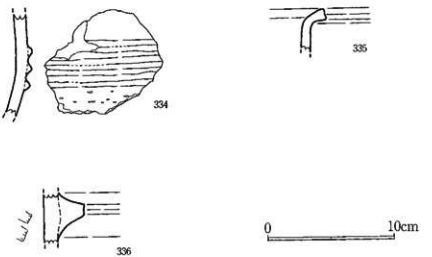
SB05はSA25の南、P－12･13区に位置する。3間×4間の棟持柱をもつ掘立柱建物跡である。桁行6～6.2m（柱間約1.5m）、梁間4～4.2m（柱間約1.4m）で、柱穴直径0.4～0.6m、深さ約0.5mである。棟持部分を入れた建物の最大長は約8.2mである。詳細な時期は不明。

（5）土坑及び炭化種子集中部（第60・61・62図）

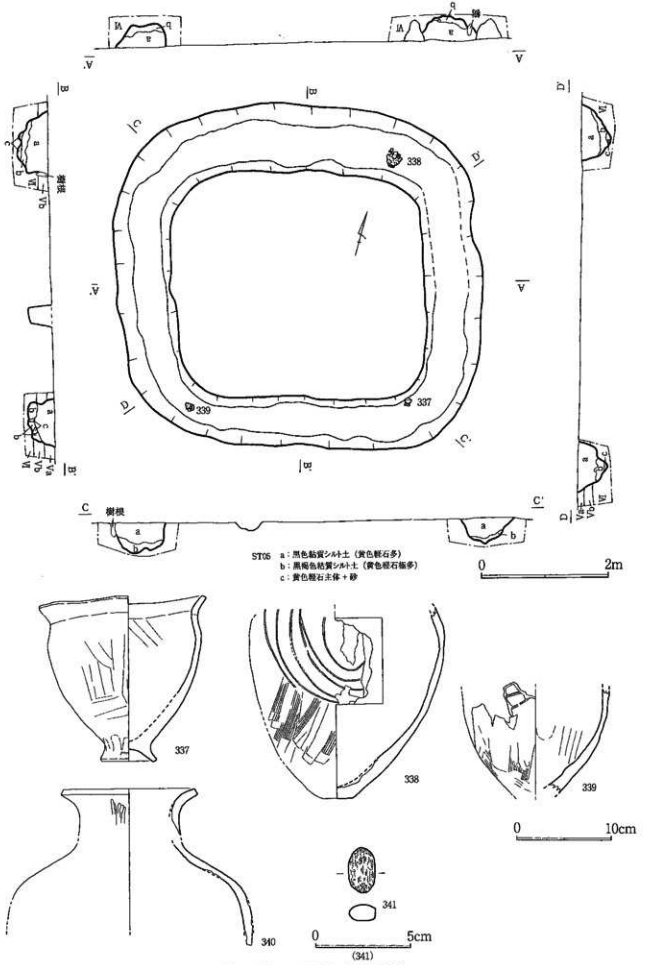
A地点では弥生時代の土坑23基、炭化種子集中部3箇所が検出された。SC03、08、10、79、80、82、83、90が後期に、SC05、13、18～22、26、38、43、45、47、74、78、81については中期後半に属すると思われる。炭化種子集中部については何れも後期に属する。

SC03（W－14）は0.6×0.4m、深さ0.25mの平面円形で断面皿状。SC05（T－13）は直径0.8m、深さ0.6mの平面円形、断面バケツ形。雲母を含む土器片が出土。SC08（T－16）は1.3×0.5mの楕円形で、東にテラスあり。SC13（Q－13）は0.8mの方形で、断面台形。SC38（R－9）は0.9×0.7mの平面楕円形、で西にテラス、南北に柱穴がある。SC18～19はW・X－9区に集中する。SC18は東を削平された浅い土坑。404は中溝式甕口縁部で、他に雲母を含む土器片等が出土している。SC19～21は直径が0.5～0.7mの平面円形、断面台形を呈するSC20・21は南に小ピットを持つ。SC22は浅い皿状の土坑で、土器が集中していた。406は甕外面にススが付着する。炭化物も多数出土し、年代は2190±40年BPである。SC79･80（Q－10・11）は並んで検出され、3m×2m程の楕円形を呈し、深さが約1m弱と同規模のものである。土坑内からは遺物が多数出土し、SC79では土坑底部から未焼成の粘土が見つかっている。用途・機能は不明である。407～409はSC79出土で、407は口唇部が窪む。409は胎土が粗い。410は外面にハケメが残る。ススが付着する。411は流れ込みか。胎土に雲母を含み、円形の浮文を有する。412は線刻を有する胴部片。413は上部に穿孔を有する軽石製品。SC81（O－12）は楕円形の南東に突出部を有する1.2×1.2m、深さ0.1mの土坑である。突出部では赤色顔料が散逸していた。

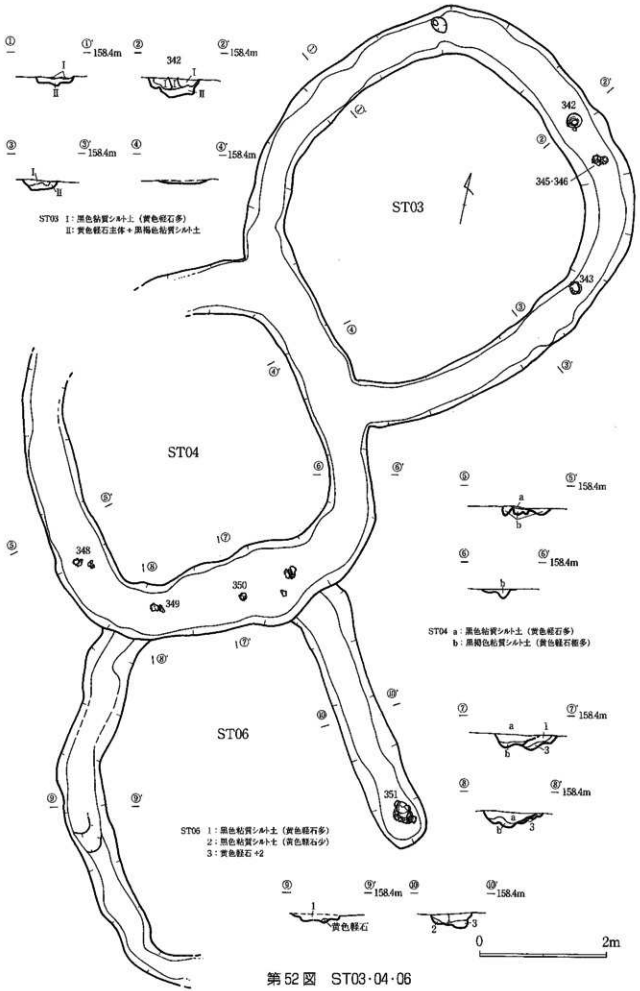




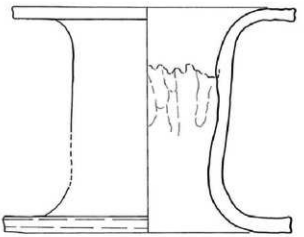
第50図　ST02及び出土遺物



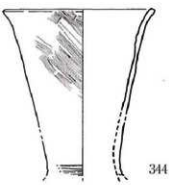
第51図　ST05及び出土遺物

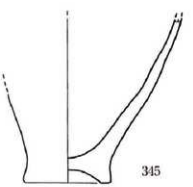


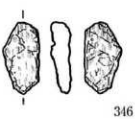
第 52 図　ST03·04·06

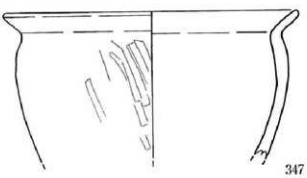

342

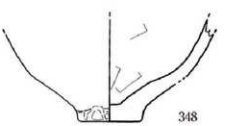
343

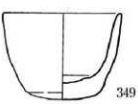

344


345

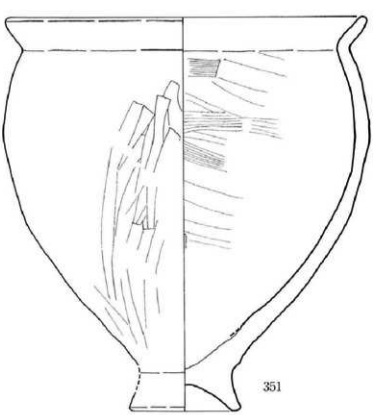

346


347


348


349

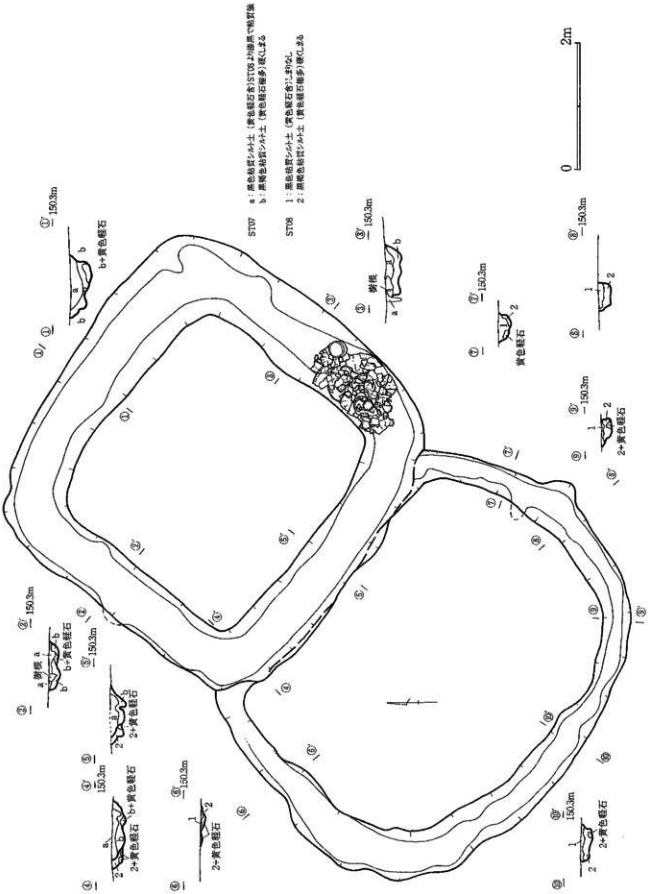
350


351

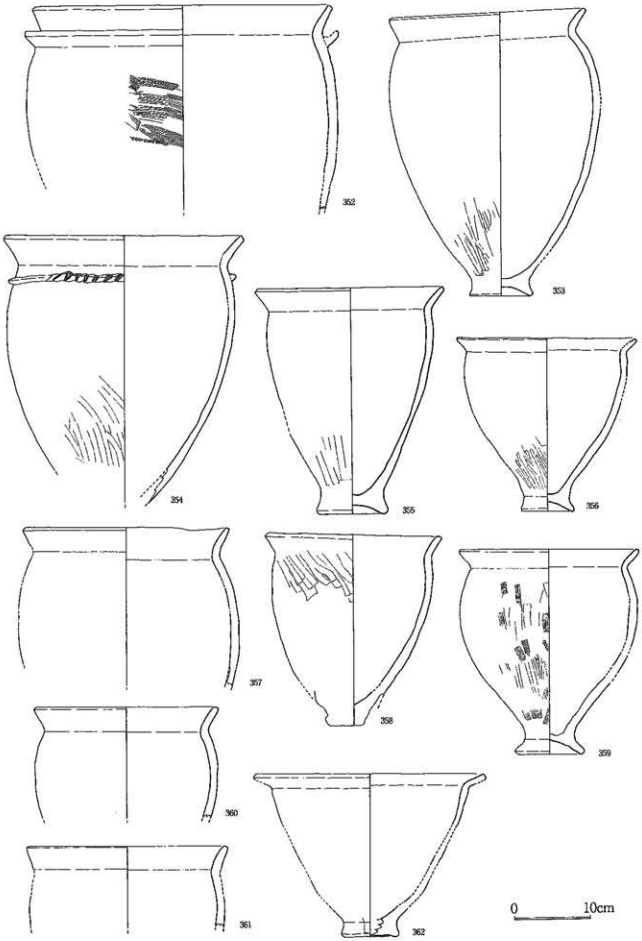
ST03 (342~345)
ST04 (346~349)
ST06 (350・351)

0 10cm

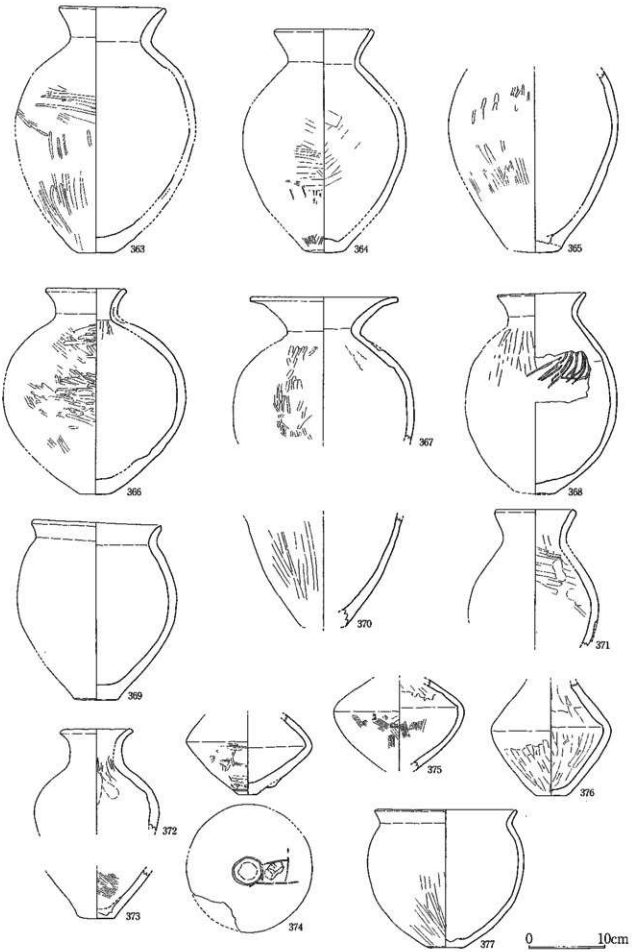
第53図　ST03·04·06出土遺物


ST07
a：黒色粘質シルト土（黄色軽石含）ST08より薄黒で粘質強
b：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）浸くしまる
ST08
1：黒色粘質シルト土（黄色軽石含）しまりなし
2：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）浸くしまる
0
2m
150.3m
b+黄色軽石
2+黄色軽石
1
2

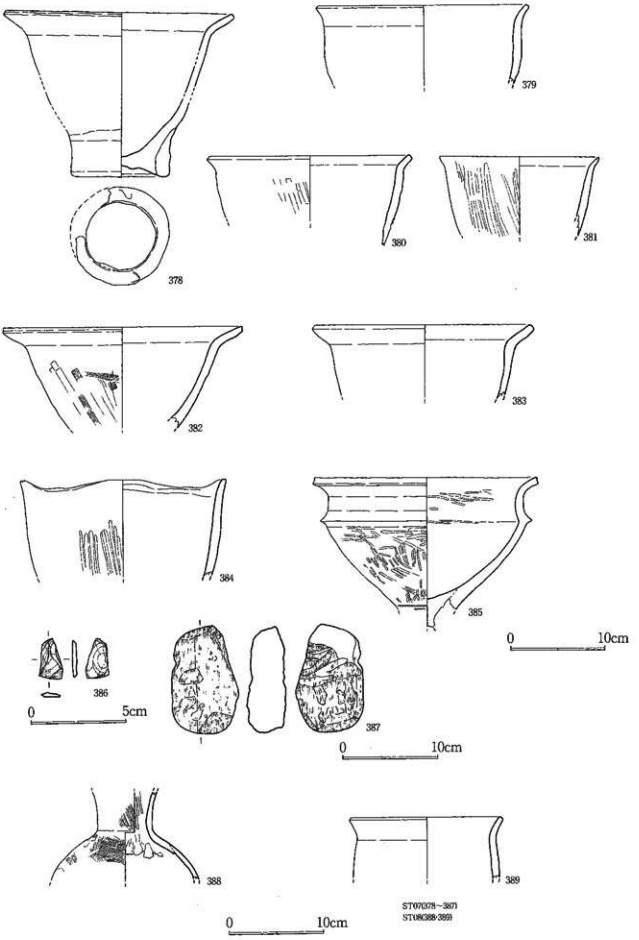
第54図　ST07・08



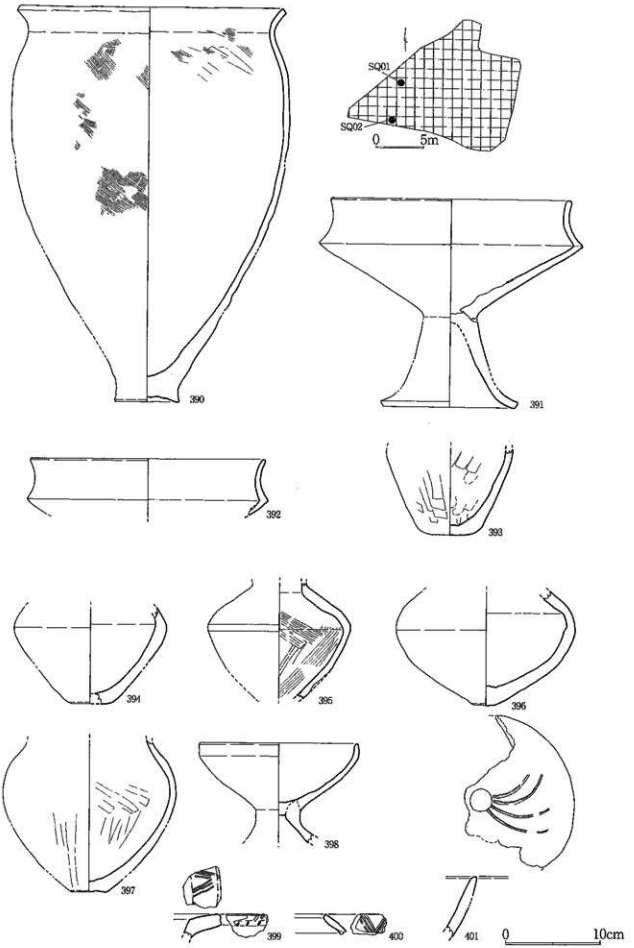
第55図　ST07出土遺物①



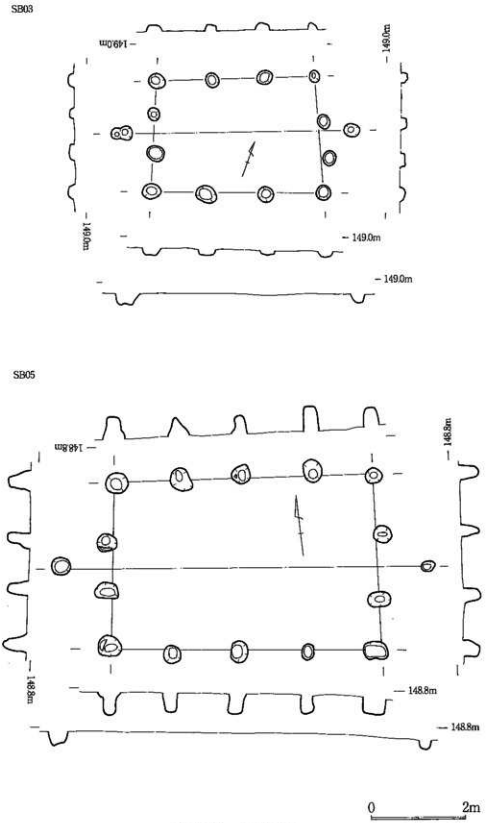
第56図　STO7出土遺物②



第57図　ST07·08出土遺物

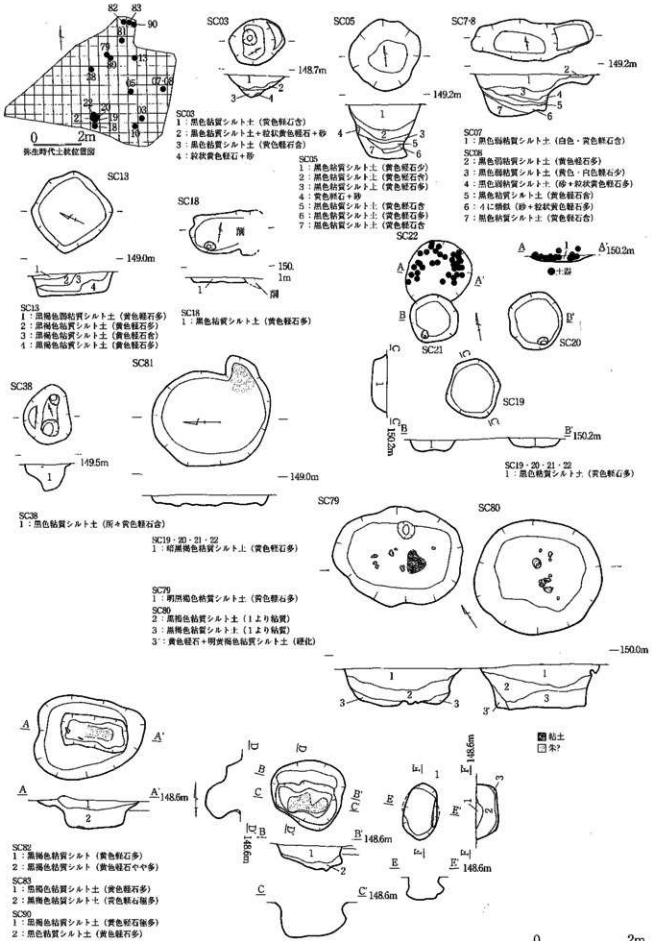


第58図　SQ01·02出土遺物

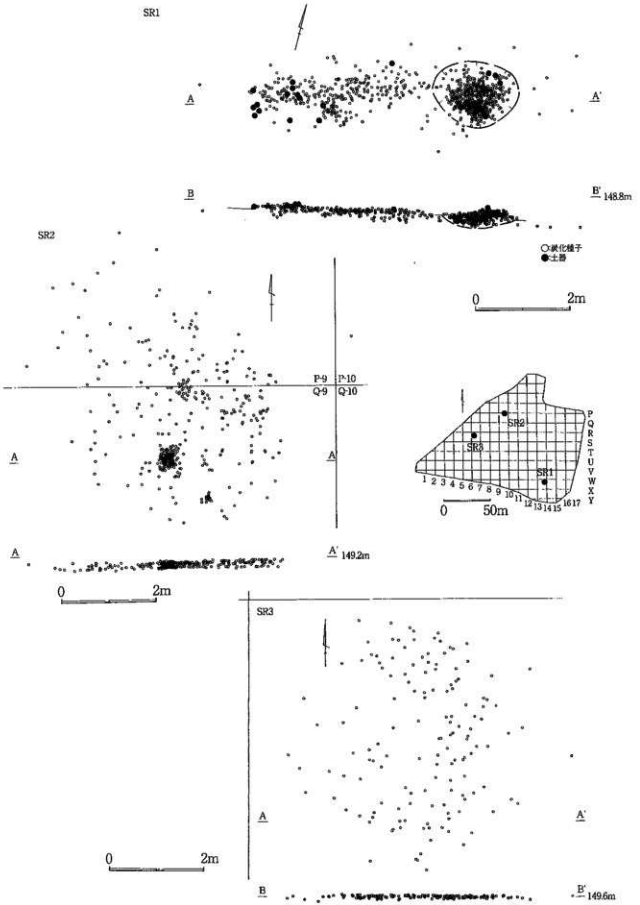


第59図　SB03・05

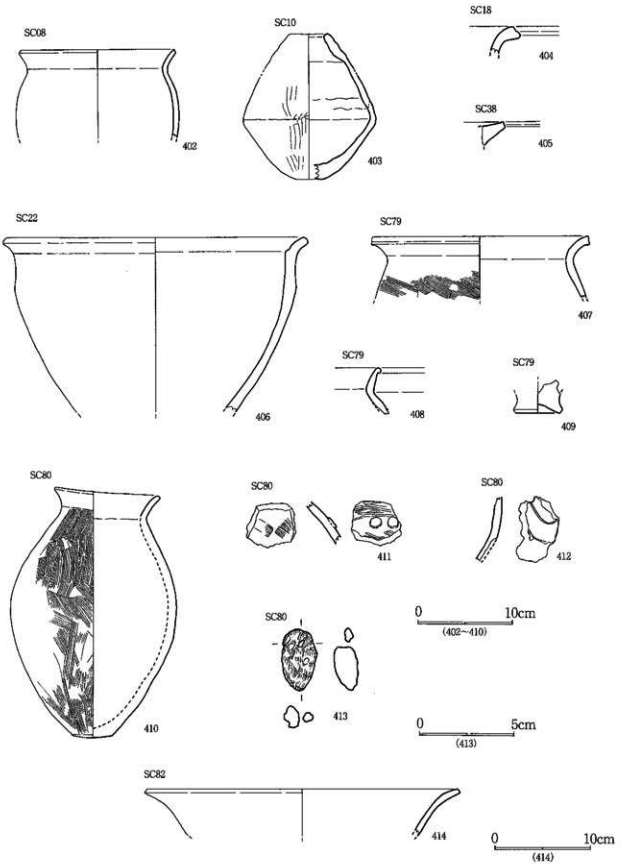
SC82・83・90（M－12・13）はほぼ東西同軸に並んでいる。SC82が2.5m×1.8mの楕円形で段を持ち、深さは約0.6mである。床部分が赤くなっており、顔料が残されていた可能性がある。また、床面より鉄製品が出土している（415）。土坑上面からは高坏片が出土している。



第60図　弥生時代の土坑



第61図　炭化種子分布図



第62図　弥生時代SC出土遺物

SC83はSC82よりやや小ぶりで、1.6 m × 1.4 mの楕円形で深さ0.6mとなっている。SC82が全体的に2段に掘り込みテラスを持つのに対し、SC83は北側のみに段を持ち南側が袋状に膨らむ。やはり床面が赤く、埋土中から鉄分を含むと思われる塊が出土している。SC90はSC82・83の主軸が東西であるのに対し南北となっており、また、大きさも1.2 m × 0.7mと小ぶりである。やはり床面が赤くなっていた。遺物の出土は見られない。いずれも弥生時代終末期の土壙墓である可能性が高い。

SC10・SR1（X － 13）は炭化種子と土器が出土している。1.8 × 1.4 mの範囲が浅い皿状に窪み、7 m × 2 mの範囲から炭化種子が出土した。403は無頸の壺で内面にススがベットリと付着する。内面に粘土輪積み痕が残る。SR2（P・Q － 9）は南北6.4 m、東西5.4の範囲に炭化種子が集中していた。SR3（S － 6）は南北6.2 m、東西6 mの範囲で炭化種子が集中していた。

（6）鉄製品（第63図）

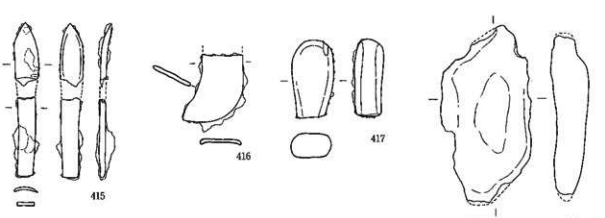
鉄製品は総数9点出土している。内訳は鉇1点、棒状鉄器1点、鉄素材1点、器種不明鉄器6点である。

415はSC － 82より出土した鉇である。鋒部を有する破片と基部片であるが、接合せず、間を欠いている。推定全長8.2cm、最大幅1.2cm、基部幅0.9cmである。また厚みは作業部位で約0.15cm、基部で約0.2cmであるが、旧状はこれよりはやや薄かったと推測される。鋒部は非対称形で刃部長に長短がある。表からみた場合、右刃部が1.7cm、左刃部が1.2cmである。裏すきは鋒部片にのみ認められ、基部は板状を呈している。鋒はやや表側に沿っており、基端部はやや裏すき側に湾曲している。時期は弥生時代終末期である。

416はU － 3区Ⅱ層より出土した。最大幅2.3cm、厚み0.15 ～ 0.20cmの平板な鉄製品であり、破面を水平に置いた場合、平面上、一方に湾曲している。鉄鎌の先端部と解釈される可能性があるが、破面付近の横断面によればやや両端から折り曲げられている可能性がある。袋部を有する曲刃器の可能性がある。後世の削平を受けた部分からの出土であるが、おそらく弥生時代後期に属すると思われる。

417はW － 7区Ⅴa層より出土した円頭形の鉄製品である。全長4.1cm、最大幅2.2cm、下端部幅1.5cm、厚み1.5cmである。表面の赤錆や土の付着は薄く、錆ぶくれも認められないため、旧状をとどめているとみてよい。下端には平坦面が認められる。表面の亀裂の様子から鋳造品の可能性も考えられるが、類例もなく、器種を断定できない。時期は弥生時代中期後葉～後期である。

418はW － 11区Ⅴa層より出土した不整形の鉄製品である。全長9.3cm、幅4.9cmであり、厚みは最大で2.0cmを測る。錆ぶくれを生じている可能性があるものの、破面を観察する限り、まとった土や赤錆層は薄く、また層状剥離も顕著ではないので、旧状に近い形状・大きさを呈しているとみられる。上下、左右非対称で、厚みも一定ではない。表面の中央部に縦に長い楕円形のくぼみがある。表裏面、周囲に平坦面を有していた痕跡は観察されない。農工具、武器といった鉄製品やその一部ではなく、あえて評価すれば鉄素材ということができよう。時期は弥生時代中期後葉から後期である。



第63図　鉄製品

上記のほか、棒状鉄器1点、器種不明鉄器4点があるが、いずれも小型で、錆化が芯までおよび、遺存状況が悪く、図示を行っていない。時期は弥生時代中期後葉～後期である。

いずれの鉄製品も弥生時代中期後葉から後期に属するものであり、南九州においては最古級の鉄製品である。

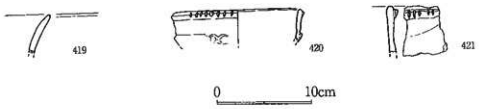
なお、416、418の2点の鉄製品についてはX線CT撮影を実施し、また遺跡の土壌と鉄器の腐食との相関性に関する調査を実施した。その結果、いずれの鉄製品の内部には金属鉄部分を確認した。その大きさは418が厚さ7mm×幅約40mm、417が厚さ6mm×幅15mm×長さ35mmで、鉄製品の大きさに比してその容積は大きい。V層はその上下を火山灰層に挟まれ、土壌抵抗率はやや高めで、埋蔵環境は弱酸化雰囲気であったと評価されている。換言すれば腐食性イオン濃度は総じて低く、土壌の腐食性は「ほとんどなし」という判断である。金属鉄の遺存量の多さはこの土中環境がもたらしたものといえる。ただし、その分、出土後の経時変化は著しく、とくに418に生じた亀裂は大きく、保存措置を講じて保存する必要がある。

（文責：村上恭通）

（7）包含層出土遺物（第64～69図）

・**縄文時代の遺物**：419は縄文時代後期。420・421は突帯文土器で炭化物が付着する。

・**弥生時代の遺物**：422～428は胎土に雲母を含む。422・423は大甕である。424は口縁部平坦面が窪む。425は胴部突帯が貧弱。426は胴部の器壁が薄く、内面に指頭痕が残る。429～432は同一系統の土器群で、口縁部は厚く肥厚する。胴部に絡縄（ミミズバレ状）突帯を貼付する。433は下城式土器。434～435は中溝式土器。438～439、441、443は無文の甕で外面にハケメが残り、外面にはススが付着。440は鉢形土器で、内外面にハケメが残りススが付着。444・445は平底の底部で下から上へハケメが残る。446から448は中実高台の甕脚部で、ハケメが残る。449は若干上げ底。450から458は胎土が粗い。454・456は外面に赤褐色系の顔料を塗布が見られる。454は壷口縁部で、口縁平坦面と口唇部、口縁直下に顔料が塗布されている。口唇部にはキザミが施されることから、入来Ⅱ式の影響を受けているものと思われる。

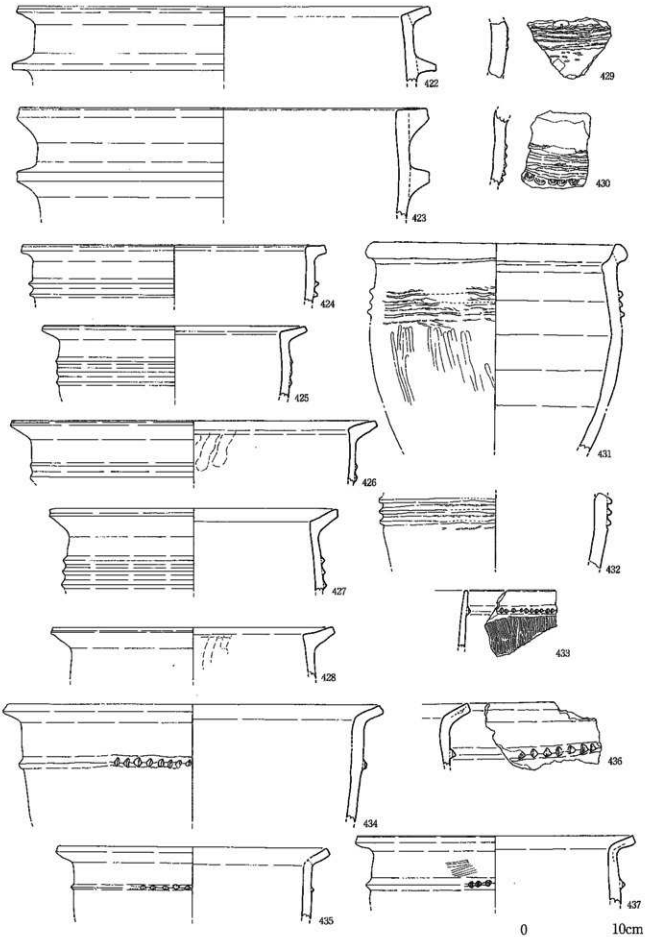


第64図　包含層出土遺物①

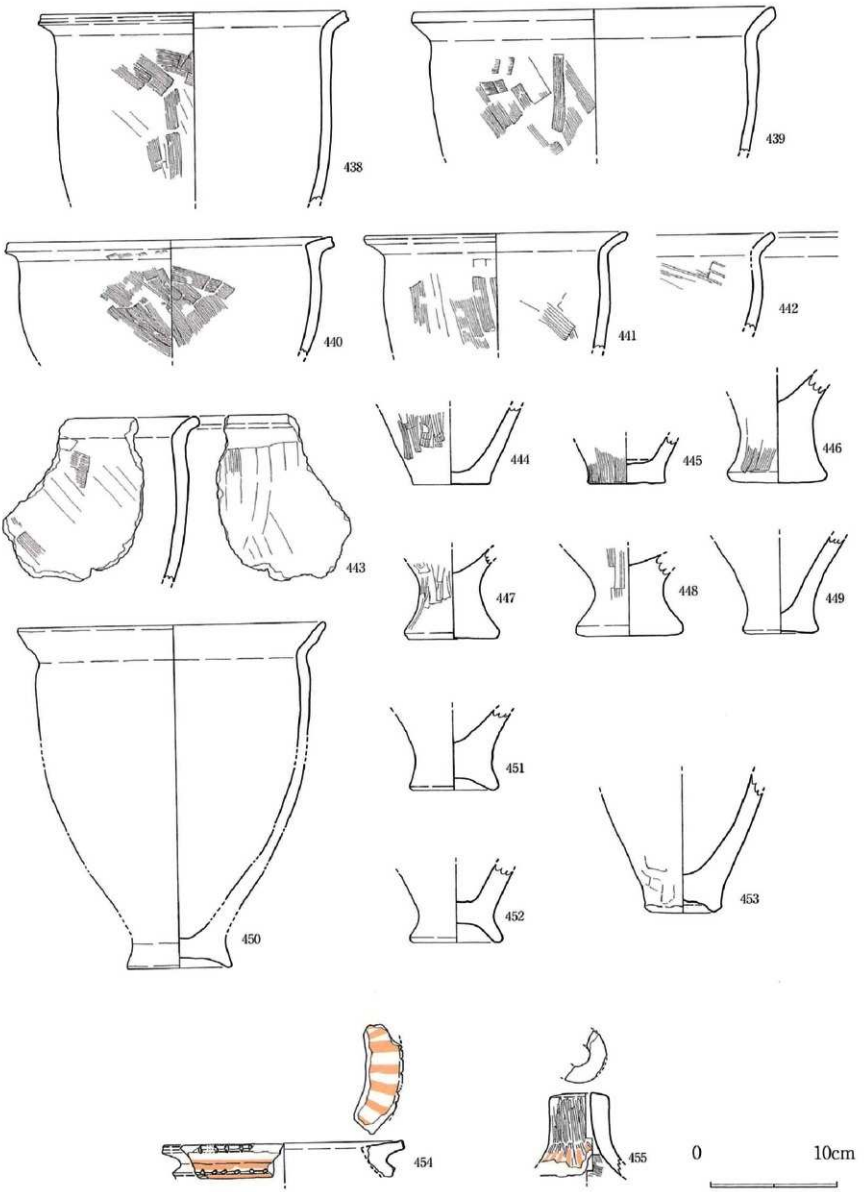
455は高坏脚部であるが、破損後に何らかの転用をされており、脚付け根が平滑に研磨されている。この2点以外にも顔料の塗布された破片が多数出土している。これらの資料については、愛媛大学田崎博之氏に黒髪式の影響を受けている可能性を指摘されている。456～472は壷である。456～459は山ノ口Ⅱ式の壷で胎土に雲母を含む。460は壷頸部に突帯貼付される。461は口唇部が窪む。462は口唇部にキザミを施し、口縁平坦面には勾玉を模ったと思われる小粘土が貼付される。463は無頸壷で口縁直下に穿孔を有する。464は粘土接合痕の残る壷で、外面にはハケメが残る。465は頸部に刻目突帯を貼付する。466・467はおそらく同一個体であり器壁が薄い。469は複合口縁に櫛描波状文が描かれる安国寺式土器の壷口縁部である。調査区南西の壁面落ち込みから出土しており、この上部に未焼成粘土が堆積していた。470は胎土に雲母を含んでいる。471・472は若干上げ底である。473～475は高坏である。473は胎土が粗く磨耗が激しい。SQ01の391・392と類似する。475は円形の透かしを有する。474は内外面にミガキが施される。476は手捏土器。477は高坏片の点用品で、左右に打ち欠きと磨耗が認められるため錘か亜飾品と思われる。478はコバルトブルーのビーズである。

479～483は打製石鏃である。479は黒曜石で、未成品と思われる。480は流紋岩の凹基鏃。481はチャートの凹基鏃、482は無斑晶安山岩の凹基鏃。483はチャートで大型。先端を欠損。

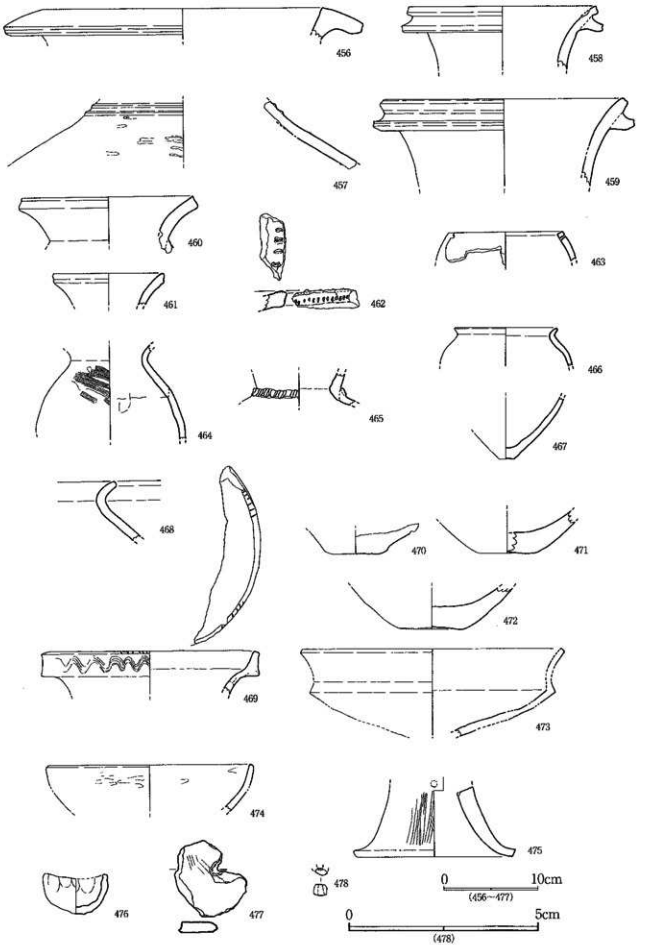
484は黒色頁岩の磨製楔形石器。485は黒色頁岩で、一部研磨が施される。486は磨製石鏃。487・488は砂岩の剥片。489は緑色珪質頁岩剥片。490～495、497～501は輝石安山岩。490・491は剥片。492・494は粗製剥片石器。495は小型で薄手。496は黒色頁岩の磨製の繋状石器。497は機能部を欠損。498・499は刃部に線状痕を残す。小型の石斧片か。500・501は打製土堀具。500は左右が装着により摩滅する。501はは刃部に線状痕、上部に装着痕が残る。502はホルンフェルスの土掘具で、装着によるものか、表裏摩滅する。503は砂岩。片面に自然面を残す。抉り部分と上部に装着による摩滅が顕著。504は小型の砥石。505・506は磨石。507・509は磨・敲石。508・510は台石兼砥石。511～515は軽石製品。511～513は浅い溝状の窪みを有する。514は表面が窪む。515は磨製石斧の模造品か。



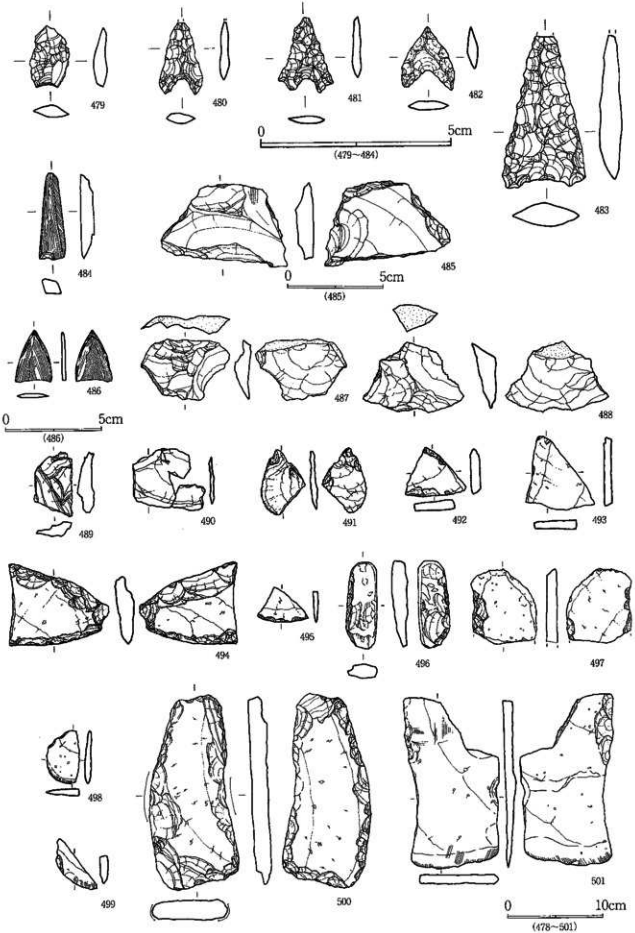
第65図　包含層出土遺物②



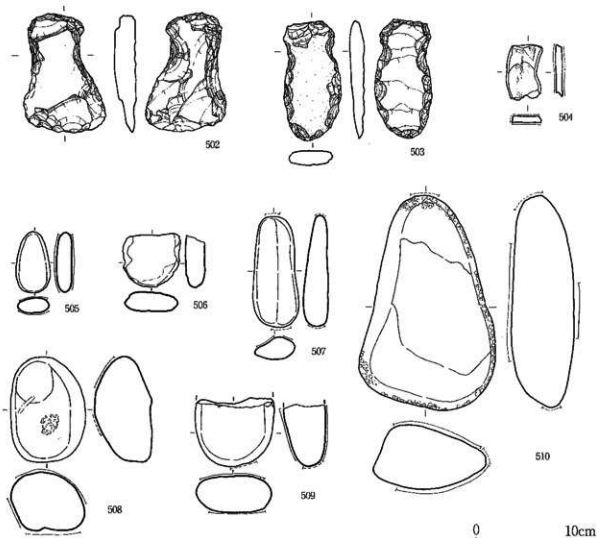
第 66 図　包含層出土遺物③

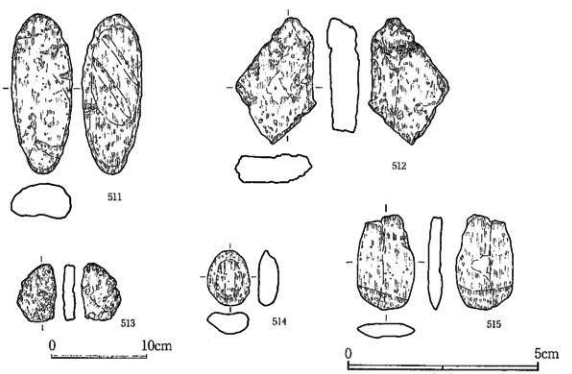


第67図　包含層出土遺物④



第68図　包含層出土遺物⑤





第69図　包含層出土遺物⑥

2．その他の時代の遺構と遺物

古代～中世の掘立柱建物跡が5棟と、道路状遺構2条の他、土坑が多数検出されている。

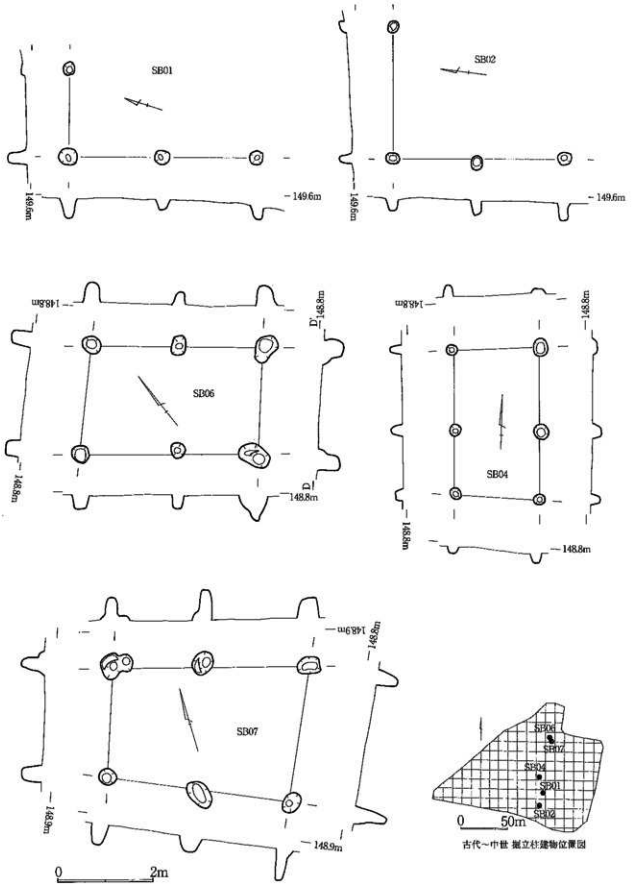
（1）掘立柱建物跡（第70図）

SB01（V－11）は残存範囲で1間（実長2.2 m）×2間（実長4.4 m）である。柱穴直径0.2～0.4 m、深さ0.1～0.4 m、主軸方向は南北である。**SB02**（W－11）はSB01の南に位置する。残存範囲で1間（実長3.2 m）×2間（実長4m）である。柱穴直径0.3 m、深さ0.1～0.3 m、主軸方向は南北である。SB01･02は東側が削平を受けている。**SB04**(T－11)はSB01の北に位置する。桁行2間（実長3.6 m、柱間1.8 m）、梁間1間（1m）で、柱穴直径0.3～0.4m、深さ0.1～0.2 m、主軸方向は南北である。**SB06**（P－12）は桁行2間（実長4.4 m、柱間2.2 m）、梁間1間（2.8 m）で、柱穴直径0.4～0.8 m、深さ0.3～0.6m、主軸方向は東西である。桁行中央の柱穴が他より若干浅い。**SB07**（P－12）はSB06と範囲が一部重複する。桁行2間（実長4.4～4.8 m、柱間2.2～2.4 m）、梁間1間（2.8～3.4 m）で、柱穴直径0.4～0.8 m、深さ0.4～0.8 m、主軸方向は東西である。埋土や柱間から古代～中世に属すると思われる。

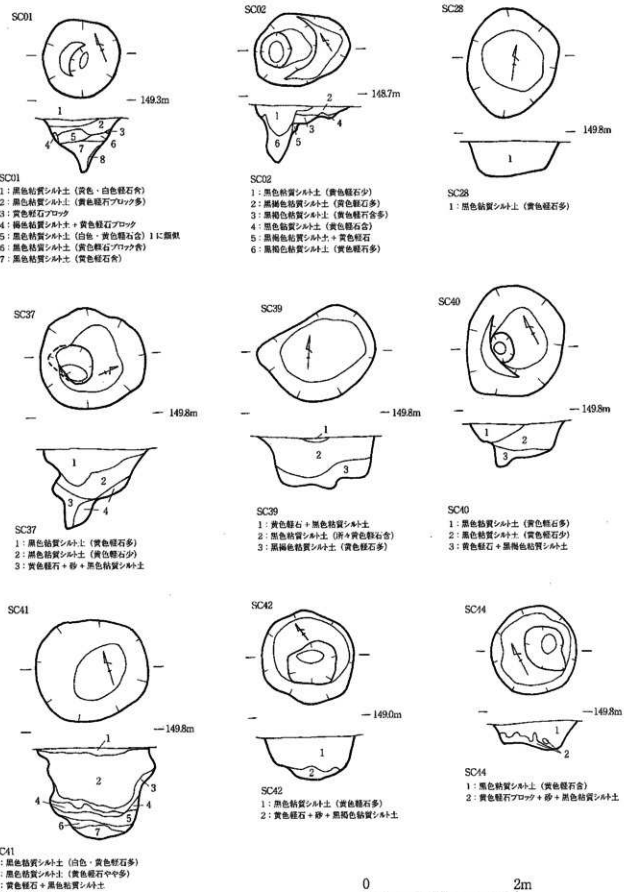
（2）土坑（第71～73図）

時期不明のものを含め多数の土坑が検出された。代表的なものだけ図示する。

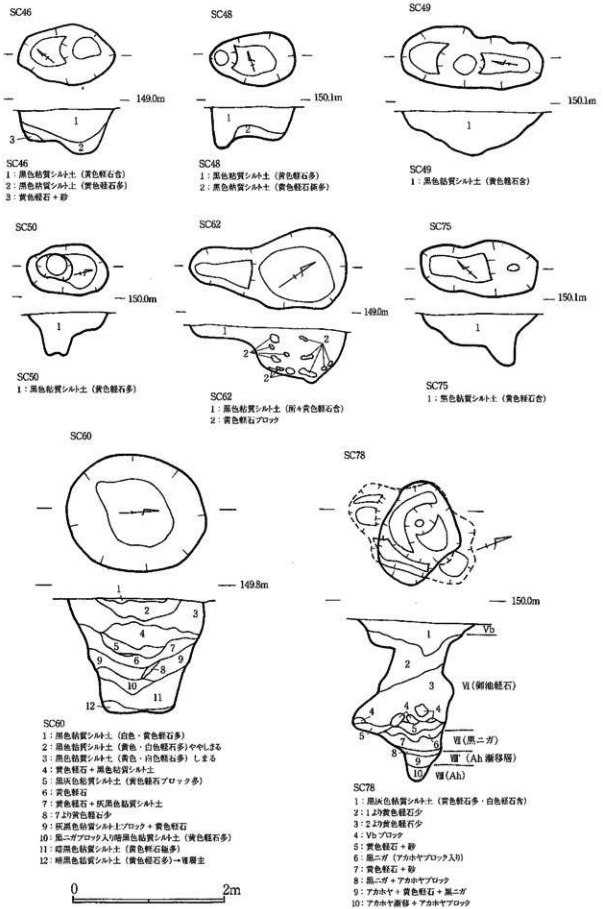
SC01（X－12）は直径0.1 m、深さ0.8mの平面円形で底面に柱穴状の落ちを持つ。埋土はⅣ層を主体とする。**SC02**(Y―13)は1.3×1m、深さ0.8mの平面楕円形で、東にテラスを持つ。**SC28**(X－10)は1.5×1.2 m、深さ0.5mの平面円形、断面台形状の土坑。埋土は単一である。**SC37**(R－9)は1.3×1.4m、深さ1.1 mの平面円形で、土坑底面に柱穴状の落ちを有す。最下層に黄色軽石と砂の層を、上位はⅣ層を主体とする。**SC39**（R－9）は直径1.6×1.2 m、深さ0.7mの平面楕円形で、断面台形状の土坑。下層は黄色軽石を多く含む。**SC40**（S－9）は1.3×1.5 m、深さ0.6 mの平面円形で、西側にテラスを持つ。埋土はⅣ層を主体とする。**SC41**（S－9）は1.5×1.3 m、深さ1.2 mの平面円形の袋状土坑である。最上層には文明軽石が含まれる。**SC42**（S－8）は1.2×1.3 m、深さ0.6 mの平面円形断面U字状の土坑。Ⅳ層を主体とする。**SC44**（S－8）は直径1.2 m、深さ0.4 mの平面円形で、東側が一段下がる。**SC46**（T－8）は1.3×0.8m、深さ0.6mの平面楕円形で、北西にテラスを持つ。Ⅳ層主体。**SC48**（X－8）は1.1×0.7 m、深さ0.5mの平面楕円形で、東側にテラスを有す。埋土は黄色軽石を多く含む黒色土が主体。**SC49**（X－8）は1.9×0.8 m、深さ0.6 mの平面楕円形。中央に向かい下がる。埋土は単一でⅣ層を主体とする。**SC50**（U－10）1.1×0.7m、深さ0.6 mの平面楕円形で、埋土はⅣ層を主体とする。**SC62**（R－9）は2.1×1.1 m、深さ0.8m、南にテラスを持ち、Ⅳ層に黄色軽石がブロック状に混ざる。**SC75**(U―9)は1.6×0.7m、深さ0.7 mの楕円形で北西にテラスを持ち埋土はⅣ層を主体とする。**SC60**(S－10)は1.8×1.6 m、深さ1.5 mの平面円形断面バケツ状の土坑。埋土上層にはⅢ層を含む。**SC78**(T－10)は1.4×1.1m、深さ2.2 mの不整円で袋状の土坑。掘り込みはⅦ層まで達する。**SC85**（P－9）は直径2.1 m、深さ1.5 mの平面円形の袋状土坑。埋土に砂を多く含む。**SC86**（P―8）は1.2×1.4 m、深さ0.3の円形皿状。埋土はⅣ層主体で、Ⅲ・Ⅵ層を含む。



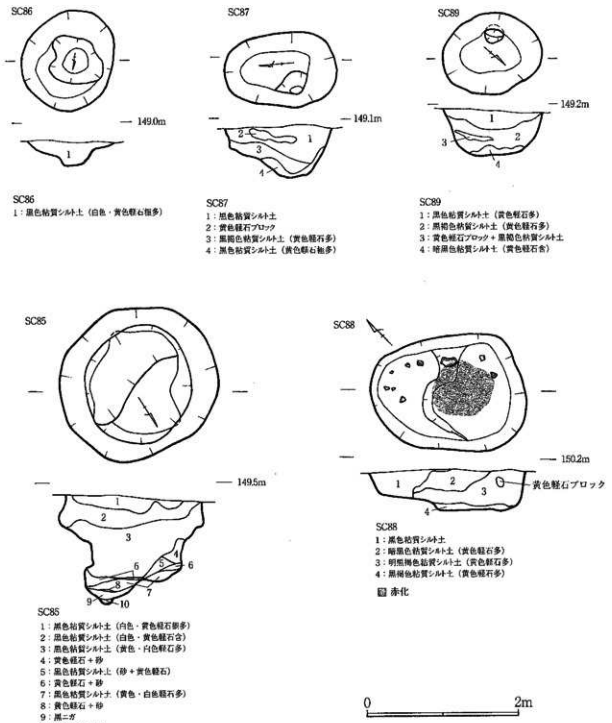
第70図　SB01・02・06・07・08



第71図　その他の土坑①

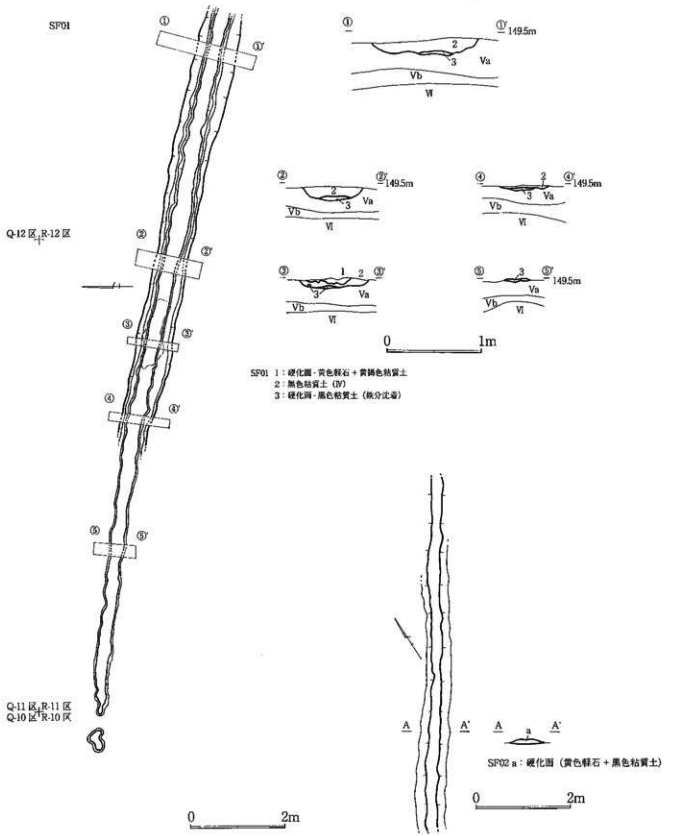


第 72 図　その他の土坑②

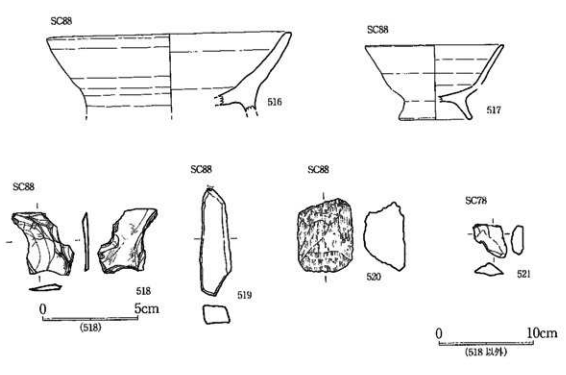


第73図　その他の土坑③

SC89（Q－9）は1.3×1.1 m、深さ0.6 mの平面楕円形、断面台形状の土坑。南側に柱穴状の落ちを持つ。**SC88**は2×1.5 m、深さ0.6 mの楕円形の土坑。底面が赤化する。南西側は掘り直されたものか。土坑内からは土師器の高台付鉢（**516**）や椀（**517**）が出土している。


SF01
Q-12 区 R-12 区
Q-11 区 R-11 区
Q-10 区 R-10 区
149.5m
Va
Vb
Vl
0
1m
SF01 1：硬化面・黄色軽石＋黄褐色粘質土
2：黒色粘質土（IV）
3：硬化面・黒色粘質土（鉄分沈着）
A
A'
a
SF02 a：硬化面（黄色軽石＋黒色粘質土）
0
2m

第 74 図　SF01・02



第 75 図　古代～中世出土遺物

（3）道路状遺構（第 74 図）

SF01 は R－10 から R－12 区にかけてほぼ東西方向に全長約 16m 検出された。地形に沿って東に向かい下る。東側では溝状の掘り込みも検出され、最大溝幅は 1.1 m、最深 0.4 mである。硬化面は溝底に 1 枚と、Ⅳ層黒色土をはさみ上位に 1 枚の計 2 枚検出された。

SF02 は R－6 区で検出された。南西から北東方向に全長 7.6 mである。検出面が黒色土より下位であるため、溝等の掘り込みは確認できなかった。硬化面の幅は 0.6m、厚さは約 10cmである。全体的に削平を受けているため、詳細は不明であるが、SF01 及び掘立柱建物跡を含め B 地点の古代～中世の遺構群に関連すると考えられる。遺物の出土が無いため詳細な時期は不明。

（4）古代～中世出土遺物（第 75 図）

A 地点での古代～中世の遺物は少ない。516 は高台付鉢である。内面外面にススが付着する。復元で口径 25.9cmである。SC88 の床面より出土している。517 は高台付椀である。518 は緑色珪質頁岩の未成品で、流れ込みか。3 層より出土している。519 は端部に敲打痕を有する敲石である。520 は軽石製品である。521 はチャートの原石である。火打石の可能性がある。522 は R－4 区出土の土師器で、体部に焼成後の穿孔が 2 箇所認められた。表裏面はやや磨耗する。523 は土師器坏で、底径 5.9 ｃｍである。

その他薩摩焼など近世陶磁器類が数点出土している。

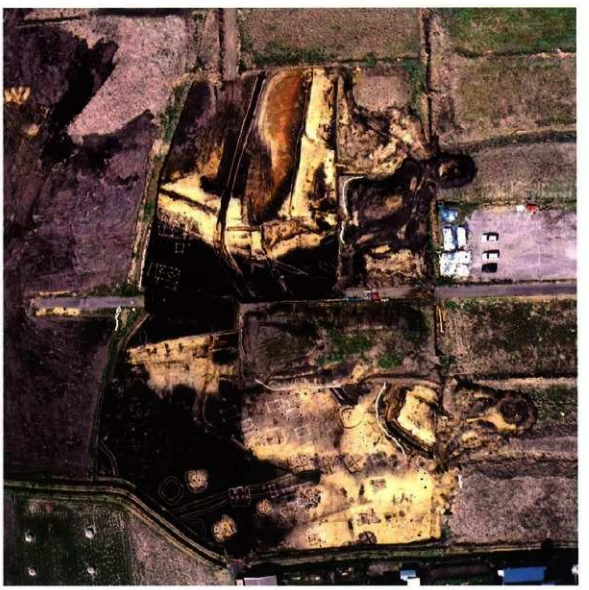
第４章　Ｂ地点の調査

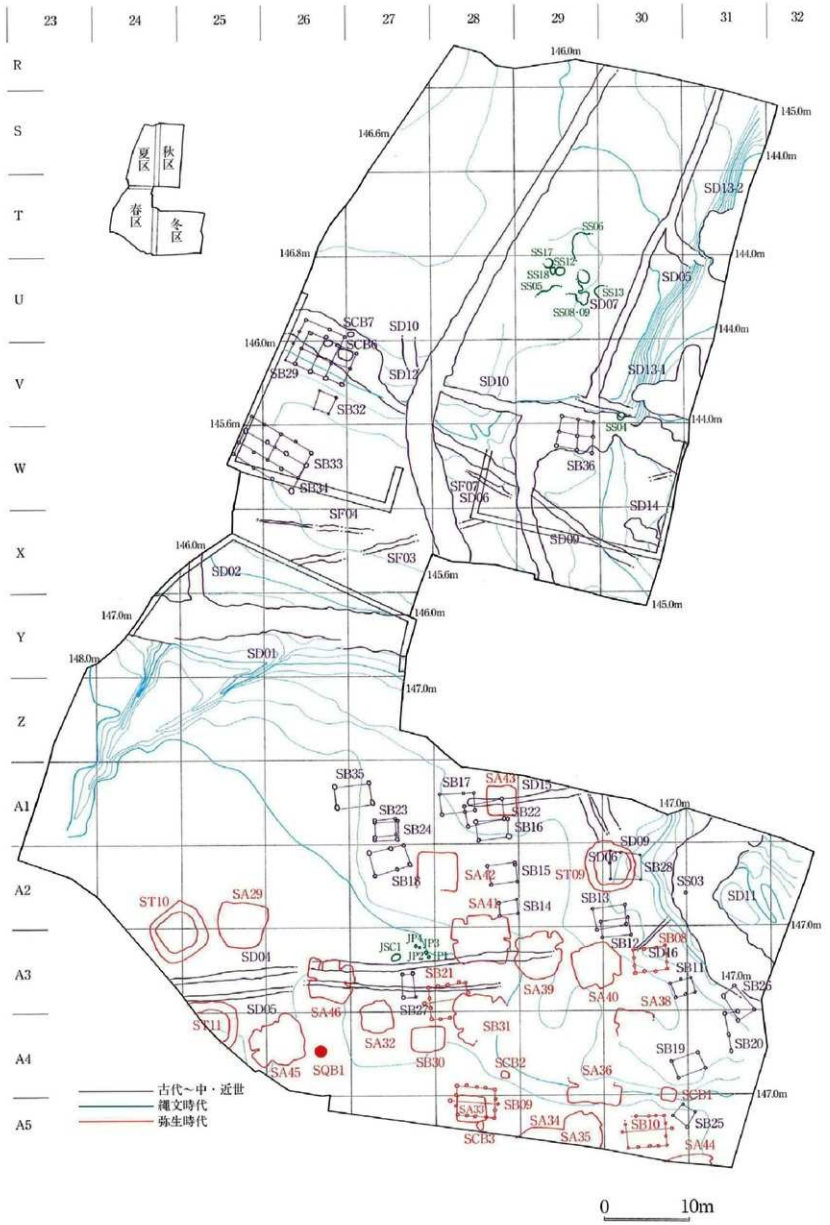
第１節　調査の方法と概要

Ｂ地点の調査面積は約6,200㎡である。調査区中央には東から西に谷間が延び、その谷間は盛土と表土にて埋められ、東西、南北に横断する農業用道路が走っていた。この道路は調査途中まで使用され、調査区が４分割されるため、南西の１／４を春区とし、時計回りにそれぞれ夏区、秋区、冬区とした。表土剥ぎを重機にて行い、精査した時点で、溝状遺構の他、弥生時代の竪穴住居跡が多数検出された。道路部分については使用期間終了後追加で表土剥ぎを行い、遺構の検出を行った。また、御池軽石より下位については、隣接するＤ地点（宮崎県埋蔵文化財センター調査区）でも遺構・遺物が確認されておらず、工事掘削深度が達しないことから調査を行う予定ではなかった。ところが、夏区と秋区の北側３／４は後世の削平により、一部アカホヤ火山灰層まで削平されていたうえ、夏・秋区を走行する溝状遺構（SD06）の壁面中位（アカホヤ火山灰層より下位）から無数の礫がある程度まとまった状態で検出され、土器も出土したため、工事計画と照らし合わせ、一部、アカホヤ火山灰層下位の縄文時代早期の調査を行うこととなった。

重機による表土除去後、遺物包含層（Ⅳ～Ⅴ）の掘り下げを人力で行った。包含層が残存していたのは冬区の一部と春区、夏・秋区の南側１／４である。弥生時代の遺構は谷の南、春・冬区に集中し、古代～中世の遺構は、溝状遺構が夏・秋区を中心に、掘立柱建物跡が春・夏・冬区を中心に検出された。

図版１　Ｂ地点全体写真





第 76 図　B 地点遺構配置図

第２節　基本層序

上層が良好な堆積で残存していたのは調査区中央の谷部分（各区の交差部分）である。そこで土層の堆積状況を観察したところ、土層の状況はＡ地点とほぼ同じで、表土・旧耕作土の下にⅢ層の文明軽石が堆積していた。Ａ地点と同じく文明軽石埋没の畠の畝間部分と考えられる。その直下にＡ地点では見られなかった、Ⅳ層黒色土に御池軽石およびアカホヤ火山灰と思われるブロックを含む層が見られた。この層は夏区南側と秋区西側の一部で確認された。自然科学分析ではオーバーフローした土砂が堆積したか砂塵によって堆積したとされている。調査担当者としては、アカホヤ火山灰等がブロック状に混入することや調査区と横市川の高低差を考えると、調査区内の大溝を掘り返した際の土が谷部に流れ込んだか、古代～中世の段階で谷の造成が行われた可能性も挙げておきたい。Ⅰ～Ⅲ層についてはＡ地点と同様であるため省略する。

Ⅳ層：黒灰から黒色を呈す粘質シルト土。サラサラしている。Ⅳａ'はⅣａ黒灰色土にアカホヤ火山灰・御池軽石等のブロックを含む。Ⅳａ層は黒灰色土。Ⅳｂ層は黒色土。

Ⅴ層：黒色～暗褐色粘質シルト土。上部から下部にかけてⅥ層の御池軽石（黄色軽石）を含む割合が高くなり褐色化していく。上部の黒色～黒褐色を呈し、御池軽石を含む部分をＶａ層、下部の御池軽石を極多く含み、暗褐色を呈する部分をＶｂ層として細分が可能である。また、調査区中央の土層堆積が良好な谷部では、上部のＶａ層が更に細分化できる。Ｖａ１とＶａ２、Ｖａ３である。Ｖａ１は黒色を呈し、小粒の黄色軽石を多く含んでいる。Ｖａ２層は黒褐色を呈し、Ｖａ３は黒色を呈す。下位に行くに従い黄色軽石を多く含む。

Ⅵ層：御池軽石（約4,200年前に霧島御池より噴出）。黄色の軽石。

Ⅶ層：黒色粘質シルト土。若干水分を含む粘質の非常に強い土である。

Ⅷ層：アカホヤ火山灰。鬼界カルデラより約6,500年前に噴出した火山灰である。ａ～ｃの三層に細分可能。Ⅷａは Ⅶ層との漸移層。Ⅷｂ層はアカホヤ火山灰層。Ⅷｃ層はアカホヤ火山灰の軽石粒を含む層。

Ⅸ層：黒褐色粘質シルト土。

Ｘ層：２層に細分される。暗赤褐色粘質土で、ｂ層にはＰ１１や蒲牟田スコリアを含む。

ＸⅠ層：暗褐色粘質シルト土。

ＸⅡ層：明褐色粘質シルト土。約１万１千年前のサツマ火山灰（Ｐ14）ブロックを所々含む。

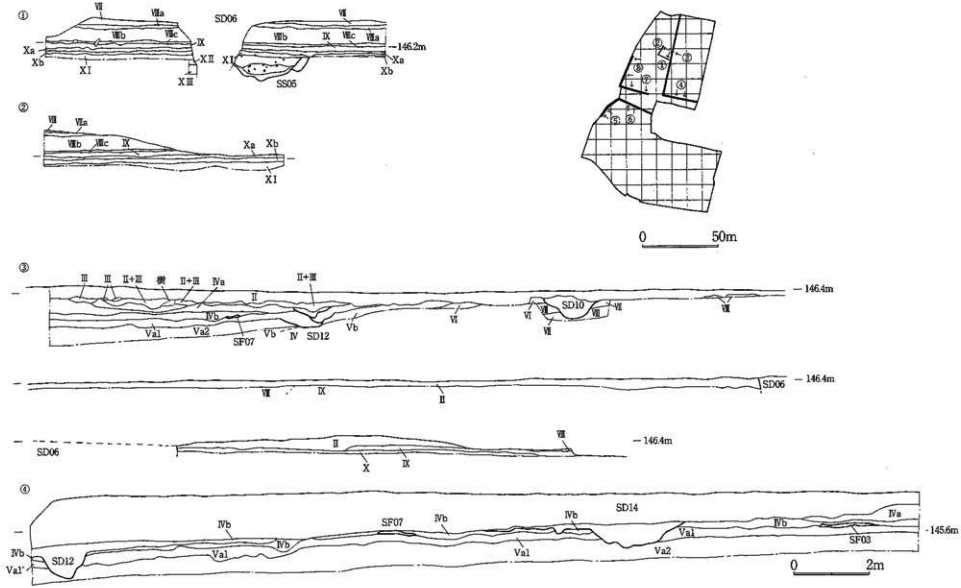
ＸⅢ層：褐色砂質シルト土。ⅩⅣ層：シラス（二次堆積）。ⅩⅤ層：砂礫層。

第３節　各時代の調査成果

１．縄文時代早期の遺構と遺物

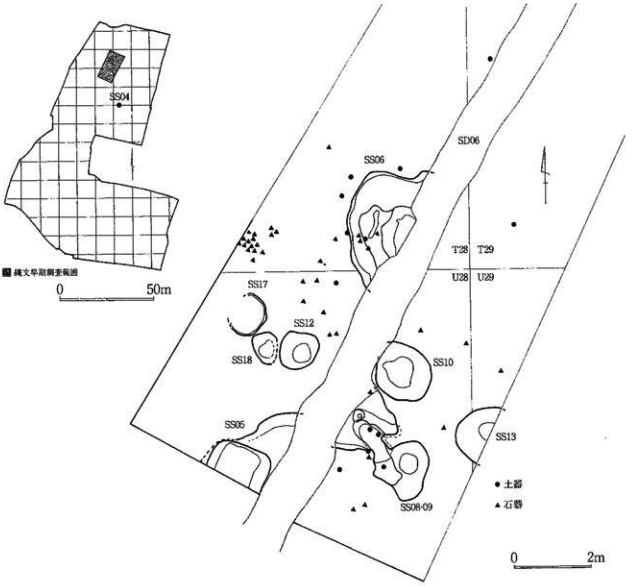
縄文早期の遺構はＴ・Ｕ－28・29区で８基とＳＤ09内で１基の計９基である。何れもＸⅠ層で検出されている。全体的に礫が散在しており、所々黒色を帯びていた。黒色部分の調査を行ったところ、若干礫を伴う大小の土坑であった。おそらく集石として使用した掘り込みが残ったもので、周辺の礫は使用後に廃棄されたものと思われる。土坑内および周辺からは円筒形の条痕文土器、石鏃等が出土している。SD09内の１基については礫が多数認められた。

これらの土坑（集石）は南に谷を望む斜面に立地する。



第77図　B地点土層断面図①

第78図　B地点土層断面図②



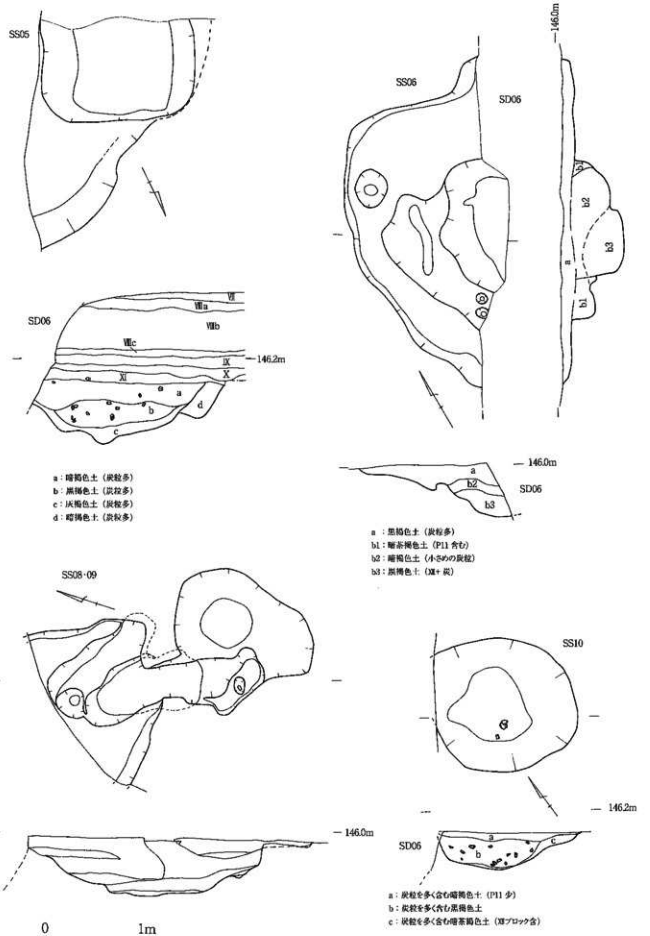
第79図　縄文時代早期遺構配置図

SS04（第81図）はＳＤ09の溝底部から検出された。1.5×1.6ｍの平面楕円形、深さ0.2ｍ程の断面皿状を呈す。遺構内からは炭化物と共に赤化した拳大から人頭大の礫が検出された。

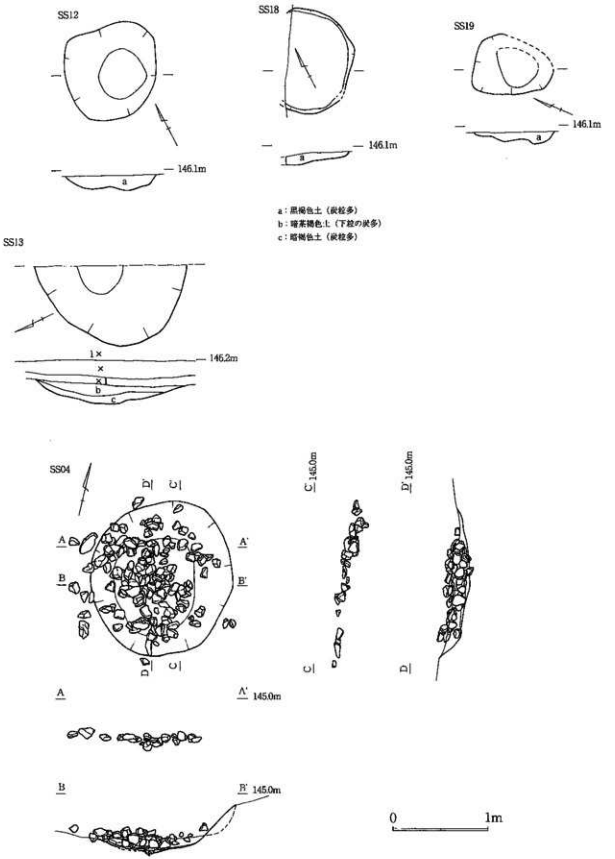
SS05（第80図）は拡張部の南端で検出された。遺構の半分のみ調査を行った。おそらく2基が切り合っているもので、1つは深さ0.7ｍと深く、1.7×（1.1）ｍの隅丸方形を呈す。埋土には礫が含まれる。もう1つの詳細は不明であるが、深さは0.4ｍ程。

SS06（第80図）はSD06によって削平されている。推定で3×3.5ｍの不整円で、深さ0.7mである。中央に向かい深くなり周囲はテラス状に浅く掘り込まれる。埋土は大きく二層に分層され、下層が更に三層に分層される。炭化物を多く含んでいる。

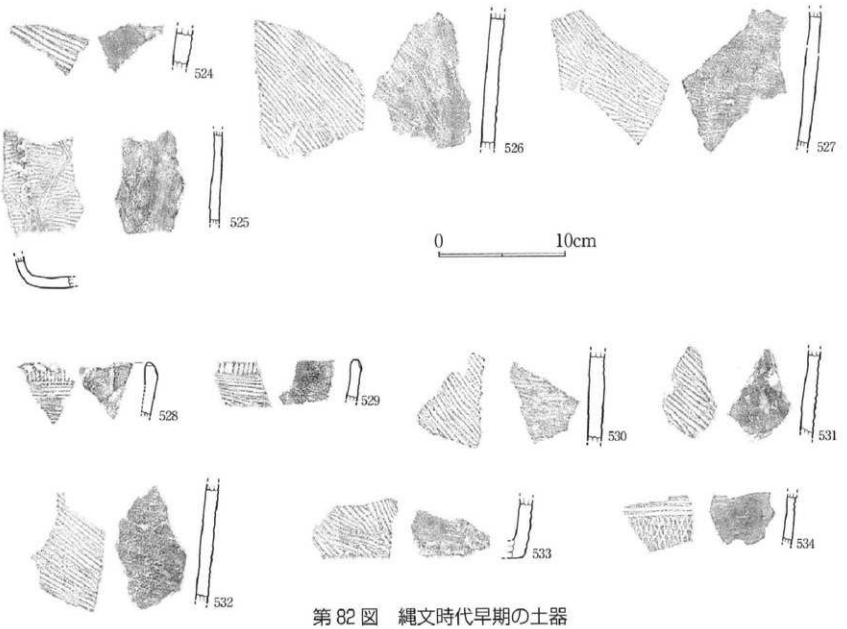
SS08·09（第80図）は複数の土坑の切り合いが考えられる。南に1.6×1.1ｍの平面楕円形、深さ0.2ｍの皿状を呈す土坑があり、北側に連結土坑状のものが見られる。これについてはSD06によって削平されているため規模は不明であるが、中央の最深部が0.7ｍ程で、この両側の壁面はオーバーハングしている。おそらくブリッジ部分と思われる。北側の掘り込みより土器が出土している（**526·527**）。土坑内からは多数の炭化物が出土している。



第 80 図　縄文早期土坑①



第 81 図　縄文早期土坑及び集石



第 82 図　縄文時代早期の土器

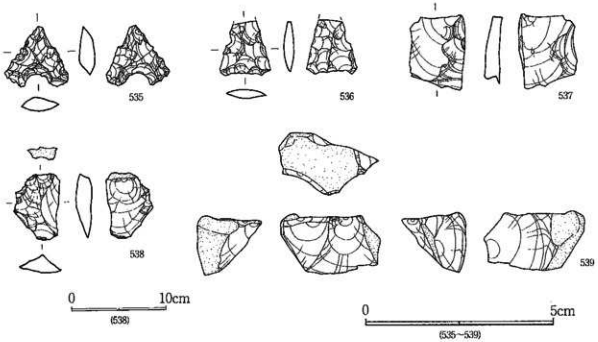
SS10・12・13・17・18（第 80・81 図）は平面円形、断面皿上を呈す土坑である。**SS10** は直径約 1.5 m、深さ 0.4 m で埋土には礫と炭化物粒が多数含まれる。**SS12** は直径約 1 m、深さ 0.2 m。**SS13** は推定で直径約 1.6 m、深さ 0.2 m。SS17 は 0.9 × 0.6 m、深さ約 0.1 m。SS18 は推定で直径約 1.1 m、深さ 0.1 m。SS13 以外埋土は単層で、炭粒を多く含んでいる。

（文責：栗山）

524 ～ **534** は縄文時代早期に帰属する土器である。これらのうち **524** ～ **527** は遺構内から出土している。以下、個別資料ごとに説明を加えたい。

524 は SS04 からの出土である。破片資料のため器形などの全体像は不明であるが、外面の条痕調整および内面のケズリ調整から早期前葉期の前平式土器であると思われる。**525** は SS05 からの出土である。角筒土器の胴部片で、外面は横方向の貝殻条痕地に同じく貝殻による沈線文が重ねられる。また、角頂部には刺突文が確認できる。内面はケズリにより調整される。前平式に後出する志風頭式土器に相当するものである。**526・527** は SS08 から出土した資料で、外面は斜位の条痕調整が加えられ、内面はケズリ調整により仕上げられる。やはり前平式土器に相当するものである。これらの出土資料から判断すると、SS04 と SS08 は早期前葉前平式期の所産であると考えられる。さらに、出土遺物からは SS05 はこれらの 2 基の集石よりは時期的に若干後出する可能性が高いといえる。

次に包含層出土資料をみてみたい。**528・529** は口縁部片で、外面の口唇部直下に貝殻による刺突文が加えられ、それ以下は横位の条痕調整が確認できる。**528** は口唇部にも貝殻刺突が施されている。**530** ～ **532** はいずれも胴部片で、外面は斜位の貝殻条痕が施され、内面はケズリにより調整される。**533** は底部の破片で、やはり外面は斜位の条痕調整が、内面はケズリ調整が加えられる。



第83図　縄文時代早期の石器

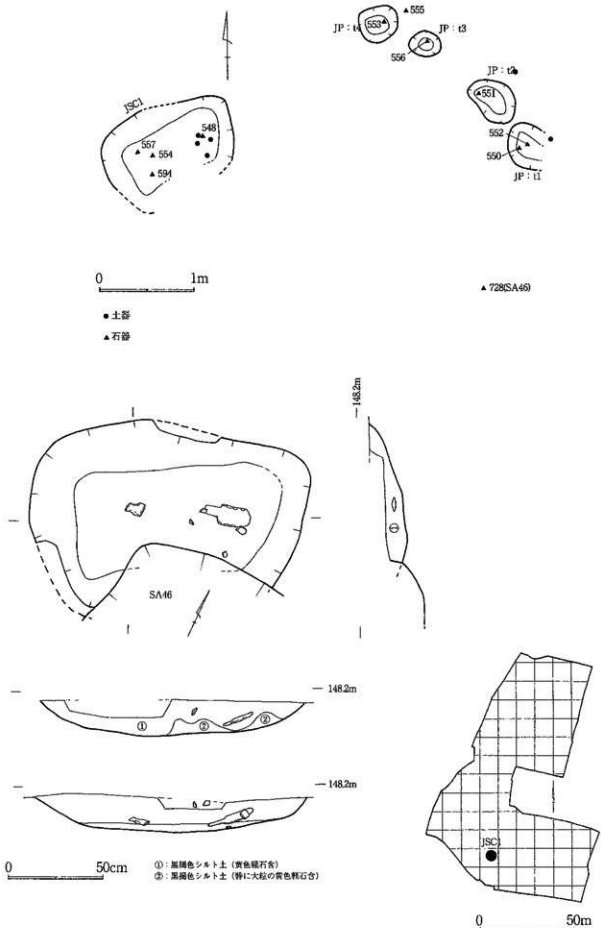
これらの資料はいずれも前平式土器に相当するものと考えられる。534は外面に3条の凹線と格子目状の撚糸文が施される資料で、早期後葉に帰属する撚糸文系塞ノ神式土器に相当するものである。
（文責：山下大輔）

535はチャートの石鏃で、凹基の三角鏃である。平面に比べ厚みがあり、調整も緻密ではないため未成品の可能性がある。536は黒曜石の石鏃で未成品。平基の三角鏃。537は黒曜石の剥片である。538は無斑晶安山岩の剥片で、下端に使用痕と思われる微細剥離が認められる。打面は自然面。539は黒曜石の残核。小型の原石を用いている。この他、未成品や剥片を含めチャートと黒曜石の砕片が出土している。
（文責：栗山）

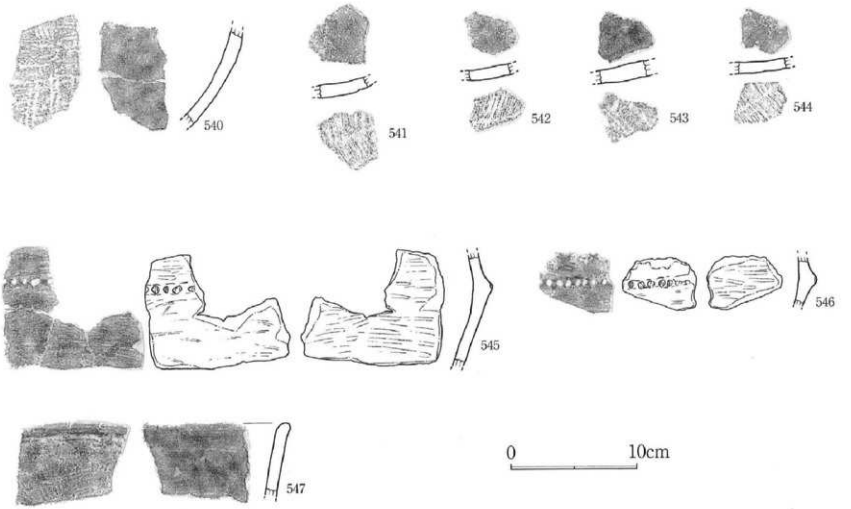
（2）縄文時代晩期の遺構と遺物

縄文時代晩期の遺構が調査区南側のSA46の北側を中心に打製石斧を埋納したと思われる土坑および柱穴が大小5基見つかっている。土坑内および周辺から突帯文が少量ではあるが出土している。晩期の遺構埋土は包含層と類似しており、遺構検出が困難であった。晩期の遺構検出のきっかけは、打製の土堀具である。SA46の北側に集中して出土し、出土地点の土が若干周辺より異なっていた。また、SA46の壁面や、サブトレンチにおいても、土が若干異なる部分が認められたため、遺構を検出することができた。

JSC1（第84図）：推定で東西1.5m、南北1m、深さ0.2mの隅丸方形を呈する。SA46によって南側が削平されていた。埋土は二層に分層され、下層（②）は一部にのみ認められた。



第 84 図　縄文時代晩期遺構配置図



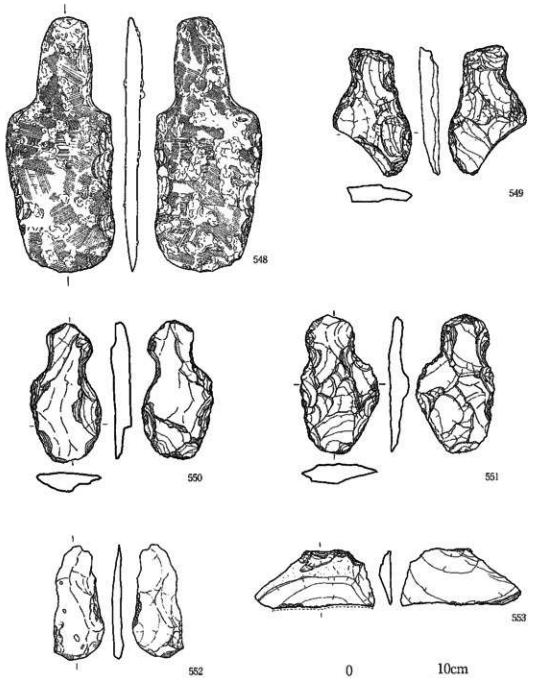
第 85 図　縄文時代晩期出土遺物①

土坑底部近くより大型の土堀具が 1 点（548）と、欠損した土堀具 1 点（554）、突帯文土器片が数点出土している。また、土坑上部からは他に 2 点の土堀具が出土している。

Jpit1 ～ 4（第 84 図）：Jpit 2 を除く柱穴上部では打製土堀具が出土している。Jpit 1 は推定で直径約 0.5 m、深さ 0.2 m。Jpit 2 は 0.5 × 0.6 m の不整円を呈し深さは 0.1 m。Jpit 3 は 0.3 × 0.4 m の円形を呈し、深さは 0.1 m。Jpit 4 は 0.4 × 0.5 m の円形を呈し、深さは 0.1 m。

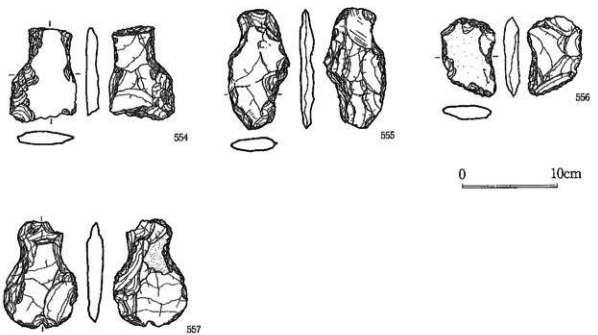
540 ～ 547 は縄文時代晩期に帰属すると考えられる土器である。540 ～ 544 は外面にいわゆる組織痕（編布圧痕）を残す資料である。破片資料のため全体像を窺い知ることはできないが、ボウル状の鉢形を呈するものと考えられる。540 は胴部片で、下半には組織痕が確認でき、上半はケズリにより調整されているようである。541 ～ 544 は底部付近の資料と考えられ、いずれも外面には組織痕が確認できる。内面は丁寧なナデないしはミガキ調整が加えられており、平滑に仕上げられている。内面は黒色化しているものが多い。545・546 は縄文時代晩期末に比定できる刻目突帯文土器である。破片のため全体像は不明であるが、底部から胴部にかけて開きながら立ち上がり、頸部の刻目突帯を境に口縁部まで内傾するものと考えられる。突帯は粘土紐の貼り付けによるものとみられるが、突帯の稜線は明確でなく接合痕も不明瞭である。刻目は指頭によるものと考えられ、いびつな楕円形を呈している。545 をみると、外面の突帯より上位はミガキ調整が加えられ、それより下位は工具ナデにより調整され削痕が残る。内面には粗いミガキ調整が加えられる。546 も同様に外面の突帯以下にはナデ調整が、内面には粗いミガキ調整が加えられる。547 は粗製の深鉢であると考えられる資料で、内外面共にナデ調整が加えられる。外面の一部には条痕状の調整痕が残る。口縁部直下の外面にはススが付着する。

（文責：山下大輔）



第86図　縄文時代晩期出土遺物②

548～552、554～557は土掘具である。553は粗製剥片石器である。JSCから出土したのは548・549・554・557の4点である。548は鉄分を含む黒色頁岩で、表面に鉄分が噴出する。表裏面は丁寧に研磨され、側部には研磨前と研磨後の加工痕が残る。長さ27.1cm、幅11.4cm、厚さ2.1cm、重さ560gと非常に大きく重い。他の土掘具と比べても日用品とは考えにくい。549～553はホルンフェルスである。549は下端を欠損している。上部に磨耗が見られる。表裏面は側面より大きく剥ぎ取り、その後端部に細かく調整を施している。上部の柄の部分がやや厚く、厚みを取るための加工が施されている。550は表裏面の磨耗が激しい。刃部や側部の加工が粗い。551は左側縁の刃部の磨耗が激しい。また、上部の磨耗が激しい。装着痕か。中央の厚みが残る。552は薄い剥片に若干加工を施したもので、全体的に磨耗が激しい。特に刃部には線条痕が残る。表面の一部には鉄分が付着する。553は自然面を有する横長剥片素材に加工を施す。加工は上部に厚みを取るための



第87図　縄文時代晩期出土遺物③

調整が施されるのみである。刃部は使用による微細剥離が見られる。石鎌としての使用が考えられる。554～557は砂岩である。554の表面は磨耗する。上部と刃部を欠損しているものの、その後再加工が施されている。555はいびつである。表面と裏面上部が磨耗する。556も欠損品を再加工したものである。表面は自然面を利用したもので、周縁を加工している。557は一部自然面を残す。やや厚めで、刃部はあまり加工を施さず、抉り部には丁寧な加工が施されている。刃部は磨耗する。

また、この他SA46内より1点（728）同様の遺物が出土しており、おそらく、縄文時代晩期の遺構を削平した際の遺物が混入したと考えられる。

（3）弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡4棟、周溝状遺構3基、土器溜り1基が挙げられる。何れも調査区南側台地、特に冬区に密集している。

竪穴住居は方形・円形・花弁状と形態、大きさとも様々である。特に削平を受けている遺構が多く、遺物の残存状況も良好とはいえないが竪穴住居はいずれも弥生時代中期後半に属する。主に中溝式土器の甕と山ノ口式系の壺というセット関係が目立つ。SA32からは瀬戸内系の凹線文土器が出土しており、それと同一固体と考えられる遺物がSA41及びSA46より出土している。

周溝状遺構のうち2基（ST09・11）は弥生時代中期後半で、残りの1基（ST10）と土器溜りは弥生時代後期に属する。周溝状遺構からは炭化米の出土は認められなかった。後期の周溝状遺構では東側から土器がまとまって出土している。

掘立柱建物跡は棟持柱の3間×4間のものが3棟、3間×3間が1棟である。詳細な時期は不明であるが、SB09についてはSA33が埋没した後に建てられたと考えられる。

（1） 竪穴住居跡

SA29（第88・89図）

A2・3－25区に位置する。南北5.35m、東西5.8m、検出面から貼床までの深さは0.5mである。主柱穴は東西方向に2本認められ、その延長線上の東西に突出壁が認められる。主柱穴の直径は0.8～0.9m、床面からの深さ0.8～0.9mである。また、南側には浅いテラスが認められる。住居北側が方形を呈すのに対し、突出壁から南はややいびつである。西側にある突出壁の北隅角の床面では緑色珪質頁岩の剥片が多数集中して出土している。貼床は柱穴を除くほぼ全面で認められた。また、南西側は壁帯溝状の浅い溝が認められる。埋土は黒色土を主体とし、黄色軽石を多く含んでいた。この黄色軽石の含み具合及び土のしまり具合から分層を行った。埋土はほぼレンズ状に堆積していることから自然に埋没したものと思われる。遺物は最上層と床面からの出土が多い。558は壷で、頸部付け根に貼付突帯を2条有す。外面は刷毛を施した後にミガキを施している。貼付突帯の一部に赤色顔料が付着している。559も壷で、胴部に貼付突帯を複数有す。558同様ハケメの後に丁寧にミガキを施し、黒褐色を呈している。560は無文の甕で口縁端部がやや肥厚し、口唇部は平滑に整えられる。内外面はハケメが残る。561は甕の口縁部片。562～570は緑色珪質頁岩の石鏃未成品。562は一部研磨が見られ、563は厚みのある剥片で、側面が丁寧に研磨される。564は薄い剥片で、研磨が認められる。565は自然面を有し、研磨が認められる。566はやや厚みが残るが研磨が認められる。567は自然面を有し、節理面で剥離している。上端を中心に研磨が認められる。568は厚く大きいが、研磨が認められる。569は自然面を有し、節理面で剥離している。570は二次加工の剥片である。571は台石兼砥石とおもわれ、表裏平坦面中央が敲打により凹む。側面は敲打痕が残る。572は砥石で、平坦面は全て使用面である。特に裏面上端は幅1cm、長さ1cm、深さ0.5cmの断面が円形に窪む。おそらく矢柄研磨に用いられたものである。砥石の下端は敲打痕と敲打による剥落が認められる。

SA30（第90・91図）

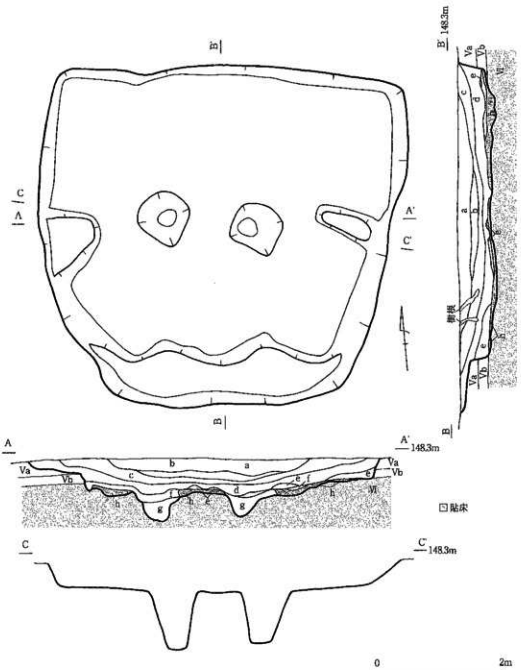
A4－27・28区に位置する。東西3.95m、南北3.1m、検出面からの深さが0.25mの方形竪穴住居である。主柱穴は東西方向の壁際立ち上がりに2本認められた。直径は0.3～0.5m、床面からの深さは0.4～0.5mである。住居中央には浅い窪みに灰混じりの焼土が1.5m×0.9mの範囲で認められた。貼床は柱穴以外の全面で認められた。厚さは3～20cmとまちまちである。土層観察の結果、柱は貼床を構築する際に立て、貼床によって周囲をつき固めていると考えられる。また、西側の柱痕部分の埋土は住居埋土と同質と思われ、東側についても住居埋土より黄色軽石が多く含まれる。遺構内からは無文の甕が多く出土している。573～575、579は無文の甕である。573は外面にススが付着し、磨耗が激しい。口縁端部がやや肥厚する。口唇部はやや丸味を帯びる。574は器壁がやや薄めで、口縁端部はやや肥厚する。ハケメが残りススが付着する。575は甕の底部。底部内面が丸みを帯びる。576は口縁部の屈曲が強い。口縁端部が肥厚し口唇部はやや窪む。器面調整はハケメが施されるが磨耗している。577は粘土継ぎ目が残る。山ノ口式の大甕。578は中溝式甕口縁部。口縁端部が肥厚し、口唇部はやや窪む。刻目突帯を有する。外面にススが付着する。579は無文の甕で、口縁部の屈曲は貧弱。縦方向のハケメが残る。580は磨耗が激しい甕脚部。581・582は緑色珪質頁岩の磨製石鏃未成品。583は小型の磨石。584は台石兼砥石。端部と平坦面中央には敲打痕が、平坦面は研磨が認められる。

SA31（第92・93図）

A3・4－28区に位置する。南側が削平を受けているため詳細な規模は不明であるが、残存している規模の長軸は6.9m、短軸は6.7m、検出面からの深さは0.4mである。おそらく7つの間仕切りをもつ不定形の花弁状住居である。柱穴は突出壁の直線状に6本、中央に2本認められたが中央の1本については土層観察の結果、貼床によって塞がれている。柱穴は直径0.3～0.5m、床面からの深さ0.2～1mである。北西の間仕切りは、後に拡張された部分と思われ、この部分は床面が当初の床面に上乗せされている。また、間仕切り部分は中央からやや高くなっていると思われるが、なだらかなため図示することはできなかった。貼床より上の埋土は三層に分層可能で、柱穴内には住居最下層のC層黒褐色土が堆積していた。遺物は最上層であるa層からの出土が多い。585は無文の甕で器壁が薄い。口縁端部が肥厚し内傾する。口縁内面には稜が付く。器面には粗いハケメが残る。586は無文の小型甕である。口縁部の屈曲が強く口縁端部に向かいやや肥厚する。口縁部内面に斜め方向のハケメが丁寧に施されている。外面は縦方向のハケメが施される。587～589は中溝式甕である。587は口縁部の屈曲が強い。口唇部はやや窪み、胴部に刻目突帯を有する。内面はハケメが残る。588は突帯が細かく、刻目も細い。589は口縁部の屈曲が弱く、口縁端部は若干肥厚する。刻目突帯を有する。590は器壁が非常に薄く、口縁端部に向かい肥厚する。口唇部は平坦である。591は甕底部で、上げ底。592は壷で肩部に突帯が剥がれた痕跡が認められる。593は壷の底部と思われる。平底である。594は鉢のミニチュア土器である。595は黒色頁岩の整状磨製石斧である。全面研磨され、刃部も研磨によって作り出されている。596はミガキ石か。平坦面と端部に磨耗が見られる。597は天草陶石の砥石。598は磨・敲石。599も磨・敲石で端部と側面に敲打痕を有す。600は端部に敲打痕、平坦面に研磨痕を残す。601は石皿。平坦面が緩やかに窪む。602・603は軽石製品で、602は磨製石斧を模したものか。603は上部の側面に円形の磨耗が残る。

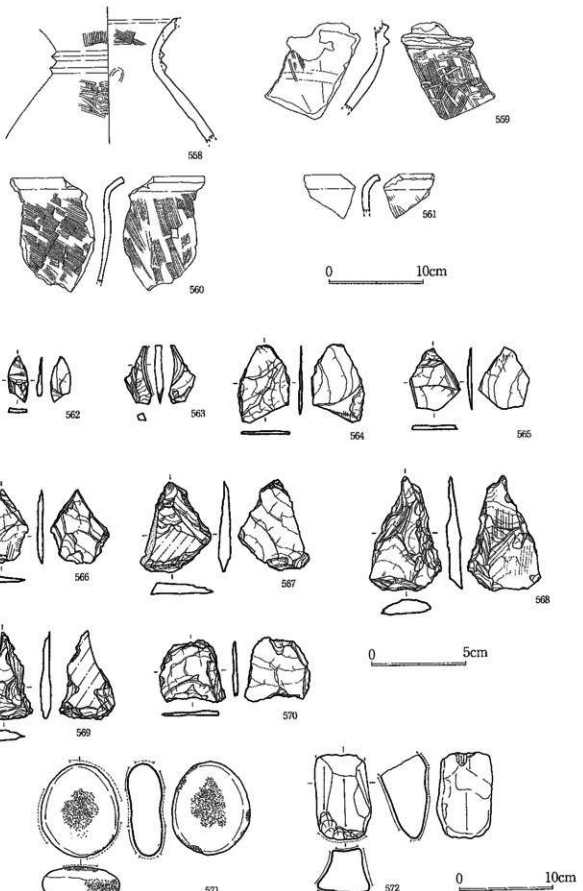
SA32（第94・95図）

A3・4－27区に位置する。南北3.85m、東西3.56m、検出面からの深さが0.4mの方形を基調とする不定形の竪穴住居跡である。南東側に緩やかなテラスが認められ、南西隅を中心に焼土が認められた。主柱穴は2本、東西方向に認められた。柱穴は直径0.3～0.5mで、床面からの深さは0.4～0.5mである。土層の堆積状況から、南西を中心にやや埋まった段階で焼土が認められるため、焼土は住居使用時に伴うものではなく廃絶後に何らかの原因で火を受けた結果残されたものであると思われる。貼床は全体的に認められ、黄色軽石を主体とする層と黒色土を主体とする層の二層からなる。住居の最上層からは瀬戸内系の凹線文土器が出土している。604は無文の小型甕である。外面にはススが付着する。口縁部の屈曲は緩やかで口縁端部が薄い。605は瀬戸内系の凹線文土器の壷である。器壁が非常に薄く焼きが堅く良好。外面は縦方向のハケメが丁寧に施され、胴部下半はミガキ。SA46出土の底部と同一個体と考えられ、SA41からも同一固体と思われる破片が出土している。606は器形は山ノ口式系の壷で、雲母を含まない。外面はミガキが施される。607はやや上げ底で、ハケメが残る。608もやや上げ底。604・605は軽石製品。

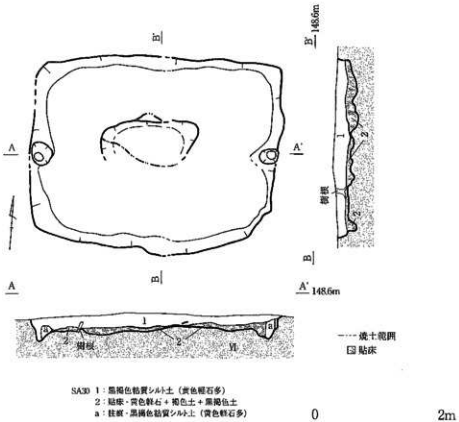


SA29 a：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
b：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）粘性弱
c：黒色粘質シルト土（黄色軽石極多）
d：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石 c より多）
e：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
f：黒灰褐色土（黄色軽石極多）
g：黒褐色＋黄色軽石
h：粘床・黄色軽石＋黒褐色土

第 88 図　SA29



第89図　SA29出土遺物



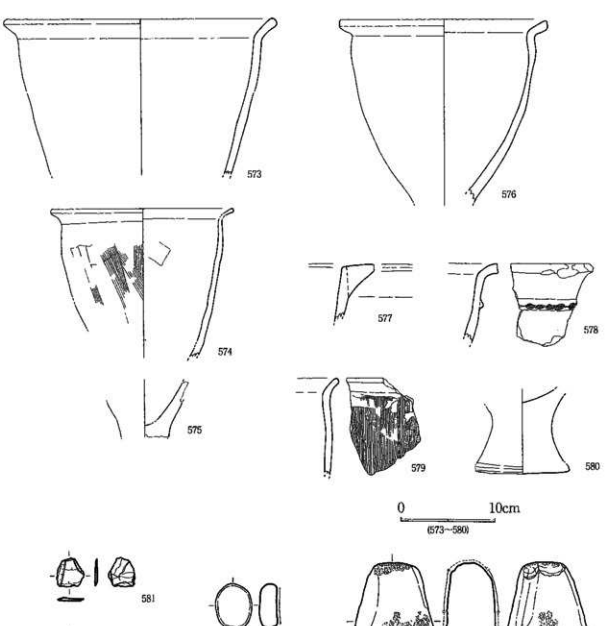
第90図　SA30

SA33（第96・97図）

A5-28区に位置する。東西3.4 m、南北3.2 m、検出面から床面までの深さが0.2 m、掘り込み面までの深さが0.3 mの方形竪穴住居である。柱穴は中央に1本認められた。規模は、直径が0.5～0.6 m、床面からの深さ0.62 mである。住居内の埋土は黄色軽石の含み具合、しまり具合から二層に分層した。下層の2層は壁面に一部認められる程度であること、1層は所々Ⅵ層御池軽石ブロックが認められることから、住居廃絶の際に埋め戻されたものと考えられる。柱穴内の埋土についても1層に非常に類似することから住居廃絶の際に柱を抜き取り埋め戻したものと思われる。また、柱穴周辺の床面からは軽石が多数出土している。

611は器形は山ノ口式系の甕である。胎土に雲母は含まない。口縁屈曲下部にはユビオサエの痕が残る。612は平底の底部で、底部外面にスサの痕跡が認められる。613は平底。614は山ノ口式系の壺胴部と思われ、円形の浮文を有す。調整はハケ後ミガキが施されている。

615～619は軽石製品である。これらの軽石は中央の柱穴付近から集中して出土した。616は中央に溝状の窪みがある。617は中央に穿孔がある。618は上部から斜めに浅い溝状の窪みを有する。619は上部側面に浅い溝状の窪みを有する。



第91図　SA30出土遺物

SA34・35（第98・99図）

調査区南端で検出され、半分以上は調査区外へ延びる。SA34がSA35の後に構築されている。SA34は推定で6.8mの円形の竪穴住居と思われる。深さは0.25mで、貼床は西側を中心に見られる。東側のSA34の上部は、SA35の貼床を利用し、西側は貼床下に黒色土層が見られる。遺構掘り込み後、床の高さを調節したためと思われる。柱穴は確認されておらず、調査区外にあるものと思われる。

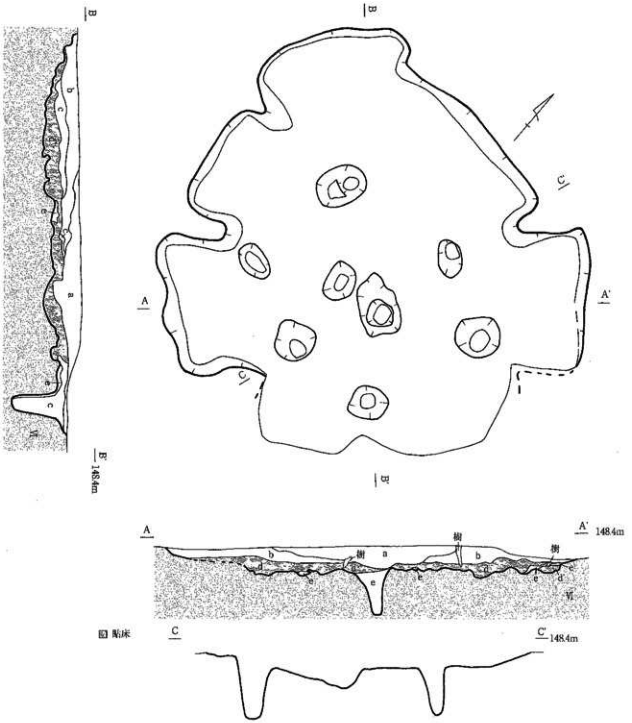
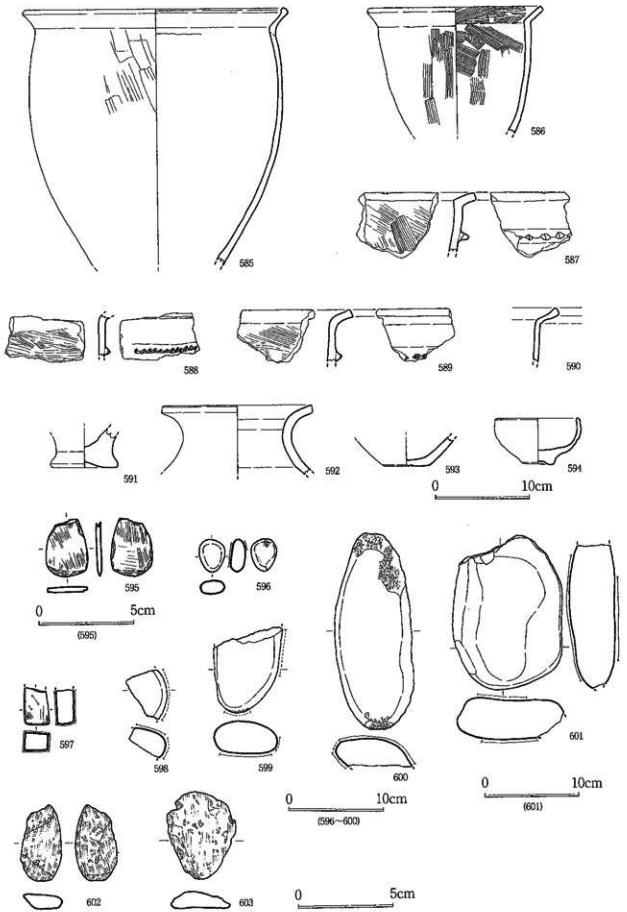


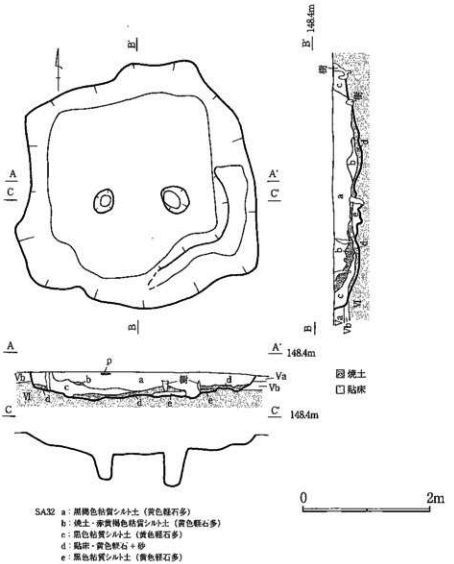
図 貼床

SA31 a：黒褐色粘質シルト上（黄色軽石多）
b：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
c：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
d：黄色軽石＋黒褐色粘質シルト土
e：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）

第92図　SA31



第93図　SA31 出土遺物

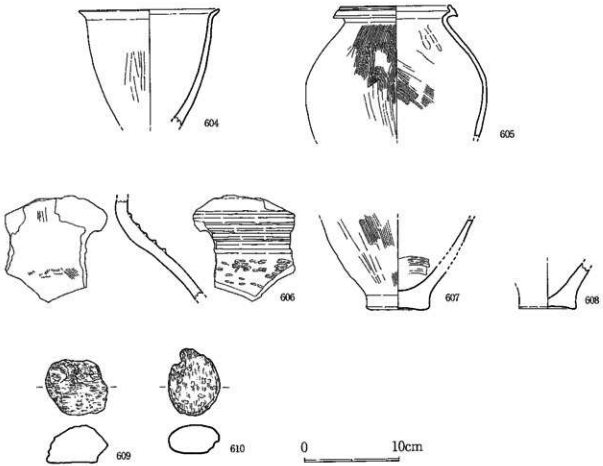


第94図　SA32

SA35は円形を基調とした間仕切りを持つタイプで、推定で5.2m程で、深さは0.1mである。中央に2.5×3mの円形の掘り込みがあり、その内部に柱穴が2本認められる。柱穴の規模は直径0.3～0.4m、床面からの深さ0.5mである。検出時で既に貼床近くまで削平を受けていたため詳細は不明である。

SA34からの出土遺物は石器が2点である。620はSA30出土の破片と接合した輝石安山岩の石皿である。621は砂岩の砥石である。

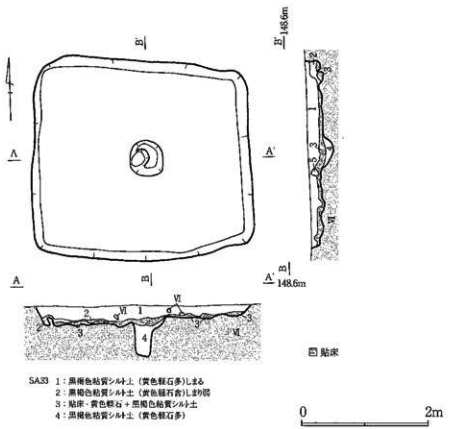
622～626はSA35からの出土遺物である。622は無文の甕で口縁端部が肥厚する。外面はススが付着し縦方向のハケメが残る。623は甕脚部で下から上へのハケメが残り、裾部側面は窪む。624は甕の胴部で貼付突帯を有す。外面はハケ後ミガキが施され、橙色を呈す。外面にはススが付着する。625は壷の胴部片で1条の貼付突帯を有す。626は壷の底部で、平底である。



第95図　SA32出土遺物

SA36（第100・101図）

北側半分は後世の削平を受けているため、詳細は不明であるが、残存範囲で東西6.35m、南北4.8mである。検出面からの深さは深いところで0.4mである。方形の当東西に突出壁を持ついわゆる「H型」の竪穴住居である。貼床は柱穴を除く全体で認められた。柱穴は東西方向に2本突出壁の延長上に位置する。柱穴の規模は直径0.4～0.6m、湯下面からの深さは0.6mである。床面を除く埋土は単一で、黒褐色土に黄色軽石を多く含んでいる。SA36からは大型の台石・石皿が3点出土した。**627・628**は台石兼砥石で、平坦面中央に研磨、平坦面端部に敲打痕が認められた。**629**は石皿である。**630**は山ノ口式の大甕で、外面にススが付着する。内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメが残る。**631～633**は中溝式甕である。**631**は口縁部屈曲が緩やかで、口縁端部が肥厚し口唇部は窪む。胴部に刻目突帯を有す。刻目には布目が残り、突帯より下部は縦方向のハケメが残る。**632**は口縁部が「く」の字に屈曲し口縁端部が肥厚する。口唇部は平坦である。布目の残る刻目突帯を有し、外面のハケメは斜め方向である。**633**は胴部に1条の刻目突帯を有すが、口縁の屈曲が緩やかで、口縁端部に向かい先細る。**635**は壷で口縁部付け根に1条の貼付突帯を有す。口唇部は窪む。内外面ともミガキが残る。**636**は無頸壷。口唇部が窪む。**634**は住居南東から出土した。横たえた状態で出土。上部は後世の削平を受けているものと思われる。口縁部平坦面に円形浮文を2個セットで貼付ける。口唇部には刻みが施される。頸部と胴部に複数の突帯を有す。底部は上げ底である。



第96図　SA33

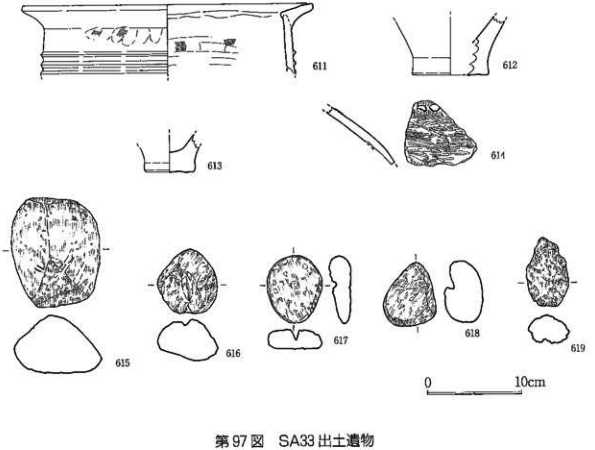
SA38（第102図）

A4 － 30区に位置する。南側半分が後世の削平を受けている。推定で東西4.4 m、南北4 m、深さは0.1 mである。東西方向に2本の柱穴があり、柱穴の外側に間仕切りの突出壁がある。いわゆる「H型」の竪穴住居跡か。柱穴の直径は0.4 ～ 0.6 m、床面からの深さは0.7 ～ 0.8 mである。貼床はほぼ全面に施されていたと思われる。埋土は貼床除くと単一である。遺物はa層から出土しているが少ない。**638**は甕の口縁部。口唇部はやや丸味を帯び、口縁部の屈曲も緩やかである。**639**は胴部に1条の貼付突帯を持つ。**640**は砂岩の砥石で、表裏・側面の平坦面が使用面で、特に表面の一部はドーナツ状に研磨痕が強く認められる。

SA39（第103・104図）

A3 － 29区に位置する。上部をSD05によって削平されている。また、遺構北側は後世の削平によって貼床まで削平を受けている。規模は南北5.6m、東西5.55 mの円形を基調とする間仕切りのある竪穴住居である。主柱穴は4本で、直径0.3 ～ 0.8m、床面からの深さは0.8 mである。一部の柱穴で柱痕が認められ（断面C）、それによれば柱の直径は20cm前後と想定される。また、柱穴に柱を設置した後に上部は叩き締められ硬化している（2層）。

貼床は柱穴を除く部分で認められた。住居中央を除き2枚認められ、2枚の貼床の間には黒色土が堆積していた。最下層は掘り込み後の整地によるものか。2枚目の貼床は東側には認められず、また、壁に向かい緩やかに上がる。北東と南東にベット状遺構を併せ持つ。

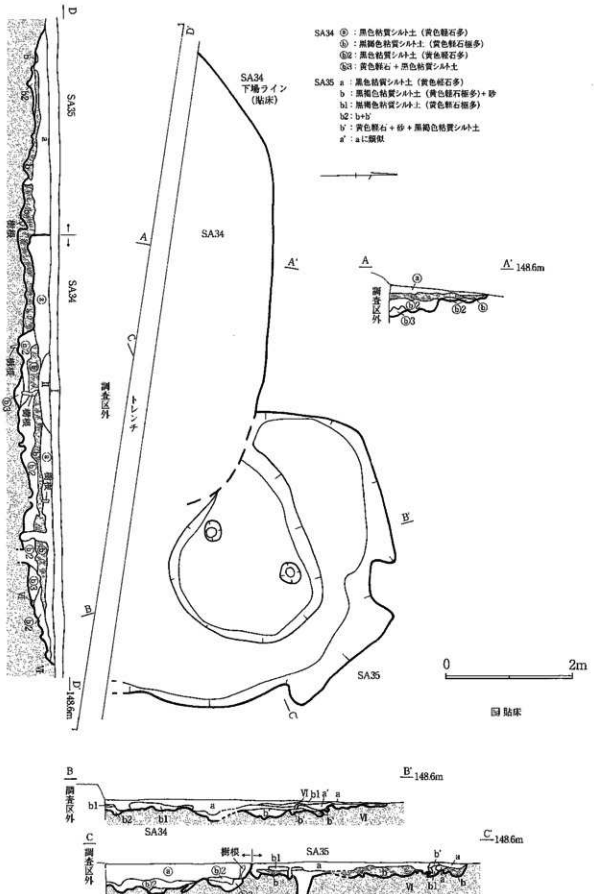


第97図　SA33出土遺物

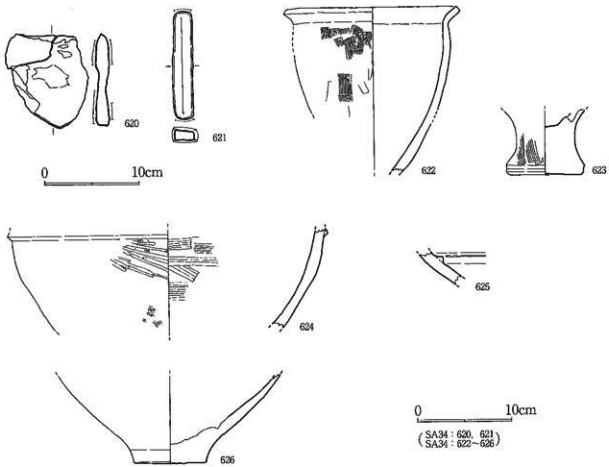
641～646はSA39出土遺物である。641は底部が若干上げ底の甕で、口縁部は「く」の字に屈曲する。口縁端部は肥厚し、口唇部は丸味を帯びる。外面は縦方向のハケメが明瞭に残り、ススが付着する。642は上げ底気味である。643は小型の壷の口縁部と思われる。外面はハケを施した後にミガキが施されている。644・645は無斑晶安山岩の剥片で、表裏面の一部が磨耗している。未成品か。646は軽石製品である。上部に斜めの浅い溝状の窪みがある、その延長上の下端にも同様の浅い窪みが認められる。

SA40（第105・106図）

A3－29・30区にまたがって位置する。SA39のすぐ東隣に位置する。全体の規模は東西5.7m、南北5.2mである。中央の3.7m×2.2mの方形を基調とし、3方にベット状遺構を持つ。ベット状遺構はそれぞれ高さが異なり、南側が一番高く、その次に西側で、一番低く面積の広いのが東側である。中央の方形部には柱穴が3箇所認められた。東西の2本が主柱穴と思われ、規模は直径が0.4～0.5m、床面からの深さは0.7～1mである。住居の埋土は大きく五層に分かれ、貼床に当たるd層が更に細分可能である。最下層は黒色土で、硬化は認められない。その上部に貼床が施されているが、黄色軽石を主体とし硬化する層と黄色軽石を含むものの硬化しない黒褐色土がサンドイッチ状に堆積している。特に主柱穴ではない中央の柱穴周辺で顕著に認められた。


SA34 ⓐ：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
ⓑ：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
ⓑ2：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
ⓑ3：黄色軽石＋黒色粘質シルト土
SA35 a：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
b：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）＋砂
b1：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
b2：b+b'
b'：黄色軽石＋砂＋黒褐色粘質シルト土
a'：aに擬似
SA34
下場ライン
（貼床）
SA35
SA34
調査区外
トレンチ
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
148.6m
0
2m
図 貼床
B
B'
C
C'
148.6m
調査区外
SA34
SA35
樹根

第98図　SA34・35



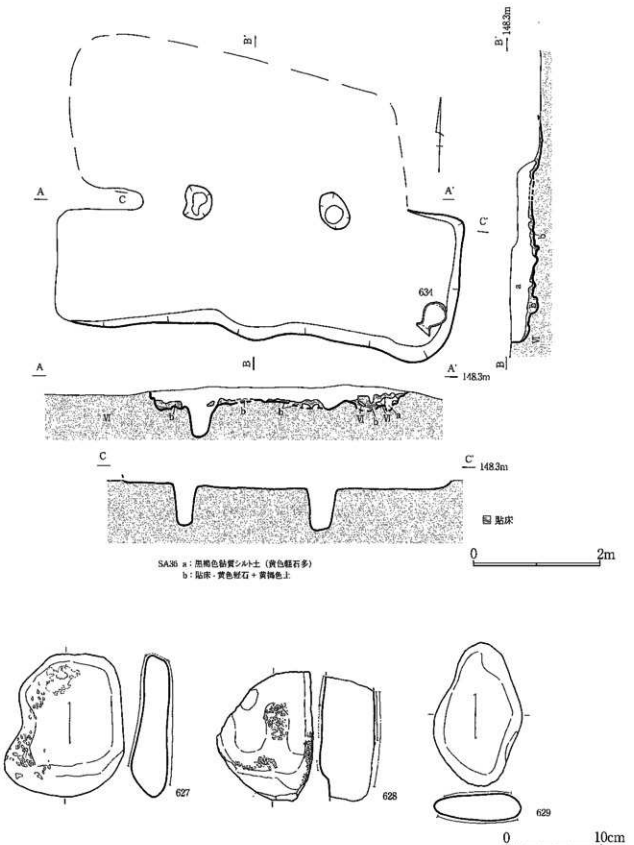
第99図　SA34・35出土遺物

647～654はSA40出土遺物である。647は「く」の字に口縁部が屈曲する中溝式甕である。口唇部が窪む。口縁部の下方に一条の布目の残る刻目突帯を貼り付けている。胴部下半は縦方向のハケメが、上部は斜め方のハケメが残る。口縁部から胴部にかけては直線的である。648は同じく中溝式甕である。口縁部の屈曲が強く胴部は丸味を帯びる。貼付突帯を貼り付け後にハケメを施しているようで、突帯の上部と下部で短いハケメが残る。口唇部は平坦に整えられる。外面にはススが付着している。649は緑色珪質頁岩の磨製石鏃である。650～654は軽石製品で平面が平滑に整えられているものが多い。

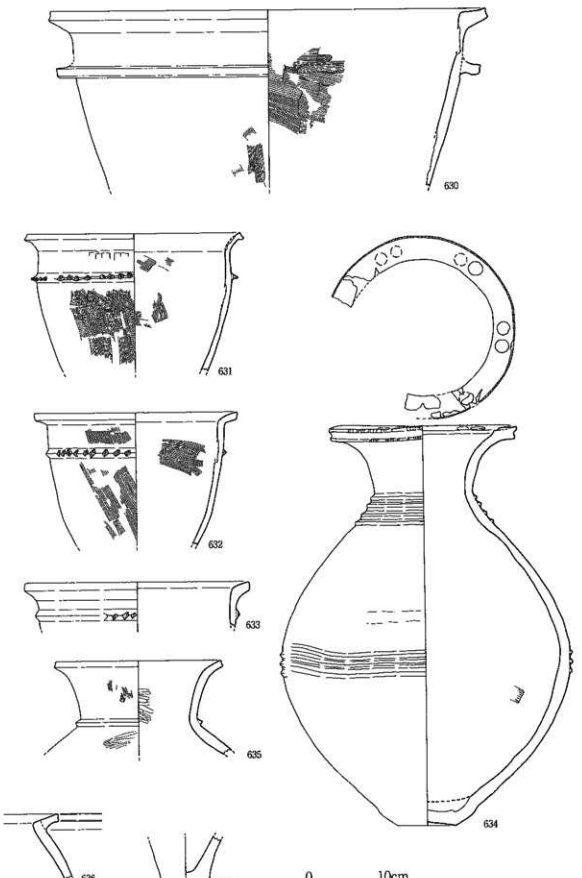
SA41（第107・108図）

SA39の西隣、A2、A3－28区に位置する。東西7.2m、南北5.5mの方形を基調とし北側に間仕切りを持つ竪穴住居である。主柱穴は4本で、南側の2本が中央に向かいやや斜めに傾斜している。主柱穴の直径は0.4～0.7mで、床面から深さは0.7～0.8mである。SA41は地形的に北に向かい傾斜する部分で、埋土も南から流れ込んだように南側に厚く堆積が認められる。貼床は柱穴を除く遺構全体で認められた。特に柱穴周辺は丁寧に何層にも築固められている。

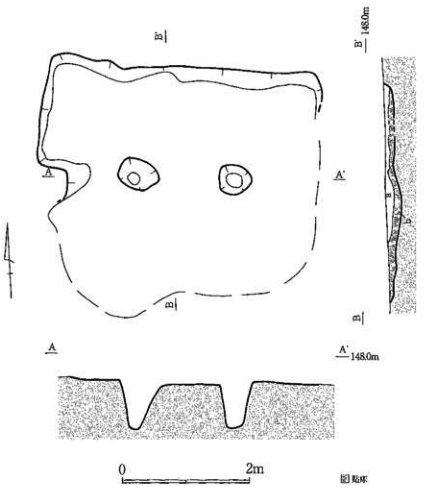
655～671はSA41出土遺物である。655は「く」の字に屈曲する甕で、口縁端部が肥厚し、口唇部は平坦である。655は中溝式甕の胴部片である。657はミニチュア土器である。この他、SA32出土の凹線文土器と同一個体と思われる器壁の薄く焼きの良好な土器片が出土している。

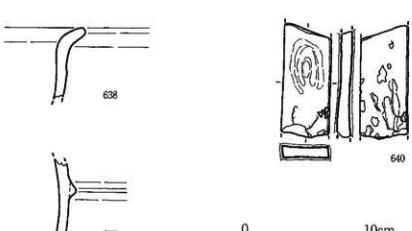


第 100 図　SA36 及び出土遺物

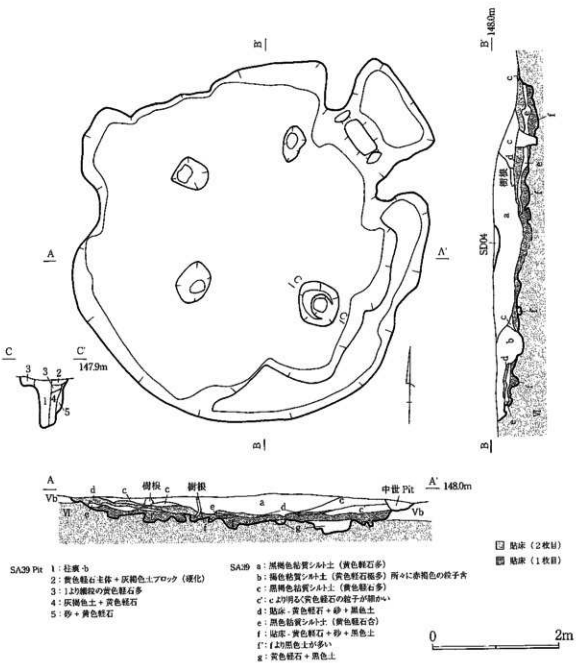


第 101 図　SA36 出土遺物





第 102 図　SA38 及び出土遺物

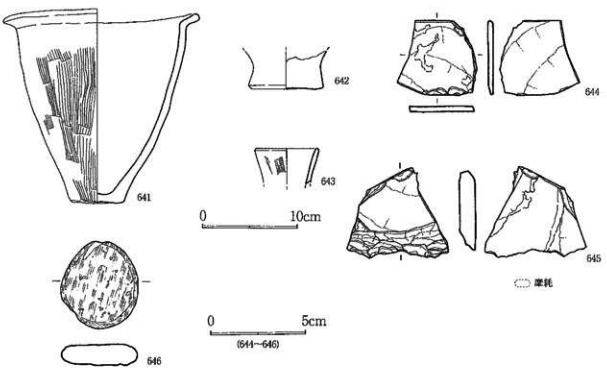


第103図　SA39

658～664は緑色珪質頁岩の磨製石鏃未成品。658は片側の刃部が研ぎだされている資料である。659は表面と基部に研磨が見られる。660・661は小型で薄いが研磨が残る。662・663は成形後の研磨段階の資料である。665は砂岩製の小型の石斧と思われる。端部から最小限の加工を施し刃部を作り出している。刃部を中心に磨耗する。666・667は砂岩の砥石で、平坦面の研磨痕が顕著である。668は小型の敲石か。669～671は軽石製品である。669は中心に浅い穿孔が認められる。670は表裏平坦面中央が浅く窪む。671は側面に溝状の窪みが認められる。

SA42（第109・110図）

SA41の北西、A 2－27・28区に位置する。東西4.8m、南北4.6m、深さ0.1mの方形竪穴住居跡である。主柱穴は東西方向に2本認められ、規模は直径0.4m、床面からの深さは1mである。貼床は住居中央では薄いものの全体的に認められた。SA41からは土器片が数点（胎土は中溝式系）と、672の砂岩製石皿片が床面から出土している。



第104図　SA39出土遺物

SA43（第109図）

A1 － 28区に位置する。B地点では最も北側で、低い場所に位置する。東西3.5 m、南北3.5mの方形竪穴住居跡で、検出面からの深さは0.3mである。住居中央に主柱穴が2本認められ、方位は東西方向である。柱穴の規模は0.5 ～ 0.6m、床面からの深さは0.45 mである。柱穴を除く住居全体に貼床が施されている。東側の一部は古代～中世の溝状遺構（SD15）によって削平を受けている。SA43からは土器片が少量出土しており、何れの胎土も中溝式系のものと思われる。

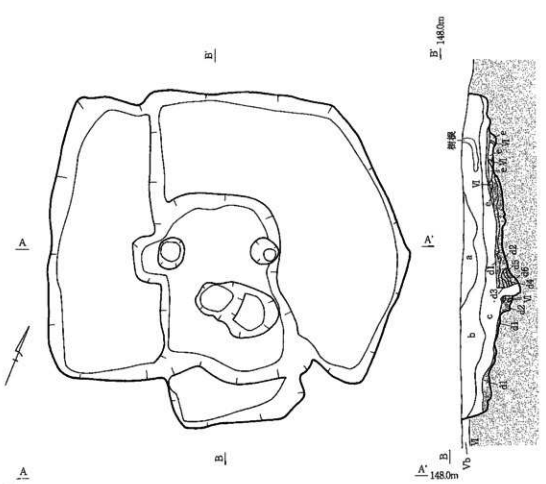
SA44（第111図）

調査区南東端のA5 － 30・31にまたがって位置する。遺構の一部のみ検出されたため詳細は不明であるが、おそらく規模が6m弱の方形の竪穴住居と思われる。掘り込みの深さは0.7mである。床面には厚さ20 ～ 30cmの貼床が認められた。出土遺物は少ない。

SA45（第112 ～ 114図）

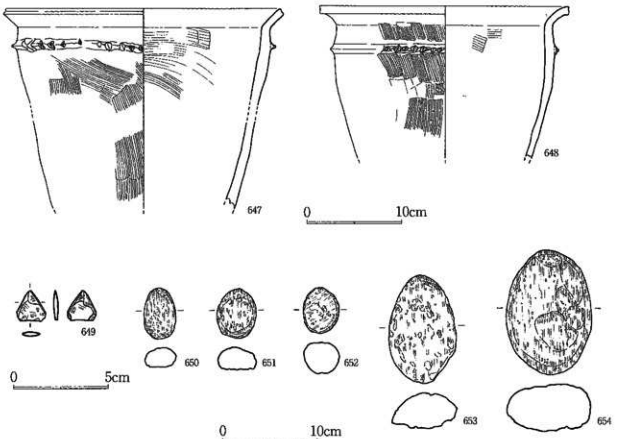
A4 － 25・26区にまたがって位置する。西隣にはST11が位置する。東西6.6m、南北6.3m、検出面から床面までの深さは0.5 mである。中央に3.4 m × 2.2 mの方形の掘り込みがあり、それを基調とし、間仕切りとベット状遺構を併せ持つ。東側は土坑状に深く窪んでいた。

貼床は中央の掘り込みを中心に認められた。その他の部分では掘り込みがⅤb層中に止まるためか貼床は薄くまばらであった。



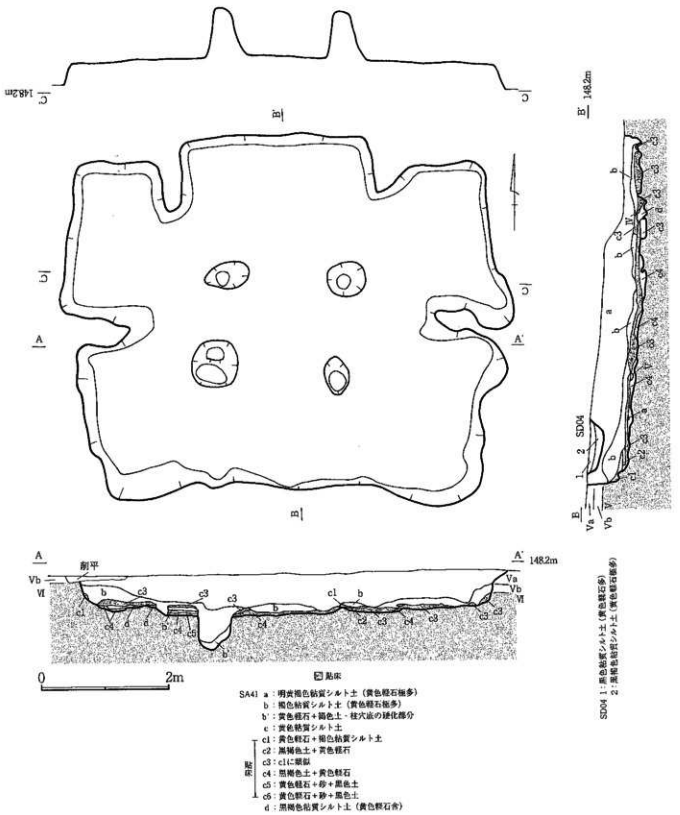
第105図　SA40

主柱穴は中央の掘り込みに2本、東西方向に認められた。住居全体の規模から考えるとやや西にずれている。柱穴の規模は0.55～0.65m、床面からの深さは0.6～0.7mである。埋土は貼床を含め三層に大別可能であった。最下層のC層は貼床構築までの堆積と考えられる黒色土である。掘り過ぎた部分を埋めたものとも考えられるが、C層上部には貼床が認められない。遺物はa層及び住居床面から出土している。特に住居西側からは緑色珪質頁岩が多く出土し、中には数枚が折り重なった状態で出土したものも見られた。



第106図　SA40出土遺物

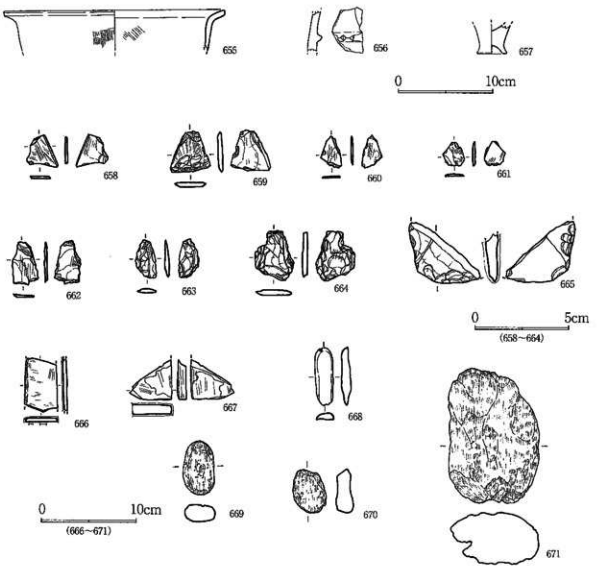
647～712はSA45出土遺物である。674は中溝式甕である。口縁部が「く」の字に屈曲し口縁端部が肥厚する。675も中溝式甕で、口縁部の屈曲がやや緩やかで、口縁端部もさほど肥厚しない。676は口縁部が「く」の字に屈曲し口縁端部が肥厚する無文の甕である。677は口縁部平坦面が窪む。678は口縁部内面に横方向のハケメが残る。口縁端部が肥厚する。679は外面に縦方向のハケメが残る。口縁部屈曲は緩やか。680は口縁部がやや短めで屈曲も緩やか。胴部に1条の貼付突帯を有する。681内外面にミガキを施す壷で、口唇部は平坦で、口縁内面が緩やかに。682は頸部付け根に断面三角の貼付突帯を複数有し、胎土に雲母を含んでいる。683は頸部付け根に断面三角の1条の貼付突帯を有する。684は肩部に断面三角の貼付突帯を複数有す。685は「へ」の字状を呈する壷口縁部で口唇部は窪む。胎土に雲母を含む山ノ口Ⅱ式の壷と思われる。686は口縁部平坦面に円形浮文を有する壷。687の底部は上げ底で、底部の粘土接合痕が残る。688の底部も上げ底。全体的に磨耗する。689・690は平底の底部。691は底部側面が粘土接合面で剥がれており、ユビオサエの痕が明瞭に残る。692～705は緑色珪質頁岩である。692～704は研磨段階のもの。692は小型であるが厚みが残る。694・695は非常に薄い。697～699、701～704は厚手で大きい。705は研磨が見られない。706は元々ホルンフェルスの擦り切りの石庖丁である。擦り切り孔より下部を再加工しスクレイパーとしたものか。上部に抉りを入れツマミを作り出している。この抉りを除くと擦り切り孔部分に再加工は施されていない。707は輝石安山岩の石皿片と思われる。708は台石兼砥石で、表面の平坦面を機能部とする。709は表面に浅い溝状の窪みが見られ、710は側部が、711は上端が窪む。



SD04 1：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
2：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）

SA41 a：明黄褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
b：褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
b'：黄色軽石＋褐色土・柱穴底の硬化部分
c：黄色粘質シルト土
c1：黄色軽石＋褐色粘質シルト土
c2：黒褐色土＋黄色軽石
c3：c1に類似
c4：黒褐色土＋黄色軽石
c5：黄色軽石＋砂＋黒色土
c6：黄色軽石＋砂＋黒色土
d：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石含）

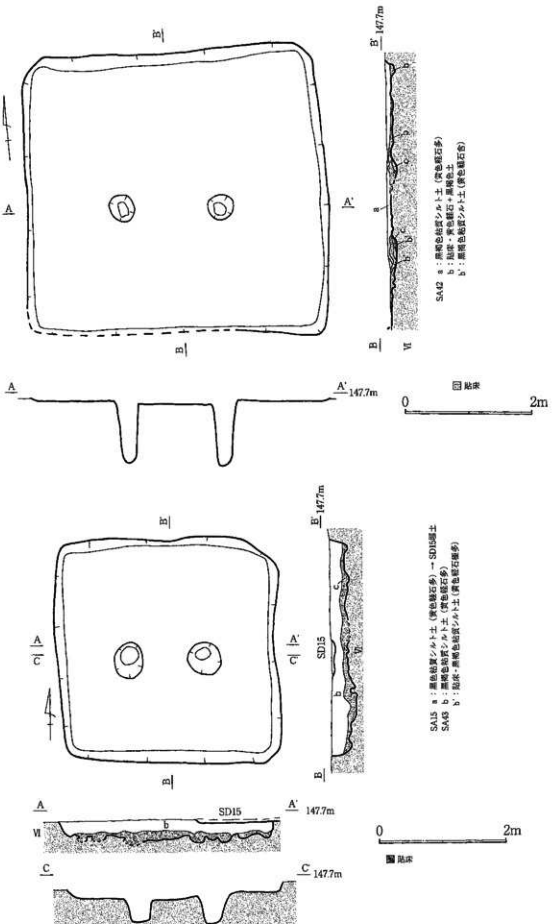
第107図　SA41



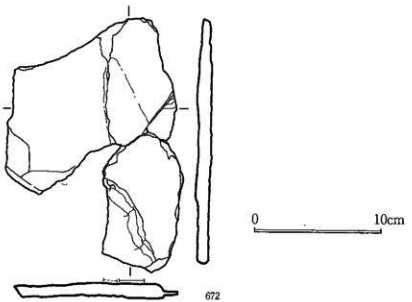
第108図　SA41出土遺物

SA46（第115～116図）

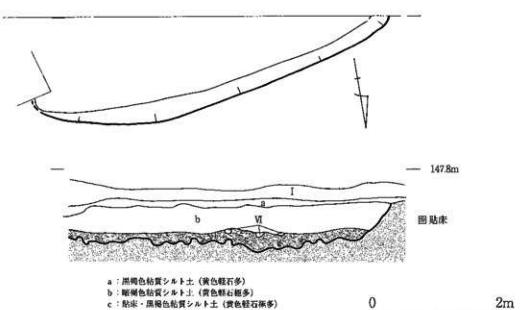
A3－26区に位置する。東西5.7m、南北5.2m、検出面から床までの深さは0.4mである。古代～中世の溝状遺構（SD04・05）がSA46上部を走行しており、断面確認のためのトレンチを掘った際にSA46の存在を確認した。中央の3m×3m程の掘り込みを中心に5つの間仕切りを持つ。北東の1角を除けばすべてベット状遺構となっている。中央の掘り込みの東西に2本の主柱穴が認められた。柱穴の直径は0.6m、床面からの深さは0.9mである。柱穴の下部は硬化していた。2本の主柱穴の間には中央土坑が認められた。貼床は中央の掘り込み部分では薄いものの全体的に認められた。



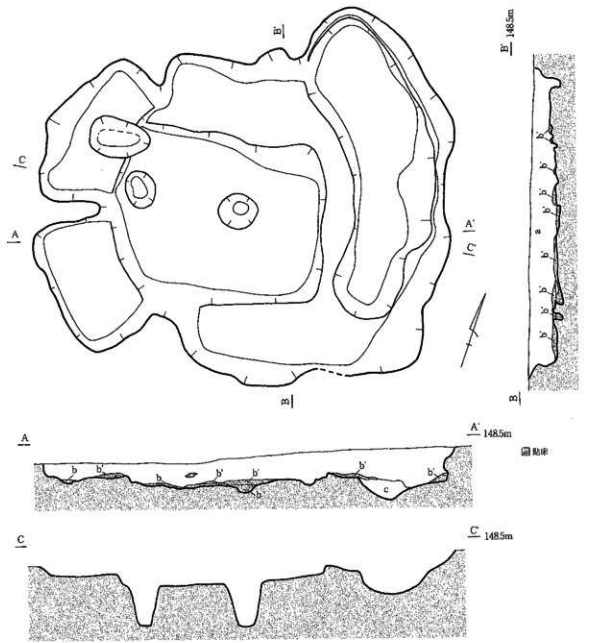
第109図　SA42・43



第 110 図　SA42 出土遺物



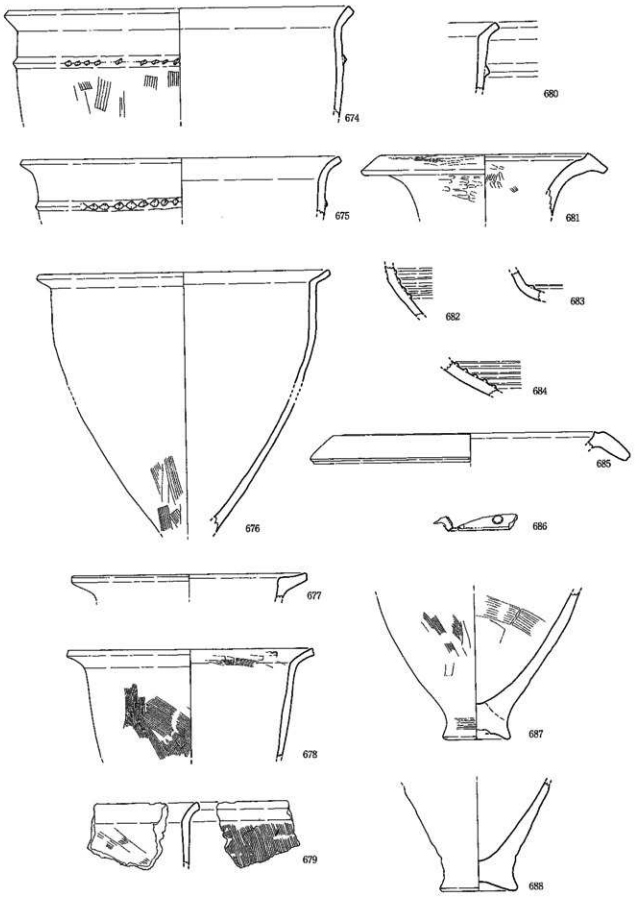
第 111 図　SA44 及び出土遺物



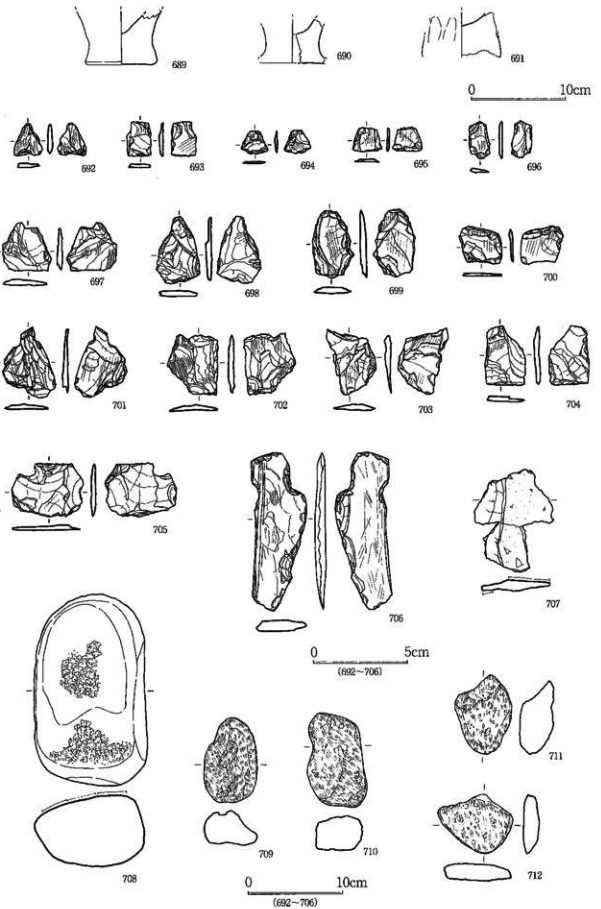
SA45 a：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
b：貼床・黄色軽石＋砂＋黒褐色土
b'：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）aより黄色軽石多で硬い
c：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）

0　2m

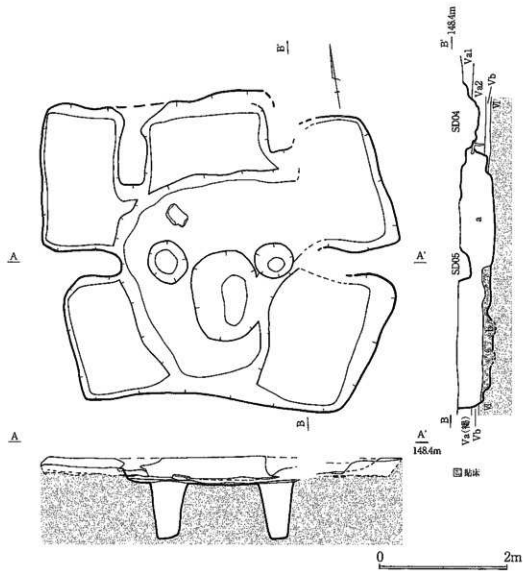
第112図　SA45



第113図　SA45出土遺物①

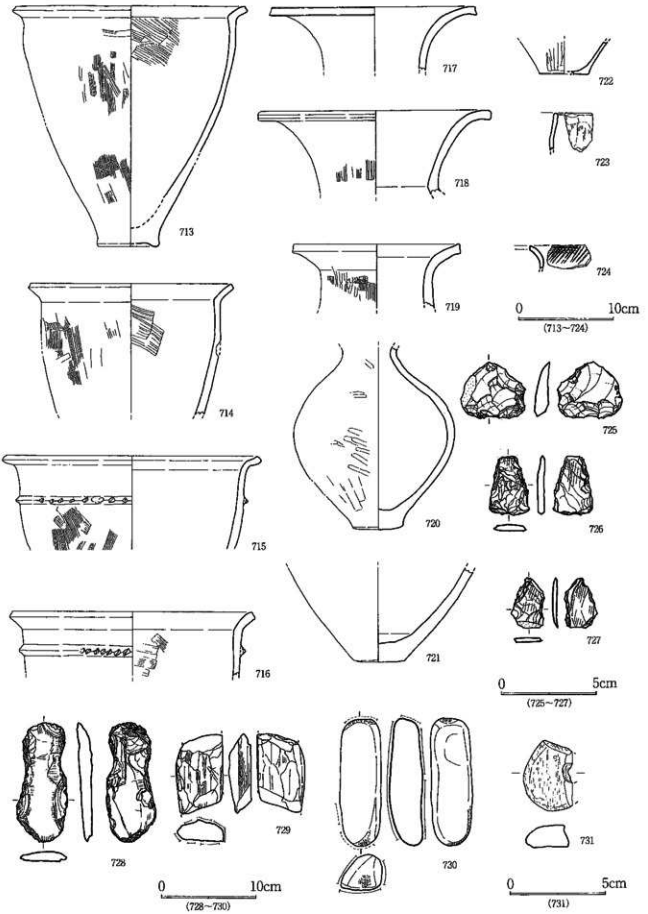


第 114 図　SA45 出土遺物②



第115図　SA46

713～731はSA46出土遺物である。713は口縁部が「く」の字に屈曲する無文の甕で、屈曲内面に稜が付く。口唇部は窪む。714も口縁部が「く」の字に屈曲する無文の甕。口唇部は平坦で、内面のハケメの単位がやや幅広。715・716は中溝式甕。715は口縁平坦面が大きく窪む。口縁端部は肥厚する。716は口縁端部がやや肥厚し口唇部が窪む。717は口縁部が大きく開く壷である。口唇部がやや窪む。718も口縁部が大きく開く壷で、口唇部が窪む。719はやや直線的に口縁部が屈曲し、大きく開くもので、頸部にはハケ後ミガキが施される。720はミガキを施す壷で、底部に黒斑が見られる。721は平底の底部外面に白色系の付着物が認められる。722の器壁は薄く焼成が良好。下から上へのハケメが残る。SA32出土の凹線文土器の底部と思われる。723は長頸壷片か。724は鉢形土器と思われる。外面に横方向と斜め方向に線刻が見られる。725～727は緑色珪質頁岩。725・727は自然面を残す。726・727は表裏平坦面に研磨痕が残る。728はホルンフェルスの土掘具で、表裏平坦面が磨耗する。刃部は縦方向の線条痕が認められる。729は砂岩の砥石で破損するが平坦面を使用面としている。730は蔵石兼砥石で、礫端部に敲打痕が、平坦面は研磨痕が認められる。731は穿孔を有する軽石製品。



第116図　SA46出土遺物

（2）周溝状遺構

B地点では3基の周溝状遺構が検出された。うち2基（ST09・11）は中期後半に、1基（ST10）は後期に位置付けられる。A地点のように周溝状遺構内から炭化米は出土していないが、土器が多数出土しているのが特徴である。

ST09（第117・118図）

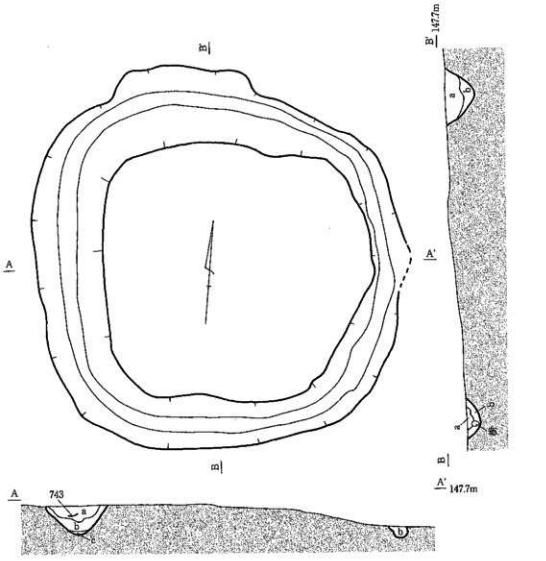
A2－29・30区に位置する。西から東へ傾斜している部分であり、弥生時代の遺構の中で最も低い場所に位置する。既にⅦ層まで削平されており、特に東側の残存状態は悪い。東西6m、南北6mの隅丸方形を呈する。溝幅は0.5～1.1m、深さは0.2～0.5mである。溝埋土は三層に分層される。最下層のC層は西側の断面でのみ確認された硬化面である。その上位のb層は黄色軽石を極めて多く含んでおり、硬くしまっていた。遺物はa層の下部を中心に出土し、その分布は西側に集中する。732・733は軽石製品である。732は上部に浅い溝状の窪みが全周している。734は山ノ口式の大甕である。胎土に雲母は含まない。735・736は中溝式甕である。737は口縁平坦面が窪み穀が付く。738は中溝式甕胴部片。739は口唇部が平坦。740～743は壺である。740はハケ後ミガキを施す。741は頸部付け根に複数の断面三角の貼付突帯を有す。742は無頸壺で743と同一個体か。744は平底で、直線的に胴部が延びる。745は外面にススが付着。746は底部裾がやや張出す。747は内面にススが付着。748は平底で胴部は大きく膨らむ。外面は磨耗する。749は内外面にススが付着。750は外面に黒斑を有する。

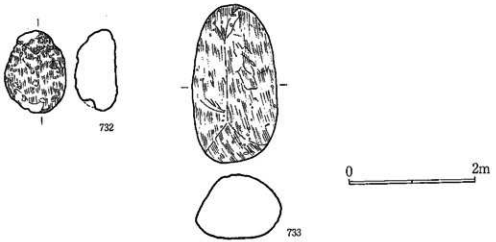
ST10（第119～121図）

A2・3－24・25区に位置する。B地点の弥生時代の遺構では最も西に位置する。弥生時代後期に属する遺構である。他の遺構（中期後半）の主軸がほぼ東西（南北）方向であるのに対し、北西－南東方向に主軸がある。規模は6.1m×6.7mの隅丸方形を呈す。溝幅は0.9～1.2mで、深さは0.1～0.4mである。周溝状遺構内に柱穴が数基認められ、南東側が一段深くなる。炭化米の出土は確認できなかったが、遺構東側から土器が多数集中して出土している。溝埋土は二層に分層可能で、下層（2層）は黄色軽石を極めて多く含み硬くしまっていた。遺物は何れも上層の下部より出土している。751～760は甕である。大小様々で、口縁直下に貼付突帯を有するものとそうでないものがある。甕底部は何れも上げ底である。貼付突帯の刻目を施す際の工具痕が口縁部に残るものが751・752・753である。751は脚裾部の粘土接合部で一部欠損する。755・756は中型の甕である。757は胴部の輪積痕が明瞭に残り、口縁外面に工具痕が割り付け状に残る。758は器壁が厚い。761は外面に黒斑を有す。762は胴部外面に帯状のススが付着する。763の口縁部はつまみ出したように貧弱である。764～766は壺である。764の底部は丸味を帯び、内外面に黒斑を有する。765は平底。766は底部に黒斑と線刻が認められる。767は鉢形土器で、底部から大きく膨らむ胴部で、底部はやや上げ底。769は高坏で、脚部に円形の透かしを有する。768は鉢形土器で、磨耗する。770と771は器台で、円形のすかしを有する。2つの大きさはほぼ同じで、外面と内面上部に赤色顔料が塗布されている。

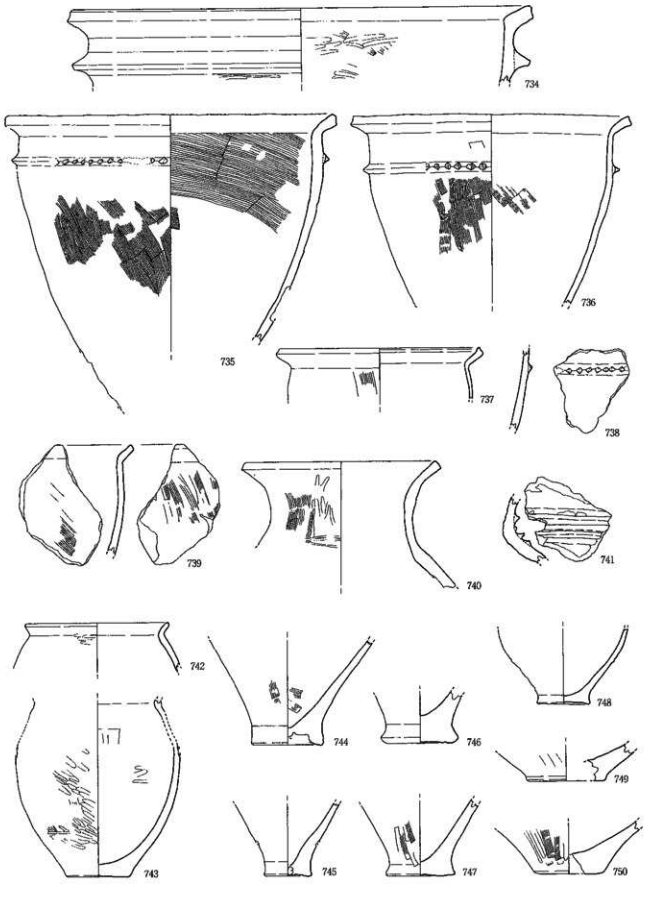
ST11（第122図）

A4－25区に位置する。約半分が調査区外へ延びる。規模は推定で6m前後の隅丸方形を呈すと思われる。溝幅は1～1.2m、深さ0.6m前後である。遺物が少量まばらに出土している。

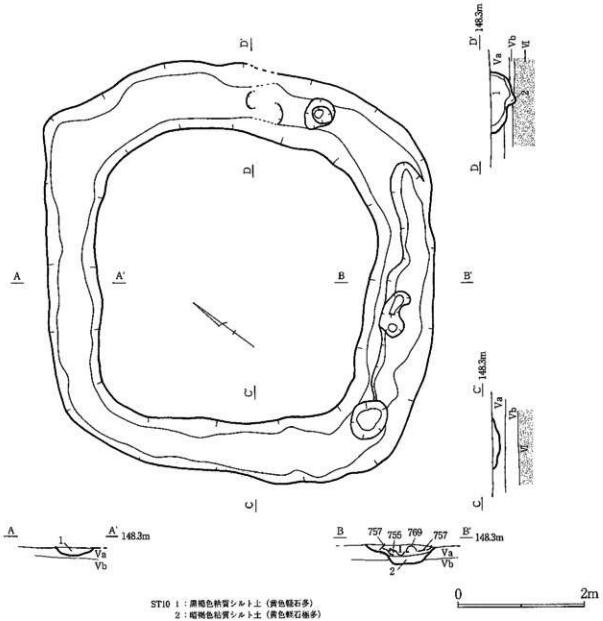




第117図　ST09及び出土遺物



第118図　ST09出土遺物

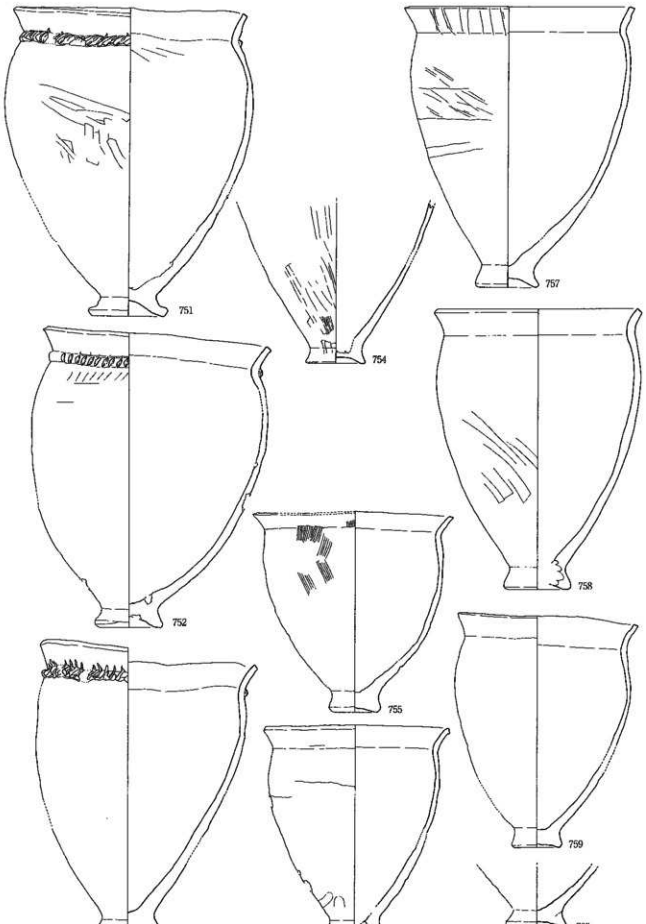


第119図　ST10

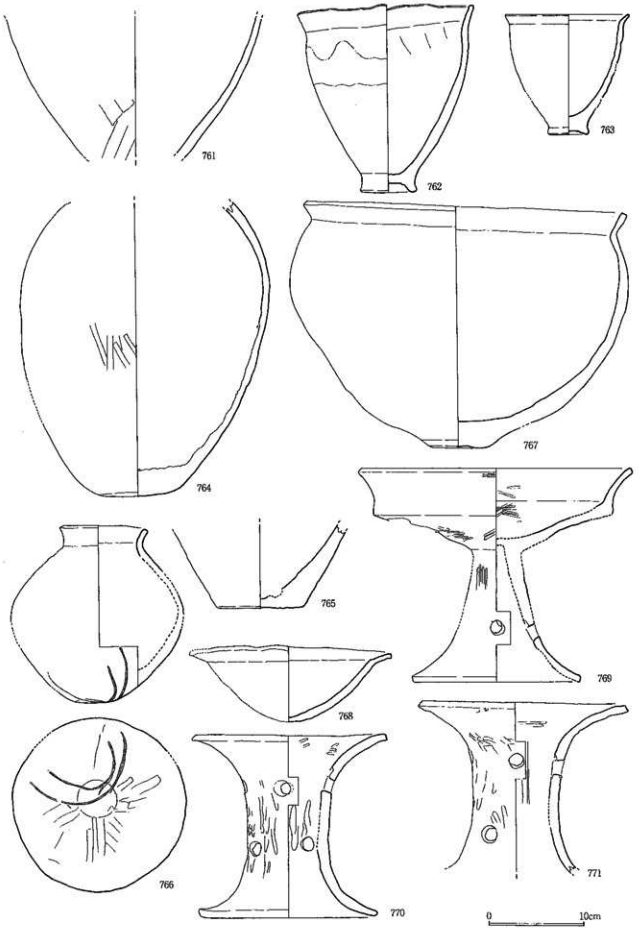
772～775はST11出土遺物である。772は把手を有する鉢形土器。773は中溝式甕胴部片。774は黒色土器。775は突帯を有する壺。

（3）土器溜り（第123図）

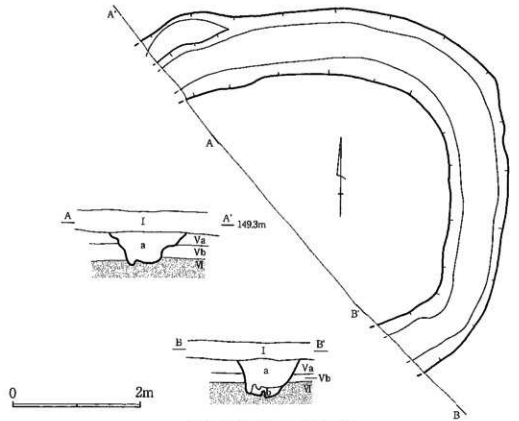
A4－26区に位置する後期の土器溜りである。ただしＶｂ層まで掘り込まれていないために検出できなかった周溝状遺構内の遺物集中部である可能性も残る。甕が主体で783の高坏を除き何れもススや炭化物が付着しており、完形のものが多い。776は底部にスサの痕跡が認められる。若干上げ底。口縁部がやや長め。777は器壁が薄く口縁部が緩やかに屈曲する。778は輪積痕が残る。779は口縁部の屈曲が強い。780は外面のハケメが残る。781は上げ底で脚部裾が大きく開く。782は鉢形土器で、外面は工具によるナデが施される。底部は若干上げ底。783は高坏。内外面は丁寧にミガキが施され、脚部は円形の透かしを有する。

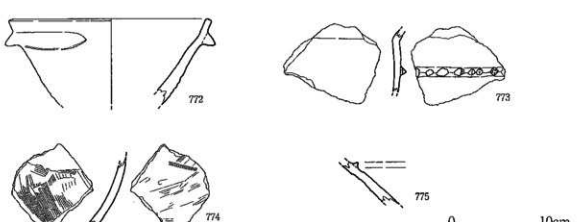


第120図　ST10出土遺物①

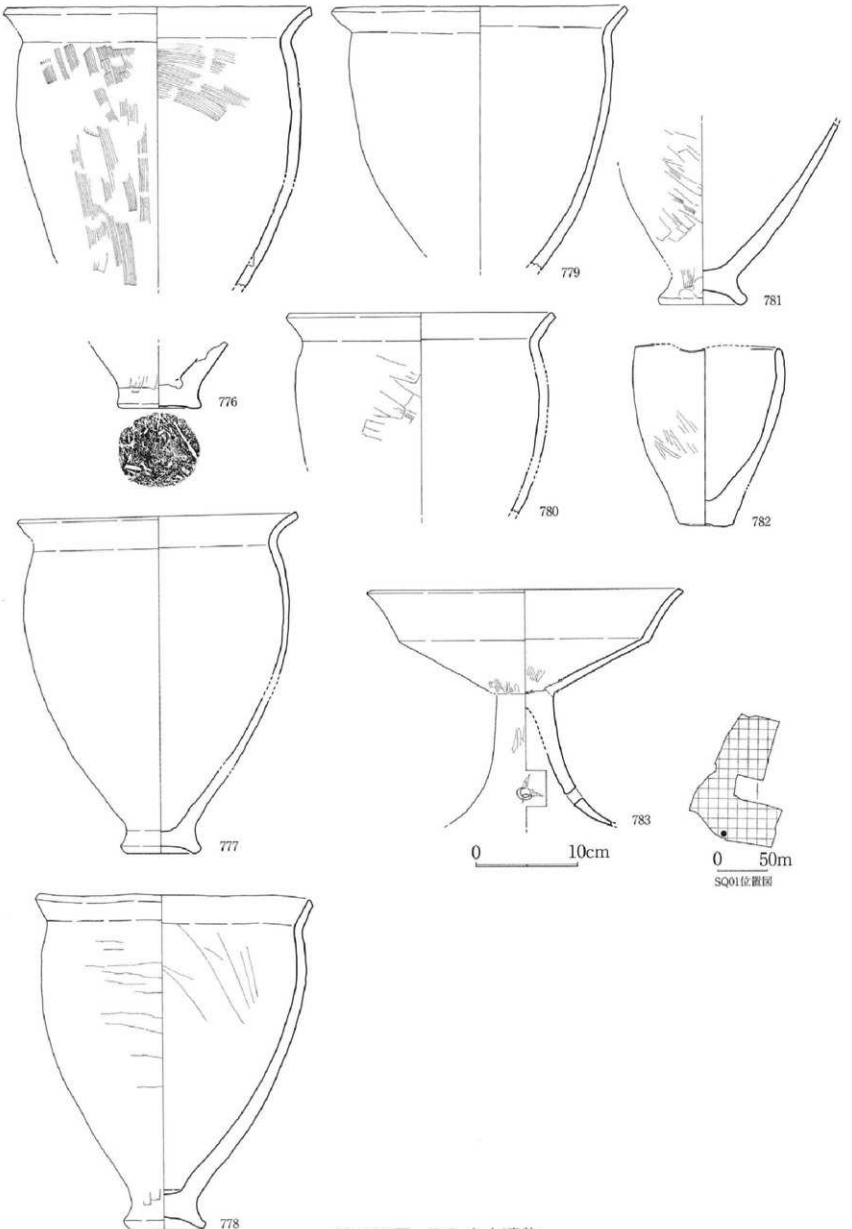


第 121 図　ST10 出土遺物②

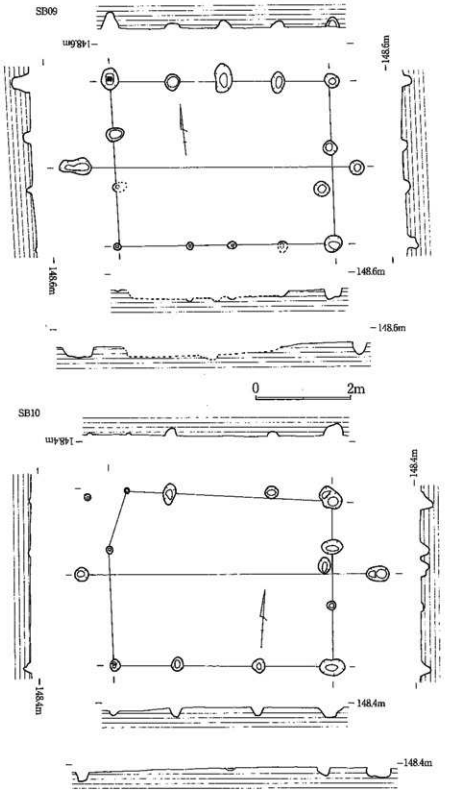




第122図　ST11及び出土遺物



第 123 図　SQ 出土遺物



第124図　SB09・10

（4）掘立柱建物跡

弥生時代の掘立柱建物跡は4軒検出されている。遺物の出土が僅かなため詳細な時期は特定できないが、掘立柱建物跡の主軸方向からおそらく中期後半に収まる可能性が高い。

SB08（第125図）

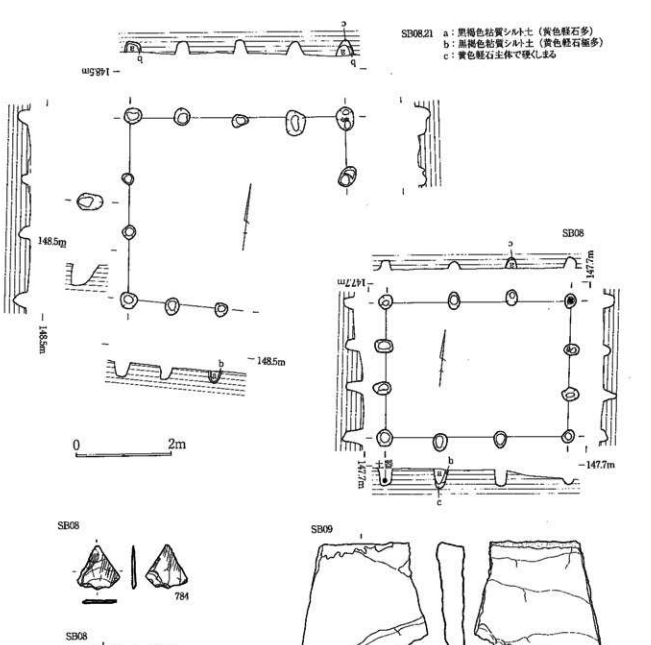
A 3 － 30区、SA38の北側に位置する。主軸方向は東西で、桁行3間（実長4.2m、柱間1.4 m）、梁間3間（実長3.2 m、柱間1.06 m）である。柱穴直径は0.3～0.4 mで、深さは0.15～0.5 mである。棟持柱を持たないが、柱間や規模から弥生時代の掘立柱建物跡と判断した。柱穴内より土器片と磨製石鏃未成品（784・785）が出土している。

SB09（第124図）

A4・5 － 28区、SA33と切り合い関係にある。埋土からSA33の後に構築されたと判断した。主軸方向は東西で、桁行4間（実長5 m、柱間1.25 m）、梁間3間（実長2 m、柱間0.6 m）。柱穴直径は0.2～0.7 m、深さは0.1～0.4 m。棟持柱を含めた規模は7mである。北西隅より蝋石安山岩の粗製剥片石器が出土している（786）。

SB10（第124図）

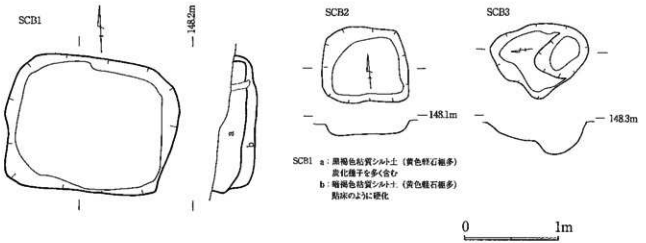
A5 － 30区に位置する棟持柱を持つ掘立柱建物跡。主軸方向は東西で、桁行3間（実長5 m、柱間1.66 m）、梁間3間（実長4m、柱間1.3 m）、柱穴直径は0.2～0.6 m、深さ0.1～0.4 m。棟持柱を含めた規模は6.7 mである。後世の削平により残存状態が悪い。



第 125 図　SB08・21 及び SB 出土遺物

SB21（第 125 図）

SA31 と切り合い関係にあるが前後関係は不明。桁行 4 間（実長 5m、柱間 1.25 m）、梁間 3 間（実長 4.2 m、柱間 1.4 m）。柱穴直径は 0.2 ～ 0.6m、深さ 0.2 ～ 0.4 mである。棟持柱を含めた規模はおそらく 5.5m 程か。



第126図　SCB1・2・3

（5）土坑（第126図）

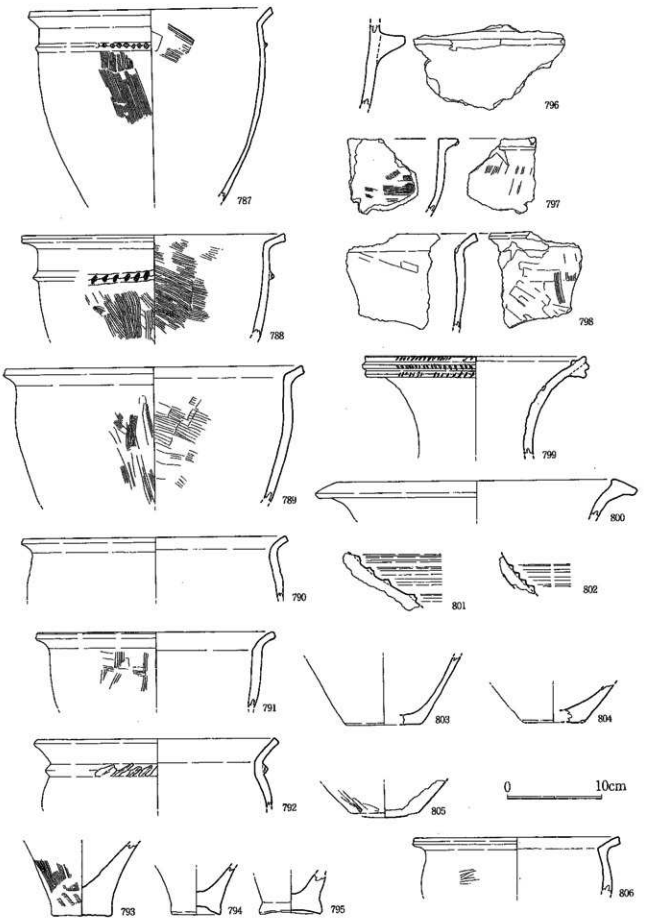
SCB 1：A4・5－30区に位置する。当初竪穴住居の中心部が残存している状況と考えられたが、調査を行った結果、方形の土坑となった（SA37は欠番）。規模は南北1.44 m、東西1.8 m、検出面からの深さ0.5 mである。埋土は黄色軽石を非常に多く含み、貼床状に硬くしまる暗褐色土（b層）と、同じく黄色軽石を多く含む黒褐色土（a層）の二層に分けられる。断面を観察したところ、上層と下層はややずれて堆積が認められるため、b層がある程度埋没後掘り直し、その後埋まったものがa層であると考えられる。a層からは多量の炭化種子が出土している。炭化種子の年代は1920 ± 60年BPである。

SCB 2：A 4－28区に位置する。東西0.9 m、南北0.8 m、深さ0.5の方形を呈す。遺物等は出土していないため詳細な時期は不明。

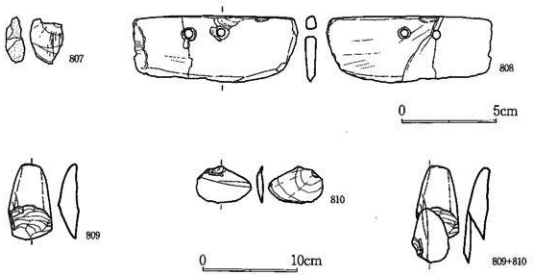
SCB 3：A 5－28区に位置する。SA33を切っている。北側にテラスを持つ不定形土坑。南北1.1 m、東西0.8 m、深さは0.3 mである。遺物等は出土していないため詳細な時期は不明。

（6）包含層出土遺物

包含層が削平を受けているため出土遺物は少ない。787・788は中溝式甕である。789の内面は横方向、外面は縦方向のハケメが施される。口縁部の屈曲はやや緩やかで、口唇部は平坦。外面にススが付着する。790は胴部が口縁端部より外に開く甕である。791は鉢形土器で、外面に縦方向と横方向のハケメが残る。口縁部は胴部に比べ器壁が薄い。口唇部は丸味を帯びる。792は後期の所産と思われる。口縁部付根に1条の刻目突帯を貼り付け、胴部は丸味を帯びる。793から795は甕底部。796は大甕の胴部。797は鉢形土器で、口縁部平坦面はほぼ水平。798は口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が肥厚する。799は胎土に雲母を含む二叉状口縁の壷。口唇部に刻みを施す。800は口縁部が下垂する壷。801は肩部にM字状突帯を有す。802は胎土に雲母を含む。803～805は壷底部。805はやや丸底。806は鉢形土器。口縁端部が肥厚し口唇部が窪む。807は原石面を残す黒曜石剥片。808は石庖丁。809と810は同一個体の磨製石斧。809は欠損後も刃部を再生し使用。欠損後810を剥離し再利用している。



第127図　包含層出土遺物①



第128図　包含層出土遺物②

4．古代～中世の遺構と遺物

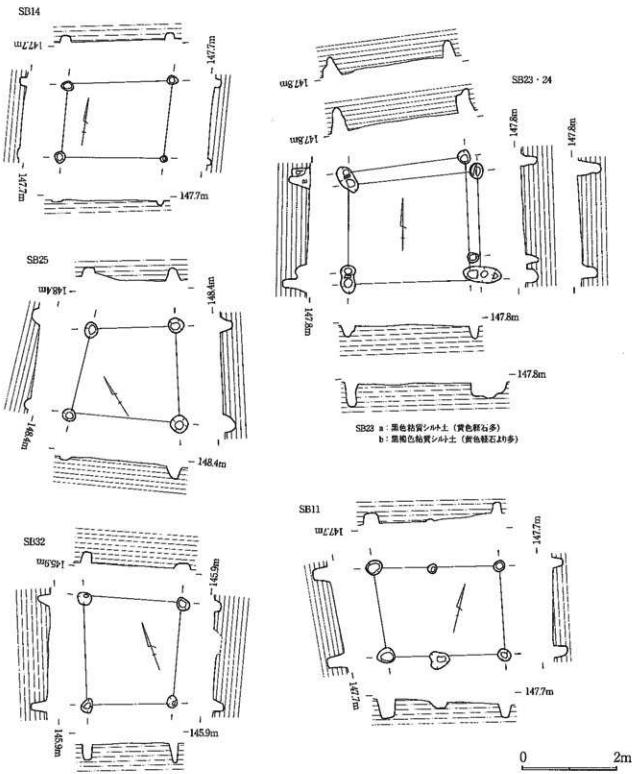
古代～中世の遺構は掘立柱建物跡23棟、溝状遺構14条（溝底部に硬化面を有するものを含む）、集石状遺構3基、埋設土器1基、土坑3基である。谷より南の段丘では、1間×1間の掘立柱建物跡が、谷間には溝状遺構、谷間から北側は規模の大きな掘立柱建物跡と溝状遺構が多い。いくつかの掘立柱建物跡の柱穴内からは古代の土師器が出土している。溝状遺構内からは中世の陶磁器類が僅かであるが出土している。これらの遺構の時期を本来ならば区分するべきであるが、遺構に伴う遺物が少ないこともあり、個々の時期を決定付けるのは困難であるため、古代～中世としてまとめた。

（1）掘立柱建物跡（第129～135図）

B地点で最も多いのは1間×1間の掘立柱建物跡で、13棟検出された。次に1間×2間が4棟、2間×3間が3棟、2軒×4軒が1棟、2間×3間の総柱に庇2面を持つものが1棟、2間×2間の総柱が1棟である。1間×1間の掘立柱建物跡には桁行と梁間の実長がほぼ同じものと（SB25・32）桁行が若干長いものの規模が3mを超えない小型のもの（SB14・23・24：第129図）、桁行が3m以上5m未満（SB12・13・15・16・27・19・26・35：第130・131図）のものに分かれる。1間×2間も3m未満（SB11：第129図）とそれ以上（SB17・18・20・22：第131・132図）に分かれる。1間×2間の特徴は中間柱が非常浅いことである。それを考慮すれば、1間×1間の中には、本来1間×2間であるものが含まれる可能性が残る。SB33・34（第150図）は切り合い関係にあり、埋土からSB33が後に建てられたと考えられる。総柱の掘立柱建物跡は2棟（SB29・36：第134・135図）である。うち1棟は2面廂（SB29）。これらの掘立柱建物跡は多くて3棟の範囲が重なる。それぞれの棟方位を示し時期を区分することが望ましいが、南側と北側では位置する地形が異なるため、主軸も異なると思われる。また、南側の遺構群と北側の遺構群とで時期差がある可能性もあるため、今回は区分していない。

個々の掘立柱建物跡の計測値を示しておく。検出時に上部を削平されているものが多いため、本来の建物の規模とは若干異なると思われる。

SB11（A3 − 30・31区）：桁行2軒（実長2.9m、柱間1.45m）、梁間1間（実長2.2m）、柱穴直径は0.2～0.4m、深さ0.1～0.5m。桁行の中間柱が非常に浅い。**SB12**（A2 − 30区）：桁行1間（実長3.9m）、梁間1間（実長2.45m）、柱穴直径0.4～0.5m、深さ0.3～0.4m。SB13と建物範囲が一部重なるが前後関係は不明。**SB13**（A2 − 30区））：桁行1間（実長4.4m）、梁間1間（実長2.9m）、柱穴直径0.5m、深さ0.2～0.4m。**SB14**（A2 − 28区）：桁行1間（実長2.5m）、梁間1間（実長1.8m）、柱穴直径は0.15～0.3m、深さ0.1～0.2mである。**SB15**（A2 − 28区）：桁行1間（実長3.6m）、梁間1間（実長2.6m）、柱穴直径は0.3～0.4m、深さ0.3～0.4m。**SB16**（A1 − 28区）：桁行1間（実長4.25m）、梁間1間（実長2.8m）、柱穴直径0.5～0.8m、深さ0.5～0.7m。**SB17**：桁行2間（実長4.45m、柱間2.3m）、柱穴直径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4m。**SB18**：桁行2間（実長4.9m、柱間2.45m）、梁間1間（3.2m）、柱穴直径0.3～0.6m、深さ0.1～0.6m。**SB19**：桁行1間（実長4m）、梁間1間（実長2.5m）、柱穴直径0.2～0.8m、深さ0.1～0.3m。**SB20**：東側を欠くがおそらく2間×3間の掘立柱建物跡と思われる。残存で桁行の実長5.2m、梁間の実長1.1m。柱穴直径0.2～0.7m、深さ0.2～0.7m。**SB22**：桁行2間（実長5.3m、柱間2.65m）、梁間1間（実長2.9m）、柱穴直径は0.2～0.8m、深さ0.2～0.8m。**SB23**：桁行1間（実長3.6m）、梁間1間（実長3.2m）、柱穴直径は0.3m、深さは0.4～0.6m。**SB24**：桁行1間、梁間1間（ともに実長2.4m）、柱穴直径は0.3m、深さは0.4～0.6m。**SB25**：桁行1間（実長2.4m）、梁間1間（実長2.35m）、柱穴直径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4m。**SB26**：桁行1間（実長4.2m）、梁間1間（実長2.6m）、柱穴直径0.3～0.7m、深さ0.2～0.4m。**SB27**：桁行1間（実長3m）、梁間1間（1.6m）、柱穴直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.4m。**SB28**：柱穴が削平されている可能性があり、本来は2間×3間と思われる。桁行3間（実長4m、柱間1.3m）、梁間2間（実長3.5m、柱間1.75m）、柱穴直径0.2～0.5m、深さ0.1～0.6m。**SB29**：総柱の掘立柱建物跡。桁行3間（実長6.7m、柱間2.2m）、梁間2間（実長4.6m、柱間2.3m）、柱穴直径0.2～0.6m、深さ0.3～0.7m。北と西に廂を持つ。廂を含めた規模は東西8m、南北5.9mである。SB29の柱穴内からは土師器坏が出土している。**811**は底部から丸味をもって立ち上がる坏で、底径5.6cm、口径11.8cm、器高4.3cm、底部の切り離しはヘラ切りである。色調は橙系である。**812**は柱状貼付高台の坏。図上復元で底径6.4cm、底部ヘラ切りである。色調は橙系である。また、**899**の鉄鏃も出土している。**SB32**：桁行1間（実長2.5m）梁間1間（実長2.4m）、柱穴直径0.3m、深さ0.2～0.6m。**SB33**：桁行4間（実長8.8m、柱間2.2m）梁間2間（実長3.85m、柱間1.9m）。柱穴直径0.3～0.7m、深さ0.2～1m。柱穴内より土師器（**813**）と布痕土器（**814**）、砥石（**891**）が出土している。**SB34**：桁行3間（実長8.9m、柱間2.9m）梁間2間（実長3.95m、柱間1.98m）。柱穴直径は0.2～0.9m、深さ0.3～0.8m。SB34には後述するSS02が伴う可能性がある。地床炉か。**SB35**：桁行1間（実長5m）梁間1間（実長3.1m）、柱穴直径0.5～0.8m、深さ0.7～0.8m。**SB36**：総柱の掘立柱建物跡。桁行2間（実長4.5m、柱間2.25m）梁間2間（実長2m、柱間1m）。柱穴直径0.3～0.9m、深さ0.2～0.8m。SD09

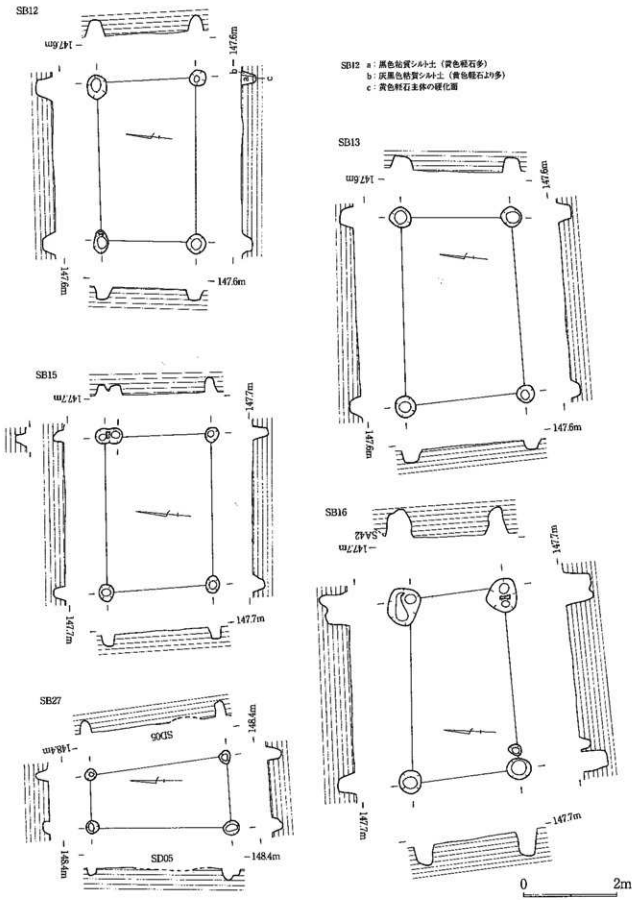


第129図　古代～中世SB①

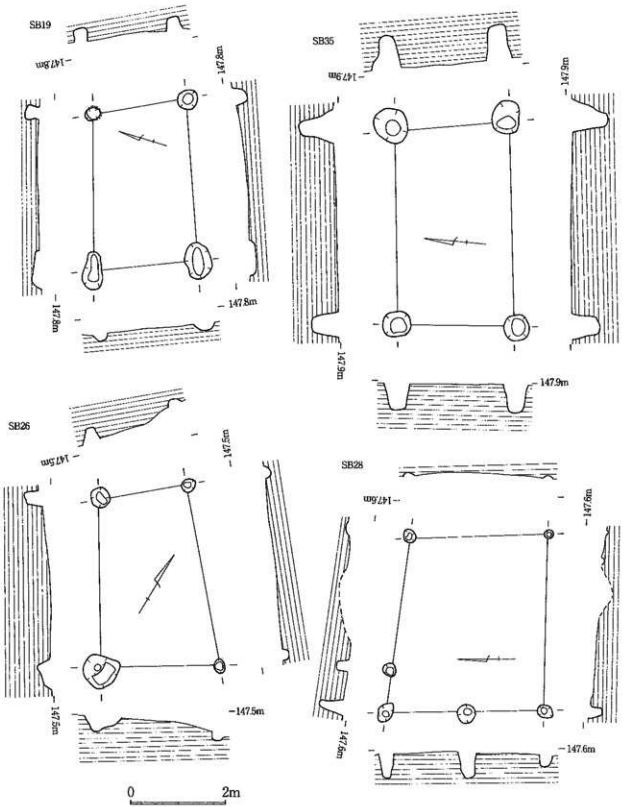
内に位置する。埋土に溝埋土を含むため、おそらくSD09より後に建てられている。

（2）集石状遺構と埋設遺構

B地点では古代～中世の集石状遺構が3基、埋設遺構が1基検出された。

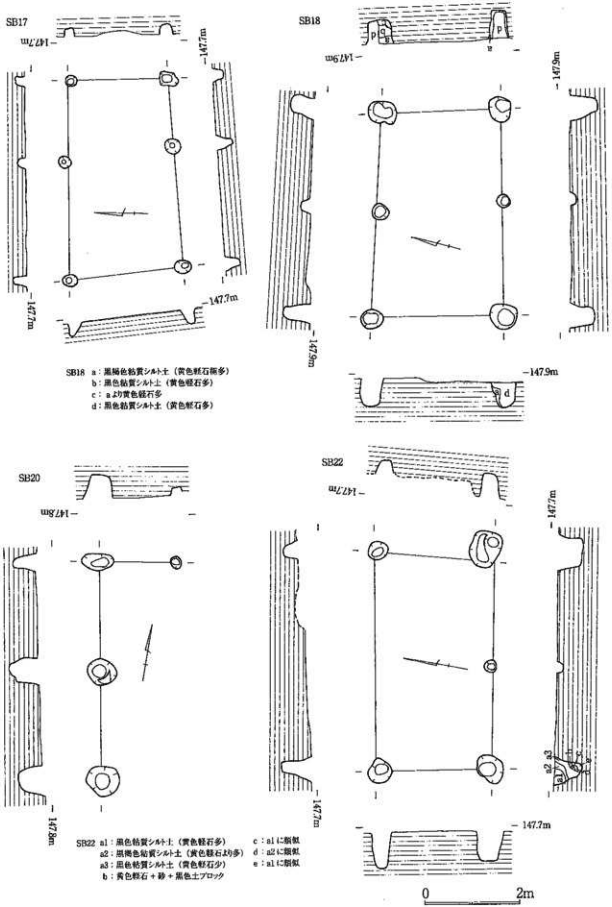


第130図　古代～中世 SB ②

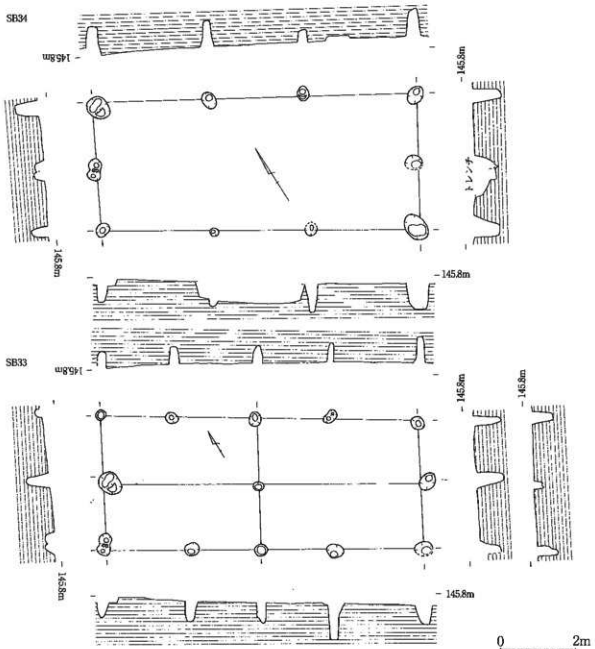


第131図　古代～中世SB③

SS01（第136図）：V－26区に位置する。大型の敲石2点と小礫十数点で構成される。範囲は0.7×0.9mである。これらの敲石や礫は被熱により赤化しているものが多い。SS01の範囲内から土師器が出土している（815・816）。谷間の傾斜地であり、集石状遺構では掘り込み等は確認でき



第 132 図　古代～中世 SB④

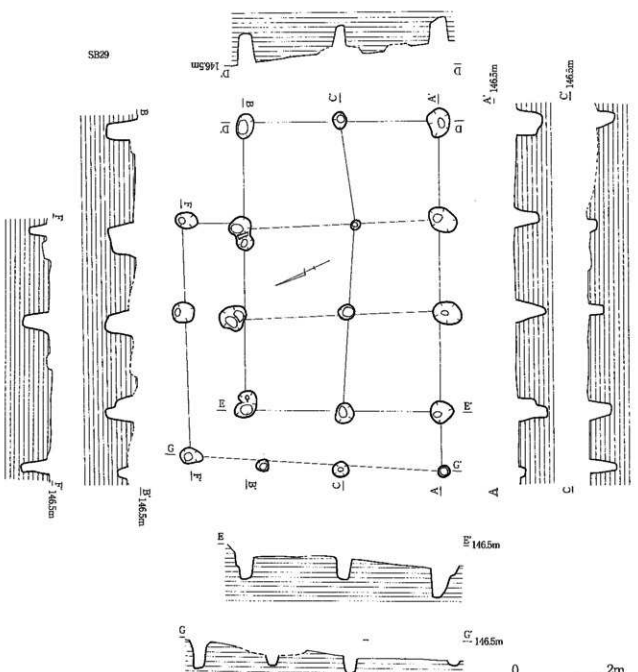


第133図　古代～中世 SB⑤

なかったため、一括資料とは言いがたいが参考資料として、SS01内に含めた。

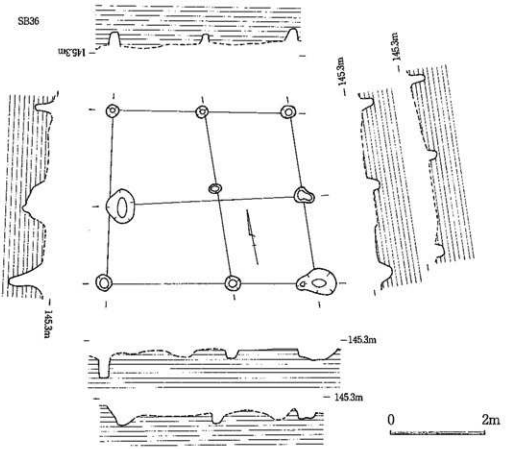
892・893はSS01出土の敲石である。892は礫端部を敲石として使用、表裏側面の平坦面は砥石として使用している。表面には墨のあとが残る。893は上下端部を敲石として、表裏側面の平坦面を砥石として使用している。815は高台付椀で、底径7.9cmである。816も高台付椀。

SS02（第136図）：W－26区に位置する。軽石と小礫を主体とし、2m×2mの範囲に軽石と土師器がまとまって出土した。SS02は焼土を伴っており、この焼土は土坑状に落ち込む。規模は1m×0.7m、深さ0.1mである。一部柱穴状に落ち込み、内部に焼土が含まれる。軽石と小礫の集中部と土師器の集中部は0.5mほど離れており、出土した土師器にも時期差があると思われるため、これら二つには時間差がある可能性がある。SS02は谷底部の平坦面に位置するため、谷斜面



第 134 図　古代～中世 SB ⑥

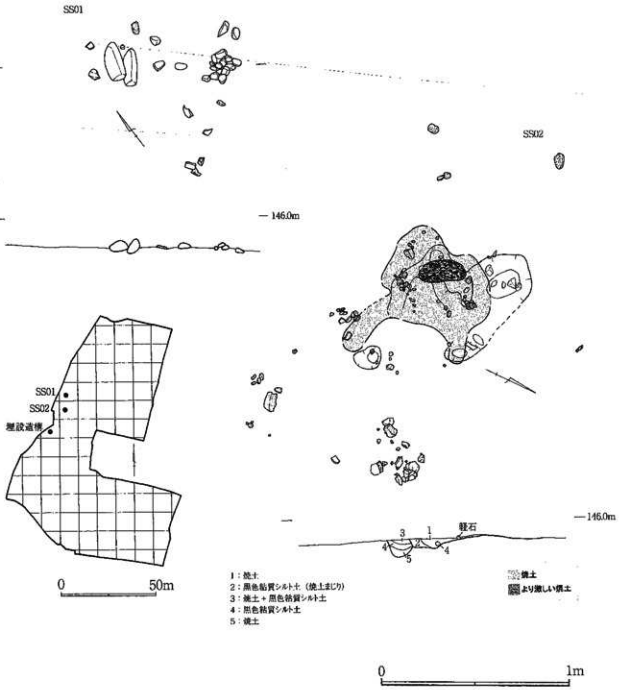
からの流れ込みも含まれる可能性が高い。一括資料とは言い難いが参考資料として含める。817～820 はほぼ同時期の土師器と思われる。底部をヘラ切り後、丁寧にナデを施し、丸味を帯びる。底部からの立ち上がりは直線的である。器高は 5cm 前後で、口径は 12～13cm、底径は 819 が 6.5cm



第135図　古代～中世SB⑦

と他に比べ小ぶりで、他は7.8cm前後である。色調は橙色系。その他に821～832がSS02の範囲内から出土している。821は坏底部。底径6.2cm。822は体部が丸味を帯びる椀で、823～825は体部が直線的に立ち上がる椀。826は高台付椀で、高台が高く直線的に伸びる。体部は底部から丸味を持って立ち上がる。827は体部が丸みを帯びて立ち上がる。828は黒色土器で、高台は短く厚い。829は土師甕内面には横方向のケズリが施される。830は口縁端部が膨らむ土師甕口縁部。831は土師甕底部。832は土師甕胴部片。

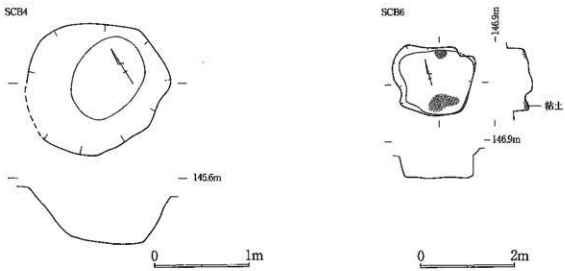
SS03（第146図）：SD11内の直角に曲がる部分から検出された。東西1m、南北0.8mの浅い皿状の窪みに拳大の礫が集積していた。礫は被熱により赤化している。また、土坑底部には粘土が堆積していた。集石状遺構内からは礫とともに、人面墨書土器が出土している（890）。890は胎土からおそらく弥生土器片を転用したものと思われるが、摩滅が激しくまた、非常に硬い。人型を模しているようにも見える。表に人面が、裏面には「衣」もしくは「亥」と思われる墨書のほか、上半を中心に墨書が見られる。SS03はSD11の硬化面を掘り込んでいるため、道路廃絶に伴う何らかの祭祀行為と思われる。



第136図　SS01・02

埋設遺構

X－25区、SD02とSD01が交わる北東に位置する。土抗等の掘り込みは見られなかった。858の土師器小壷に859の軽石が蓋をするように設置されていた。858は北に口が開くようにやや斜めに設置されていた。小壷内には土が詰まっていただけであった。859も、併せ口等の加工は見られなかった。検出位置や検出状況から、おそらく胞衣壷と考えられる。類例としては久留米市の筑後国府跡が挙げられる。



第137図　中世SCB

（3）土坑（第137図）

B地点では古代～中世に属すると思われる土坑が3基検出された。

SCB 4：SD09とSD06の中間に位置する。1.5 m × 1.4 mの楕円形を呈し、深さ0.5m。土坑内からは**833・834**の土師器が出土している。

SCB 6：SB29内に位置し、SB29に伴う可能性もある。東西1.8 m、南北1.5 m、深さ0.8 mの隅丸方形を呈す。土坑底部から粘土が検出された。また、土坑内からは多数の遺物が出土している。**835**は口径・底径に比べ器高の高い坏である。色調は橙色系である。器壁が薄く焼成が良好である。**836**は高台付椀で、高台が長く伸び、口縁部に向かいやや外反する。**837**の底部は回転ヘラ切り。**838**～**843**は椀である。**838**・**840**は体部が丸味をおび、**839**・**842**は直線的である。**841**は硬質で器壁が薄い。**844**は鉢で指頭痕が残る。内面はケズリが施される。**845**は外面に縦方向のハケメが残る土師甕。

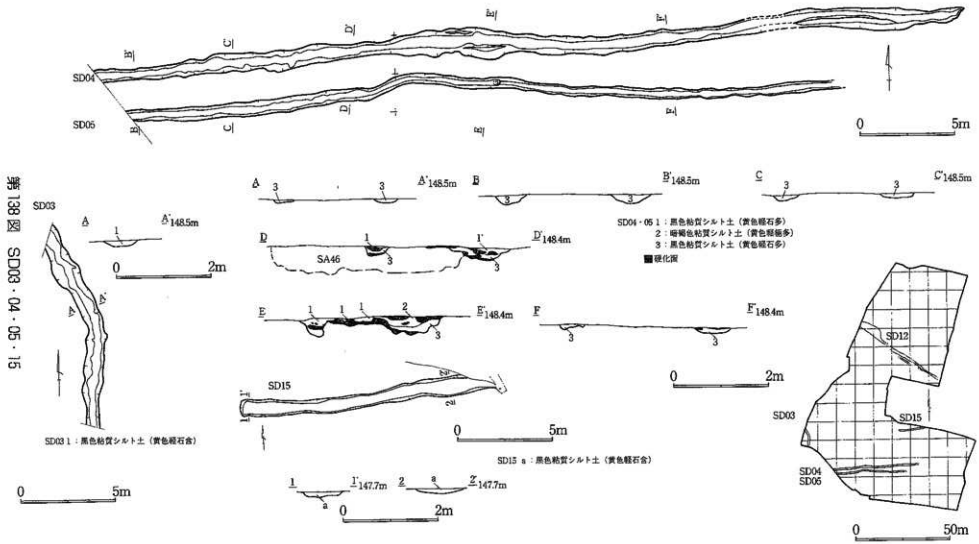
SCB 7：SB29の北東に位置する掘り込みである。0.8 m × 0.5m、深さ0.3m。土坑内からは**846**・**847**が出土している。**847**は器高の低い坏。口縁端部が外反する。**846**は短い高台の椀。

（4）溝状遺構と道路状遺構

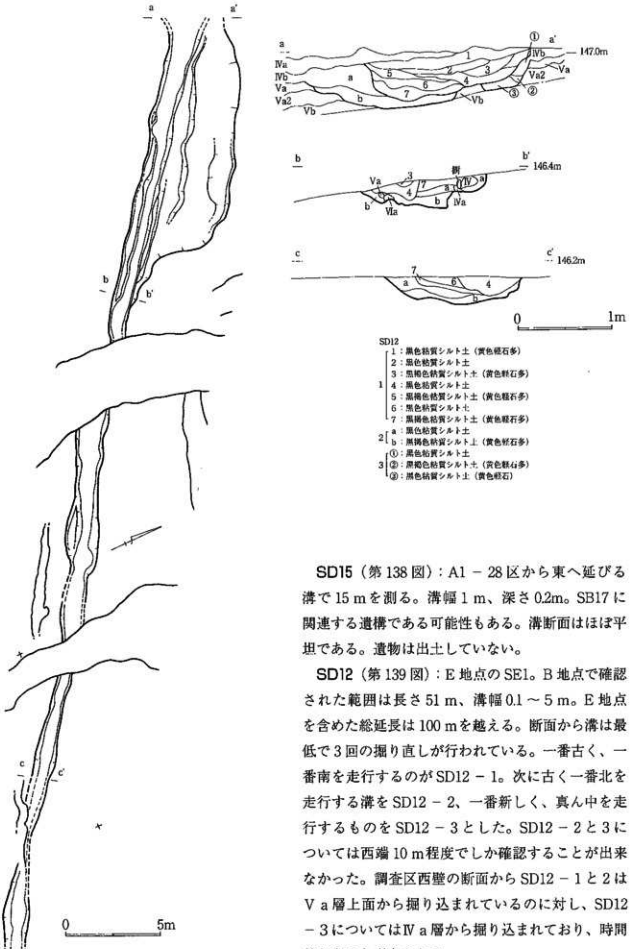
B地点では古代～中世の溝状遺構15条と道路状遺構7条が検出された。うち古代に属すると思われるのがSD03・04・05・12・15である。B地点西側に位置するE地点（宮崎県埋蔵文化財センター調査）検出の遺構と同一である。

SD03（第138図）：E地点のSE3。B地点での検出は約10 mで、南にカーブし、調査区外へ延びる。E地点を含めた総延長は約73m。溝幅0.4m、深さ0.2m、断面は逆台形を呈す。

SD04（第138図）：南側段丘を東西方向に2条の溝がほぼ平行に走る。総延長は50 mに及ぶ。溝幅は0.4～1.2 mで、2つの溝間は1.6～1.8m、2条をあわせた幅は3～4m である。溝中間地点では溝間に硬化面が認められたため、これらの溝は硬化面に伴う側溝の可能性がある。SD04内より火打石の可能性があるチャートの原石（**894**）が出土している。



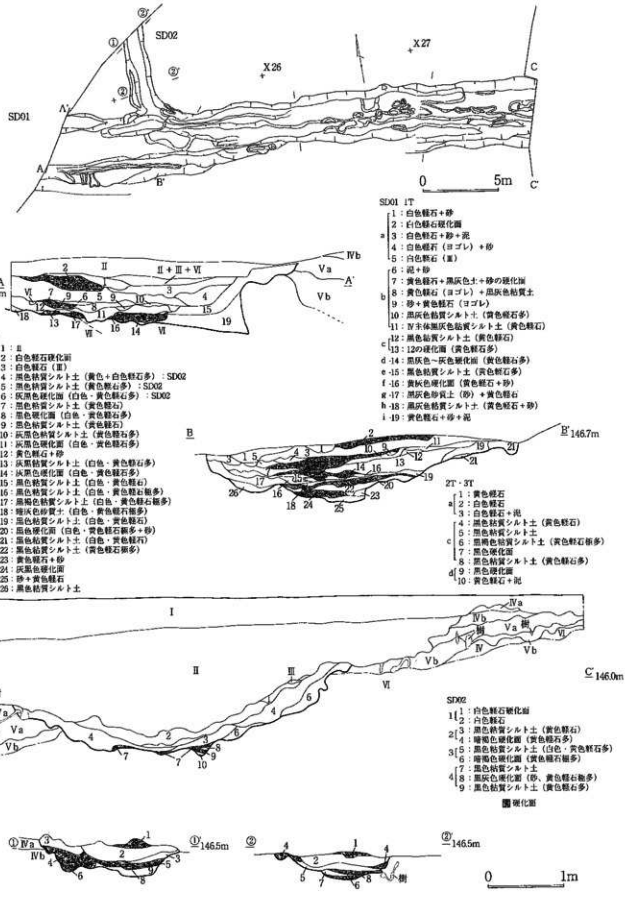
第138図 SD03・04・05・15



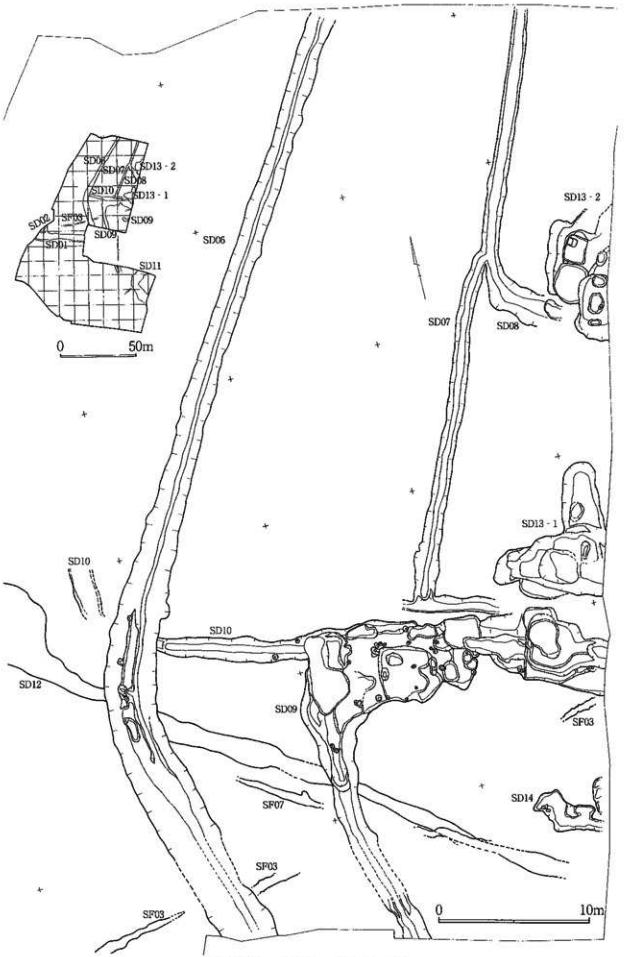
第139図　SD12

SD15（第138図）：A1－28区から東へ延びる溝で15mを測る。溝幅1m、深さ0.2m。SB17に関連する遺構である可能性もある。溝断面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

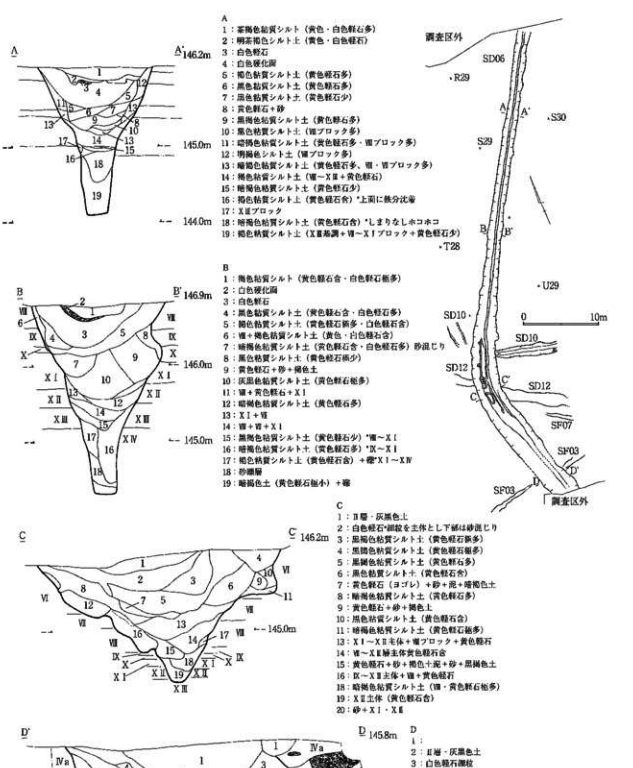
SD12（第139図）：E地点のSE1。B地点で確認された範囲は長さ51m、溝幅0.1～5m。E地点を含めた総延長は100mを越える。断面から溝は最低で3回の掘り直しが行われている。一番古く、一番南を走行するのがSD12－1。次に古く一番北を走行する溝をSD12－2、一番新しく、真ん中を走行するものをSD12－3とした。SD12－2と3については西端10m程度でしか確認することが出来なかった。調査区西壁の断面からSD12－1と2はⅤa層上面から掘り込まれているのに対し、SD12－3についてはⅣa層から掘り込まれており、時間差があると考えられる。



第140図　SD01・02



第141図　SD07～10・13・14



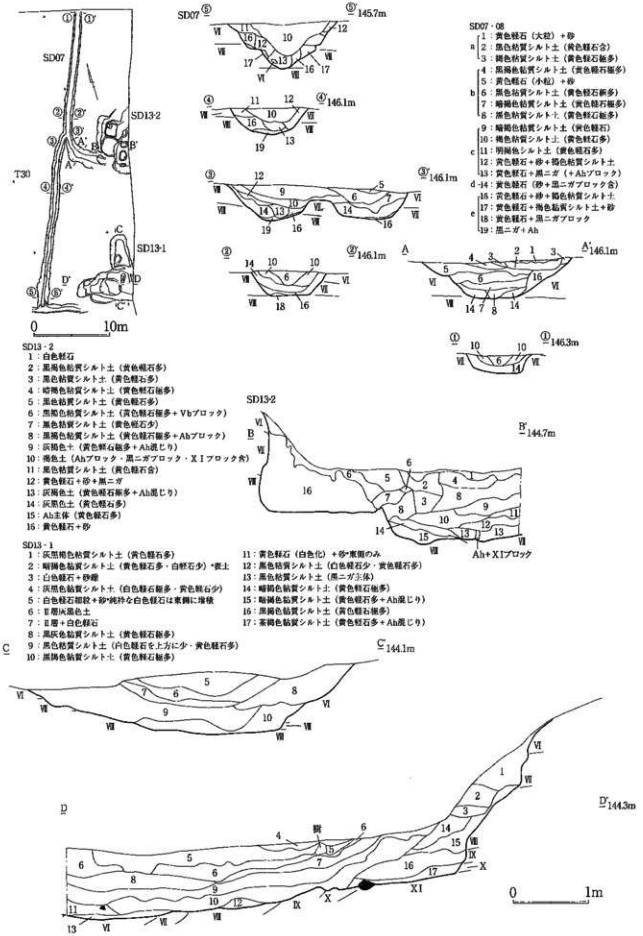
A
1：茶褐色粘質シルト（黄色・白色軽石多）
2：明茶褐色シルト土（黄色・白色軽石）
3：白色軽石
4：白色硬化面
5：褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
6：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
7：黒色粘質シルト土（黄色軽石少）
8：黄色軽石＋砂
9：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
10：黒色粘質シルト土（Ⅷブロック多）
11：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石多・Ⅷブロック多）
12：明褐色シルト土（Ⅷブロック多）
13：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石多、Ⅷ・Ⅸブロック多）
14：褐色粘質シルト土（Ⅷ～Ⅸ＋黄色軽石）
15：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石少）
16：褐色粘質シルト土（黄色軽石少）*上面に焼分泥層
17：Ⅸブロック
18：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石含）*しまりなしホコホコ
19：褐色粘質シルト土（Ⅸ層基調＋Ⅷ～Ⅸ1ブロック＋黄色軽石少）

B
1：褐色粘質シルト（黄色軽石含・白色群石極多）
2：白色硬化面
3：白色軽石
4：黒色粘質シルト土（黄色軽石含・白色軽石多）
5：褐色粘質シルト土（黄色軽石斑多・白色軽石含）
6：Ⅷ＋褐色粘質シルト土（黄色・白色軽石含）
7：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石含・白色軽石多）砂混じり
8：黒色粘質シルト土（黄色軽石極少）
9：黄色軽石＋砂＋褐色土
10：灰黒色粘質シルト土（黄色軽石極多）
11：Ⅷ＋黄色軽石＋Ⅺ1
12：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
13：Ⅺ1＋Ⅻ
14：Ⅷ＋Ⅻ＋Ⅺ1
15：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石少）*Ⅷ～Ⅺ1
16：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石多）*Ⅸ～Ⅺ1
17：褐色粘質シルト土（黄色軽石含）＋礫*Ⅺ1～ⅪⅣ
18：砂礫層
19：暗褐色土（黄色軽石極小）＋Ⅷ

C
1：Ⅱ層・灰黒色土
2：白色軽石・細砂を主体とし下部は砂混じり
3：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石斑多）
4：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
5：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
6：黒色粘質シルト土（黄色軽石含）
7：黄色軽石（ヨゴレ）＋砂＋泥＋暗褐色土
8：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
9：黄色軽石＋砂＋褐色土
10：黒色粘質シルト土（黄色軽石含）
11：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
13：Ⅺ1～Ⅺ2主体＋Ⅷブロック＋黄色軽石
14：Ⅷ～Ⅺ1極主体黄色軽石
15：黄色軽石＋砂＋褐色土泥＋砂＋黒褐色土
16：Ⅸ～Ⅺ2主体＋Ⅷ＋黄色軽石
18：暗褐色粘質シルト土（Ⅷ・黄色群石極多）
19：Ⅺ2主体（黄色軽石含）
20：砂＋Ⅺ1・Ⅺ2

D
1：
2：Ⅱ層・灰黒色土
3：白色軽石混粒
4：Ⅱ層・灰黒色土
5：白色軽石
6：黒色褐色粘質シルト土（白色軽石多）
7：黒色粘質シルト土（黄色軽石多・白色軽石含）
8：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石斑多・白色軽石少）
9：黒色粘質シルト土（白色軽石・黄色軽石）
10：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石斑多・白色軽石斑多）＋砂
11：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
12：黒色粘質シルト土
13：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石）＋砂
■ 硬化面

第142図　SD06断面図



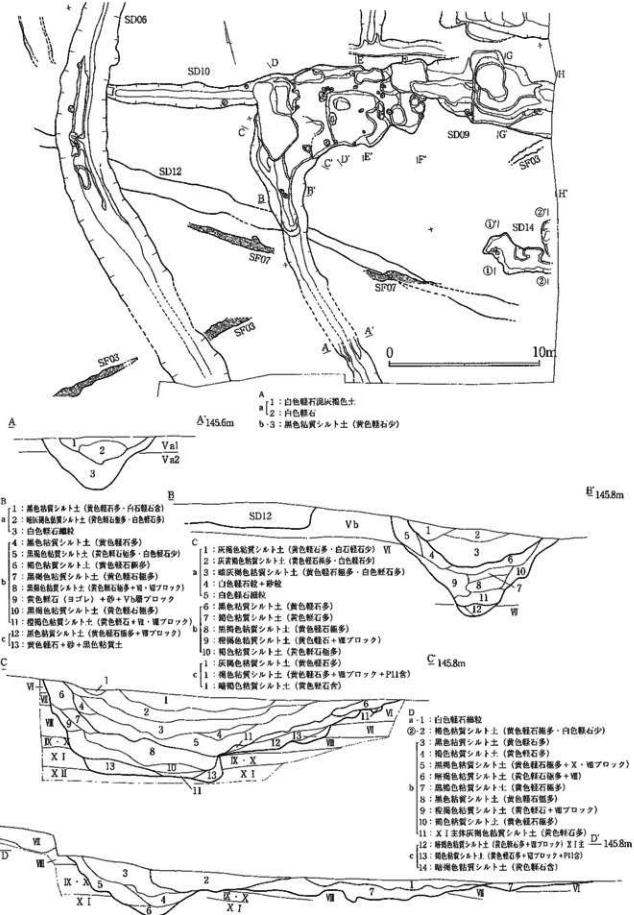
SD13-2

1：白色軽石
2：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
3：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
4：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
5：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
6：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多＋Vbブロック）
7：黒色粘質シルト土（黄色軽石多）
8：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多＋Ahブロック）
9：灰褐色土（黄色軽石極多＋Ah混じり）
10：褐色土（Ahブロック・黒ニガブロック・XIブロック含）
11：黒色粘質シルト土（黄色軽石含）
12：黄色軽石＋砂＋黒ニガ
13：灰褐色土（黄色軽石極多＋Ah混じり）
14：灰黒色土（黄色軽石多）
15：Ah主体（黄色軽石多）
16：黄色軽石＋砂

SD13-1

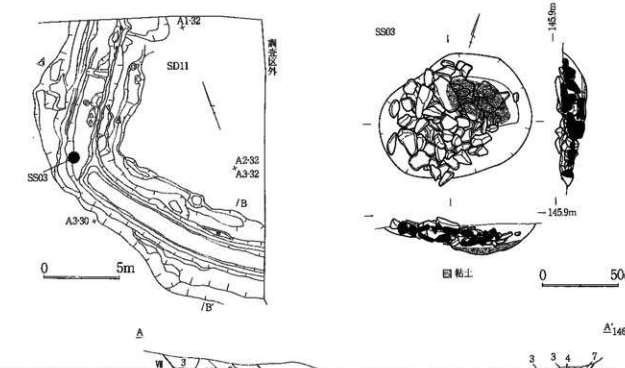
1：灰黒褐色粘質シルト土（黄色軽石多）
2：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石多・白軽石少）＊霞土
3：白色軽石＋砂礫
4：灰黒色粘質シルト土（白色軽石極多・黄色粒石少）
5：白色軽石層砂＋砂純砂な白色軽石は素鋼に堆積
6：E層灰黒色土
7：E層＋白色軽石
8：黒灰色粘質シルト土（黄色軽石極多）
9：黒色粘質シルト土（白色軽石を上方に少・黄色軽石多）
10：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
11：黄色軽石（白色化）＋砂・素鋼のみ
12：黒色粘質シルト土（白色軽石少・黄色軽石多）
13：黒色粘質シルト土（黒ニガ主体）
14：暗褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
15：褐褐色粘質シルト土（黄色軽石多＋Ah混じり）
16：黒褐色粘質シルト土（黄色軽石極多）
17：茶褐色粘質シルト土（黄色軽石多＋Ah混じり）

第143図　SD07・08・13断面図



第 144 図　SD09・10 断面図①

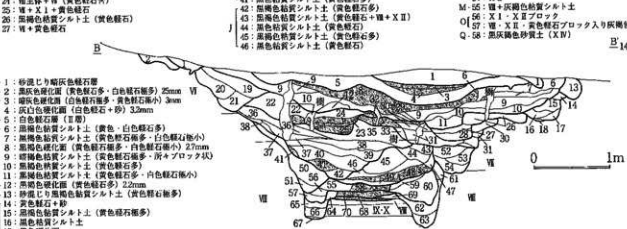
第145図　SD09・10断面図②,SD14平・断面図



A-1：灰褐色腐植シルト土（Ⅱ＋黄色・白色粒石）
2：笹主体＋黄色粒石
3：暗褐色シルト土（黄色粒石多）
4：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
5：笹主体
6：笹主体＋Ⅷ（黄色粒石含）
7：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石極多）
8：黒褐色粘質シルト土（Ⅱ＋黄色＋白色粒石）
B 9：黒色粘質シルト土（黄色・白色粒石）
10：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石含）
11：暗黒土り黒色粘質土
12：黒色砂質シルト土（白色粒石）
13：灰褐色砂質シルト土（白色粒石）
14：Ⅱ
15：黒色砂質シルト土（白色粒石）
C 16：灰黒色硬化面
17：黒灰色硬化面
18：黒色粘質シルト土（黄色粒石）
19：暗褐色粘質シルト土（Ⅷ＋黄色粒石微多）
20：黒色硬化面（黄色粒石＋Ⅷ）
21：黒褐色粘質シルト土（Ⅷ＋黄色粒石）
D 22：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石斑多）
23：Ⅷ・地ブロック＋黄色粒石
24：笹主体＋Ⅷ（黄色粒石含）
25：Ⅷ＋XⅠ＋黄色粒石
26：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石）
27：Ⅷ＋黄色粒石

28：XⅡ＋Ⅷ＋47ブロック
29：黒色粘質シルト土（黄色粒石＋XⅡ）
30：XⅡ主体
F 31：黒褐色礫化面（黄色粒石＋Ⅷ）
32：XⅡ主体
33：黒灰色粘質シルト土（黄色粒石）
34：XⅠ・XⅡブロック
35：黒色粘質シルト土（Ⅷ）
36：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石斑多）
37：黒褐色礫化面（黄色粒石斑多）
H 38：黒褐色粘質シルト土（Ⅷ＋黄色粒石）と黒褐色礫化面
39：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
40：黒褐色礫化面（黄色粒石斑多）
41：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
42：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
43：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石＋Ⅷ＋XⅡ）
J 44：黒色粘質シルト土（黄色粒石）
45：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
46：黒色粘質シルト土（黄色粒石）

K 47：黒色礫化面＋黒灰色礫化面
48：XⅡ＋黒色粘質シルト土
49：褐褐色粘質シルト土（黄色粒石）
50：黒色粘質シルト土（Ⅷ＋黄色粒石）
51：黒色粘質シルト土
L 52：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
53：黒色礫化面（XⅡ＋黄色粒石斑多）
54：XⅡ
M・55：Ⅷ＋灰褐色粘質シルト土
56：XⅠ・XⅡブロック
O 57：Ⅷ・XⅡ・黄色粒石ブロック入り灰黒色土
Q・58：黒灰褐色砂質土（XⅣ）



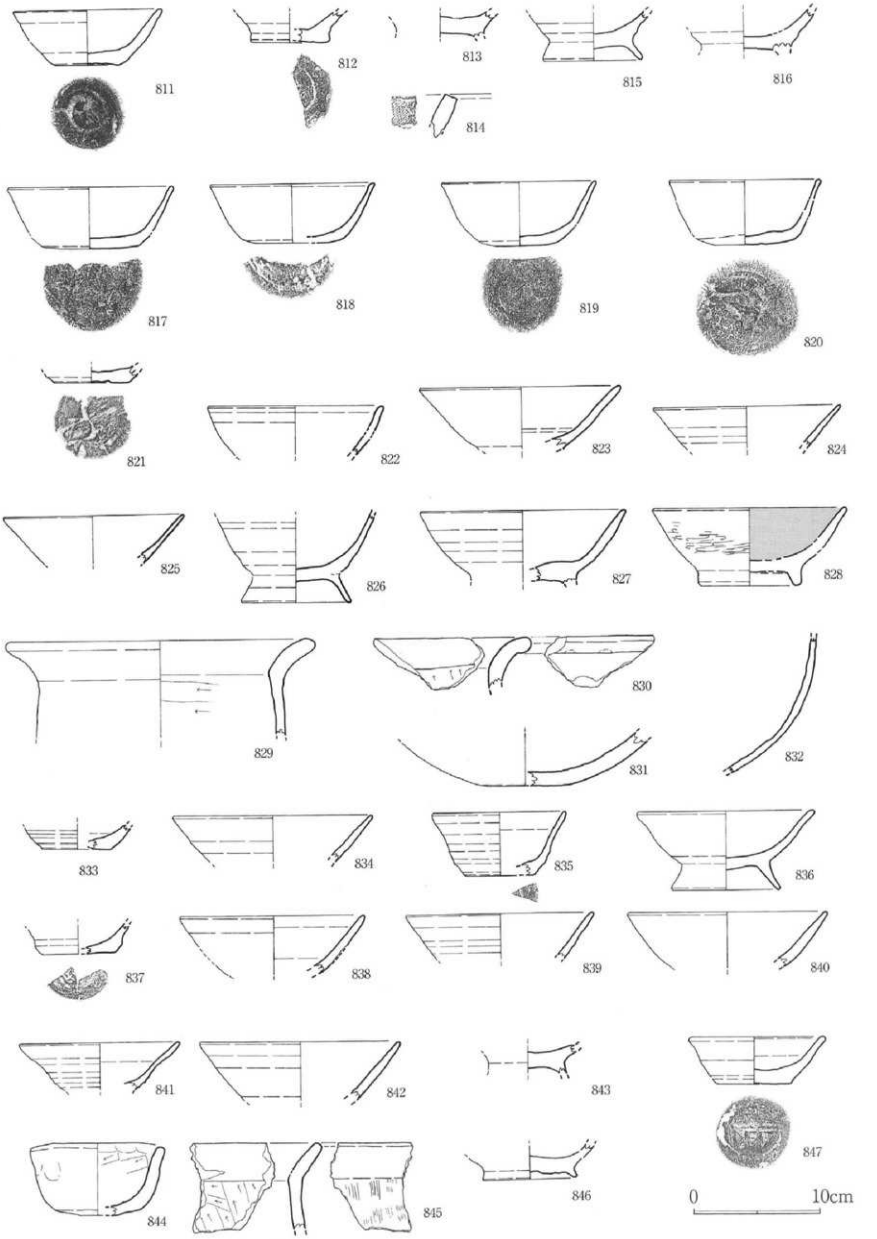
A・1：砂混じり暗灰色粘石層
B・2：黒灰色礫化面（黄色粒石多・白色粒石斑多）25mm Ⅵ
3：暗灰色礫化面（白色粒石斑多・黄色粒石斑小）3mm
C 4：灰白色礫化面（白色粒石＋砂）3.2mm
5：白色粘石層（主層）
6：黒褐色粘質シルト土（黄色・白色粒石多）
7：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石斑多・白色粒石多）
8：黒褐色礫化面（黄色粒石斑多・白色粒石極小）2.7mm
D 9：暗褐色粘質シルト土（黄色粒石極多・所々ブロック状）
10：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
11：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多・白色粒石極小）
12：黒褐色礫化面（黄色粒石多）2.2mm
E・13：砂混じり黒褐色粘質シルト土（黄色粒石極多）
14：黄色粘石＋砂
15：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石極多）
F 16：黒色粘質シルト土
17：黒色礫化面
18：暗褐色粘質シルト土（黄色粒石極多）
19：灰黒色粘質シルト土（黄色粒石＋白色粒石極少）
G 20：黄色粘石（ヨゴレ）＋砂＋暗色土
21：暗褐色粘質シルト土（黄色粒石・白色粒石含）
22：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
23：灰黒色礫化面（黄色粒石多・白色粒石少）2.7mm
H 24：灰黒色礫化面（黄色粒石多・白色粒石少）3mm
25：暗褐色礫化面（黄色粒石極多）
26：暗褐色粘質シルト土（黄色粒石極多）
27：灰黄色砂質土（黄色粒石＋砂混じり）
28：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）＋砂
I 29：灰黒色礫化面（黄色粒石多・白色粒石）3mm
30：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
31：褐褐色粘質シルト土（黄色粒石極多）
J 32：暗褐色礫化面（黄色粒石斑多）2.6mm
33：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石極）
34：黄色粒石主＋黒褐色粘質シルト土＋砂

35：灰黒褐色粘質シルト土（黄色粒石斑多）
36：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
37：〃
K 38：黒色礫化面（白色粒石多・黄色粒石極多）2.8mm
39：黒色礫化面（白色粒石多・黄色粒石多）2.7mm
40：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
41：黄色粒石＋砂（礫化面）
42：黄色粒石（ヨゴレ）＋砂
43：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
44：黒褐色粘質シルト土（黄色粒石斑多）
45：黒色粘質シルト土（黄色粒石含）
46：暗灰黒色粘質シルト土（黄色粒石極多）
L 47：砂＋黄色粒石（ヨゴレ）
48：黒色礫化面（黄色粒石＋黒色土）
49：4より明るい灰黒色粘質シルト土（黄色粒石極多）
50：砂＋黄色粒石
51：7より細かく砂多

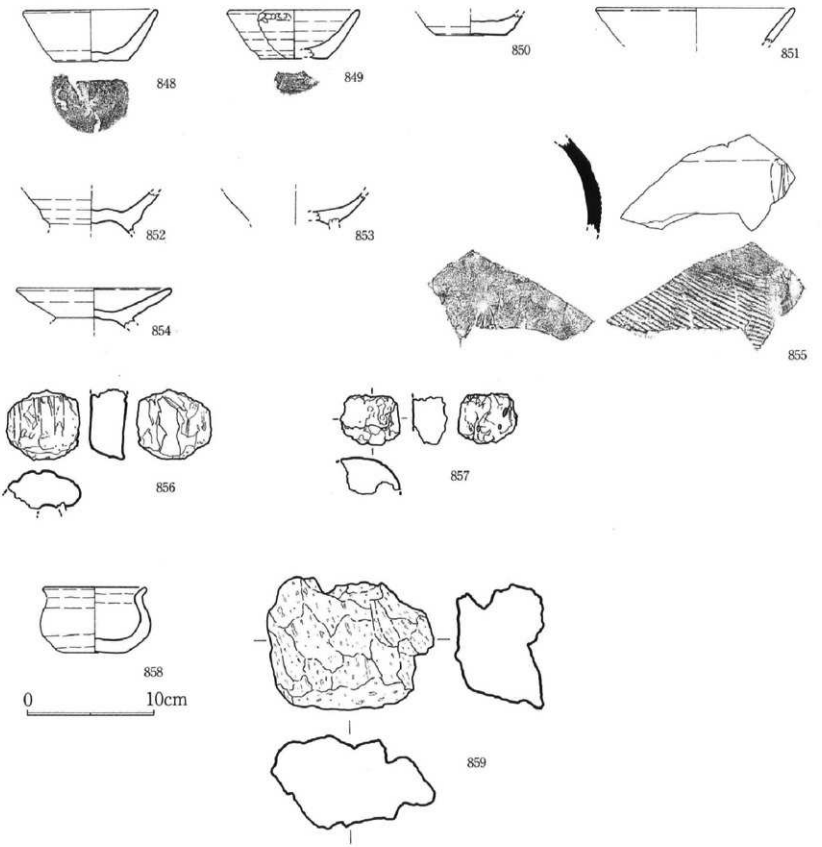
O 59：Ⅷ～X1ブロック＋黄色粒石
60：Ⅷ・Ⅷブロック＋礫プロック＋砂
61：黒色粘質シルト土（黄色粒石多）
P 62：Ⅷ混じり暗灰褐色粘質シルト土（黄色粒石多）
63：Vbブロック＋黒色粘質シルト土（黄色粒石）＋砂
64：黒灰色粘質シルト土（黄色粒石多）
Q 65：黒色粘質シルト土（黄色粒石含）
66：黒灰色粘質シルト土（黄色粒石含）
67：黒色砂質シルト土
68：黒色礫化面（黄色粒石斑多・白色粒石極多）3mm
R 69：暗灰色砂質土（白色粒石多・黄色粒石多）
70：黒色・灰白色・黒色礫化面（白色粒石）

礫化面

第146図　SD11及びSS03



第147図　遺構出土遺物①

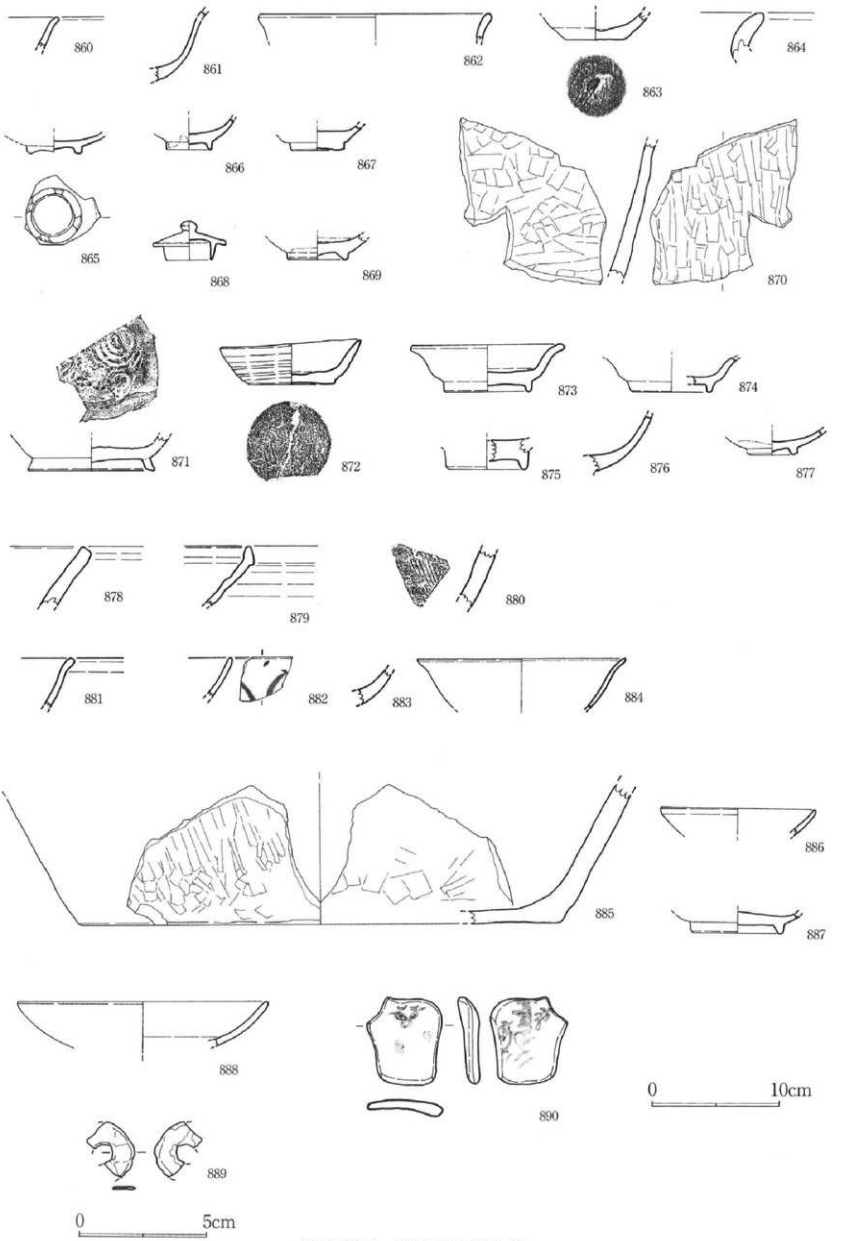


第 148 図　遺構出土遺物②

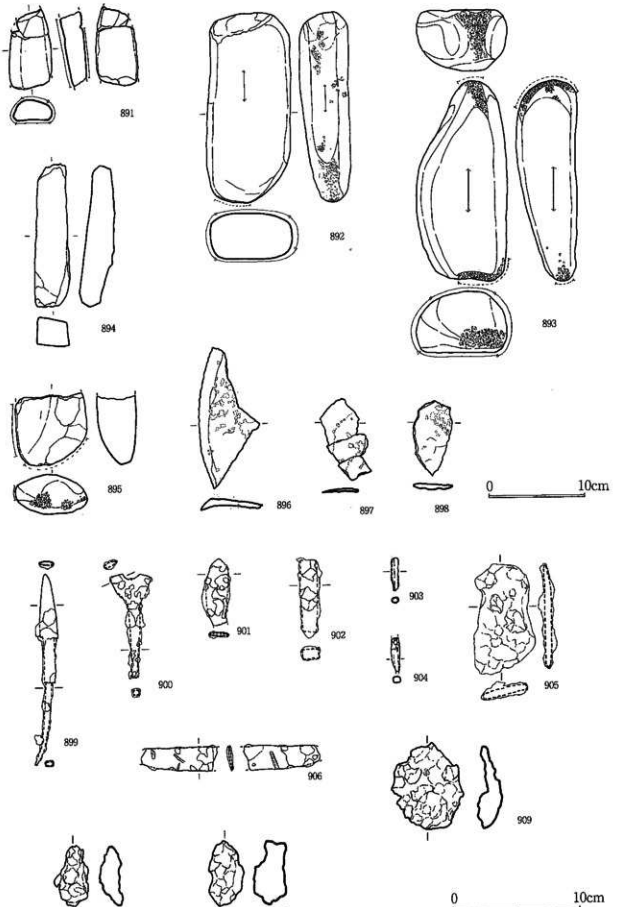
SD12 からは土師器（848 ～ 854）や須恵器（855）と供に鍛冶関連遺物（905・907 ～ 909）が出土している。848 ～ 850 は坏。底部径は 6cm 前後。849 は口縁部外面に工具痕が残る。851 ～ 853 は椀。854 は高台坏皿。856・857 は鞴の羽口で、856 の内径は 2cm 程か。857 は胎土に籾圧痕が多数残る。896 ～ 898 は金床石片で、表面に鉄分が多く付着する。900・901 は鉄鏃。903・904 は釘。905 は鉄素材。906 は刀子片か。909・908 は鉄塊系遺物。909 は椀形滓。この他にも多数の椀形滓が出土している。

SD01・02（第 140 図）

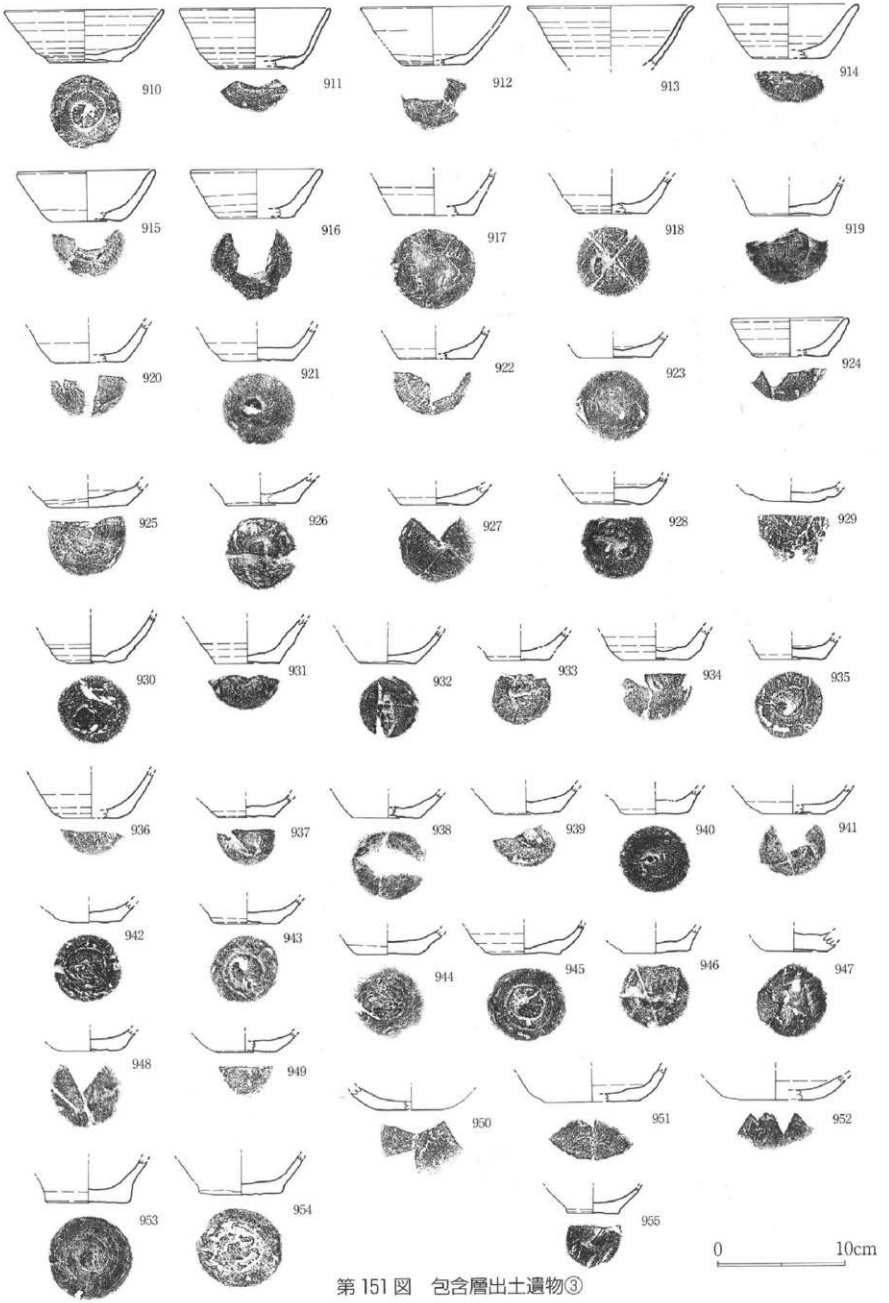
谷底部を東西方向に走行する硬化面を伴う溝状遺構。E 地点の SG 群 1 の SG5 と SE5 である。長さ 32m、幅 5 m程で、深さは最深部で、1.5 mである。溝内に残される硬化面は大きく 4 枚で、最上層が文明軽石降下後のもので、SD02 と共通する。SD01 は東へ向かい低くなる。



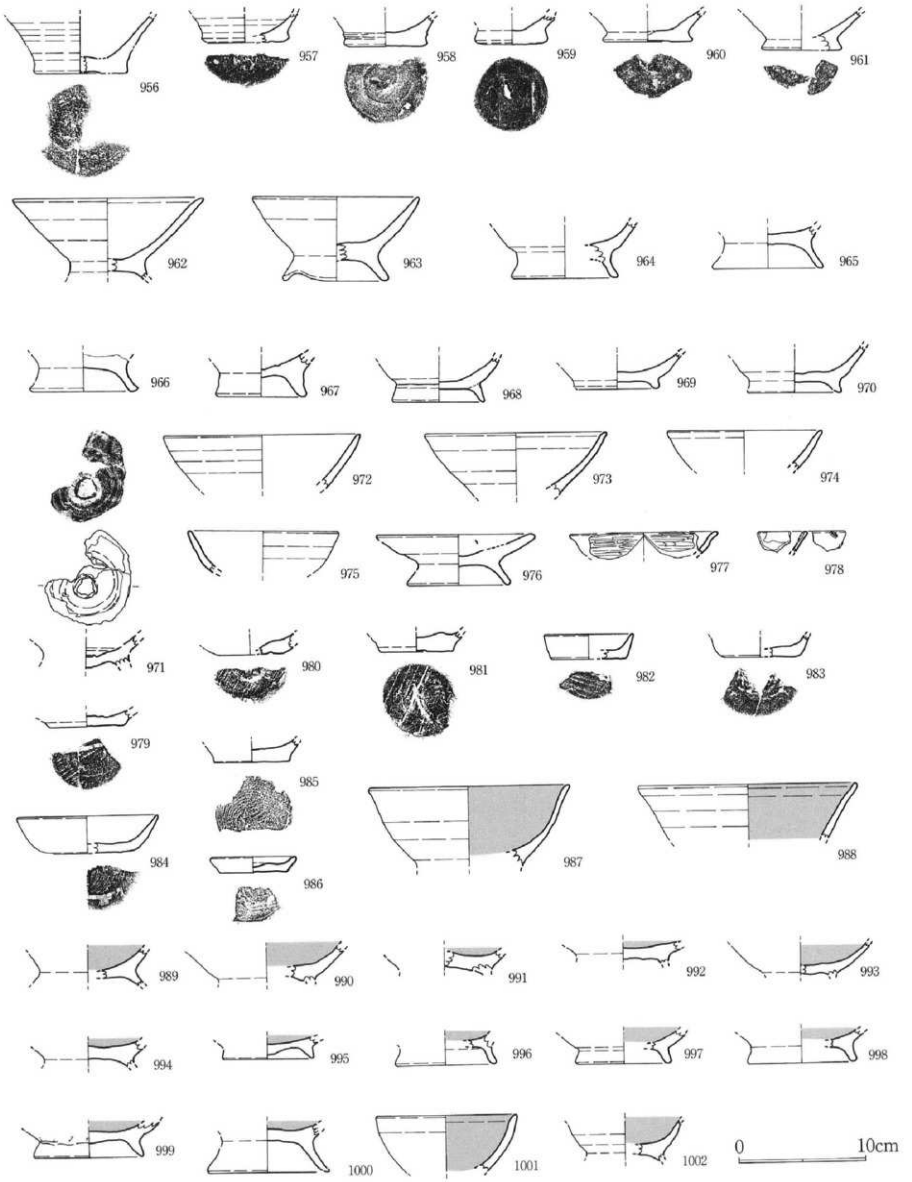
第 149 図　遺構出土遺物③



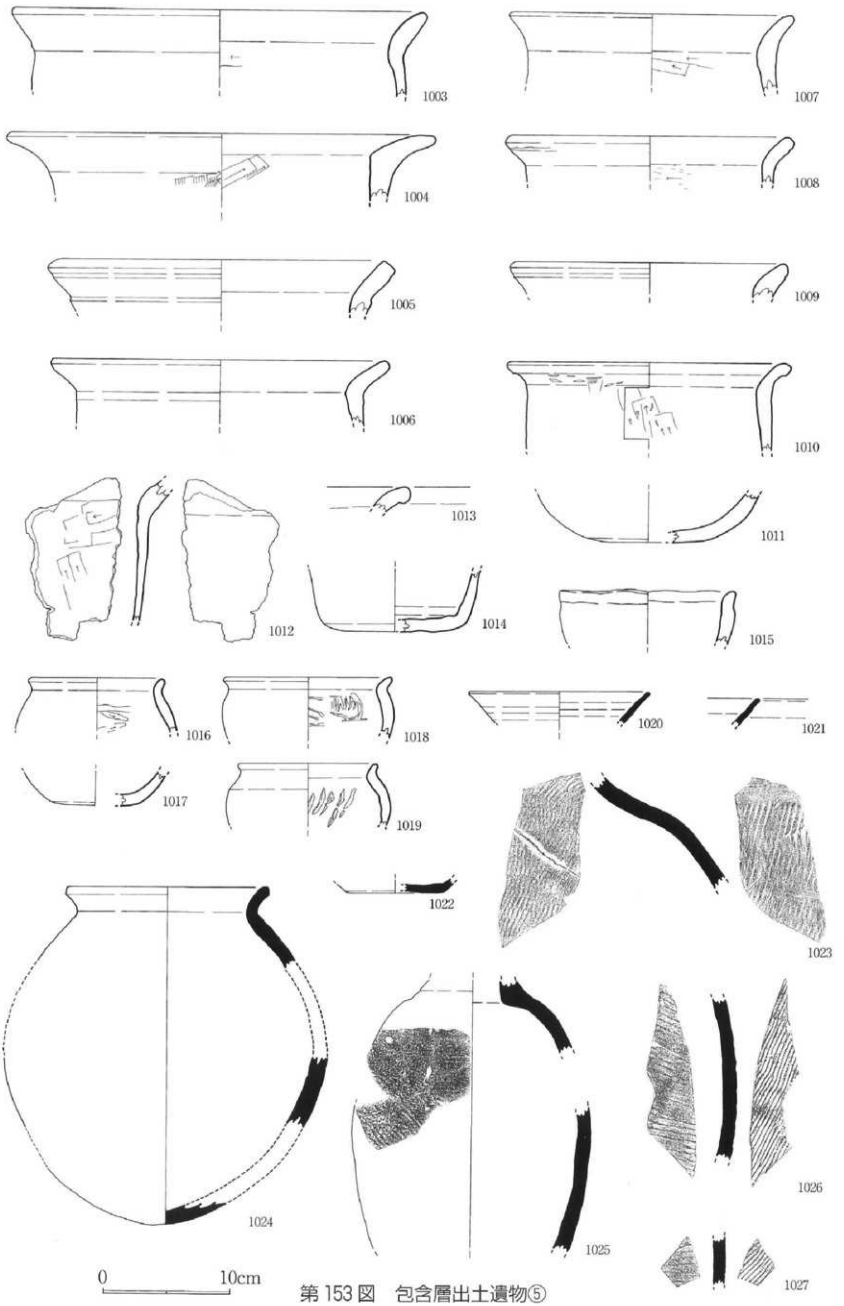
第 150 図　遺構出土遺物④



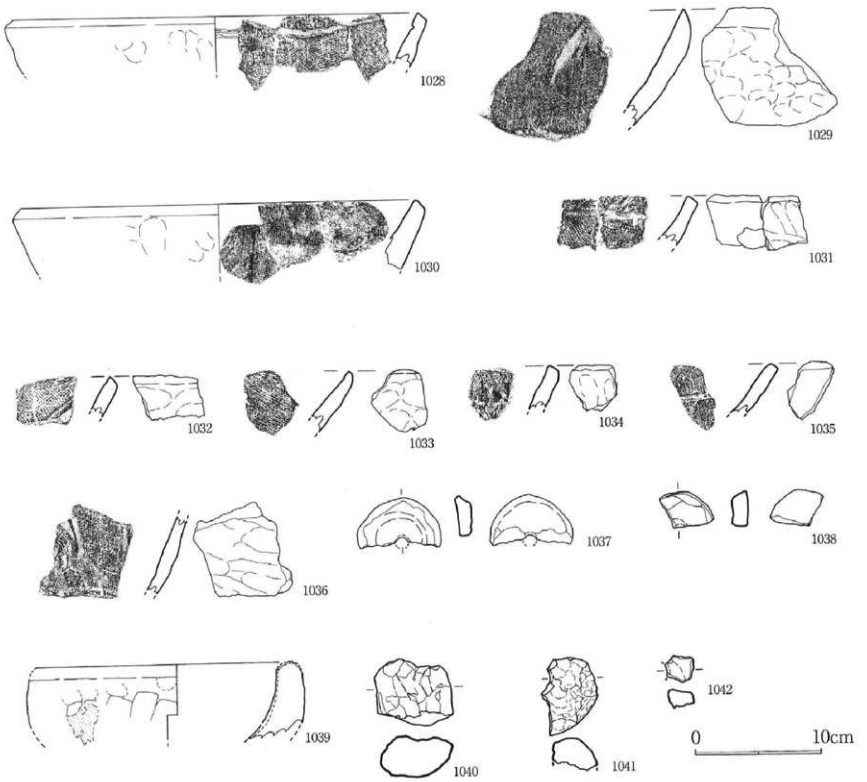
第 151 図　包含層出土遺物③



第 152 図　包含層出土遺物④



第 153 図　包含層出土遺物⑤



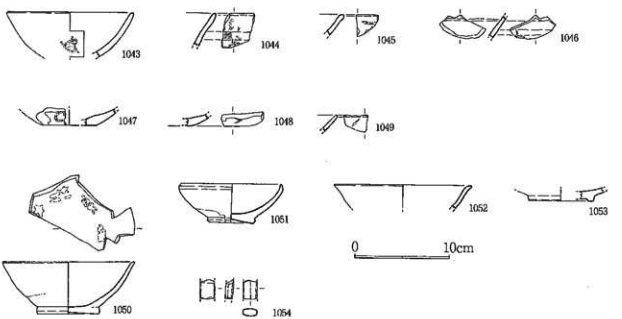
第154図　包含層出土遺物⑥

SD02はE地点のSG 8にあたる。B地点で検出された溝の長さは5m、溝幅1.5m。深さ0.5mである。やはり硬化面を伴っている。硬化面は4枚確認されている。検出時の文明軽石降下後の硬化面はSD01と合流後そのまま南へ延びるようであった。

SD01は調査区外の東側Y－31までは延びることが確認され、Y－28区付近でSD06と合流していることも確認しているが、切り合い関係にあるか一連の遺構であるかについては掘り下げを行っていないため不明である。SD内からは龍泉窯系青磁（860・861）が出土している。

SD06（第141・142図）

SD06は北から南へ調査区を横断する大溝である。V－27区付近で東へ折れる。長さ65m、溝幅1.5～3m、深さ1.5～2mである。溝断面はV－27区より北側は逆フラスコ状を呈し、砂礫層まで掘り込まれている。これは元々V字状に掘られた溝が掘り返しにより徐々に「U」字状に変化した結果と思われる。その名残が断面Cに残る。SD06は文明軽石降下後の硬化面は伴うものの、それ以前の硬化面は認められなかった。SD06はSD12及びSD10より後に構築されたと考えられる。SD06からは溝底部より、切り高台の白磁（865）や天目茶碗（867）、薩摩焼（868・869）や常滑焼の甕（870）などが出土している。



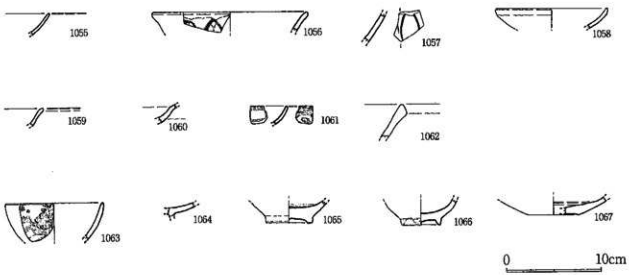
第155図　包含層出土遺物⑦

SD07・08（第141・143図）

SD06の15m東を平行して走行するのがSD07である。その中間T－30区で東へ分岐するのがSD08である。SD07は検出された範囲で長さ40m、幅1～1.5m、深さ0.3～0.6mである。V－29区で東西方向に走る溝と合流する。SD07のすぐ東側は崖状に落ちる。SD08はその崖状の落ち込むように走行する。検出された範囲で長さ6m、幅0.9～2m、深さ0.25～0.5mである。SD07とSD08は断面③から同時存在していたことが窺る。硬化面は伴わず、埋土に砂を含む層が見られる。埋土に文明軽石は含まれない。SD07・08内からは須恵器壷（871）の他、大型の軽石が多く出土しているが、製品等は見られない。

SD13（第141・143図）

S－30区からV－30区で検出された。遺構上位に文明軽石が堆積する。北側で検出した遺構をSD13－2、南側で検出した遺構をSD13－1とした。SD13－2は先述したSD08の延長上に位置し、SD13－2の西側斜面の痕跡から、SD08に関連すると考えられる。西側斜面をほぼ直角に切り崩しているが、直ぐに黄色軽石が埋没し、その後掘りなおされている。SD13－2には機能不明の、南北10m、東西4m程の範囲に2m×1.5～2mの底面が平らな方形の堀り込みが複数見られる。SD13－1はSD13－2の南8mに位置する。南北9m、東西7mの範囲で確認された。溝の掘り直しが行われているが、東西方向の断面では何れも溝底面はほぼ平坦に掘り込まれている。SD13は傾斜地を掘削していると思われ、検出時溝西側の斜面はⅥ層が露出していた。溝東側が調査区外であるため詳細であるが、本来はSD07の東側に地形を利用した大溝があり、SD13はその内の深い部分が残っているものであると考えられる。溝内からは常滑焼甕（885）や白磁（886・887）が出土している他、本来の溝範囲に含まれるU—31区の柱穴より青磁（888）や摩滅した古銭（889）が出土している。SD13では調査中水が湧き出ていた。



第156図　包含層出土遺物⑧

SD09・10（第141・144・145）

SD06の東8m程に位置する。南側はSD06に平行して走行し、V－29区とW－30区で東へ直角に折れ曲がる。検出された溝の長さは約40m、溝幅1.5～5m、深さ0.2～1.3mである。SD09・10はSD12より後に構築されSD06より古い。また、SD07が南で合流する東西方向の溝はSD09に含まれる可能性も残る。北から南に下る傾斜地を掘削して掘られており、掘り直し位置のずれもあるが、溝が屈曲する付近では溝幅が広く平坦に掘られているのも特徴である。SD10は長さ35mを超える。溝幅は1.5～5m、深さは0.4～1.3mである。SD09がある程度埋まった段階で掘り込まれている。

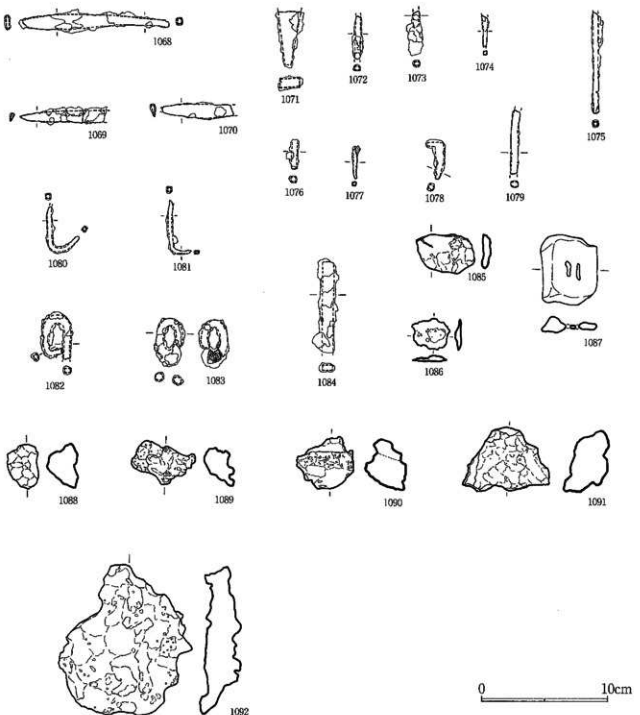
SD09・10は最初にSD09のみが構築され、数回の掘り直しの後、SD10が追加されたものと思われる。その後、おそらくSD09のみが使用され、W－30区で階段状の落ちを形成するものと考えられる。断面Gで文明軽石の硬化面が見られるが、他では検出されていない。また、階段状の落ちでは調査中水が湧き出ていた。遺構内からは底部切り離しが糸切りの土師器坏（872）の他、青・白磁（873～877）が出土している。

SD14（第145図）

W－30区で検出された。範囲は東西4.5m、南北3.5m、溝幅0.7～1.5m、深さ0.5～1mである。西から東に向かい深くなる。遺構西端では大型の軽石が3個固まって出土した。軽石は被熱により赤化していた。埋土には文明軽石を含み、埋土中位に砂層がはさまれる。

SD11（第146図）

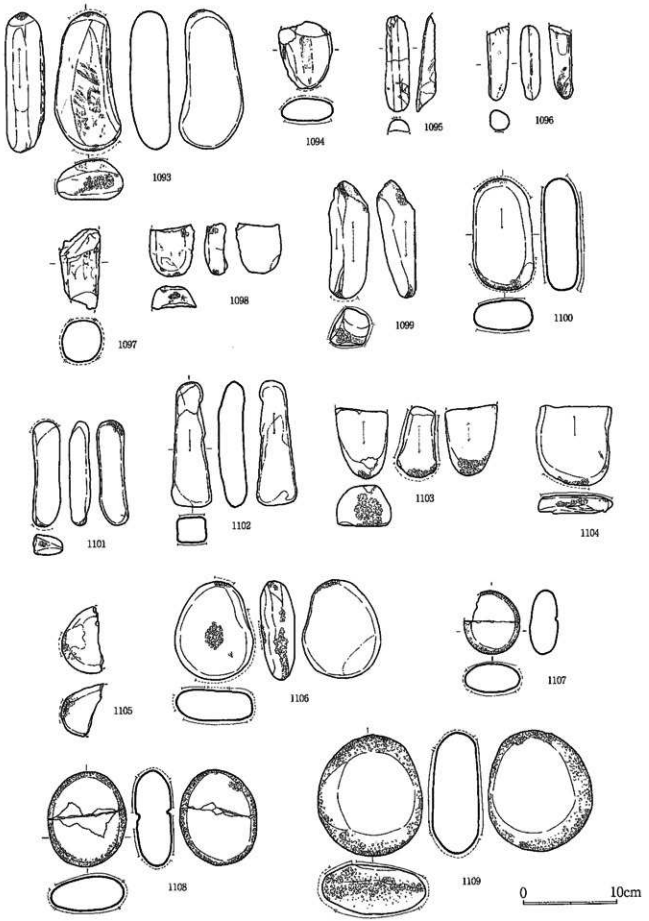
文明軽石が堆積する遺構の中で唯一谷の南に位置する。確認された範囲で、長さ約27m、溝幅5～7m、検出面からの深さ2.2mである。10回以上の掘り直しと埋め戻しを繰り返した結果これだけの規模になったと思われる。溝底部に硬化面を伴う場合と伴わない場合がある。溝断面は、下方では「V」字状に掘られ、上位は浅い皿状や「U」字状を呈す。埋土には下層の硬化面ブロックを含むものも見られる。遺構はA2－31区で直角に折れ曲がる。この付近で先述したSS03が埋土「H」の硬化面に掘り込まれている。溝最下層の硬化面幅は約1mである。



第157図　包含層出土遺物⑨

SD11の「K」段階より備前焼擂鉢（880）が、「C・D」段階で龍泉窯系青磁（881～848）が出土している他、瓦質土器（878）や東播系の捏鉢（879）が出土している。また、溝内からは多量の軽石も出土している。

先述したようにSD11は文明軽石を含む遺構の中で唯一谷より南に位置する。調査区全体で、北から南に伸びる溝状遺構はSD06・07・08・09・11が挙げられる。これらは何れも溝途中で南東へ折れ曲がっている。文明軽石降下後段階を除けばSD11以外は硬化面を伴なわない。



第 158 図　包含層出土遺物⑩

（5）包含層出土遺物

V～X－25～27区を中心に土師器坏・椀・黒色土器・墨書土器・土師甕・須恵器・布痕土器・陶磁器類・鉄器及び鍛冶関連遺物が出土している。

B地点で最も出土量が多いのは土師器坏である。完形品は少ないが、底部のみの資料を中心に相当数出土している。910～961は坏である。遺構出土品を中心に復元出来る資料14点の口径から大きく3つに分かれる。①口径10.4～11.2cm②口径11.8cm～12.6cm③口径13cm以上である。また、底径が復元可能な資料から底径は5cm前後、6cm前後、7cm前後である。①・②は器高が5cm以下とそれ以上に分かれるようだ。③はSS02の819～820のみである。椀は口径13センチ以上で、高台が長く伸びるものと、短い「ハ」の字状を呈するもの（967～970）がある。底径は前者が8cm以上、後者が7cm前後である。その他台付皿（976）やミガキ椀（977）、口縁部内面に籾痕を有する978や、見込みに布痕とドーナツ状の盛り上がりが見られる971などが出土している。979～982は底部に板状圧痕、984～986の底部切り離しは糸切り。987～1002は黒色土器である。土師器の出土量に対し、黒色土器の出土は少ない。999は高台付け根に工具痕が残る。土師甕は復元出来る資料が少ない。1013・1010の口縁部が玉縁状である。1015は小鉢で、1016～1019は小壷である。内面にミガキやケズリの工具痕が残る。須恵器の出土は少ないが、坏片が3点の他甕や壷が出土している。転用硯（1024・1027）も見られる。布痕土器は口縁部資料が多く出土している。墨書土器は7点出土している。その他越州窯系青磁や緑釉陶器（洛北産、近江産）片が数点出土している。1039は坩堝である。この他鞴羽口や、1088～1092などの鍛冶関連遺物が多く出土している。鉄製品は刀子や釘等が出土している。中世陶磁器類は龍泉窯系青磁や白磁が出土している。谷より南側では近世陶磁器がⅡ層中から出土している。石器は礫表面に墨痕が残るものや礫端部に敲打痕が残るものが多い。

B地点では多くの遺構が検出されたが遺構内の出土遺物が少ないため、個々の遺物の時期を特定し難い。SD03・04・05・15・12については埋土に文明軽石を含まず、また、隣接するE地点との関連や出土遺物より、おそらく古代に属する遺構と思われる。また、これらに並行するように位置するSB群についてもおそらく古代に属する可能性が高い。これらのSB群は谷より北のSB29・32・33・34の一群と谷より南の一群とで規模が大きく異なる。また、遺構間の切り合いや、SD12の土層状況を考慮すれば一時期ではなくある程度の時間幅が考えられる。

中世の溝状遺構（道路状遺構）は少量ながらも陶磁器類が出土しており、おそらく13世紀～15世紀を中心に構築され、文明軽石降下後も使用されていた可能性が高い。SD01・02・11は谷への道路としての機能が高く、E地点を含めSD01によって囲まれる内部には同時期と考えられる掘立柱建物跡等の遺構が皆無である。また、SD06の大溝は水路や道路という機能は考えられ難く、防御的な役割である可能性が高いものの、SD06の西側にはE地点の小溝状遺構群が認められるのみである。SD07・08・09・10・13についても機能が不明であるが、水に関連する可能性が高い。E地点およびB地点で検出された溝状遺構および道路状遺構は何れも大規模で、一過性のものとは考え難く、横市川流域の同時期の動向も踏まえ、平田遺跡周辺にこれらのSD群に関連する遺跡が存在するものと思われる。

＊計測値の（ ）は反転復元

図番	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層	計測値（cm）			調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
7	1	弥生土器	甕	SA01	1	(32.4)	—	—	ナデ	ナデ	明褐	明褐	雲母多	外面煤付
	2	弥生土器	甕	SA01	1	(31.0)	—	—	ハケ・ナデ	ナデ	橙	橙	雲母	外面煤付
	3	弥生土器	甕	SA01	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	雲母	煤付
	4	弥生土器	甕	SA01	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色・雲母	煤付
8	6	弥生土器	甕	SA02	1	—	—	—	ハケ後ナデ	ナデ	橙	橙	赤褐・雲母	外面煤付
	7	弥生土器	甕脚部	SA02	1	—	8.0	—	ナデ	ナデ	黒褐	橙	雲母・長石	穿穴内出土
9	11	弥生土器	甕	SA03	1	—	—	—	ナデ	ナデ	灰白	にぶい黄橙	赤褐・黒色	
11	13	弥生土器	鉢	SA04	2	21.4	—	—	ハケ・ミガキ	ハケ・ミガキ	橙	橙	黒・白・赤	頸部暗文状ミガキ 外面煤
	14	弥生土器	甕	SA04	2	(24.3)	—	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	明赤褐	明赤褐	雲母・白	外面煤付
	15	弥生土器	甕	SA04	2	(25.6)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	赤褐	
	16	弥生土器	甕	SA04	2	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	雲母	口唇部横撫
	17	弥生土器	底部	SA04	2	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐	橙	白・雲母	
	18	弥生土器	底部	SA04	2	—	(6.7)	—	ナデ	ナデ・磨耗	橙	橙	赤褐・雲母	底部織維庄痕
13	29	弥生土器	壺	SA05	4	6.0	—	—	工具ナデ	ハケ	灰褐	橙	灰白	
	30	弥生土器	甕	SA05	3	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	長石・石英	内外面煤付
	31	弥生土器	高杯	SA05	2	(25.4)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤褐・石英	外面黒斑
14	36	弥生土器	甕	SA06	1	—	—	—	ナデ	ハケ	褐	黒褐	雲母	外面煤付
	37	弥生土器	壺	SA06	1	—	—	—	磨耗	ナデ	橙	橙	雲母	
15	39	弥生土器	甕	SA08	4	—	—	—	ナデ	ハケ→ナデ	橙	橙	白色・雲母	
	40	弥生土器	壺	ST01	2	(6.9)	—	—	ナデ	ナデ	橙～褐灰	橙	褐・灰	
16	43	弥生土器	甕	SA09	1	—	—	—	ナデ	ナデ	暗褐	褐	白	
	44	弥生土器	底部	SA09	1	—	(5.8)	—	ハケ	ナデ	橙	褐灰	白・黒	外面煤付
17	50	弥生土器	甕	SA11	1	—	—	—	ハケ後ミガキ	ハケ	黒褐	灰褐	長石・赤褐	割れ炭煤付
	51	弥生土器	甕	SA11	1	—	—	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	
19	58	弥生土器	甕	SA12	1	29.2	—	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・雲母	外面煤付
	59	弥生土器	甕	SA12	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	雲母・白	突帯調査	
	60	弥生土器	甕	SA12	1	—	—	—	ナデ	ハケ	橙	にぶい橙	雲母・白	外面煤付
	61	弥生土器	甕	SA12	1	—	—	—	ハケ	ナデ	暗褐	暗褐	雲母・白	外面煤付
	62	弥生土器	甕脚部	SA12	1	—	7.6	—	ハケ	ナデ	黒	にぶい黄橙	褐・黒	
	63	弥生土器	甕脚部	SA12	1	—	6.2	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	黒褐	白・石英	
	64	弥生土器	壺	SA12	1	(15.5)	—	—	丁寧ミガキ	ナデ	褐	浅黄橙	褐・黒	口唇部浮文
20	67	弥生土器	甕	SA13	1	(28.7)	—	—	ハケ	ナデ	暗褐色	褐色	雲母	SA14と接合
	68	弥生土器	壺	SA13	1	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤褐	黒褐	雲母	
	69	弥生土器	底部	SA13	1	—	6.2	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	黒	
24	113	弥生土器	甕	SA14	1	(27.6)	—	—	ナデ・磨耗	ナデ	褐	褐	雲母	外面煤付
25	131	弥生土器	壺	SA15	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	雲母・長石	外面煤付
	130	弥生土器	甕	SA15	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	雲母・長石	外面煤付
26	135	弥生土器	甕	SA16	1	—	—	—	ナデ	ナデ	褐	にぶい赤褐	雲母・石英	外面煤付
	136	弥生土器	甕	SA16	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	雲母・石英・長石	
27	141	弥生土器	甕	SA17	Y	—	—	—	ハケ	工具ナデ	にぶい黄橙	橙	石英・長石・赤褐	円形調落
29	143	弥生土器	長頸壺	SA18	1	(6.7)	2.6	20.3	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐・黒・石英・長石	
	144	弥生土器	鉢	SA18	Y	10.9	3.2	9.4	ミガキ	ミガキ	浅黄	黒～灰黄	白	体部断状の炭化物
	145	弥生土器	鉢	SA18	1	12.7	4.3	9.5	ミガキ状ナデ	ナデ	橙	橙	黒・白	
	146	弥生土器	ミニチュア	SA18	Y	9.7	3.8	7.0	工具ナデ	ナデ	橙	橙	赤・黒・白	外面煤付
	147	弥生土器	壺	SA18	1	—	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	褐	褐	雲母・長石・石英	
	148	弥生土器	底部	SA18	1	—	6.3	—	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	褐	褐	雲母・長石・石英	
	149	弥生土器	鉢？	SA18	1	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	石英・灰・白・赤褐	
	150	弥生土器	高杯	SA18	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤・石英・黒	
31	163	弥生土器	甕	SA19	2	(32.0)	—	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白・褐	外面煤付
	164	弥生土器	甕	SA19	2	(26.8)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・石英・長石	外面煤付
	165	弥生土器	壺	SA19	2	—	—	—	ナデ	ハケ	明赤褐	明赤褐	雲母・石英・長石	外面煤付
	166	弥生土器	底部	SA19	2	—	6.9	—	工具ナデ	剥落	にぶい黄橙	褐灰	黒・石英・長石	

＊計測値の（ ）は反転復元

図番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層	計測値（cm）			調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
32	172	弥生土器	壺	SA22	1	—	—	—	ナデ	ナデ	褐	にぶい褐	白	
34	174	弥生土器	鉢	SA23	2	(24.5)	—	—	ハケ	ハケ？磨耗	黄灰	にぶい黄橙	黒・赤褐	外面煤付
	175	弥生土器	壺	SA23	1・2	(22.6)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	白・雲母	外面煤付
	176	弥生土器	甕	SA23	2	(21.6)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい橙	赤・雲母・白	
	177	弥生土器	鉢	SA23	2	(17.4)	—	—	ナデ	ハケ	浅黄橙	灰黄褐	雲母・白・褐	外面煤付
	178	弥生土器	甕	SA23	1	(30.4)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤・黒・石英	
	179	弥生土器	壺	SA23	2	(25.6)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい橙	赤・黒	外面煤付
	180	弥生土器	鉢	SA23	1・2	(32.6)	—	—	ハケ	ナデ	橙	橙	赤・灰白・石英	
	181	弥生土器	壺	SA23	1	(15.4)	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ	浅黄橙	にぶい橙	赤・黒	
	182	弥生土器	甕	SA23	2	(11.0)	—	—	ミガキ・磨耗	ハケ後ナデ	橙	橙	赤・石英	
	183	弥生土器	壺	SA23	2	(19.5)	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤・黒・石英	
	184	弥生土器	壺	SA23	2	(22.6)	—	—	ナデ	ハケ	にぶい黄橙	浅黄橙	白	
	185	弥生土器	壺	SA23	2	(17.4)	—	—	ナデ	ナデ	灰白	浅黄橙	褐・黒	
	186	弥生土器	壺	SA23	2	—	—	—	ミガキ・磨耗	ハケ	黄橙	浅黄～黄灰	白・石英・褐	
	187	弥生土器	底部	SA23	2	—	6.8	—	ナデ・磨耗	ナデ・磨耗	黄灰	黄灰	石英多・赤褐	
	188	弥生土器	底部	SA23	2	—	6.2	—	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	赤褐	内面煤付
	189	弥生土器	底部	SA23	2	—	7.3	—	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	白	内面煤付
	190	弥生土器	ミニチュア	SA23	2	6.8	2.4	6.4	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	灰白	浅黄橙	石英・褐・黒	外面煤付
37	212	弥生土器	甕	SA24	2	(31.6)	—	—	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	明黄褐	橙	石英・赤褐・黒	外面煤付
	213	弥生土器	壺	SA24	1	(23.4)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	浅黄	石英・褐	外面煤付
	214	弥生土器	甕	SA24	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙～黒褐	にぶい黄橙～黒褐	黒・石英	外面煤付
	215	弥生土器	鉢	SA24	1	(16.8)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	黒	
	216	弥生土器	鉢	SA24	2	24.4	8.0	17.1	ミガキ	ナデ・磨耗	褐	にぶい橙		
	217	弥生土器	底部	SA24	2	—	6.5	—	工具ナデ	ナデ	灰褐	黒褐	石英・白・黒・褐	
	218	弥生土器	底部	SA24	2	—	5.0	—	ハケ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙～褐灰	褐・石英・粗	外面煤付
	219	弥生土器	底部	SA24	2	—	(6.8)	—	ナデ	ナデ・剥離	橙	橙	褐・黒・白・石英	内面煤付
	220	弥生土器	底部	SA24	2	—	5.8	—	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	黄橙	黄橙	石英・黒	外面煤付
	221	弥生土器	底部	SA24	2	—	(7.8)	—	ナデ	ミガキ	褐灰	にぶい黄橙	石英・長石多	
40	228	弥生土器	壺	SA25	1	(26.3)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	褐灰	石英多・白	外面煤付
	229	弥生土器	鉢	SA25	1	—	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ	灰黄	浅黄	黒	
43	234	弥生土器	甕	SA27 SA28	2・1	27.2	7.6	26.5	工具ナデ	ナデ	橙	橙	赤・黒・白	内面黒斑
	235	弥生土器	壺	SA27 SA28	1	18.8	—	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	橙	橙	赤・黒・白	
	236	弥生土器	甕	SA27	1・2・Y	(30.0)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・灰・黒	外面煤付
	237	弥生土器	壺	SA27	2	(18.8)	—	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	橙	橙	灰・褐	外面煤付
	238	弥生土器	甕	SA27 SA28	1・2/1	(21.6)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	黒・褐	外面煤付・黒斑
	239	弥生土器	鉢	SA27	1・2	—	—	—	工具ナデ	ハケ後ナデ	橙	橙	黒 粗	
	240	弥生土器	甕	SA27	Y	—	—	—	ハケ	ナデ	橙	橙	褐 粗	
	241	弥生土器	底部	SA27	2・Y	—	7.2	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	褐・灰 粗	外面磨滅痕
	242	弥生土器	甕	SA27	1・2	(13.8)	4.3	14.3	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい赤褐	白・石英 粗	
	243	弥生土器	底部	SA27	Y	—	(6.4)	—	ナデ	ナデ・剥落	橙	橙	褐・白 粗	外面黒斑
	244	弥生土器	底部	SA27	Y	—	7.6	—	ハケ後ナデ	ナデ	橙	橙	灰・褐・黒	黒斑
	245	弥生土器	底部	SA27	2	—	(5.8)	—	ナデ	ナデ	赤橙	橙	石英・赤・黒・灰	
	246	弥生土器	底部	SA27	2	—	8.4	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	石英・長石	
	247	弥生土器	底部	SA27	Y	—	(6.6)	—	ナデ	ナデ	橙	橙	黒・褐	
	248	弥生土器	底部	SA27	2	—	5.4	—	ナデ	剥落	橙	橙	赤・黒・白	底部織維圧痕
	249	弥生土器	鉢	SA27	2・Y	23.5	8.2	—	工具ナデ	ナデ	橙	褐灰	白・石英多	外面煤付
	250	弥生土器	壺	SA27	1・2	(13.8)	5.5	35.8	ナデ	ナデ	橙	橙	黒・褐	外面黒斑

＊計測値の（　）は反転復元

図番番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	備考
43	251	弥生土器	壺	SA27	1・2・Y	15.3	4.5	29.8	ミガキ	ハケ後ナデ	橙	にぶい橙	黒	
	252	弥生土器	壺	SA27	＊	9.2	—	—	ミガキ	ナデ	橙	橙	褐・灰・黒	櫛描波状文
44	253	弥生土器	壺	SA27	2	(7.8)	5.0	16.1	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐		
	254	弥生土器	壺	SA27	1・2	(13.4)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	灰・褐	外面繊維痕
	255	弥生土器	壺	SA27	Y	(12.5)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	灰・褐	外面黒斑
	256	弥生土器	壺	SA27	2・Y	—	(3.0)	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	白・黒	外面黒斑
	257	弥生土器	壺	SA27	1・2	—	(5.5)	—	ナデ・剥離	ナデ	橙	橙	褐・黒・白	外面煤付着(表面剥離後)
	258	弥生土器	壺	SA27	1・2・Y	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄	黄灰	長石・石英	線刻
	259	弥生土器	壺	SA27	2	—	2.0	—	ナデ・ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒・褐	外面黒斑
	260	弥生土器	長頸壺	SA27	1・2	9.6	(3.9)	24.4	ミガキ	ナデ	明赤褐	明赤褐	褐・灰	線刻あり
	261	弥生土器	長頸壺	SA27	1・2・Y	(10.5)	—	—	ミガキ	ハケ	にぶい橙	にぶい橙	褐・石英	
	262	弥生土器	長頸壺	SA27	2	(8.7)	—	—	ミガキ	ハケ	橙	橙	灰・褐	内外黒斑
	263	弥生土器	長頸壺	SA27/Vaa	1・2/Va	—	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ	橙	浅黄橙	灰・褐	
	264	弥生土器	長頸壺	SA27	2・Y	—	—	—	ミガキ	ナデ	褐灰	灰	石英・赤褐	沈線＋重弧文 免田式
	265	弥生土器	高坏	SA27	1・2・3・Y	27.7	—	—	ミガキ	ミガキ	橙	橙	褐・黒	
	266	弥生土器	高坏	SA27	Y	—	15.0	—	ミガキ	ナデ	黄橙	黄橙	褐・黒	円形透かし
	267	弥生土器	高坏	SA27	1・2・Y	-	—	—	ミガキ	ミガキ	灰黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	268	弥生土器	小型鉢	SA27	UY	(9.4)	4.9	9.0	ミガキ	ナデ	橙	橙	石英多	黒斑
	269	弥生土器	小型鉢	SA27	Y	—	(5.5)	—	ナデ	ハケ	橙	橙	褐・灰・黒	黒斑
	270	弥生土器	小型鉢	SA27	2	(13.4)	(6.0)	10.1	ナデ	ナデ	橙	橙	石英・長石	
	271	弥生土器	小型鉢	SA27	2	(10.4)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒粒	
	272	弥生土器	小型鉢	SA27	Y	(13.8)	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	長石・石英	黒斑
	273	弥生土器	小型鉢	SA27	2・Y	14.4	4.5	11.5	ナデ	ナデ	橙	橙	黒・白	
	274	弥生土器	小型鉢	SA27	2・4・UY	(10.7)	4.5	8.0	ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	赤・黒・白	黒斑
	275	弥生土器	ミニチュア	SA27	1・2	(6.8)	3.0	6.6	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒・白	
	276	弥生土器	ミニチュア	SA27	2・3・Y	(7.5)	3.0	7.0	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	割れ後煤付
	277	弥生土器	ミニチュア	SA27	2	—	3.7	—	指オサエ	ナデ	橙	橙	白・黒	
47	294	弥生土器	甕	SA28	1	(28.8)	7.8	44.8	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい橙	褐	内外面黒斑、外面煤
	295	弥生土器	甕	SA28	1	(28.6)	—	—	工具ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰・褐	外面煤付
	296	弥生土器	甕	SA28	1	(24.2)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐	外面煤付
	297	弥生土器	甕	SA28	1	(18.5)	—	—	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・石英	外面煤付
	298	弥生土器	甕	SA28	1	(17.4)	—	—	ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐	外面煤付
	299	弥生土器	甕	SA28	1	—	5.2	—	磨耗	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・石英	内面黒斑
	300	弥生土器	甕	SA28	1	—	7.2	—	工具ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	内外面煤付
	301	弥生土器	甕	SA28	1	—	(4.5)	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	赤褐・黒	外面煤付
	302	弥生土器		SA28	Y	—	7.7	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	黒	白・石英	
	303	弥生土器		SA28	1	—	5.6	—	ナデ・磨耗	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐	
	304	弥生土器	底部	SA28	1	—	7.5	—	ハケ	ナデ	浅黄橙	黒	赤褐・黒	外面顔料付
	305	弥生土器	小型甕	SA28	Y	(13.2)	—	12.2	ハケ後ミガキ	ナデ	橙	明赤褐	赤褐・黒・白	外面黒斑
	306	弥生土器	小型甕	SA28	1	(10.4)	—	—	ナデ	工具ナデ	淡黄	浅黄橙	黒	外面煤付着
	307	弥生土器	壺	SA28	1	19.1	7.0	—	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤褐・黒・白	

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
48	308	弥生土器	壺	SA28	1	—	8.3	—	ナデ	ナデ	橙	褐灰	白・灰・黒	
	309	弥生土器	鉢	SA28	1	(11.5)	5.3	(25.6)	ミガキ状ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	赤褐	
	310	弥生土器	壺	SA28	1	13.0	(5.2)	30.0	ハケ	工具ナデ	にぶい黄橙	灰	赤褐	破断
	311	弥生土器	底都	SA28	1	—	7.8	—	工具ナデ	ハケ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	
	312	弥生土器	底部	SA28/SA27	2/2	—	4.0	—	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤褐・灰	外面黒斑
	313	弥生土器	底都	SA28	1	—	(4.5)	—	ハケ	ナデ	明黄褐	橙	赤褐	
	314	弥生土器	長頸壺	SA28/V a a	1/V a	(9.1)	—	—	ミガキ	工具ナデ	橙	橙	褐・黒	
	315	弥生土器	長頸壺	SA28	1	(8.7)	—	—	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・石英・長石	
	316	弥生土器	長頸壺	SA28	1	8.8	—	—	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐	
	317	弥生土器	長頸壺	SA28	1	—	—	—	ミガキ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	褐・灰	
	318	弥生土器	長頸壺	SA28	1	—	—	—	ミガキ	ナデ・ミガキ	にぶい橙	浅黄橙	褐・石英	
	319	弥生土器	壺	SA28	1	—	3.5	—	工具ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	赤・黒・白	擬漏
	320	弥生土器	長頸壺	SA28	1・2	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	褐灰	赤褐・石英・黒	沈線＋重弧文発出式
	321	弥生土器	高坏	SA28	2	(26.7)	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐・黒・石英	円形透かし
	322	弥生土器	高坏	SA28	1	—	(18.0)	—	工具ナデ	ナデ	橙	橙	赤・黒・白	円形透かし
	323	弥生土器	高坏	SA28	2	—	—	—	磨滅	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒・石英	
	324	弥生土器	高坏	SA28	1	—	—	—	磨滅	ナデ	灰褐	にぶい橙	褐・黒・石英	
	325	弥生土器	高坏	SA28	Y	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐	
49	326	弥生土器	鉢	SA28	1	(26.8)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英・長石	外面煤付
	327	弥生土器	鉢	SA28	1	(19.0)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐	
	328	弥生土器	鉢	SA28	1	(12.2)	4.6	8.8	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	石英・長石・赤褐	
	329	弥生土器	鉢	SA28	1・Y	10.5	(4.0)	7.5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	橙	橙	褐・黒	
	330	弥生土器	鉢？	SA28	1	(7.6)	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・黒	
50	334	弥生土器		ST02	1	—	—	—	ナデ・爪痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母	外面煤付
	335	弥生土器	壺	ST02	1	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤・石英・黒	外面煤付
	336	弥生土器	壺	ST02	1	—	—	—	ナデ	ハケ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	雲母・長石	
51	337	弥生土器	甕	ST05	2	17.2	5.4	17.5	ハケ後ナデ	ハケ・ナデ	橙～にぶい黄橙	橙～にぶい黄橙	褐・石英	外面煤付
	338	弥生土器	甕	ST05	2	—	3.2	—	ハケ・ミガキ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	外面煤付、輪積痕
	339	弥生土器	甕	ST05	2	—	—	—	ハケ・ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	赤褐・石英	外面煤付
	340	弥生土器	甕	ST05	2	13.8	—	—	ナデ・ミガキ	ナデ	灰白	灰黄	黒・褐	
52	342	弥生土器	器台	ST03	1	22.2	22.5	18.0	ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	黒・褐	
	343	弥生土器	壺	ST03	1	(11.6)	(6.0)	16.8	ハケ	ナデ	浅黄橙	明褐灰	黒・褐	
	344	弥生土器	長頸壺	ST03	1	(11.4)	—	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	黒	頸部沈線
	345	弥生土器	底都	ST03	1	—	6.4	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	黒・褐	内面銅料付
53	347	弥生土器	壺	ST04	1	(23.0)	—	—	工具ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	黒・褐	
	348	弥生土器	壺	ST04	1	—	4.5	—	ナデ	ハケ後ナデ	橙	にぶい黄橙	褐	
	349	弥生土器	鉢	ST04	1	9.4	5.6	6.8	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	黒・白多	黒漆
	350	弥生土器	壺	ST06	1	—	—	—	施朱	施朱	赤橙	赤褐	黒・赤褐	朱塗り
	351	弥生土器	壺	ST06	1	(27.8)	8.0	30.9	ハケ	ハケ	橙～にぶい黄橙	橙～にぶい黄橙	黒・白・褐	外面煤付
55	352	弥生土器	壺	ST07	1	38.6	—	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	褐	内外面煤付
	353	弥生土器	壺	ST07	1	25.2	8.0	38.1	ハケ・ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	褐・黒	内外面煤付
	354	弥生土器	壺	ST07	1	31.4	—	—	工具ナデ・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒・白	外面煤付
	355	弥生土器	壺	ST07	1	(24.4)	8.5	30.0	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	外面煤付
	356	弥生土器	壺	ST07	1・S	23.8	6.6	23.1	工具ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	褐・白	外面煤付
	357	弥生土器	壺	ST07	1・S	26.5	—	—	工具ナデ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	褐・黒	外面煤付
	358	弥生土器	壺	ST07	1	22.4	—	25.6	ハケ・磨滅	ハケ	褐灰	にぶい黄橙	褐・黒	外面煤付
	359	弥生土器	壺	ST07	1	(23.5)	8.2	(27.3)	ハケ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	褐・黒・白	外面煤付
	360	弥生土器	壺	ST07	1	(23.5)	—	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	橙	褐・黒・白	外面煤付
	361	弥生土器	壺	ST07	1	(25.8)	—	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	褐・黒	外面煤付
	362	弥生土器	底都	ST07	1	30.0	7.8	21.7	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	橙	褐・黒・白	

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
56	363	弥生土器	甕	ST07	1	13.4	4.5	32.7	ミガキ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	褐・黒	外面煤科付
	364	弥生土器	壺	ST07	1	12.4	5.4	(29.5)	ハケ・ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	365	弥生土器	壺	ST07	1	—	—	—	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	366	弥生土器	壺	ST07	1・S	(10.3)	4.5	27.2	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	黄灰	褐・黒	
	367	弥生土器	鉢	ST07	1	(18.0)	—	—	ミガキ	ナデ・ハケ	橙	橙	褐・黒・白	
	368	弥生土器	壺	ST07	1	11.4	5.4	26.7	工具ナデ	ナデ	橙	橙～褐灰	褐・黒・白	線刻
	369	弥生土器	壺	ST07	1	16.7	5.2	23.7	工具ナデ・磨耗	ナデ	淡黄	淡黄	褐	
	370	弥生土器	壺	ST07	1	—	—	—	工具ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	黒斑
	371	弥生土器	鉢	ST07	1	10.0	—	—	磨耗	工具ナデ	浅黄橙	浅黄	褐・黒	
	372	弥生土器	壺	ST07	1	9.0	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	褐・黒	
	373	弥生土器	底部	ST07	1	—	4.5	—	ナデ	ハケ	にぶい黄橙	灰黄褐	褐・黒	黒斑
	374	弥生土器	壺	ST07	1	—	2.4	—	ミガキ	ナデ	にぶい橙	灰褐	褐・黒	線刻・黒斑・墨土粘付
	375	弥生土器	蓋	ST07	1	—	—	—	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい黄橙	褐・黒	外面煤付着
	376	弥生土器	壺	ST07	1	—	(3.8)	—	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	浅黄橙	褐灰	褐・黒・白	
	377	弥生土器	底	ST07	1	18.5	4.3	20.1	工具ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	黒	
57	378	弥生土器	鉢	ST07	1	23.8	9.5	17.6	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・黒	接合成明瞭
	379	弥生土器	鉢	ST07	1	(22.2)	—	—	磨耗	ナデ	橙	橙	褐・白	
	380	弥生土器	鉢	ST07	1	(21.0)	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	灰白	褐	
	381	弥生土器	鉢	ST07	1	(16.9)	—	—	ミガキ	ナデ	橙	橙	褐	
	382	弥生土器	鉢	ST07	1	(25.7)	—	—	ハケ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	褐・白	
	383	弥生土器	鉢	ST07	1	(22.8)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	外面煤付
	384	弥生土器	鉢	ST07	1	(21.8)	—	—	ミガキ	ナデ	にぶい橙	橙	褐・白	
	385	弥生土器	高坏		1/ V a	(23.5)	—	—	ミガキ	ミガキ	橙	橙	褐・黒	沈線
	388	弥生土器	装飾壺	ST08	1	—	—	—	ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙	黒	黒・白	
	389	弥生土器	鉢	ST08	1	(15.0)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
58	390	弥生土器	壺	SQ01	V a	(27.9)	6.8	41.8	ハケ	ハケ・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	
	391	弥生土器	高坏	SQ01	V a	(25.3)	14.0	21.9	磨耗	磨耗	橙	橙	褐・白	
	392	弥生土器	高坏	SQ01	V a	(27.6)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	
	393	弥生土器	壺	SQ01・S5	V a	—	(3.5)	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰	褐	
	394	弥生土器	壺	SQ02	V a	—	(3.7)	—	磨耗	磨耗	にぶい橙	褐灰	褐・白・石英	
	395	弥生土器	甕	SQ02	V a	—	—	—	ナデ	ハケ	明黄褐	褐灰	褐	
	396	弥生土器	壺	SQ02	V a	—	2.2	—	ナデ	ナデ	橙	黒褐	褐・白	線刻
	397	弥生土器	底	SQ02	V a	—	3.8	—	工具ナデ	工具ナデ	浅黄橙	灰	褐・白	
	398	弥生土器	高坏	SQ02	V a	16.6	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	
	399	弥生土器	口縁部	SQ02	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	橙～褐灰	橙～褐灰	褐・白	鋤痕と刻み
	400	弥生土器	LJ縁部	SQ02	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	褐・白	擦痕
	401	弥生土器	口縁部	SQ02	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐多	外面煤付
62	402	弥生土器	底	SC08		(16.1)	—	—	ナデ	ハケ後ナデ	橙	にぶい黄橙	褐・石英	
	403	弥生土器	壺	SC10	1	3.8	2.7	15.4	工具ナデ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	白 輝緑	内外煤付
	404	弥生土器	壺	SC18	1	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	褐・黒	
	405	弥生土器	鉢	SC22	1	(31.1)	—	—	工具ナデ	工具ナデ	橙	褐	石英多	外面煤付
	406	弥生土器	甕	SC38	1		—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	褐・黒	
	407	弥生土器	壺	SC79	1・2	(22.8)	—	—	ハケ	ハケ	橙	橙	褐・石英多	外面煤付
	408	弥生土器	甕	SC79	1・2	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	褐・白	
	409	弥生土器	底部	SC79	1・2	—	4.6	—	ナデ	—	橙	—	白・黒	
	410	弥生土器	壺	SC80	1・2	10.8	4.0	26.5	ハケ	ナデ？	橙	橙	白	内外面煤付
	411	弥生土器	壺	SC80	1・2	—	—	—	ミガキ	ハケ	暗赤褐	暗赤褐	密褐・長石	円形浮文
	412	弥生土器	甕	SC80	1・2	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい橙	石英・長石 赤褐・黒	線刻
	417	弥生土器	高坏	SC82	1	(32.4)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	黒斑
64	419	縄文土器	深鉢	Q6	V a	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	灰黄褐	白・石英	施文
	420	縄文土器	深鉢	M 12	V a	13.2	—	—	ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	石英	突帯文
	421	縄文土器	浅鉢	S10	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐	石英	突帯文 外面煤付

*計測値の（ ）は反転復元

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層	計測値(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	貼土	備考
65	422	弥生土器	甕	表採		(43.1)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	灰褐	雲母	外面煤付
	423	弥生土器	甕	V10	V a	(42.9)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	雲母	
	424	弥生土器	甕	N12	V a	(31.9)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	雲母	
	425	弥生土器	甕	Q11	V a	(27.5)	—	—	ナデ	ナデ	明褐	明褐	雲母	外面煤付
	426	弥生土器	甕	Q11	V a	(38.4)	—	—	ナデ	ナデ・指頭痕	にぶい黄褐	にぶい橙	雲母	
	427	弥生土器	鉢	W5	V a	(30.3)	—	—	ナデ	ナデ	明褐	橙	雲母	外面煤付
	428	弥生土器	鉢	U5	V a	(29.5)	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	雲母	外面煤付
	429	弥生土器	壺	U5	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英多	
	430	弥生土器	甕	X9	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	赤黒	暗赤褐	石英多	
	431	弥生土器	壺	V6・7/W5	V a	(26.0)	—	—	ミガキ状ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英多	
	432	弥生土器	壺	U6	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	明赤褐	石英多	
	433	弥生土器	壺	W6	V a	—	—	—	ハケ	ナデ	橙	橙	石英・雲母	外側煤付 焼成前穿孔
	434	弥生土器	甕	R11 Q12	V a	(39.2)	—	—	ナデ	ナデ	浅黄	灰黄	褐・黒・石英	外側煤付
	435	弥生土器	甕	O12	V a	(28.4)	—	—	磨耗	磨耗	橙	明黄褐	褐・黒	外側煤付
	436	弥生土器	甕	O13	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	
	437	弥生土器	壺	N12	V a	(29.0)	—	—	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒・石英	
66	438	弥生土器	壺	V6	V a	(24.0)	—	—	ハケ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	石英・白	外側煤付
	439	弥生土器	甕	W10	V a	(28.6)	—	—	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	440	弥生土器	甕	P13	V a	(25.5)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	橙	黒	
	441	弥生土器	甕	W9	V a	(20.6)	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	橙	橙	褐・黒・石英	外面煤付
	442	弥生土器	甕	U6	V a	—	—	—	ナデ	工具ナデ	明赤褐	褐灰	褐・黒	
	443	弥生土器	甕	W9	V a	—	—	—	ハケ	ハケ	黒褐	明赤褐	石英・黒	外面煤付
	444	弥生土器	甕	表採		—	(5.9)	—	ハケ	ナデ	明赤褐	灰黄褐	石英・白	
	445	弥生土器	壺	W5	V a	—	6.2	—	ハケ	ナデ	灰黄褐	灰黄褐	褐・白	
	446	弥生土器	甕	V6	V a	—	7.5	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	雲母・白	内面煤付
	447	弥生土器	甕	V10	V a	—	7.0	—	ハケ	ナデ	にぶい褐	黒褐	雲母・白	内面煤付
	448	弥生土器	壺	V7	V a・b	—	(8.9)	—	ハケ	ナデ	にぶい赤褐	黒褐	雲母・白	内面煤付
	449	弥生土器	甕	O13	V a	—	5.6	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	黒・白	
	450	弥生土器	壺		V a /2	(24.2)	8.2	27.3	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐多 細	外面煤付
	451	弥生土器	壺	P12	V a	—	6.5	—	磨耗	ナデ	にぶい橙	黒	白	
	452	弥生土器	壺	M 12	V a	—	6.5	—	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	内面煤付
	453	弥生土器	壺	M5	V a	—	5.5	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	褐・黒・白	
	454	弥生土器	甕	W7	V a	(18.8)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	彩文土器
	455	弥生土器	高坏	V11	V a	—	—	—	ミガキ	ナデ・ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	彩文土器・転用
	456	弥生土器	甕	U 5・6	V a	(29.7)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	雲母・白	
	457	弥生土器	壺	T 11	V a	—	—	—	ミガキ	ナデ	褐	にぶい褐	雲母・白	
	458	弥生土器	壺	W 10	V a	19.8	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	雲母・白	
	459	弥生土器	鉢	X7	V a	(25.0)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	雲母・白	
	460	弥生土器	壺	N12	V a	(18.0)	—	—	ナデ	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	461	弥生土器	壺	N12	V a	(11.5)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	462	弥生土器	鉢	S11	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	石英	浮文・刺突
	463	弥生土器	壺	O12/Q7	V a	(12.0)	—	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	褐・黒	穿孔
	464	弥生土器	甕	S6	V a	—	—	—	ハケ	ナデ	灰黄	浅黄	黒・白	
	465	弥生土器	鉢	W10	V a	—	—	—	ナデ	磨耗	橙	にぶい橙	白・黒	
	466	弥生土器	甕	S5	V a	10.6	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒・石英	内外面煤付
67	467	弥生土器	壺	S5/T6	V a	—	1.6	—	ミガキ・磨耗	ナデ	灰白	橙	褐・黒	内面煤付
	468	弥生土器	鉢	O11	V a	—	—	—	磨耗	磨耗	橙	明黄褐	白	
	469	弥生土器	壺	X1	V a	(22.0)	—	—	ナデ	ナデ・磨耗	橙	橙	褐・白・灰	鋸歯波状文
	470	弥生土器	壺	Q11	V a	—	5.5	—	ナデ		にぶい橙		雲母	
	471	弥生土器	甕	O13	V a	—	(6.0)	—	ミガキ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・白	
	472	弥生土器	鉢	U6	V a	—	(7.0)	—	ナデ	ナデ	黄灰	灰白	褐・白・石英	
	473	弥生土器	高坏	S6	V a	(27.6)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	褐・黒	
	474	弥生土器	高坏	T5	V a	(21.4)	—	—	ミガキ	ミガキ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	475	弥生土器	高坏	S5	V a	—	16.5	—	ミガキ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	黒	円形透かし
	476	弥生土器	手づくね	O12	V a	6.2	1.4	4.2	ナデ・指オサエ		橙	にぶい黄橙	黒・白	
75	516	土師器	鉢	SC88	4	(25.9)	—	—	ナデ	ナデ	黄橙	浅黄橙	砂粒	内外面煤付着
	517	土師器	坏	SC88	1	(14.6)	7.5	(7.8)	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒	
	522	土師器	坏	R4	V a	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	砂粒	穿孔
	523	土師器	坏	R5	V a	—	5.9	—	ナデ	ナデ	橙	橙	砂粒	底部糸切

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値（cm）			
						長さ	幅	厚さ	重量
7	5	砥石	SA01	1	砂岩	15.1	6.4	4.4	524.9
8	8	砥石	SA02	1	砂岩	4.9	3.1	2.6	54.0
	9	軽石製品	SA02	1	軽石	6.1	4.2	1.4	11.4
	10	軽石製品	SA02	1	軽石	4.1	3.3	0.8	3.2
9	12	軽石製品	SA03	1	軽石	3.2	1.8	0.8	1.1
11	20	磨石	SA04	2	砂岩	4.1	4.1	2.0	31.1
	21	剥片	SA04	–	輝石安山岩	2.6	2.2	1.8	11.2
	22	磨石	SA04	2	砂岩	3.6	7.5	5.7	138.9
	23	台石・砥石	SA04	2	砂岩	26.5	14.9	9.9	4800
	24	軽石製品	SA04	2	軽石	8.8	6.8	3.4	68.1
	25	軽石製品	SA04	2	軽石	8.4	4.8	3.3	31.0
	26	軽石製品	SA04	2	軽石	12.2	6.1	3.1	47.5
	27	軽石製品	SA04	2	軽石	10.0	6.5	3.4	46.7
	28	軽石製品	SA04	2	軽石	3.7	2.7	0.9	3.0
13	32	スクレイパー	SA05	2	頁岩A	3.9	5.1	0.7	11.1
	33	未成品	SA05	–	頁岩A	2.8	1.7	0.5	1.5
	34	磨石	SA05	–	砂岩	3.7	4.1	2.2	31.4
	35	石皿	SA05	3	輝石安山岩	12.4	13.6	3.5	800
14	38	磨製石鏃	SA06	1	緑色岩類	1.8	1.8	0.2	0.9
15	42	剥片	SA08	4	砂岩	8.5	15.7	2.1	202.4
	43	磨石片	SA08	4	砂岩	7.6	9.2	1.3	69.5
16	45	磨製石鏃	SA09	1	頁岩A	5.1	4.1	0.5	12.1
	46	未成品	SA09	–	頁岩A	2.2	1.8	0.2	0.8
	47	磨石	SA09	1	砂岩	4.1	3.1	3.4	74.7
	48	磨石	SA09	1	砂岩	3.4	3.0	1.8	15.6
	49	磨石	SA09	1	砂岩	2.6	2.3	0.8	3.9
17	52	未成品	SA11	–	頁岩B	1.3	1.2	0.2	0.3
	53	未成品	SA11	–	頁岩B	2.2	1.2	0.2	0.7
	54	スクレイパー	SA11	1	頁岩A	2.2	2.6	0.5	2.4
	55	未成品	SA11	–	頁岩B	3.2	2.1	0.3	2.0
	56	未成品	SA11	1	頁岩B	3.7	1.6	0.3	1.7
	57	軽石製品	SA11	1	軽石	8.8	5.7	5.0	45.5
19	65	軽石製品	SA12	1	軽石	6.7	7.0	5.5	44.6
	66	石核	SA12	1	輝石安山岩	7.4	6.9	5.4	300
21	70	石鏃	SA13	1	チャート	2.0	1.6	0.5	1.0
	71	石包丁片	SA13	1	頁岩B	1.6	4.0	0.4	2.6
	72	磨製石鏃	SA13	1	頁岩B	1.5	2.0	0.2	0.8
	73	未成品	SA13	1	頁岩B	3.1	1.4	0.3	1.8
	74	未成品	SA13	1	頁岩B	3.2	1.5	0.6	2.7
	75	未成品	SA13	1	頁岩B	3.7	2.1	0.6	2.7
	76	欠損品	SA13	1	緑色岩類	1.5	2.4	0.3	1.5
	77	欠損品	SA13	1	頁岩A	2.1	1.9	0.3	1.4
	78	未成品	SA13	1	頁岩A	2.4	1.9	0.2	0.9
	79	未成品	SA13	1	頁岩A	2.3	1.9	0.2	1.1
	80	未成品	SA13	1	頁岩A	2.2	1.1	0.2	0.4
	81	未成品	SA13	1	頁岩A	2.3	1.2	0.2	0.6
	82	未成品	SA13	1	頁岩A	1.9	1.4	0.2	0.6
	83	失敗品	SA13	1	頁岩A	1.6	1.6	0.3	0.7
	84	未成品	SA13	1	頁岩A	2.3	1.5	0.4	0.9
	85	未成品	SA13	1	頁岩A	2.3	1.9	0.3	1.1
	86	未成品	SA13	1	頁岩A	2.8	2.4	0.2	1.5
	87	未成品	SA13	1	頁岩A	3.1	1.4	0.4	1.4
	88	未成品	SA13	1	頁岩A	3.2	2.0	0.3	2.6
	89	未成品	SA13	1	頁岩A	2.8	1.9	0.4	1.5
	90	未成品	SA13	1	頁岩A	3.2	2.8	0.6	3.3
	91	未成品	SA13	1	頁岩A	2.5	1.9	0.4	1.4
	92	未成品	SA13	1	頁岩A	3.3	2.1	0.5	1.6
	93	未成品	SA13	1	頁岩A	3.3	1.4	0.3	1.3
	94	未成品	SA13	1	頁岩A	2.7	2.6	0.3	1.9
	95	未成品	SA13	1	頁岩A	2.9	2.4	0.5	3.1
	96	未成品	SA13	1	頁岩A	2.9	2.1	0.7	2.4
	97	未成品	SA13	1	頁岩A	2.8	2.7	0.5	3.7
	98	未成品	SA13	1	頁岩A	3.1	2.8	0.5	2.9
	99	未成品	SA13	1	頁岩A	3.2	1.4	0.4	1.4
	100	未成品	SA13	1	頁岩A	3.8	2.1	0.4	3.0
	101	未成品	SA13	1	頁岩A	2.7	2.8	0.3	2.6
	102	未成品	SA13	1	頁岩A	3.4	2.5	0.4	3.5
	103	未成品	SA13	1	頁岩A	3.9	2.2	0.3	1.9
	104	未成品	SA13	1	頁岩A	4.1	1.5	0.5	2.7
	105	未成品	SA13	1	頁岩A	4.5	2.3	0.6	5.3
	106	未成品	SA13	1	頁岩A	5.5	2.4	0.6	7.9
	107	未成品	SA13	1	頁岩A	4.0	3.1	0.3	4.4
22	108	未成品	SA13	1	頁岩A	2.1	4.0	5.5	4.3
	109	未成品	SA13	1	RF	3.5	3.6	0.8	11.4
	110	軽石製品	SA13	1	軽石	3.2	2.7	2.1	3.5
	111	石皿	SA13	1	輝石安山岩	12.0	7.0	6.8	930
	112	台石・砥石	SA13	Y	砂岩	25.1	14.6	9.8	4400
24	114	磨製石鏃	SA14	1	頁岩A	2.5	2.3	0.2	1.5
	115	未成品	SA14	1	頁岩A	1.5	1.2	0.2	0.5
	116	未成品	SA14	1	頁岩A	1.7	1.3	0.2	0.3
	117	未成品	SA14	1	頁岩A	1.8	1.9	0.2	0.3
	118	未成品	SA14	1	頁岩A	3.5	1.3	0.4	1.6
	119	未成品	SA14	1	頁岩A	2.4	1.6	0.4	1.1
	120	未成品	SA14	1	頁岩A	3.1	1.7	0.5	2.3
	121	未成品	SA14	1	頁岩A	2.3	1.8	0.3	1.1

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値（cm）			
						長さ	幅	厚さ	重量
24	122	未成品	SA14	1	頁岩A	3.5	1.4	0.3	1.2
	123	未成品	SA14	1	頁岩A	1.6	2.8	0.3	1.3
	124	未成品	SA14	1	頁岩A	1.7	1.5	0.2	0.5
	125	失敗品	SA14	1	頁岩A	2.0	1.3	0.3	–
	126	未成品	SA14	1	頁岩A	3.4	2.1	0.6	3.5
	127	磨・敲石	SA14	1	砂岩	9.9	6.6	3.9	280
	128	磨・敲石	SA14	1	砂岩	7.8	5.2	5.4	265
25	132	失敗品	SA15	1	頁岩B	2.6	2.4	0.5	2.7
	133	未成品	SA15	1	頁岩B	1.9	1.8	0.3	1.0
	134	未成品	SA15	1	頁岩A	1.8	1.4	0.2	0.6
27	142	軽石製品	SA17	Y	軽石	12.9	6.5	5.2	110
29	151	欠損品	SA18	1	頁岩B	2.5	2.8	0.3	2.6
	152	未成品	SA18	1	頁岩B	3.5	2.3	0.4	2.8
	153	石包丁	SA18	Y	頁岩B	4.2	9.4	0.6	27.2
	154	石包丁未成品	SA18	1	頁岩B	3.6	8.5	0.5	24.7
	155	軽石製品	SA18	1	軽石	4.2	3.1	3.4	9.6
	156	軽石製品	SA18	1	軽石	5.0	3.6	2.7	14.0
	157	軽石製品	SA18	1	軽石	8.1	6.7	3.4	50.0
	158	軽石製品	SA18	1	軽石	6.8	5.5	3.8	32.8
	159	台石	SA18	Y	砂岩	30.5	25.1	7.8	7.8
	160	磨・敲石	SA18	Y	砂岩	13.8	9.2	8.0	1345
	161	砥石	SA18	Y	緑色岩類	7.1	2.9	1.5	59.7
	162	台石・砥石	SA18	Y	砂岩	20.5	8.2	4.8	1510
31	167	残核	SA19	2	輝石安山岩	5.0	8.6	6.7	310
	168	台石・砥石	SA19	Y	砂岩	23.7	13.4	5.8	1905
	169	石皿	SA19	2	砂岩	10.1	9.3	2.1	400
	170	磨・敲石	SA19	2	砂岩	10.4	7.4	5.2	560
	171	台石・砥石	SA19	Y	砂岩	17.1	11.0	4.4	1135
32	173	未成品	SA22	1	頁岩B	3.2	1.4	0.2	0.9
35	191	磨製石鏃	SA23	2	頁岩B	2.4	2.1	0.2	1.1
	192	未成品	SA23	2	頁岩B	1.5	1.7	0.3	0.6
	193	未成品	SA23	–	頁岩B	4.5	3.4	0.4	11.3
	194	未成品	SA23	–	頁岩B	4.1	3.0	0.4	11.3
	195	ミガキ石	SA23	2	流紋岩	5.8	2.4	1.4	238
	196	敲石	SA23	2	砂岩	9.7	4.7	3.5	210
	197	砥石	SA23	8	流紋岩	10.7	4.9	2.1	165
	198	砥石	SA23	2	砂岩	19.0	5.2	4.2	565
	199	台石・砥石	SA23	2	砂岩	13.2	8.5	5.0	630
	200	台石	SA23	2	砂岩	24.3	22.6	6.1	5.2
	201	軽石製品	SA23	1	軽石	4.0	3.3	1.4	5.9
	202	軽石製品	SA23	2	軽石	4.5	3.1	1.4	5.1
	203	軽石製品	SA23	2	軽石	5.5	6.0	4.1	34.1
	204	軽石製品	SA23	2	軽石	6.5	3.7	2.8	15.3
	205	軽石製品	SA23	2	軽石	5.1	3.2	2.8	10.5
	206	軽石製品	SA23	2	軽石	7.6	4.0	1.7	18.7
	207	軽石製品	SA23	2	軽石	7.0	6.6	3.1	39.6
	208	軽石製品	SA23	2	軽石	6.2	4.2	2.8	16.4
	209	軽石製品	SA23	2	軽石	9.3	5.5	2.8	29.5
	210	軽石製品	SA23	2	軽石	7.1	5.6	3.0	23.5
	211	軽石製品	SA23	1	軽石	12.4	5.4	3.9	59.7
38	223	磨製石鏃	SA24	2	頁岩A	2.5	1.5	0.2	1.0
	224	未成品	SA24	2	頁岩A	3.2	2.3	0.5	4.8
	225	未成品	SA24	2	頁岩A	2.8	2.2	0.4	2.6
	226	軽石製品	SA24	2	軽石	7.2	5.7	4.0	48.8
	227	砥石	SA24	2	砂岩	25.3	9.3	2.8	1080
40	230	未成品	SA25	2	頁岩A	4.2	2.6	0.5	4.8
	231	未成品	SA25	1	頁岩B	4.3	3.1	0.5	5.0
	232	未成品	SA25	1	頁岩B	3.9	5.0	1.0	1.8
	233	石皿	SA25	1	輝石安山岩	16.3	8.8	3.0	700
45	278	磨製石鏃	SA27	2	頁岩B	4.7	2.6	0.4	
	279	磨製石鏃	SA27	Y	頁岩B	2.9	2.1	0.4	2.6
	280	石包丁未成品	SA27	2	頁岩B	3.3	6.6	0.8	24.1
	281	石包丁	SA27	1	頁岩B	4.3	11.3	5.5	45.7
	282	砥石	SA27	2	頁岩B	5.2	3.8	1.0	25.1
	283	砥石	SA27	Y	砂岩	19.0	9.5	3.3	850
	284	砥石	SA27	Y	砂岩	16.4	9.9	1.4	340
	285	砥石	SA27	Y	流紋岩	8.8	3.0	1.3	51.4
	286	砥石	SA27	2	緑色岩類	7.4	9.7	3.7	225
	287	台石・砥石	SA27	Y	砂岩	12.0	9.3	5.6	780
	288	軽石製品	SA27	2	軽石	4.7	3.5	3.0	16
	289	軽石製品	SA27	2	軽石	7.5	3.2	2.9	20.6
	290	軽石製品	SA27	2	軽石	9.8	8.9	3.3	49.4
	291	軽石製品	SA27	2	軽石	9.1	6.0	6.0	72.8
	292	軽石製品	SA27	1	軽石	9.7	5.4	4.5	46.2
	293	軽石製品	SA27	2	軽石	12.6	6.5	5.3	151.3
49	331	軽石製品	SA28	1	軽石	9.5	7.6	2.9	67.7
	332	軽石製品	SA28	1	軽石	6.6	5.5	2.7	18.2
	333	軽石製品	SA28	1	軽石	5.1	1.9	0.9	1.5
51	341	軽石製品	ST05	–	軽石	2.4	1.4	0.9	0.9
53	346	軽石製品	ST04	–	軽石	5.6	2.9	1.6	6.1
57	386	未成品	ST07	1	頁岩A	2.0	1.3	0.3	0.6
	387	軽石製品	ST07	1	軽石	11.5	7.1	4.2	57.2
62	413	軽石製品	SC80	–	軽石	3.3	1.8	1.4	1.6

頁岩A：緑色珪質頁岩
頁岩B：黒色頁岩

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値（cm）			
						長さ	幅	厚さ	重量
67	479	石鏃	T 11	Va	黒曜石	1.65	1	0.35	0.5
	480	石鏃	P10	Va	流紋岩	20.5	1.3	0.25	0.5
	481	石鏃	S 4	Va	チャート	20.5	1.5	0.25	0.5
	482	石鏃	T 11	Va	無斑晶安山岩	1.65	1.4	0.25	0.4
	483	石鏃	X 5	Va	チャート	4.05	2.15	0.6	4.1
	484	磨製横刃石器	S 5	Va	頁岩C	2.3	0.7	0.3	0.6
	485	未成品	P13	Va	頁岩C	4.4	6.6	1.15	32.2
	486	磨製石鏃	Q 11	Va	ホルンフェルス	2.7	1.9	0.2	1.4
67	487	剥片	W 11	Va	砂岩	6.6	9.4	1.9	89.9
	488	剥片	P 10	Va	砂岩	10.7	7.4	2.8	115.4
	489	剥片	S 12	Va	頁岩A	6.8	4.1	1.7	37.1
	490	剥片	O 12	Va	輝石安山岩	6.5	7.6	0.6	13.6
	491	剥片	O 10	Va	輝石安山岩	6.8	4.6	1	24.1
	492	粗製剥片石器	N 12	Va	輝石安山岩	5.2	6.5	1.1	42.3
	493	粗製剥片石器	Q 11	Va	輝石安山岩	7.85	7.2	1	62.7
	494	粗製剥片石器	U 7	Va	輝石安山岩	8.6	10.3	2	210
	495	粗製剥片石器	M 11	Va	輝石安山岩	3.7	5.2	0.5	10.9
	496	楔状石器	V 11	Va	流紋岩	9.2	3.3	1.65	64.7
	497	土掘具	Q 7	Va	輝石安山岩	7.9	6.9	1.2	103.8
	498	石斧	T 5	Va	輝石安山岩	5.5	3.4	0.7	15.9
	499	石斧	W 7	Va	輝石安山岩	5.3	4.2	0.8	12
	500	土掘具	Q 8	Va	輝石安山岩	24	9.3	2.3	620
	501	土掘具	X 15	Va	輝石安山岩	18	10.1	1.3	255

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値（cm）			
						長さ	幅	厚さ	重量
68	502	打製石斧	W 10	Va	ホルンフェルス	12.7	8.5	2.2	280
	503	打製石斧	S 6	Va	砂岩	12.6	6	1.5	155
	504	砥石	WAA	Va	頁岩	5.8	3.8	0.7	27.5
	505	砥石	V 6	Va	砂岩	6.4	3.5	1.6	50.5
	506	砥石	V 6	Va	砂岩	5.7	6.1	2.1	81.9
	507	砥石	X 9	Va	砂岩	11.7	4.75	2.6	183.1
	508	凹石	U 11	Va	砂岩	11.1	7.7	6.15	700
	509	凹石	Q 11	Va	砂岩	7.2	7.9	4.4	335
	510	台石・砥石	V 9	Va	砂岩	22.8	14.3	7	2630
	511	軽石製品	S 12	Va	軽石	16.8	6.4	4	114.6
	512	軽石製品	S 4	Va	軽石	13.5	8.4	3.4	101.4
	513	軽石製品	S 4	Va	軽石	6	4.1	1.3	7
	514	軽石製品	P 11	Va	軽石	5.8	4.4	2.3	28.5
	515	軽石製品	S 12	Va	軽石	5	3	0.8	6.5
85	518	未成品	SC88	3	頁岩A	3.35	3.25	0.3	2.5
	519	砥石	SC88		砂岩	11.3	3.25	2	121.4
	520	軽石製品	SC88	4	軽石	7.7	5.9	4.4	61.1
	521	火打ち石？	SC78		チャート	3.5	3.45	1.3	15.1

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	計測値（cm）				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
11	19	土製紡錘車	SA04	2	5.3	5.4	1.4	36.8	胎土に雲母・石英含む
25	129	高坏転用品	SA15	1	12.0	4.9	1.9		全体的に摩滅、類似品がR11区より出土
26	137	土製勾玉	SA16	1	2.9	2.5	1.4		
	138	土製勾玉	SA16	1	2.6	2.7	1.3		
	139	土製勾玉	SA16	1	2.3	2.1	1.1		
	140	土製勾玉	SA16	1	2.3	1.8	1.0		
37	222	粘土塊	SA24	1	7.3	5.5	3.0	80.0	顔料付
66	477	垂飾品	S5	Va	8.0	7.6	1.1		高坏から転用
	478	ビーズ	S5	Va	−	−	0.4		

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	計測値（cm）				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
63	415	鉇	SC82	Y	8.2	1.2	0.9		
	416	不明鉄製品	U3	II	−	−	0.2		鉄鏃？
	417	不明鉄製品	W7	Va	4.1	2.2	1.5		
	418	不明鉄製品	W11	Va	9.3	4.9	2.0		

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm）			調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
81	524	縄文土器	深鉢	SS04		—	—	—	条痕	ケズリ	橙	橙	角閃石	前平式
	525	縄文土器	深鉢	SS05	～帖	—	—	—	条痕・刺突文	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石	志風頭式
	526	縄文土器	深鉢	SS08	a・Y	—	—	—	条痕	ケズリ	橙	黒褐	角閃石・石英	前平式
	527	縄文土器	深鉢	SS08	a	—	—	—	条痕	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石	前平式
	528	縄文土器	深鉢	U28	X I	—	—	—	条痕・貝殻刺突文	調整	にぶい黄橙	灰黄褐	黒・白	前平式
	529	縄文土器	深鉢	秋区一括		—	—	—	条痕・貝殻刺突文	ケズリ	にぶい黄橙	橙	石英・長石	前平式
	530	縄文土器	深鉢	U28	X I	—	—	—	条痕	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・石英	前平式
	531	縄文土器	深鉢	SD06		—	—	—	条痕	ケズリ	橙	にぶい黄橙	角閃石・石英	前平式
	532	縄文土器	深鉢	T29	X I	—	—	—	条痕	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒・白	前平式
	533	縄文土器	深鉢	T29	X I	—	—	—	条痕	ケズリ	にぶい黄橙	黒	白	前平式
	534	縄文土器	深鉢	T29	X I	—	—	—	押圧・擦糸文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒・白	擦糸文系高ノ神式
84	540	縄文土器	鉢	A2-26	V a	—	—	—	組織痕・ケズリ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	黒褐	白	
	541	縄文土器	鉢	A3-27	V a	—	—	—	組織痕	ナデ	橙	黒褐	石英・長石	
	542	縄文土器	鉢	A3-25	V a	—	—	—	組織痕	ナデ	黄褐	黄褐	金石	
	543	縄文土器	鉢	A4-26	V a	—	—	—	組織痕	ミガキ	にぶい黄橙	黒褐	長石	
	544	縄文土器	鉢	A4-26	V a	—	—	—	組織痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石・長石	
	545	縄文土器	深鉢	A3-26	V a	—	—	—	ミガキ・ナデ	粗いミガキ	黒褐	にぶい黄橙	黒	期目突帯文
	546	縄文土器	深鉢	SA46 Pit1		—	—	—	ナデ	粗いミガキ	褐灰	褐灰	黒・白	期目突帯文
	547	縄文土器	深鉢	SA46	a	—	—	—	ナデ	ナデ	黒褐	褐	白	外面煤付
89	558	弥生土器	甕	SA29	a・Y	—	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ・ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石	一部施朱
	559	弥生土器	壺	SA29	a・Y	—	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ	黒褐	にぶい褐	石英	
	560	弥生土器	甕	SA29	Y	—	—	—	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい橙	石英	
	561	弥生土器	甕	SA29	a	—	—	—	ハケ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	黒・白	
90	573	弥生土器	甕	SA30		(28.2)	—	—	磨耗	磨耗	橙	にぶい黄橙	石英多・褐・黒	外面煤付
	574	弥生土器	甕	SA30		19.0	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	褐・石英・長石	574と同一個体か
	575	弥生土器	壺	SA30		—	—	—	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	暗褐	黒・石英・長石	574と同一個体か
	576	弥生土器	甕	SA30		(21.7)	—	—	ハケ・磨耗	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	黒・白	外面煤付
	577	弥生土器	甕	SA30		—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	褐・黒	
	578	弥生土器	甕	SA30	a・Y	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	褐・黒	外面煤付
	579	弥生土器	甕	SA30	a	—	—	—	ハケ	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	褐・黒	外面煤付
	580	弥生土器	甕	SA30		—	9.8	—	磨耗	磨耗	淡橙～浅黄橙		褐・黒・白	全体的に磨耗
92	585	弥生土器	甕	SA31		27.4		—	ハケ	ナデ	にぶい橙	橙	長石・石英	外面煤付
	586	弥生土器	甕	SA31		18.0	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	外面煤付
	587	弥生土器	壺	SA31	a	—	—	—	ナデ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白	内面煤付
	588	弥生土器	甕	SA31	a	—	—	—	ナデ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐	外面煤付
	589	弥生土器	甕	SA31	b	—	—	—	ナデ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒	
	590	弥生土器	甕	SA31	a	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒・白	
	591	弥生土器	鉢	SA31	a	—	6.8	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	褐・黒	内面煤付
	592	弥生土器	壺	SA31/ A4-27	a/V a	15.6	—	—	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・白・石英	突帯側島
	593	弥生土器	甕	SA31	a	—	4.8	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰白	褐・白	
	594	弥生土器	ミニチュア	SA31	Y	8.3	3.3	4.9	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	通物番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm）			調整		色調		胎土	備考
						口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
94	604	弥生土器	壺	SA32	a	(14.5)	—	—	ミガキ状ナデ	ナデ	灰褐～黒褐	灰褐	褐・黒・山・石英・雲	外面煤付
	605	弥生土器	壺	SA32		(11.5)	—	—	ハケ・ミガキ	ハケ	明赤褐～橙	明赤褐～橙	白 雲母	四隅文 723と同一か
	606	弥生土器	甕	SA32	a	—	—	—	ミガキ	ハケ・ナデ	褐灰	浅黄橙	褐・黒	
	607	弥生土器	底部	SA32/A3:37	a/Vu	—	5.8	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	白	外面煤付
	608	弥生土器	底部	SA32/A3:37	a/Vn	—	6.0	—	ナデ	ナデ	橙	灰	褐・黒	
96	611	弥生土器	甕	SA33	a	(30.5)	—	—	ナデ	ハケ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐・灰	
	612	弥生土器	底部	SA33	a	(8.0)	—	—	ナデ	ナデ	褐灰	浅黄橙	褐・黒・白	
	613	弥生土器	底部	SA33	a	—	(5.0)	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒	
	614	弥生土器	壺	SA33	a	—	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ	褐灰	浅黄橙	白・灰	円部浮文
98	622	弥生土器	甕	SA35		18.0	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	橙	橙	褐・黒・白・石英	外面煤付
	623	弥生土器	壺	SA35	Y		7.4	—	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	褐・黒	
	624	弥生土器	壺	SA35/39	a/b	—	—	—	ハケ後ミガキ	ハケ・ナデ・磨耗	橙	褐灰	褐・黒・白	外面煤付
	625	弥生土器	甕	SA35	a	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰黄	褐・黒	
	626	弥生土器	壺	SA35	a	—	(7.5)	—	磨耗	ナデ・磨耗	橙	橙	褐・石英・雲	
100	630	弥生土器	甕	SA36	a	—	(57.0)	—	ハケ後ナデ	ハケ	にぶい橙	橙	褐・黒	内外面煤付
	631	弥生土器	甕	SA36	a	(28.2)	—	—	ハケ	ハケ・ナデ	橙	橙	褐・黒・白	外面煤付
	632	弥生土器	甕	SA36	a	(26.8)	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	橙	明黄褐	褐・黒	
	633	弥生土器	甕	SA36	a	(29.5)	—	—	磨耗	磨耗	浅黄橙	浅黄橙	褐・灰・黒	
	634	弥生土器	甕	SA36	a	24.8	7.6	(53.0)	ナデ・磨耗	ハケ後ナデ	橙	浅黄橙	褐・黒	外面煤付
	635	弥生土器	壺	SA36	a	(21.9)	—	—	ミガキ・ハケ	ミガキ・ナデ	橙	橙	褐・黒・石英	
	636	弥生土器	壺	SA36	a	—	—	—	ハケ・ナデ	ハケ後ナデ	明黄褐	明黄褐	褐・黒・白	
	637	弥生土器	甕	SA36	a	—	6.0	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	褐・黒・白・石英	
101	638	弥生土器	甕	SA38	a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	639	弥生土器	壺	SA38	a	—	—	—	ナデ	ナデ	黒	浅黄橙	黒	黒色
103	641	弥生土器	甕	SA39	Y	20.4	5.6	20.6	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・石英	内外面煤付
	642	弥生土器	甕	SA39	a	—	7.4	—	ナデ	剥落	にぶい黄橙	橙	褐・黒	
	643	弥生土器	壺	SA39	一括	(6.3)	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	黒・白	
105	647	弥生土器	甕	SA40		(29.0)	—	—	ハケ	ハケ・ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	橙・黒・白・石英	外面煤付
	648	弥生土器	甕	SA40	b	26.4	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英	外面煤付
107	655	弥生土器	甕	SA41	Y	23.2	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	橙	橙	褐・白	外面煤付
	656	弥生土器	壺	SA41	a	—	—	—	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	黒・長石	
	657	弥生土器	ミニチュア	SA41	Y	—	3.0	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒	
110	673	弥生土器	甕	SA44	Y	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・黒	外面煤付
112	674	弥生土器	甕	SA45	a	(36.0)	—	—	ハケ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・石英・灰	外面煤付
	675	弥生土器	壺	SA45	a	(33.5)	—	—	ナデ	ナデ	橙	明黄褐	褐・黒・白・石英	
	676	弥生土器	壺	SA45	a	(30.6)	—	—	ハケ	ナデ	橙	橙	褐・黒・白・石英	外面煤付
	677	弥生土器	甕	SA45	a	(24.5)	—	—	ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	黒・石英	外面煤付
	678	弥生土器	壺	SA45	a	(25.9)	—	—	ハケ	ナデ・ハケ	灰白	浅黄橙	褐・黒・石英	外面煤付
	679	弥生土器	甕	SA45	a	—	—	—	ハケ	ハケ	にぶい橙	橙	石英・黒	外面煤付
	680	弥生土器	壺	SA45	一括	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	外面煤付
	681	弥生土器	壺	SA45	a	(22.0)	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・石英	
	682	弥生土器	壺	SA45	a	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	雲母	

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	通物番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
112	683	弥生土器	壺	SA45	一括	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・石英	
	684	弥生土器	壺	SA45	一括	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰白	白・石英	
	685	弥生土器	壺	SA45	a	(26.6)	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	暗赤褐	雲母・白	
	686	弥生土器	甕	SA45	Y	—	—	—	ナデ	欠損	にぶい黄橙	灰褐	黒・石英	円形浮文有
	687	弥生土器	甕	SA45	a	—	6.8	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	橙	橙	褐・黒・白・石英	全体的に摩耗
	688	弥生土器	甕	SA45	a	—	7.0	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	黒・石英	
113	689	弥生土器	甕	SA45	a	—	(7.8)	—	磨耗	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	
	690	弥生土器	甕	SA45	a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	691	弥生土器	甕	SA45	a	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	褐灰	白・石英	
115	713	弥生土器	鉢	SA46	a	24.2	6.0	25.5	ハケ	ハケ	灰黄褐	にぶい黄橙	黒・石英・白	外面煤付
	714	弥生土器	鉢	SA46	a	(21.3)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい橙	にぶい黄橙	白・黒・橙	外面煤付
	715	弥生土器	鉢	SA46	a	(26.5)	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	橙	橙	石英・長石	外面煤付
	716	弥生土器	鉢	SA46	a	(25.2)	—	—	ハケ	ハケ	橙		黒・石英・長石	外面煤付
	717	弥生土器	鉢	SA46	a	(21.5)	—	—	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	褐・石英	
	718	弥生土器	鉢	SA46	Y	24.0	—	—	ハケ後ナデ	ミガキ・ナデ磨耗	橙	橙	褐・黒・白	
	719	弥生土器	鉢	SA46	a	(17.5)	—	—	ハケ後ミガキ	ナデ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白・石英	
	720	弥生土器	鉢	SA46	a	—	5.3	—	ハケ・ミガキ	ハケ後ナデ	橙	橙	褐・石英	黒斑
	721	弥生土器	底部	SA46/A4-25	a/Va	—	5.0	—	ナデ	ナデ・磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白・石英	黒斑
	722	弥生土器	底部	SA46	一括	—	5.1	—	ミガキ後ナデ	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	白	605と同一か
	723	弥生土器	底部	SA46		—	—	—	ハケ後ナデ	ナデ	明褐	明褐	石英・長石・黒	
	724	弥生土器	鉢	SA46		—	—	—	ナデ・磨耗	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	赤褐・長石・石英	線刻
117	734	弥生土器	壺	ST09	a	(24.3)	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい橙	橙	褐・黒	
	735	弥生土器	甕	ST09		34.5	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	内外面煤付
	736	弥生土器	壺	ST09	a	29.3	—	—	ハケ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	内外面煤付
	737	弥生土器	壺	ST09	a	(21.2)	—	—	ハケ	ナデ	明黄褐	明黄褐	石英	内外面煤付
	738	弥生土器	鉢	ST09	a		—	—	磨耗	ナデ	にぶい橙	橙	褐・石英	外面煤付
	739	弥生土器	甕	ST09	a		—	—	ハケ・磨耗	ハケ後ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	白・石英	外面煤付
	740	弥生土器	蓋	ST09		20.2	—	—	ハケ・ミガキ	ナデ	橙	橙	黒・白	
	741	弥生土器	甕	ST09	a	—	—	—	ナデ	磨耗	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・石英	
	742	弥生土器	甕	ST09	a	(15.0)	—	—	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒	92と同一個体か
	743	弥生土器	甕	ST09	a	—	(6.5)	—	ハケ後ミガキ	ハケ・ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒	91と同一個体か
	744	弥生土器	底部	ST09	a	—	7.2	—	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	にぶい黄橙	黒褐	白・石英	内面煤付
	745	弥生土器	底部	ST09	a/Y	—	(4.7)	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	白・石英	外面煤付
	746	弥生土器	底部	ST09	a	—	7.0	—	ハケ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黒	白・石英	内面煤付
	747	弥生土器	底部	ST09	Y	—	7.6	—	ハケ後ナデ	ナデ	橙	橙	灰・褐・黒	内面炭化物付
	748	弥生土器	底部	ST09		—	5.5	—	磨耗	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	
	749	弥生土器	底部	ST09	a	—	(8.2)	—	ハケ後ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	褐・黒・石英	内外面煤付
	750	弥生土器	底部	ST09	a	—	(7.4)	—	ハケ後ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	黒	白・石英	黒斑
119	751	弥生土器	鉢	ST10	a	30.0	9.5	41.0	工具ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	外面煤付・黒斑
	752	弥生土器	壺	ST10	a	29.2	8.3	10.1	ナデ・輪積痕	ナデ	明黄褐	明黄褐	褐・黒・白	外面煤付
	753	弥生土器	壺	ST10	a	28.2	8.0	38.1	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	外面煤付
	754	弥生土器	鉢	ST10/A3-25	a/Vu	—	7.4	—	工具ナデ	ナデ	浅黄	にぶい橙	褐・黒	外面煤付
	755	弥生土器	壺	ST10	u	25.5	5.8	26.4	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	外面煤付
	756	弥生土器	甕	ST10/A4-26	a/Va	23.9	7.0	28.2	ナデ・輪積痕	ナデ	橙	橙	褐・黒	内外面煤付
	757	弥生土器	甕	ST10	a	29.1	7.7	37.4	工具痕・輪積痕	ナデ	黄橙	黄橙	褐・黒・白	内外面煤付
	758	弥生土器	壺	ST10	u	26.5	8.0	37.5	工具ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒・白	外面煤付
	759	弥生土器	甕	ST10	u	23.0	6.0	31.0	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒・白	内外面煤付
	760	弥生土器	壺	ST10/A3-25	a/Vu	—	7.4	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	褐・黒	

＊計測値の（ ）は反転復元

掲載番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
120	761	弥生土器	甕	ST10/A3-25	a/Ⅴa	—	—	—	ハケ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒・褐	外面煤付・黒斑
	762	弥生土器	壺	ST10		18.3	5.5	19.8	ナデ	ナデ	橙	橙	褐・黒	外面炭化物付
	763	弥生土器	甕	ST10	a	12.9	4.0	12.7	磨耗	ナデ	橙	橙	黒・白	外面煤付
	764	弥生土器	鉢	ST10	a	—	(8.0)	—	ミガキ状ナデ	ナデ	黄橙	浅黄橙	褐・黒	内外黒斑
	765	弥生土器	底部	ST10	a	—	(8.8)	—	磨耗	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐・白	
	766	弥生土器	甕	ST10/A4-26	a/Ⅴa	8.5	3.5	18.8	工具ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	赤彩線刻
	767	弥生土器	鉢	ST10	a	33.5	6.6	2.6	ナデ	ナデ	橙	橙	灰・褐	外面煤・内面黒斑
	768	弥生土器	鉢	ST10	a	21.2	1.7	8.0	ナデ・磨耗	ナデ・磨耗	橙	橙	褐・黒	
	769	弥生土器	高坏	ST10/A4-26	a/Ⅴa	(31.4)	17.7	—	ミガキ	ミガキ	橙	橙	細粒	
	770	弥生土器	器台	ST10/A3-25	a/Ⅴa	20.1	18.4	19.6	ミガキ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	褐・黒	円形透かし
	771	弥生土器	器台	ST10	a	21.7	—	—	ミガキ	ミガキ	橙	橙	褐・黒	円形透かし
121	772	弥生土器	鉢	ST11	a	(20.2)	—	—	磨耗	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	773	弥生土器	壺	ST11	a	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒	外面煤付
	774	弥生土器	壺	ST11	a	—	—	—	ハケ後ミガキ	ハケ	明黄褐	黒	黒	
	775	弥生土器	甕	ST11	a	—	—	—	ナデ	調整	浅黄橙	灰白	黒	
122	776	弥生土器	鉢	SQ01/A4-26	Ⅴa	30.2	7.7	—	ハケ	ハケ・ナデ	にぶい黄橙	橙	褐・黒・白	外面煤付
	777	弥生土器	甕	SQ01	Ⅴa	27.2	6.5	33.7	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・黒	内外面煤付
	778	弥生土器	壺	SQ01	Ⅴa	26.7	6.8	33.6	ナデ・輪積痕	工具痕	浅黄橙	浅黄橙	褐・黒	外面煤付
	779	弥生土器	甕	SQ01	Ⅴa	28.8	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・黒	外面煤付
	780	弥生土器	壺	SQ01	Ⅴa	26.0	—	—	ハケ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	褐・黒	外面炭化物付
	781	弥生土器	甕	SQ01	Ⅴa	—	8.0	—	ハケ	ナデ	浅黄橙	にぶい橙	褐・黒	外面煤付
	782	弥生土器	鉢	SQ01	Ⅴa	14.2	5.2	17.6	工具ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	褐・黒	外面炭化物
	783	弥生土器	高坏	SQ01	Ⅴa	30.5	—	—	ミガキ	ミガキ	橙	橙	褐・黒	円形透かし
126	787	弥生土器	壺	A3-26/SD05・04	Ⅴa	(25.5)	—	—	ハケ	ハケ	黄橙	にぶい黄橙	褐・黒・白	外面煤付
	788	弥生土器	甕	W30	Ⅴa	(27.5)	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	浅黄橙	黒・黒	外面煤付
	789	弥生土器	壺	W30	Ⅴa	(31.3)	—	—	ハケ	ハケ	浅黄橙	浅黄	褐・黒	外面煤付
	790	弥生土器	甕	W30	Ⅴa	(27.7)	—	—	ハケ・磨耗	調整	橙	にぶい橙	黒	
	791	弥生土器	壺	W30	Ⅴa	(25.0)	—	—	ハケ	ナデ	褐灰	浅黄橙	黒	
	792	弥生土器	甕	A3-25	Ⅴa	(24.9)	—	—	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	褐・黒	
	793	弥生土器	底部	A2-26	Ⅴa	—	6.0	—	ハケ	ナデ	にぶい黄橙	黒褐	白・黒・石英	
	794	弥生土器	底部	X30	Ⅴa	—	5.1	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐・黒	
	795	弥生土器	底部	X28・30	Ⅴa	—	6.4	—	ナデ・調耗	ナデ	明黄橙	黄灰	白・石英	
	796	弥生土器	壺	SD12	Ⅰ	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	黒	漆れ込み
	797	弥生土器	甕	W30	Ⅴa	—	—	—	ハケ	ハケ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	石英	
	798	弥生土器	壺	W30	Ⅴa	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒・石英	
	799	弥生土器	甕	Z24/A3-25	Ⅴa	(23.2)	—	—	ミガキ	ナデ	褐	にぶい赤褐	雲母	
	800	弥生土器	壺	A1-26	Ⅴa	(29.4)	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・石英	
	801	弥生土器	甕	A3-26	Ⅴa	—	—	—	ミガキ	剥落	黒褐	灰褐	石英	
	802	弥生土器	壺	A4-26	Ⅴa	—	—	—	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐	橙	雲母	
	803	弥生土器	底部	X30	Ⅴa	—	(7.6)	—	ナデ	ナデ	黄橙	褐灰	白	外面煤付
	804	弥生土器	底部	W30	Ⅴa	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰	褐・石英	
	805	弥生土器	底部	A3-25	Ⅴa	—	(7.5)	—	ミガキ	剥離	黒	にぶい黄	石英	
	806	弥生土器	甕	A3-25	Ⅴa	(21.6)	—	—	ミガキ	ミガキ	橙	橙	石英・黒	

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	遺物番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整 外面	内面	備考
147	811	土師器	坏	SB29	-	11.8	5.6	4.3	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	812	土師器	坏	SB29	pit	-	(6.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	813	土師器	椀	SD33	-	-	-	-	回転ナデ		
	814	布痕土器		SB33	-	-	-	-	ナデ	布痕	
	815	土師器	椀	SS01/V・W26	Va	-	7.9	-	回転ナデ		
	816	土師器	椀	SS01/V26/V・W27	Ⅳb～Va	-	-	-	回転ナデ		
	817	土師器	坏	SS02	Va	(13.1)	(7.6)	(4.9)	回転ナデ		底部ヘラ後ナデ
	818	土師器	坏	SS02	Va	(13.1)	(7.8)	(4.7)	回転ナデ		底部ヘラ後ナデ
	819	土師器	坏	SS02	Va	(12.4)	(6.5)	(5.0)	回転ナデ		底部ヘラ後ナデ
	820	土師器	坏	SS02	Va	12.2	7.8	5.1	回転ナデ		底部ヘラ後ナデ
	821	土師器	坏	SS02/W26	Va	-	(6.2)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	822	土師器	椀	SS02	Va	(14.0)	-	-	回転ナデ		
	823	土師器	椀	SS02	Va	(16.0)	-	-	回転ナデ		外面煤付
	824	土師器	椀	SS02	Va	(15.0)	-	-	回転ナデ		
	825	土師器	坏	SS02	Va	(14.4)	-	-	回転ナデ		
	826	土師器	椀	SS02	Va	-	(5.7)	-	回転ナデ		
	827	土師器	椀	SS02/W・X26	Va	(16.2)	-	-	回転ナデ		
	828	黒色土器	椀	SS02/W26/Y27	Va～Ⅳb	15.5	8.2	6.2	ミガキ		外面一部煤付
	829	土師器	甕	SS02	Va	(24.6)	-	-	ナデ	ケズリ	外面炭化物付
	830	土師器	甕	SS02	Va	-	-	-	ナデ	ケズリ	
	831	土師器	鉢	SS02	Va	-	7.0	-	ケズリ後ナデ	ナデ	
	832	土師器	甕	SS02	pit	-	-	-	ケズリ後ナデ	ナデ	外面煤付着
	833	土師器	坏	SCB5	-	-	5.5	-	回転ナデ		底部回転ヘラ
	834	土師器	坏	SCB5	-	(16.0)	-	-	回転ナデ		
	835	土師器	坏	SCB6/V26	/Ⅳb・Va	(10.6)	(5.0)	(5.7)	回転ナデ		底部回転ヘラ切 擬状圧痕
	836	土師器	椀	SCB6	pit	14.2	8.7	6.3	回転ナデ		
	837	土師器	坏	SCB6/V 26	/Va	-	(5.8)	-	回転ナデ		内外面煤付
	838	土師器	椀	SCB6/SD12-2	/a	(14.8)	-	-	回転ナデ		外面煤付
	839	土師器	椀	SCB6	-	(15.0)	-	-	回転ナデ		内外面煤付
	840	土師器	椀	SCB6	-	-	-	-	回転ナデ		
	841	土師器	坏	SCB6/V・W27	/Ⅳb	12.6	-	-	回転ナデ		
	842	土師器	椀	SCB6/SD12	/Y	16.0	-	-	回転ナデ		外面煤付
	843	土師器	椀	SCB6	-	-	-	-	回転ナデ		
	844	土師器	小鉢	SCB6	pit	(10.5)	(6.7)	(5.7)	指オサエ	ヘズリ後ナデ	
	845	土師器	甕	SCB6	-	-	-	-	ハケ	ケズリ	外面煤付
	846	土師器	椀	SCB7	-	-	7.6	-	ミガキ	回転ナデ	内面縁・頸斜付
	847	土師器	小皿	SCB7		(10.9)	(5.9)	(3.7)	回転ナデ		ヘラ
148	848	土師器	坏	SD12-3	Y	(10.6)	(6.0)	(4.1)	回転ナデ		ヘラ
	849	土師器	坏	SD12-3/V26	Y/Ⅳb	(10.6)	(5.4)	(3.8)	回転ナデ		ヘラ
	850	土師器	坏	SD12	1	-	5.8	-	回転ナデ		不明
	851	土師器	坏	SD12	Y	(16.0)	-	-	回転ナデ		
	852	土師器	椀	SD12-1/V26	/Ⅳb	-	-	-	回転ナデ		
	853	土師器	椀	SD12-2	a	-	-	-	回転ナデ		

＊計測値の（　）は反転復元

図版番号	図版番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm）			調整		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	
148	854	土師器	高台付皿	SD12-2	Y	(12.3)	-	-	回転ナデ		
	855	須恵器	壷	SD12-1/X25・26	Y/Va	-	-	-	タタキ	指オサエ	耳把付
	856	粘土製品	鐘羽口	SD12	a	-	-	-			スサ多合
	857	粘土製品	鐘羽口	SD12-3	Y	-	-	-			初殻・圧痕
	858	土師器	小壷	X25	Va	8.2	5.0	5.1	ナデ	ナデ	底部回転ヘラ切　内面底部に炭化物・外面煤
	859	軽石		X25	Va	13.2	10.5	7.5			227の蓋
149	860	青磁	椀	SD01	a	-	-	-	施釉		
	861	青磁	椀	SD01	a	-	-	-	施釉		龍泉窯系Ⅳ類
	862	青磁	椀	SD02	2-4	(18.4)	-	-	施釉		15～16c代
	863	土師器	坏	SD06	一括	-	4.5	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	864	土師器	甕	SD06	一括	-	-	-	ナデ		
	865	白磁	椀	SD06	一括	-	4.4	-	施釉		切り高台　14～15c
	866	陶器	椀	SD06	一括	-	3.6	-	施釉		
	867	陶器	椀	SD06	19	-	4.2	-	施釉	施釉	
	868	龍泉	茶家の壷	SD06	一括	3.6	-	3.1	施釉		
	869	龍泉	椀	SD06	一括	-	4.8	-	施釉・釉はぎ	施釉	龍門司系
	870	常滑	甕	SD06・01	一括/3	-	-	-	工具ナデ		
	871	須恵器	壷	SD07	13	-	9.8	-	ナデ	タタキ	
	872	土師器	坏	SD09	c	11.0	6.9	3.5	ナデ		底部糸切
	873	青磁	皿	SD09	b	12.2	6.9	3.3	施釉・釉はぎ		15c代
	874	青磁	皿	SD09	b	-	(6.3)	-	施釉	施釉・釉はぎ	
	875	青磁		SD09	b	-	(6.4)	-	施釉		
	876	青磁	椀	SD09	b	-	-	-	施釉		龍泉窯系Ⅳ類
	877	白磁	皿	SD09	b	-	4.0	-	施釉		
	878	瓦質	小明	SD11	一括	-	-	-	ナデ・磨耗		
	879	東鋪系	理鉢	SD11	K	-	-	-	ナデ・磨耗		焼成不良
	880	備前	酒鉢	SD11	C	-	-	-	回転ナデ		
	881	青磁	椀	SD11	D	-	-	-	施釉		16c代
	882	青磁	椀	SD11	D	-	-	-	施釉		龍泉窯系Ⅲ類
	883	青磁	椀	SD11	C	-	-	-	施釉		14C代
149	884	白磁	椀	SD11	D	16.3	-	-	施釉		口禿げ　13c後半～14C初
	885	常滑	甕	SD13	K	-	38.4	-	ナデ		
	886	白磁	椀	SD13	I	(12.3)	-	-	施釉		
	887	白磁	皿	SD13	C	-	(7.4)	-	施釉・釉はぎ		被熱
	888	青磁	皿	U31	pit	(19.8)	-	-	施釉		
	889	古銭		U31	pit	-	-	-			
	890	墨書土器		SS03		6.9	6.0	1.4	人間印書	墨書	「衣■」もしくは「衣■」か
151	910	土師器	坏	V・W26/X27/V26	Ⅳa～Vb	(12.6)	(5.6)	(4.2)	回転ナデ		底部回転ヘラ切り　外面煤付着
	911	土師器	坏	V26・W26	Ⅳa～Va	(12.0)	(4.8)	(6.2)	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	912	土師器	坏	V・W26/X26	Va～Ⅳb	11.8	5.1	4.7	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	913	土師器	坏	V26	Va	13.2			回転ナデ		
	914	土師器	坏	X30	Va	11.2	6.0	4.4	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	915	土師器	坏	W26	Ⅳb・Va	11.0	5.4	4.0	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	916	土師器	坏	X25	Ⅳb・Va	10.4	6.2	3.9	回転ナデ		底部回転ヘラ切

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	図版番号	種別	器種	出土尺	出土層位	計測値（cm）			調整		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	
151	917	土師器	坏	V26	Ⅳb・Ⅴa	-	6.4	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	918	土師器	坏	X25/X26	Ⅴa/Ⅳb	-	(6.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	919	土師器	坏	V26	Ⅳb	-	(6.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	920	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	(5.6)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	921	土師器	坏	W27	Ⅴa	-	(5.8)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	922	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	(6.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	923	土師器	坏	W 26	Ⅴa	-	(5.9)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	924	土師器	坏	X27	Ⅴa	(9.2)	(6.0)	(3.1)	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	925	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	6.0	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	926	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	5.8	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	927	土師器	坏	V 26	Ⅴa	-	5.8	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	928	土師器	坏	V26	Ⅴa	-	5.7	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	929	土師器	坏	拳Ｔｒ	一括	-	(5.6)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	930	土師器	坏	V 26	Ⅴa	-	5.0	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	931	土師器	坏	V26	Ⅳb	-	(5.2)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	932	土師器	坏	V26	Ⅳa・b・Ⅴa	-	4.7	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	933	土師器	坏	W25	Ⅴa	-	4.6	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	934	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	(5.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	935	土師器	坏	V27	Ⅴa	-	5.2	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	936	土師器	坏	W26	Ⅳb	-	(4.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	937	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	(4.6)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	938	土師器	坏	W26/W・X27	Ⅳa/Ⅴa	-	5.4	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切 全体的に歪む
	939	土師器	坏	W27	Ⅴa	-	(5.2)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	940	土師器	坏	X 27	Ⅴa	-	5.0	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	941	土師器	坏	V・W26	Ⅴa	-	(4.8)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	942	土師器	坏	X 27	Ⅴa	-	5.1	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	943	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	5.1	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	944	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	5.0	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	945	土師器	坏	V26	Ⅴa	-	(6.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	946	土師器	坏	W25	Ⅴa・Ⅳb	-	5.4	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	947	土師器	坏	X30	Ⅳb	-	5.2	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	948	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	5.0	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切 底部工具痕
	949	土師器	坏	W27	Ⅳb	-	5.0	-	ミガキ	回転ナデ	底部回転ヘラ切
	950	土師器	坏	X27	Ⅴa	-	5.0	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	951	土師器	坏	X27	Ⅴa	-	(7.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	952	土師器	坏	X27	Ⅴa	-	(7.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	953	土師器	坏	V26	Ⅴa	-	6.7	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	954	土師器	坏	V・W26	Ⅴa	-	6.7	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	955	土師器	坏	V26	Ⅳb	-	(4.2)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
152	956	土師器	坏	W26・27	Ⅴa	-	(7.5)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	957	土師器	坏	X27	Ⅴa	-	(7.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	958	土師器	坏	W26	Ⅴa	-	(6.5)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	959	土師器	坏	V26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	960	土師器	坏	W25	Ⅴa	-	(7.1)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	961	土師器	坏	W27	Ⅴa	-	(6.3)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	962	土師器	椀	X25・26	Ⅳb・Ⅴa	15.0	-	-	回転ナデ		
	963	土師器	椀	V27	Ⅳb	(13.2)	(8.4)	(5.7)	回転ナデ		
	964	土師器	椀	V26	Ⅴa	-	(8.4)	-	回転ナデ		
	965	土師器	椀	X27/V26	Ⅴa／Ⅳb	-	8.8	-	回転ナデ		
	966	土師器	椀	V27	Ⅴa	-	8.5	-	回転ナデ	剥落	

＊計測値の（ ）は反転復元

図版番号	個別番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm）			調整		備考
						口径	底径	器高	外面	内面	
152	967	土師器	椀	W 26	Ⅳb	-	(7.3)	-	回転ナデ		
	968	土師器	椀	W28	Ⅳb	-	7.4	-	回転ナデ		
	969	土師器	椀	W25	Ⅴa	-	6.8	-	回転ナデ		
	970	土師器	椀	W26	Ⅴa	-	-	-	布痕	回転ナデ	
	971	土師器	椀	W26	Ⅳa・b	-	7.4	-	回転ナデ		
	972	土師器	椀	V26	Ⅳb	(15.6)	-	-	回転ナデ		
	973	土師器	椀	V26	Ⅳb	(14.4)	-	-	回転ナデ		
	974	土師器	椀	W 26	Ⅴa	(12.2)	-	-	回転ナデ		
	975	土師器	椀	W26	Ⅴa	(12.0)	-	-	回転ナデ		
	976	土師器	皿	V26	Ⅳa・b	12.7	8.2	4.0	回転ナデ		
	977	土師器	ミガキ椀	W29	Ⅳb	(11.7)	-	-	ミガキ		
	978	土師器	坏	X26	Ⅳb	-	-	-	回転ナデ		外面穿孔痕
	979	土師器	坏	V26	Ⅳb	-	(6.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切後状圧痕
	980	土師器	坏	W27	Ⅳb・Ⅴa	-	(5.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切後状圧痕
	981	土師器	坏	X26	Ⅴa	-	(6.0)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切後状圧痕
	982	土師器	小皿	V26	一括	(7.1)	(6.0)	(2.0)	回転ナデ		底部回転ヘラ切後状圧痕
	983	土師器	小皿	V26・W27	Ⅳb／Ⅴa	-	(6.4)	-	回転ナデ		底部回転ヘラ切
	984	土師器	坏	X26	Ⅳa	(11.2)	(5.6)	(3.0)	回転ナデ		底部糸切
	985	土師器	坏	W26	Ⅳa	-	6.1	-	回転ナデ		底部糸切
	986	土師器	小皿	W30	Ⅴa	6.8	5.2	1.3	回転ナデ		底部糸切
	987	黒色土器	椀	W26	Ⅴa	(16.0)	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	988	黒色土器	椀	V26	Ⅴa	(17.4)	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	989	黒色土器	椀	V26	Ⅳb	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	990	黒色土器	椀	W26・27	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	991	黒色土器	椀	X26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	992	黒色土器	椀	W26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	993	黒色土器	椀	W30	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	994	黒色土器	椀	X26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
	995	黒色土器	椀	W 27	Ⅴa	-	7.3	-	回転ナデ	ミガキ	
	996	黒色土器	椀	X26	Ⅴa	-	(8.0)	-	回転ナデ	ミガキ	焼成不良
	997	黒色土器	椀	底Ｔｒ	一括	-	(7.6)	-	回転ナデ	ミガキ	放射状のミガキ
	998	黒色土器	椀	V 27／W 28	Ⅴa／Ⅳb	-	(8.6)	-	回転ナデ	ミガキ	
	999	黒色土器	椀	V・W26	Ⅴa	-	8.7	-	回転ナデ	ミガキ	工具痕
	1000	黒色土器	椀	V26	Ⅴa	-	9.6	-	回転ナデ	ミガキ	
	1001	黒色土器	椀	W26	Ⅴa	-	(11.2)	-	回転ナデ	ミガキ	
	1002	黒色土器	椀	V26	Ⅳb	-	-	-	回転ナデ	ミガキ	
153	1003	土師器	甕	W25・26	Ⅴa	(53.0)	-	-	ナデ	ケズリ	外面炭化物付
	1004	土師器	甕	W29	Ⅳb	(34.0)	-	-	ハケ	ケズリ	
	1005	土師器	甕	W・X26	Ⅴa	(27.6)	-	-	ナデ	ケズリ	炭化物付
	1006	土師器	甕	W26・27/X27	Ⅴa・Ⅳb／Ⅴa	(27.0)	-	-	ナデ	ケズリ	全体的に摩耗
	1007	土師器	甕	W26/27	Ⅴa／Ⅳb	(22.8)	-	-	ナデ	ケズリ	
	1008	土師器	甕	W26	Ⅴa	(23.0)	-	-	ナデ	ケズリ	
	1009	土師器	甕	V26	Ⅴa	(22.2)	-	-	ナデ？	ケズリ	
	1010	土師器	甕	V・W26/W25	Ⅴa	(22.8)	-	-	ハケ後ナデ	ケズリ	
	1011	土師器	甕	X29	Ⅳb	-	10.0	-	ケズリ後ナデ	ナデ	
	1012	土師器	甕	V26	Ⅴa	-	-	-	ナデ	ケズリ	炭化物付
	1013	土師器	甕	X26	Ⅴa	-	-	-			
	1014	土師器	鉢	V26	Ⅴa	-	11.0	-	ナデ	ナデ	

＊計測値の（　）は反転復元

図版番号	図版番号	種別	器種	出土区	出土層位	計測値（cm） 口径	底径	器高	調整 外面	内面	備考
153	1015	土師器	小鉢	V25/X26/X27	Ⅳb／Ⅴa/Ⅳb	(14.0)	-	-	ナデ	ケズリ後ナデ	外面煤付
	1016	土師器	小壺	W26	Ⅴa	(10.8)	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	外面煤付
	1017	土師器	小壺	W26	Ⅴa	-	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	1016と同一か
	1018	土師器	小壺	W29・30	Ⅴa・Ⅳb	(13.4)	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	
	1019	土師器	小壺	X29	Ⅳb	(10.2)	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	内面煤付
	1020	須恵器	坏	X26	Ⅴa	(14.4)	-	-	回転ナデ		
	1021	須恵器	坏	W26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ		
	1022	須恵器	坏	X26/V27	Ⅴa	-	(8.0)	-	回転ナデ		
	1023	須恵器	壺	W26	Ⅴa	-	-	-	タタキ	タタキ	
	1024	須恵器	甕	W26/V26	Ⅴa/一括	16.0	-	26.8	タタキ	当て具	
	1025	須恵器	壺	X25	Ⅴa	-	-	-	タタキ	ナデ	自然釉
	1026	須恵器	転用硯	V26	Ⅴa	-	-	-	タタキ	磨耗	
	1027	須恵器	転用硯	V26	Ⅳb	-	-	-	タタキ	磨耗	
154	1028	布痕土器		X 26	Ⅳb・Ⅴa	(33.6)	-	-	指頭痕	布痕	
	1029	布痕土器		V 26	Ⅴa	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1030	布痕土器		W26	Ⅴa	(33.0)	-	-	指頭痕	布痕	
	1031	布痕土器		W・X26	Ⅴa	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1032	布痕土器		X25・26	Ⅴa	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1033	布痕土器		X25	Ⅴa	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1034	布痕土器		X26	Ⅴa	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1035	布痕土器		W26	Ⅴa	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1036	布痕土器		X26	Ⅳb	-	-	-	指頭痕	布痕	
	1037	土師器転用紡錘車		U27	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	
	1038	土師器転用紡錘車		W26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	
	1039	土製品	坩堝	V26	Ⅳb／Ⅴa	(17.0)	-	-	指頭痕	不明	
	1040	土製品	粘土塊	V26	Ⅳb		-	-	ナデ	ナデ	
155	1043	墨書土器	椀	V26	Ⅳb／Ⅴa	(13.4)	-	-	回転ナデ		「■中」か「得」
	1044	墨書土器	坏	W26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ		「■永■」
	1045	墨書土器	坏	X27	Ⅳb	-	-	-	回転ナデ		
	1046	墨書土器	坏	W26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ		
	1047	墨書土器	坏	V26	Ⅳb	-	(5.8)	-	回転ナデ		
	1048	墨書土器	坏	W25	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ		
	1049	墨書土器	坏	X26	Ⅴa	-	-	-	回転ナデ		
	1050	青磁	椀	V27	Ⅴa	-	-	-	施釉		越州窯系Ⅱ類
	1051	青磁	椀	V・W26	Ⅴa	10.5	5.1	4.3	施釉		越州窯系
	1052	青磁	皿	V26・27	Ⅳb	(14.5)	-	-	施釉		越州窯系
	1053	青磁	椀	W27	Ⅴa	-	(6.9)	-	施釉		越州窯系
	1054	緑釉陶器		V26	Ⅳb	-	-	-	施釉		
156	1055	青磁	皿	V26	Ⅳa	-	-	-	施釉		龍泉窯系Ⅰ類
	1056	青磁	椀	X 30	Ⅴa	-	-	-	施釉		龍泉窯系
	1057	青磁	椀	X30	Ⅳb	-	-	-	施釉		龍泉窯系Ⅱ類
	1058	白磁	皿	X 27	Ⅰ	(12.0)	-	-	施釉		
	1059	白磁	皿	X27	Ⅳa	-	-	-	施釉		
	1060	白磁	皿	A32-6	Ⅴa	-	-	-	施釉		
	1061	陶磁器	椀	A2-25	Ⅴa	-	-	-	施釉		青花
	1062	東播系	捏鉢	X25	Ⅴa	-	-	-	ナデ	ナデ	
	1063	肥前	椀	冬	一括	(10.4)	-	-	染付	施釉	
156	1064	内野山窯系	椀	X25	Ⅴa	-	-	-	施釉	施釉	
	1065	薩摩	椀	A2-27	Ⅱ	-	(5.0)	-	施釉	施釉・釉剥	
	1066	薩摩	椀	表採		-	4.1	-	施釉	施釉	
	1067	薩摩	皿	A2-27	Ⅱ	-	(5.4)	-	施釉	施釉・釉剥	

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値(cm)			
						長さ	幅	厚さ	重量
83	535	石鏃	SS06	a	チャート	1.7	1.65	0.4	0.7
	536	石鏃	SS06	a	黒曜石	1.4	1.35	0.25	
	537	石鏃	U29	XI		2	1.45	0.5	1.3
	538	剥片	U29	XI	無斑晶安山岩	3.5	2.4	0.9	6.5
	539	残核	U29	XI	黒曜石	1.6	2.65	1.7	5
86	548	土掘具	JSC1	①	頁岩	27.1	11.4	2.1	560
	549	土掘具	JSC1	①	ホルンフェルス	13.6	8.3	2.0	184.8
	550	土掘具	Jpit1	Va	ホルンフェルス	14.8	7.6	2.0	240
	551	土掘具	Jpit2	Va	ホルンフェルス	14.6	8.4	2.2	240
	552	土掘具	Jpit1	Va	ホルンフェルス	12.0	5.4	1.0	67
	553	粗製剥片石器	Jpit4	Va	ホルンフェルス	6.05	12.8	1.6	85.9
87	554	土掘具	JSC1	①	砂岩	9.9	7.05	1.45	119.4
	555	土掘具	A326	Va	砂岩	6.5	12.7	1.45	128.7
	556	土掘具	Jpit3	Va	砂岩	8.4	5.7	1.55	89.9
	557	土掘具	JSC1	①	砂岩	11.5	7.8	1.75	144.2
89	562	未製品	SA29	Y	頁岩A	2.45	1.05	0.3	0.6
	563	未製品	SA29	Y	頁岩A	3.1	1.45	0.4	1.2
	564	未製品	SA29	Y	頁岩A	4.1	2.25	0.2	2.3
	565	未製品	SA29	Y	頁岩A	3.3	2.7	0.22	1.7
	566	未製品	SA29	Y	頁岩A	3.9	3.1	0.3	3.2
	567	未製品	SA29	Y	頁岩A	4.8	3.8	0.65	9.8
	568	未製品	SA29	Y	頁岩A	6.1	3.85	0.8	14.7
	569	未製品	SA29	Y	頁岩A	4.7	2.95	0.55	6.6
	570	未製品	SA30	Y	頁岩A	3.4	3.45	0.3	3.9
	571	台石	SA29	Y	砂岩	9.9	8.2	3.6	410
	572	砥石	SA29	Y/pit	砂岩	9.1	6	5.1	300
91	581	未製品	SA30	−	頁岩A	1.5	1.4	0.18	0.4
	582	未製品	SA30	−	頁岩A	2.7	2	0.5	2
	583	砥石	SA30	Y	砂岩	4.7	3.85	1.9	55.4
	584	台石・砥石	SA30	Y	砂岩	12.3	9	5.4	845
93	595	鑿状磨製石斧	SA31	Y	頁岩B	3.05	2.2	0.28	3.1
	596	砥石	SA31	a	砂岩	3.4	2.8	1.5	19.6
	597	砥石	SA31	b	天草陶石	3.9	2.7	1.9	34.1
	598	砥石	SA31	b	砂岩	5.25	4.45		57
	599	敲石	SA31	Y	砂岩	9.1	7.3	3.5	315
	600	敲石	SA31	Y	砂岩	20.7	8.35	3	680
	601	石皿	SA31	Y	砂岩	32.6	23.6	10.1	11000
	602	軽石製品	SA31	−	軽石	4	2.2	0.8	2.7
	603	軽石製品	SA31	−	軽石	4.6	3.65	0.95	2.6
95	609	軽石製品	SA32	Y	軽石	5.9	6.45	3.9	23.8
	610	軽石製品	SA32	Y	軽石	7.1	5.4	3	33.2
97	615	軽石製品	SA33	Y	軽石	11.5	9.3	6.2	132.9
	616	軽石製品	SA33	Y	軽石	6.8	6.3	4.4	56.3
	617	軽石製品	SA33	Y	軽石	7.2	5.8	2.3	23.7
	618	軽石製品	SA33	Y	軽石	6.8	5.6	4.1	39.5
	619	軽石製品	SA33	Y	軽石	7.3	4.4	3.1	20.4
99	620	石錘	SA34/30	a/a	輝石安山岩	9.9	8.8	1.4	180
	621	砥石	SA34	Y	砂岩	11.4	2.2	1.15	59.5
100	627	台石・砥石	SA36	Y	砂岩	30.4	25.4	7.8	8400
	628	台石・砥石	SA36	Y	砂岩	27.5	20.3	12.5	
	629	石皿	SA36	Y	砂岩	30.3	18.9	5.8	4400
101	640	砥石	SA38	a	砂岩	9	3.9	1.1	66.6
104	644	未製品	SA39	a	無斑晶安山岩	4.8	5.4	0.9	25.7
	645	未製品	SA38	a	無斑晶安山岩	3.9	4.2	0.3	7.9
	646	軽石製品	SA39	Y	軽石	4.6	4.1	1.2	8.9
106	649	磨製石鏃	SA40	a	頁岩A	1.65	1.55	0.25	0.6
	650	軽石製品	SA40	Y	軽石	5.4	3.3	2.1	11.2
	651	軽石製品	SA40	Y	軽石	5.3	4.2	2.4	12.5
	652	軽石製品	SA40	Y	軽石	4.9	3.8	3.3	19.8
	653	軽石製品	SA40	a	軽石	11.4	7.2	3.8	89.8
	654	軽石製品	SA40	a	軽石	13.1	9.1	5.1	194.3
108	658	未製品	SA41	Y	頁岩A	1.7	1.7	0.15	
	659	未製品	SA41	Y	頁岩A	2.15	2.15	0.22	
	660	未製品	SA41	Y	頁岩A	1.7	1.1	0.1	
	661	未製品	SA41	−	頁岩A	1.28	1.1	0.14	
	662	未製品	SA41	Y	頁岩A	2.3	1.4	0.18	
	663	未製品	SA41	Y	頁岩A	2	1.1	0.25	
	664	未製品	SA41	−	頁岩A	2.6	2.1	0.3	
	665	石斧	A41	−	砂岩	3.2	3.7	0.7	7.4
	666	砥石	SA41	a	砂岩	5.65	3.55	0.43	15.2
	667	砥石	SA41	Y	砂岩	4.2	4.55	1	2.46
	668	敲石	SA41	Y	砂岩	6.1	1.95	0.7	10.7
	669	軽石製品	SA41	Y	軽石	5.7	3.3	1.85	9.9
	670	軽石製品	SA41	Y	軽石	4.6	3.6	1.5	4.7
	671	軽石製品	SA41	Y	軽石	14.1	9.7	5.5	170.4
110	672	石錘	SA42	Y	砂岩	20	14.1	1.4	340

図版番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	計測値(cm)			
						長さ	幅	厚さ	重量
113	692	未製品	SA45	−	頁岩A	1.75	1.55	0.28	
	693	未製品	SA45	−	頁岩A	1.8	1.3	0.2	
	694	未製品	SA45	−	頁岩A	1.2	1.45	0.18	
	695	未製品	SA45	−	頁岩A	1.25	1.55	0.18	
	696	未製品	SA45	−	頁岩A	2	1.1	0.22	
	697	未製品	SA45	a	頁岩A	3	2.6	0.32	1.7
	698	未製品	SA45	a	頁岩A	3.5	2.25	0.3	2.4
	699	未製品	SA45	Y	頁岩A	3.05	2.25	0.31	2.8
	700	未製品	SA45	−	頁岩A	2	2.3	0.2	
	701	未製品	SA45	Y	頁岩A	3.8	2.8	0.35	2.5
	702	未製品	SA45	Y	頁岩A	3.2	2.15	0.355	2.5
	703	未製品	SA45	Y	頁岩A	3.95	2.6	0.32	2.2
	704	未製品	SA45	a	頁岩A	3.1	2.1	0.32	2.2
	705	未製品	SA45	Y	頁岩A	2.8	3.8	0.3	3.2
	706	横刃石包丁→スクレイパー	SA45	a	ホルンフェルス	8.3	2.9	0.6	17.5
	707	石皿片	SA45	Y	輝石安山岩	107.5	8.35	1.6	100
	708	台石	SA45	Y	砂岩	21.2	12	7.9	
	709	軽石製品	SA45	C	軽石	9	5.6	3.7	68.2
	710	軽石製品	SA45	a	軽石	10.1	6.3	3.6	82
	711	軽石製品	SA45	a	軽石	8.4	6	3.6	49.3
	712	軽石製品	SA45	Y	軽石	6.3	8	1.9	22.4
116	725	未製品	SA46	−	頁岩A	3.1	2.05	0.4	3.2
	726	未製品	SA46	−	頁岩A	2.95	3.4	0.7	7.9
	727	未製品	SA46	−	頁岩A	2.6	1.7	0.28	1.2
	728	土掘具	SA46	Va	ホルンフェルス	12.6	5.2	1.55	110.1
	729	砥石	SA46	a	砂岩	8.3	4.95	2.35	126.6
	730	敲石	SA46	b	砂岩	13.5	4.4	3.75	330
	731	軽石製品	SA46	−	軽石	3.7	2.6	1.3	4.7
117	732	軽石製品	ST09	a	軽石	6.5	4.8	3.3	27.5
	733	軽石製品	ST09	a	軽石	12.4	6.7	5.1	139.5
125	784	未製品	SB08	−	頁岩A	2.3	2.2	0.2	0.7
	785	未製品	SB08	−	頁岩A	2.85	2.1	0.28	1.9
	786	粗製剥片石器	SB09	−	輝石安山岩	17.3	13.8	3	800
128	807	剥片	U26	Va	黒曜石	2.45	1.2	1	3.4
	808	石包丁	V・W26	Va	頁岩B	3.55	8.75	0.55	23.4
	809	磨製石斧	W27	Va	頁岩B	8	4.6	2.15	100
	810	磨製石斧片(スクレイパー)	X26	Va	頁岩B	4	5.8	0.7	18.6
150	891	砥石	SB33	pit	砂岩	8.45	4.35	2.6	115.2
	892	砥石	SS01	Va	砂岩	20	9	5.05	1750
	893	砥石兼敲石	SS01	Va	砂岩	21.2	9.6	6.5	1760
	894	砥石(火打石?)	SD04	一括	チャート	15.1	3.7	3.7	310
	895	砥石兼敲石	SD06	一括	砂岩	7.6	7.5	4.2	340
	896	金床石片	SD12-2	Y	砂岩	15.3	6.4	1.2	73.9
	897	金床石片	SD12-2	Y	砂岩	8.7	5.4	0.75	26
	898	金床石片	SD12-2	Y	砂岩	7.9	4.2	0.9	25.5
158	1093	砥石	W26	Va	砂岩	14.7	6.9	4.2	620
	1094	砥石	X25	Va	砂岩	7.1	5.7	2.4	121
	1095	砥石	W27・V26	Va	砂岩	10.2	2.5	2.15	58.2
	1096	砥石	W26	Va	砂岩	7.9	2.4	2.1	54.9
	1097	敲石	X28	Va	砂岩	8.5	4.3	4.4	200
	1098	敲石	V26	Va	砂岩	5.35	4.8	2.4	83.6
	1099	敲石	X27	Va	砂岩	12.5	4.3	4	235
	1100	砥石兼敲石	X27	Va	砂岩	11.9	6.6	3.2	415
	1101	敲石	X25	Va	砂岩	11.1	3.2	2.2	105.9
	1102	砥石	X26	Va	砂岩	13.2	4.2	2.8	230
	1103	砥石兼敲石	X28	IVb	砂岩	7.5	5.7	4.3	245
	1104	砥石兼敲石	X25	IV	砂岩	8.4	8	2	210
	1105	敲石	W25	IVb	砂岩	70.1	4.4	5.6	162
	1106	台石	X25	IVb	砂岩	10.4	8.2	3.5	430
	1107	磨・敲石	W26	Va	砂岩	6.8	6	3	141.4
	1108	磨・敲石	W27・V26	IVb	砂岩	10	8.2	3.7	436.8
	1109	磨・敲石	W29	Va	砂岩	13.8	11.1	5.3	1070

頁岩A：緑色珪質頁岩
頁岩B：黒色頁岩

図版番号	遺物番号	器種	出土尺	層	計測値 (cm)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量	
150	899	鉄鏃	SB29	pit	15.1	1.4	0.3	19	
	900	鉄鏃	SD12-3	③	8.2	3.2	0.4	17.6	
	901	不明鉄器	SD12-1	1	5.2	1.8	0.25	7.3	
	902	不明鉄器	SD12-2	a	5.7	1.3	0.9	33.1	
	903	釘	SD12-3	Y	2.6	0.5	0.4	1.3	
	904	釘	SD12-1	1	2.7	0.4	0.5	1.7	
	905	鉄滓材	SD12-2	a	8.6	4.85	0.6	81.8	
	906	不明鉄器	SD12-2	Y	6	1.9	0.15	8.3	
	907	鉄滓系遺物	SD12-2	a	4.75	2.7	1.85	27.5	
	908	鉄滓系遺物	SD12-1	1	5.1	2.8	2.6	62.8	
	909	鏡形鉄	SD12-1	1	6.85	5.8	2	68.5	
	1040	鞴羽口	V26	Ⅳb	5.3	6.1	3.3	74.2	
	1041	鞴羽口	X26	Va	6.2	4.6	2.65	71.3	
	1042	鞴羽口	V27	Va	2.2	2.3	1.45	6.5	
157	1068	不明鉄器	V27	Va	11.6	1.15	0.3	17.8	
	1069	不明鉄器	X29	Ⅳb	6.65	0.9	0.35	6	
	1070	不明鉄器	V25	Va	5.7	1.2	0.25	6.1	
	1071	不明鉄器	V26	Ⅳb	4.2	1.8	0.8	20.8	
	1072	釘	V26	Ⅳa	3.4	0.4	0.35	3	
	1073	不明鉄器	W27	Ⅳb	3.6	1.3	0.35	5.6	
	1074	釘	V26	Va	2.4	0.5	0.3	0.8	
	1075	棒状鉄器	X25	Ⅳa	8	0.4	0.4	8.3	
	1076	棒状鉄器	A225	Va	2.45	0.4	0.4	1.7	
	1077	釘	W25	Va	2.7	0.3	0.3	0.6	
	1078	釘	W27	Ⅳb	3.15	1.3	0.5	6.5	
	1079	棒状鉄器	W25	Ⅳa	5.1	0.55	0.4	4.3	
	1080	釘	W30	Va	3.55	2.4	0.4	3.3	
	1081	釘	W30	Va	4.25	1.8	0.4	3.2	
	1082	不明鉄器	W26	Va	3.5	2.2	0.4	10.3	
	1083	不明鉄器	X25	Va	3.85	2.15	0.6	8.9	
	1084	棒状鉄器	A4-26	Va	7.2	0.9	0.45	18.3	
	1085	鉄鍋片	X26	Ⅳa	4.65	3.2	0.8	19.2	
	1086	不明鉄器	W30	Va	2.45	3	0.45	3	
	1087	不明鉄器	一括		2.8	2.3	0.7	3.8	
	1088	鉄滓系遺物	V27	Va	3.5	2.45	2.4	27.1	
	1089	ガラス質滓	V27	Va	5.1	3.45	2.4	12.1	
	1090	椀形滓	X26	Va	4.6	4.2	3.3	68.7	
	1091	椀形滓	W27	Va	6.9	5.2	3.5	142.2	
	1092	椀形滓	W28	Ⅳb	10.5	11.9	3.2	330	